赤磐市文化財調査報告　第3集

備前国分寺跡

２００９年

岡山県赤磐市教育委員会

受付
第 4968 号
21. .17
赤磐市
社会教育課

赤磐市文化財調査報告第3集　備前国分寺跡　正誤表

頁、行	誤	正
P76　図63	図中　レベル数値22.90m	図中　レベル数値21.90m
P78　下から1行目	標高22.4m	標高21.4m
P78　下から1行目	回廊上は22.0m	回廊上は21.0m
P78　図65	図中　レベル数値22.30m	図中　レベル数値21.30m
P79　上から1行目	東で21.8m	東で20.8m
P79　上から4行目	22.17～22.20m	21.17～21.20m
P79　上から15行目	底面高21.30m	底面高20.30m
P79　上から18行目	底面高21.65m	底面高20.65m
P79　図66	図中　レベル数値22.20m	図中　レベル数値21.20m
P297　下から3行目	西面回廊(T5)で22.17m	西面回廊(T5)で21.17m

赤磐市文化財調査報告　第3集

備前国分寺跡

２００９年

岡山県赤磐市教育委員会

塔基壇全景（南東から）

1　文字瓦（274）

2　銅印「常」（421）

序

岡山県の東部に位置する赤磐市は、県内三大河川のひとつである吉井川の中流に沿って南北に広がっています。市域は、いくつかの平野と丘陵からなり南部中央には砂川が南北に流れています。温暖な瀬戸内海式気候に恵まれ、市の花「桃」をはじめとする果物の産地としても知られています。

本市には貴重な文化財が数多く残されており、古代から連綿と続く人々の営みを伝えています。それらを代表するのが、国史跡に指定されている備前国分寺跡・両宮山古墳・熊山遺跡であり、それぞれがこの地域の歴史を物語る重要な遺跡です。

備前国分寺跡は、奈良時代に聖武天皇の発願により建立された国分寺の中のひとつであり、昭和50年に国指定を受けたのち、その保存を図るため公有化が進められ、ほぼ完了しています。

本報告書は史跡の保存整備のための資料の収集を目的として、平成15・16・17年度の3ヵ年にわたって実施した、備前国分寺跡の調査成果を取りまとめたものであり、この調査によって、金堂や塔などの諸堂宇の規模・構造や寺域の広がりが明らかになりました。その内容は、国分寺が「国の華」と称されたにふさわしいものです。調査は平成18年度以降も継続して進められており、さらなる成果が上がることが期待されます。

この資料が備前国分寺跡の保存と活用、そして地域史研究ならびに古代史研究に寄与すれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際して多々ご協力をいただいた地元の方々、調査をご指導いただいた第二次山陽遺跡整備委員会の先生方、文化庁をはじめ関係機関の方々に、厚くお礼を申し上げます。

平成21年2月

赤磐市教育委員会
教育長　花　田　文　甫

例言

1　本書は史跡整備事業に伴う国史跡備前国分寺跡の第１～３次発掘調査報告書である。

2　備前国分寺跡は岡山県赤磐市馬屋1048他に所在する。

3　調査は文化庁から国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金）を得て赤磐市教育委員会が実施した。

4　調査は平成15・16・17年度の３ヵ年にわたって実施した。
第１次調査は平成15年６月23日から平成16年１月19日まで実施し、1,030㎡を調査した。
第２次調査は平成16年６月９日から平成17年１月14日まで実施し、740.4㎡を調査した。
第３次調査は平成17年６月７日から平成18年２月27日まで実施し、924.98㎡を調査した。
第３次調査後、第４～６次調査（平成18～20年度）を実施しており、その成果については次回報告書に掲載する。

5　第１次調査を宇垣匡雅・塩見真康・大熊美穂、第２次調査を宇垣・大熊・有賀祐史、第３次調査を宇垣・大熊・有賀が担当した。

6　調査にあたっては第二次山陽遺跡整備委員会をはじめ文化庁文化財部記念物課・岡山県教育庁文化財課から御指導および御助言をいただいた。

7　本書の執筆は、第１章、第３章第１節、第３章第２節第１・３・５～８項、第４章第４～６節を有賀が、第２章第２節、第４章第１～３節を宇垣が、第３章第２節第２・４項、第５章第１節を大熊が、第２章第１節を畑地ひとみが担当した。なお、第５章第２節は有賀・大熊が担当した。

8　付載１については国立歴史民俗博物館の齋藤努氏より報告文をいただいた。

9　付載２については岡山理科大学の白石純氏より報告文をいただいた。

10　本書は第１～３次調査の成果をまとめたものである。

11　本報告書に掲載した出土遺物・実測図・写真等は赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337）に保管している。

凡例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は座標北（平面直角座標第Ⅴ系）である。調査地付近における磁北は西偏7°0′を測る。図10の座標値、報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系（平面直角座標第Ⅴ系）に準拠している。その他の図のグリッドは、昭和49（1974）年度に任意に設定した寺域グリッドである（第3章第1節参照）。

2　遺構および遺物の縮尺は各図面に記しているが、基本的には次のとおり統一している。
遺構全体図：1/120　土層断面：1/60　礎石・柱穴・炉等：1/20・1/30　瓦：1/4　土器：1/3
土製品：1/2　鉄製品：1/3・1/4　銅製品：1/1・1/2　石器・石製品：1/2・1/3

3　本文中の遺構全体図（主要堂塔およびトレンチ）と土層断面図は縮尺が異なり、また土層断面図は紙面の都合上、見開き2頁にわたり、さらに下段に続く配置をとっているものがある。

4　遺物番号は、章ごとに通し番号とした。

5　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

6　註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめている。

7　図2・5は国土地理院発行の1/50,000地形図「和気」「岡山北部」を複製・縮小・加筆したものであり、図6・7は山陽町作成の1/2,500地形図（平成7年）を複製・縮小して作成した。

8　時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。

9　本書掲載の遺構図の中の被熱範囲等に付したトーンは、基本的に以下のとおりに統一している。

盛土・造成土　　基壇修復土　　瓦だまり　　地山

被熱・焼土面（影響弱）　　被熱・焼土面（影響強）　　被熱・焼土面（黒色化）　　被熱・焼土面（ブロック状）

目次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過と体制 …… 3
（１）　調査の経過 …… 3
（２）　調査および報告書作成の体制 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境 …… 7

第１節　地理的歴史的環境 …… 7
（１）　地理的環境 …… 7
（２）　歴史的環境 …… 8
第２節　既往の研究 …… 15

第３章　遺構 …… 19

第１節　遺構の概要 …… 19
（１）　遺跡の立地と現状 …… 19
（２）　調査区の概要 …… 21
（３）　検出遺構の概要 …… 21
第２節　遺構各説 …… 24
（１）　金堂 …… 24
（２）　講堂 …… 35
（３）　回廊［Ｔ５・６］ …… 76
（４）　南門・中門 …… 81
（５）　僧房［Ｔ７・８］ …… 97
（６）　塔 …… 106
（７）　築地 …… 115
（８）　その他［Ｔ２・３・９・10・12・19］ …… 131

第４章　遺物 ……137
第１節　瓦 ……137
（１）　創建期の瓦 ……137
（２）　塔の瓦 ……161
（３）　補修瓦 ……167
（４）　補修瓦２－軒丸瓦－ ……174
（５）　補修瓦２－軒平瓦－ ……179
（６）　補修瓦３－平瓦－ ……193
（７）　南門補修瓦 ……201
（８）　金堂上層瓦だまり ……208
（９）　中世瓦１ ……224
（10）　中世瓦２ ……227
（11）　中世瓦３ ……231
（12）　近世瓦 ……241
（13）　文字瓦・戯画瓦 ……241
第２節　奈良時代平瓦・軒丸瓦の検討 ……247
（１）　文字瓦 ……247
（２）　軒丸瓦１式の製作工人－刻みの分類－ ……260
（３）　軒丸瓦１式の製作手法 ……264
（４）　創建期瓦の特色 ……265
第３節　瓦の変遷からみた堂塔 ……266
第４節　土器 ……269
（１）　施釉陶器等 ……269
（２）　中・近世土器 ……270
第５節　土製品・銅製品・石製品 ……272
（１）　土製品 ……272
（２）　銅製品 ……273
（３）　石製品 ……273
第６節　古代の土器について ……276
（１）　奈良時代後半の土器 ……276
（２）　僧房出土の平安時代の土師器 ……278
（３）　平安時代末の土器 ……280
第５章　総括 ……283
第１節　伽藍配置の復元 ……283
（１）　造営軸の復元 ……283
（２）　単位尺の復元 ……288

（3）　伽藍配置と堂塔間の距離 ……290
（4）　造営順序 ……292
第２節　堂塔の考察 ……294
（1）　各堂塔の総括 ……294
（2）　回廊の復元 ……296
（3）　基壇外装の問題 ……298
（4）　伽藍の変遷 ……299
（5）　今後の課題 ……299

付載

付載１　備前国分寺跡出土銅関連資料の自然科学的分析結果 ……301
付載２　備前国分寺跡出土の白色物質について ……307

図版
報告書抄録
奥付

巻頭図版

巻頭図版１　塔基壇全景（南東から）
巻頭図版２　１．文字瓦
　　２．銅印「常」

図目次

図１　位置図 ……7
図２　備前国分寺跡位置図（1/150,000） ……7
図３　古墳時代以前の出土遺物（1/3・1/2） ……8
図４　穂崎中次戸・鳥井・塩辛遺跡
　　出土遺物（1/3・1/2） ……9
図５　周辺遺跡分布図（1/50,000） ……10
図６　周辺遺跡位置図（1/12,000） ……11
図７　国分寺周辺の字名（1/5,000） ……13
図８　先行研究における備前国分寺 ……16
図９　昭和49（1974）年度
　　確認調査による伽藍配置 ……17
図10　遺跡の地形図（1/2,000） ……20
図11　調査区の配置（1/1,500） ……22
図12　金堂遺構全体図（1/120） ……25
図13　A－A′断面（1/60） ……26
図14　B－B′断面（1/60） ……26
図15　C－C′断面（1/60） ……26
図16　D－D′断面（1/60） ……28
図17　E－E′断面（1/60） ……28
図18　版築断面（1/10） ……29
図19　基壇北辺（1/160） ……29
図20　石敷１（1/30） ……31
図21　F－F′断面（1/60） ……31
図22　柱穴配置図（1/60） ……32
図23　柱穴（1/20） ……32
図24　金堂出土遺物（1/3） ……33

図25　金堂復元図（1/120）……34
図26　講堂遺構全体図（1/120）……36
図27　A－A′断面（1/60）……40
図28　B－B′断面（1/60）……40
図29　C－C′断面（1/60）……40
図30　D－D′断面（1/60）……41
図31　E－E′断面（1/60）……43
図32　F－F′断面（1/60）……43
図33　G－G′断面（1/60）……43
図34　H－H′断面（1/60）……43
図35　講堂復元図（1/120）……44
図36　北面回廊西側遺構図（1/60）……48
図37　石列1（1/30）……49
図38　排水遺構1（1/30）……50
図39　炉1（1/20）……51
図40　炉1出土遺物（1/3）……51
図41　炉3（1/20）……51
図42　炉4（1/20）……52
図43　炉5（1/20）……52
図44　北面回廊倒壊瓦（1/20）……53
図45　北面回廊下層出土遺物（1/3）……55
図46　北面回廊上層出土遺物（1）（1/3）……56
図47　北面回廊上層出土遺物（2）（1/3）……57
図48　北面回廊上層出土遺物（3）（1/3）……58
図49　雨落ち溝4出土遺物（1/3）……59
図50　北面回廊南側基壇斜面出土遺物（1/3）……59
図51　鉄製品（1）（1/3・1/4）……60
図52　鉄製品（2）（1/3）……61
図53　銅板出土状況図（1/20）……62
図54　銅板（1/4）……63
図55　再建講堂出土遺物（1/3）……66
図56　講堂中世・近世遺物（1/3）……67
図57　再建講堂復元図（1/120）……69
図58　井戸1（1/40）……71
図59　講堂包含層出土遺物（1/3）……72
図60　壁土（1）（1/3）……73
図61　壁土（2）（1/3）……74
図62　壁土（3）（1/3）……75
図63　T5（1/120・1/60）……76
図64　T6（1/120・1/60）……76
図65　T5A－A′断面（1/60）……78
図66　炉6（1/20）……79
図67　T5出土遺物（1/3）……80
図68　中門遺構全体図（1/120）……83
図69　南門遺構全体図（1/120）……85
図70　A－A′断面（1/60）……86
図71　B－B′断面（1/60）……86
図72　C－C′断面（1/60）……86
図73　D－D′断面（1/60）……86
図74　E－E′断面（1/60）……87
図75　T－5（1/30）……92
図76　P－11（1/20）……92
図77　南門・中門出土遺物（1/3）……93
図78　中門復元図（1/120）……94
図79　南門復元図（1/120）……95
図80　T7（1/120・1/60）……97
図81　T8（1/120）……98
図82　A－A′断面（1/60）……98
図83　B－B′断面（1/60）……99
図84　C－C′断面（1/60）……99
図85　礎石78（1/30）……100
図86　礎石84 P－17（1/30）……100
図87　僧房復元図（1/120）……102
図88　僧房出土遺物（1）（1/3）……104
図89　僧房出土遺物（2）（1/3）……105
図90　塔遺構全体図（1/120）……107
図91　A－A′断面（1/60）……108
図92　B－B′断面（1/60）……108
図93　C－C′断面（1/60）……109
図94　D－D′断面（1/60）……109
図95　E－E′断面（1/60）……110
図96　F－F′断面（1/60）……110
図97　礎石92（1/30）……111
図98　礎石93南壁断面（1/30）……111
図99　塔出土遺物（1/3）……113
図100　塔復元図（1/120）……114

図101　T15・16（1/120・1/60）……116
図102　T15出土遺物（1/3）……116
図103　T17（1/120・1/60）……118
図104　T19B（1/120・1/60）……118
図105　T18（1/120・1/60）……119
図106　T17出土遺物（1）（1/3）……121
図107　T17出土遺物（2）（1/3）……122
図108　T17出土遺物（3）（1/3）……123
図109　T11（1/120・1/60）……125
図110　T13（1/120・1/60）……125
図111　石列3（1/30）……126
図112　カマド1（1/30）……127
図113　雨落ち溝19出土遺物（1/3）……129
図114　カマド1周辺出土遺物（1/3・1/2）……130
図115　T2（1/120・1/60）……132
図116　T3（1/120・1/60）……132
図117　T3出土遺物（1/3）……132
図118　T9（1/120・1/60）……133
図119　T9出土遺物（1/3）……133
図120　T12（1/120・1/60）……134
図121　T10（1/120・1/60）……134
図122　T19（1/120・1/60）……134
図123　軒丸瓦1式（1）（1/4）……138
図124　軒丸瓦1式（2）（1/4）……140
図125　軒丸瓦1式（3）（1/4）……141
図126　軒丸瓦1式（4）（1/4）……142
図127　軒平瓦1B式（1）（1/4）……144
図128　軒平瓦1B式（2）（1/4）……145
図129　軒平瓦1B式（3）（1/4）……146
図130　軒平瓦2B式（1）（1/4）……147
図131　軒平瓦2B式（2）（1/4）……148
図132　軒平瓦2B式（3）（1/4）……149
図133　軒平瓦2A式（1/4）……150
図134　創建期の丸瓦（1）（1/4）……151
図135　創建期の丸瓦（2）（1/4）……152
図136　丸瓦の規格……153
図137　平瓦の規格……153
図138　創建期の平瓦（1）（1/4）……155
図139　創建期の平瓦（2）（1/4）……156
図140　創建期の平瓦（3）（1/4）……157
図141　創建期の平瓦（4）（1/4）……158
図142　創建期の平瓦（5）・不明製品（1/4）……159
図143　隅木蓋瓦（1/4）……160
図144　塼（1/4）……161
図145　軒平瓦1A式（1/4）……162
図146　軒平瓦1B式（4）（1/4）……163
図147　軒丸瓦2式・軒平瓦3式（1）（1/4）……164
図148　軒平瓦3式（2）（1/4）……166
図149　軒丸瓦3式（1/4）……167
図150　軒丸瓦4・5式（1/4）……169
図151　軒平瓦4式（1/4）……170
図152　軒丸瓦6式・軒平瓦5式（1）（1/4）……172
図153　軒平瓦5式（2）（1/4）……173
図154　軒丸瓦7～16式（1/4）……175
図155　軒丸瓦17～19式（1/4）……178
図156　軒平瓦6～11式（1/4）……180
図157　軒平瓦12・13式（1/4）……182
図158　軒平瓦14～17式（1/4）……183
図159　軒平瓦18～20式（1/4）……186
図160　軒平瓦21～24式（1/4）……188
図161　同笵瓦・関連資料（1）（1/4）……189
図162　同笵瓦・関連資料（2）（1/4）……190
図163　補修瓦－平瓦（1）（1/4）……191
図164　補修瓦－平瓦（2）（1/4）……192
図165　補修瓦－平瓦（3）（1/4）……194
図166　補修瓦－平瓦（4）（1/4）……196
図167　補修瓦－平瓦（5）（1/4）……197
図168　補修瓦－平瓦（6）（1/4）……198
図169　補修瓦－平瓦（7）（1/4）……199
図170　補修瓦－平瓦（8）（1/4）……200
図171　補修瓦－鬼瓦（1/3）……202
図172　軒丸瓦20式（1）
　　・軒平瓦25式（1）（1/4）……203
図173　軒平瓦25式（2）（1/4）……205
図174　軒平瓦25式（3）（1/4）……206

図175　軒丸瓦20式（2）
・南門補修瓦－平瓦（1）（1/4）……207
図176　南門補修瓦－平瓦（2）（1/4）……208
図177　軒丸瓦21式・22式（1）（1/4）……210
図178　軒丸瓦22式（2）
・軒平瓦26式（1）（1/4）……211
図179　軒平瓦26式（2）（1/4）……212
図180　軒平瓦27式（1/4）……214
図181　金堂上層瓦だまり丸瓦（1）（1/4）……215
図182　金堂上層瓦だまり丸瓦（2）（1/4）……216
図183　金堂上層瓦だまり平瓦（1）（1/4）……217
図184　金堂上層瓦だまり平瓦（2）
・丸瓦（3）（1/4）……218
図185　金堂上層瓦だまり平瓦（3）（1/4）……220
図186　金堂上層瓦だまり平瓦（4）（1/4）……221
図187　金堂上層瓦だまり平瓦（5）（1/4）……222
図188　金堂上層瓦だまり鬼瓦（1/3）……223
図189　軒丸瓦23式・軒平瓦28式（1/4）……225
図190　軒丸瓦24～28式
・軒平瓦29式（1/4）……226
図191　軒平瓦30～32式・丸瓦（1/4）……229
図192　軒丸瓦29式（1/4）……230
図193　軒平瓦33式（1）（1/4）……232
図194　軒平瓦33式（2）(1/4)……234
図195　軒平瓦34式（1/4）……235
図196　丸瓦（1/4）……236
図197　平瓦（1）・道具瓦（1）（1/4）……237
図198　平瓦（2）（1/4）……238
図199　道具瓦（2）・鬼瓦（1）（1/3）……239
図200　鬼瓦（2）（1/3）……240
図201　近世瓦（1/4）……241
図202　文字瓦・戯画瓦（1）（1/2）……242
図203　文字瓦・戯画瓦（2）（1/2）……243
図204　文字瓦・戯画瓦（3）（1/2）……244
図205　文字瓦・戯画瓦（4）（1/2）……245
図206　文字瓦（1）（1/4）……247
図207　文字瓦（2）（1/4）……248
図208　文字瓦（3）（1/4）……249
図209　文字瓦（4）（1/4）……250
図210　文字瓦（5）（1/4）……251
図211　文字瓦（6）（1/4）……252
図212　文字瓦の文字別出土量……253
図213　文字瓦の細別……253
図214　文字瓦（7）（1/2）……254
図215　文字瓦（8）（1/2）……255
図216　文字瓦（9）（1/2）……256
図217　文字瓦（10）（1/2）……257
図218　文字瓦（11）（1/2）……259
図219　刻み分類の出土比率……260
図220　刻みの分類（1）（1/2）……261
図221　刻みの分類（2）（1/2）……262
図222　刻みの分類（3）（1/2）……263
図223　製作手法の分類……264
図224　堂塔の変遷……266
図225　施釉陶器等（1）（1/1・1/3）……269
図226　施釉陶器等（2）（1/3）……270
図227　中・近世土器（1/3）……271
図228　土製品（1/2）……272
図229　銅製品（1/1・1/2）……274
図230　石製品（1/2・1/3）……275
図231　土器の法量分布……277
図232　備前国分寺跡出土の古代の土器（1/8）……279
図233　検出遺構および堂塔の基準点（1/1,500）……284
図234　伽藍配置復元図（1/1,250）……286
図235　伽藍配置および造営軸の復元（1/1,250）……291
図236　回廊復元図（1/1,000）……297

表目次

表１　軒瓦の出土状況 ……139
表２　備前国分寺跡出土文字瓦一覧 ……258
表３　刻み分類ごとの出土状況 ……260
表４　基準遺構の位置 ……283
表５　遺構の方位の振れ ……285
表６　僧房基準遺構の位置 ……285
表７　僧房遺構方位との振れ ……285
表８　東築地塀の基準遺構の位置 ……287
表９　東築地塀遺構方位との振れ ……287
表10　各造営軸との方位の振れ ……288
表11　堂塔心の推定座標 ……289
表12　堂塔間の距離 ……289
表13　築地塀の全長 ……290
表14　堂塔規模の一覧 ……294
表15　土器観察表 ……309
表16　石製品観察表 ……314
表17　金属製品観察表 ……315
表18　土製品観察表 ……316
表19　新旧遺構名称対照表 ……317

図版目次

図版１　１ 金堂全景（北東から）
　　２ 講堂全景（南西から）
図版２　南門・中門調査区全景（上が北）
図版３　１ Ｔ４北面回廊（南西から）
　　２ Ｔ４北面回廊南側基壇斜面
　　屋根瓦の倒壊状況（南から）
図版４　１ Ｔ５西面回廊（南西から）
　　２ 塔（上が北）
図版５　１ 金堂石敷１（北から）
　　２ 塔基壇版築断面礎石89・90（南東から）
　　３ 金堂基壇版築断面（東から）
図版６　１ 講堂瓦出土状況（南から）
　　２ 北面回廊銅板出土状況（西から）
図版７　１ 北面回廊および講堂西端（南西から）
　　２ 北面回廊炉１（北西から）
　　３ 北面回廊炉２（西から）
図版８　１ 北面回廊炉３（西から）
　　２ 北面回廊炉５（南西から）
　　３ Ｔ５西面回廊炉６（西から）
図版９　１ 遺跡遠景（東から）
　　２ 遺跡全景（南から）
図版10　１ 遺跡の現況塔付近（南から）
　　２ 遺跡の現況寺域北端（北から）
　　３ 遺跡の現況寺域西側（南西から）
図版11　１ 金堂周辺全景（上が北）
　　２ 金堂全景（上が北）
図版12　１ 金堂（南西から）
　　２ 金堂礎石９・10・14・15（北西から）
　　３ 金堂礎石５（東から）
図版13　１ 金堂礎石７（東から）
　　２ 金堂石敷１（北東から）
　　３ 金堂雨落ち溝１断面（東から）
図版14　１ 講堂全景（上が北）
　　２ 講堂北東隅（南西から）
図版15　１ 講堂西部と北面回廊（西から）
　　２ 講堂北東隅（北から）
図版16　１ 講堂雨落ち溝２瓦だまり（西から）
　　２ 講堂雨落ち溝２瓦だまり（北西から）
　　３ 講堂雨落ち溝２軒平瓦出土状況（西から）
図版17　１ 講堂礎石32・35（南東から）
　　２ 北面回廊白磁椀等出土状況（南西から）
　　３ 北面回廊石列１（西から）

図版18　1 Ｔ４北面回廊（北西から）
2 Ｔ４北面回廊南側基壇斜面
屋根瓦の倒壊状況（北西から）
3 Ｔ４礎石41周辺遺物出土状況（北から）
図版19　1 Ｔ５西面回廊（東から）
2 Ｔ５西面回廊（北東から）
3 Ｔ６東面回廊（東から）
図版20　1 中門全景（西から）
2 中門礎石57（東から）
3 南面回廊礎石63･64（北から）
図版21　1 南門全景（北西から）
2 南門全景（南から）
図版22　1 南門雨落ち溝12断面（南西から）
2 南門雨落ち溝12断面（北西から）
3 南面築地雨落ち溝14（南から）
図版23　1 塔調査区全景（東から）
2 塔礎石92（北西から）
3 塔礎石94（南から）
図版24　1 塔礎石93断面（北から）
2 塔礎石と溝19（西から）
3 塔溝19断面（南東から）
図版25　1 Ｔ７僧房（西から）
2 Ｔ７僧房礎石78（北から）
3 Ｔ７僧房礎石73･79（北から）
図版26　1 Ｔ８僧房（上が北）
2 Ｔ８僧房雨落ち溝16（南東から）
3 Ｔ８僧房Ｐ－17・礎石84（北から）
図版27　1 Ｔ８僧房礎石85（北から）
2 Ｔ８僧房Ｐ－12銅印出土状況（西から）
3 T15･16南面築地（北東から）
図版28　1 T17全景（東から）
2 T17雨落ち溝17（南東から）
3 T17雨落ち溝17炉壁出土状況（西から）
図版29　1 T18全景（東から）
2 T19Ｂ全景（南西から）
3 T19Ｂ雨落ち溝17断面（南東から）
図版30　1 T11全景（北東から）
2 T11北面築地（北から）
3 T11カマド１（東から）
図版31　1 T13全景（南西から）
2 T13雨落ち溝19･石列３（南東から）
3 Ｔ９全景（南東から）
図版32　1 軒丸瓦１式　軒平瓦１Ｂ式
2 軒丸瓦１式　軒平瓦２Ｂ式
図版33　1 軒丸瓦２式　軒平瓦３式
2 軒丸瓦４式　軒平瓦４式
図版34　1 軒丸瓦６式　軒平瓦５式
2 軒丸瓦３式
3 軒丸瓦５式
4 軒丸瓦７式
5 軒丸瓦９式
図版35　1 軒丸瓦12式
2 軒丸瓦13式
3 軒丸瓦14式
4 軒丸瓦15式
5 軒丸瓦16式
6 軒丸瓦18式
図版36　1 軒平瓦７式
2 軒平瓦８式
3 軒平瓦12式
4 軒平瓦13式
5 軒平瓦14式
6 軒平瓦15式
7 軒平瓦16式
8 軒平瓦17式
図版37　1 軒平瓦18式 (a)
2 軒平瓦18式 (c)
3 軒平瓦19式
4 軒平瓦20式
5 軒平瓦22式
6 軒平瓦23式
7 軒平瓦24式
8 軒平瓦27式
図版38　1 軒丸瓦20式　軒平瓦25式
2 軒丸瓦21式 (a)
3 軒丸瓦21式 (b)

図版39　1 軒丸瓦22式　軒平瓦26式
2 軒丸瓦23式　軒平瓦28式
図版40　1 軒丸瓦24式
2 軒丸瓦25式
3 軒丸瓦26式
4 軒丸瓦27式
5 軒丸瓦28式
図版41　1 軒平瓦29式
2 軒平瓦30式
3 軒平瓦31式
4 軒平瓦32式
5 軒丸瓦29式　軒平瓦33式
6 軒平瓦34式
図版42　丸瓦
図版43　平瓦
図版44　1 軒平瓦33式
2 丸瓦
3 平瓦の胎土（174と同種）
4 軒平瓦33式鰭状部基部破面
5 隅木蓋瓦
6 塼
図版45　鬼瓦
図版46　文字瓦
図版47　1 北面回廊下層出土土器
2 北面回廊上層出土土器等（1）
図版48　1 北面回廊上層出土土器等（2）
2 雨落ち溝４出土土器
図版49　1 僧房出土土器
2 T11雨落ち溝19出土土器
図版50　1 カマド１周辺出土土器
2 T17出土土器
3 円孔をもつ須恵器等
4 縄文・弥生時代の土器
5 中・近世の土器（1）
図版51　1 中・近世の土器（2）
2 土製品
図版52　1 鉄製品
2 石器・石製品
図版53　1 炉壁等
2 壁土
図版54　1 唐三彩・三彩
2 緑釉・灰釉陶器

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

昭和44（1969）年から、遺跡の後背丘陵（東高月丘陵）において当時の山陽町下市・河本・岩田・和田・熊崎・鴨崎の６地区にわたって計画された大規模住宅団地である県営山陽団地の開発が始まった。計画地には、用木山遺跡をはじめとする弥生時代中期後半の集落遺跡群や、古墳時代にわたって築かれた多くの古墳群が所在し、発掘調査の後、記録保存がなされた。昭和46（1971）年に住宅団地への入居が始まり、人口が増加する中で、幼稚園や小学校などの公共施設も整備されていった。この山陽団地に近接する本遺跡も例外ではなく、住宅需要の増加から、寺域想定区域内に次々に宅地開発が計画された。

開発行為から備前国分寺跡を保護する目的で、岡山県教育委員会が中心となり昭和49（1974）年度に確認調査を実施し、寺域想定区域の地下には比較的良好な形で国分寺の遺構が残存していることが判明した。主要な建物については南門・中門・金堂・講堂・僧房・塔が確認され、塔を南東隅に配した、いわゆる国分寺式の伽藍配置をとっている。寺域についても、東西600尺、南北ははっきりしないまでも800尺程度内におさまるものと推定された（備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975）。

この調査結果を受け、山陽町は遺跡の保存を図るため、文化庁に対し国指定申請を行い、昭和50（1975）年７月19日付け文部省告示第119号で国指定史跡「備前国分寺跡」として指定を受けた。その後、国庫補助金を受けながら史跡地の公有化を進め、平成14年度末で史跡地の９割を買い上げ、民有地３筆・神社有地１筆・官有地２筆を残して史跡地の公有化を終了した。

その間、平成８年度に山陽町遺跡整備委員会を発足させ、平成８・９年度に本遺跡や備前国分尼寺跡、両宮山古墳を中心とした西高月遺跡群の調査研究、整備活用の指針を協議・検討した。その協議結果は『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』（平成10年発行）にまとめられている。その中で、本遺跡は整備拠点地区に設定され、早期の保存活用整備が望まれる遺跡とされ、整備のための発掘調査の必要性が述べられた。

平成13年度には第二次山陽町遺跡整備委員会を発足させ（合併後は第二次山陽遺跡整備委員会）、備前国分寺跡等の調査計画について指導をあおぎ、整備に向けて動き出した。

全国の国分寺跡の多くが住宅や現国分寺などの既存建物で遺存状況が良好とはいえない中、備前国分寺跡は寺域全体が比較的良好な状態で残っており、周囲の遺跡群とあわせて整備、活用が求められる遺跡である。そこで、山陽町（合併後赤磐市）では備前国分寺跡整備のための資料を得る目的で、平成15～17年度から３ヵ年にわたって発掘調査を実施することとした。調査内容は、主に主要建物の規模・構造、そして寺域の範囲確認である。

なお、３ヵ年の調査後（平成18年度以降）、詳細把握のできなかった僧房等を中心に調査を継続している。

調査にあたっては第二次山陽遺跡整備委員会から多くの御指導・御教示をいただき、文化庁記念物

課および岡山県教育庁文化財課から御指導・御教示を得た。

参考・引用文献

備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』10
　岡山県教育委員会

山陽町1998『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』

写真１　遺跡整備委員会　現地指導

第２節　調査の経過と体制

（１）調査の経過

第１次調査　平成15年６月に着手し、平成16年１月に終了した。第1次調査では主に講堂の規模・構造を把握するために講堂推定範囲の約3/4にわたって調査区を設け、調査を実施した。また、３本のトレンチによる調査を行った。トレンチの内訳は、講堂の北方に僧房の確認を目的としたＴ７、そして寺域の西限、北限を確認するためのＴ２およびＴ３である。

講堂調査区は、後世の耕作により基壇を大幅に削平されていたが、創建当初に建てられた建物が平安時代末に焼失し、鎌倉時代以降に建替えがなされていることが明らかとなった。また、それまで配置が明確でなかった回廊が講堂に接続することが判明し、かつその構造が複廊式であったことが確認された。

Ｔ７では礎石や柱穴を確認したが、僧房の規模・構造の把握には至らなかった。そのため、僧房建物については以降の調査の課題となった。また、寺域範囲の確認トレンチでは、Ｔ２・Ｔ３ともにそれを示す遺構は確認されず、近世の溝を検出した。

第２次調査　平成16年６月に着手し、平成17年１月に終了した。第２次調査では、第１次調査によって講堂に接続することが判明した回廊の規模をＴ４で把握した。複廊式の回廊は焼土層の下に良好な状態で遺存しており、基壇南側斜面には屋根瓦が位置関係を保ったまま落下した状態で認められた。

また、南門・中門・塔の基壇規模、構造について平面的な調査を行った。南門には原位置をとどめる礎石が残り、その遺存状況は良好であった。南門の西側では南面築地を検出し、寺域範囲についての情報も得られた。中門基壇は近世に掘削され溜め池が設けられたため、遺存状況は必ずしも良くなかったが、根石から柱配置等の復元が可能であった。中門基壇から西へ回廊基壇が確認され、回廊が中門と講堂を結ぶことが確定した。

塔については礎石は抜き取られていたが、頑丈に設置された根石が残り、建物規模の復元ができた。さらに、石造七重層塔が立つ心礎が平面位置としてほぼ原位置を保っていることも明らかになった。

第３次調査　平成17年６月に着手し、平成18年２月に終了した。第３次調査では金堂基壇の北東部分に調査区を設定し、調査を進めた。基壇版築の状況がよく観察でき、礎石の据え付け方法を確認することができた。基壇周囲の瓦だまりからは、金堂の建替えの変遷を理解し得る状況が観察された。

この年次の金堂調査区で、主要建物の比較的広範な面積に及ぶ調査を終えたので、このほか14本のトレンチを設け、寺域規模等の確認を行った。Ｔ５・６では回廊の東西配置を把握し、西面回廊ではとりわけ良好な状態で基壇を検出している。寺域北・東・南辺の把握を目的としたＴ10～13・15～19Ｂにおいては、築地やそれに伴う雨落ち溝の状況から、寺域範囲を確認することができた。北限については、昭和49年度調査時には判明しておらず、北限の把握は当該年次調査の新たな成果となった。Ｔ８で第１次調査に続いて僧房の調査を行ったが、同一基壇上に別棟の建物を検出するなど、僧房の構造・規模については不明瞭な点が多く、さらなる調査が必要となった。

現地説明会等　毎年度、発掘調査状況の公開・周知を目的として現地説明会を開催した。平成15年11月15日（第１次調査）、平成16年11月６日（第２次調査）、平成17年12月18日（第３次調査）に開

催し、各々160名程度の参加を得た。また、第３次調査中に備前国分寺跡発掘調査速報展として平成17年11月19日～平成18年１月31日まで「瓦に刻まれた文字」を赤磐市山陽郷土資料館において開催し、備前国分寺跡出土の文字瓦や銅印を展示、公開した。

整理作業　遺構図面・写真・出土遺物等の整理作業は調査後に随時実施し、主に平成18・19・20年度に実施した。

（２）調査および報告書作成の体制

３ヵ年にわたる調査に際しては、第二次山陽遺跡整備委員会を開催し、委員の方々に調査方針・計画や検出遺構の評価などについて検討していただき、多くの御教示と御指導をいただいた。

また、調査に至る協議、さらに調査の過程では文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課の御指導をいただいた。調査にあたっては地元の方々をはじめ、多くの方々からご協力をいただいた。

さらに、本報告書作成の過程で、遺物等について諸氏に分析あるいは同定・鑑定等を依頼し、ご指導をいただいた。記して御礼申し上げる。

第二次山陽遺跡整備委員会

伊藤　晃（元岡山県古代吉備文化財センター参事）	
岡本明郎（日本考古学協会員）	
狩野　久（元岡山大学教授）	
亀田修一（岡山理科大学総合情報学部教授）	
葛原克人（元ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授）	平成17年度まで
河本　清（元くらしき作陽大学食文化学部教授）	平成18年６月から
近藤義郎（岡山大学名誉教授）	平成17年10月まで
中村　一（京都大学名誉教授）	
則武忠直（赤磐市文化財保護委員会議副議長）	
箱崎和久（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）	平成17年度から

指導・助言

文化庁文化財部記念物課	文化財調査官	白崎　恵介	平成19年８月まで
	文化財調査官	市原　富士夫	平成19年９月から
岡山県教育庁文化財課	参事	田村　啓介	
	総括副参事	平井　泰男	平成17年度まで
	総括副参事	光永　真一	平成18年度から
	総括主幹	田中　秀樹	平成16年度まで
	総括主幹	成本　俊治	平成17・18年度
	主幹	三宅　克広	平成19年度まで
	主任	金田　善敬	平成16年度から

事務局

山陽町教育委員会　平成17年３月６日まで

赤磐市教育委員会　平成17年３月７日から

	教育長	渡辺　勝也	平成17年度まで
	教育長	花田　文甫	平成18年度から
	教育次長	故倉　英教	平成19年度まで
	教育次長	藤原　洋文	平成20年度から
社会教育課	課長	真野　卓見	平成17年３月まで
	課長	楢原　哲哉	平成17年３月から平成19年度まで
	課長	奥田　智明	平成20年度から
	参事	宇垣　匡雅	平成19年度まで（調査・整理担当）
	主幹	澤山　孝之	平成20年度から（整理担当）
	主査	塩見　真康	平成18年度まで（調査担当）
	主事	大熊　美穂	平成19年度まで（調査・整理担当）
	主事	有賀　祐史	平成16年度から（調査・整理担当）
	嘱託	畑地　ひとみ	平成20年度から（整理担当）

遺物の検討にあたっては以下の方々からご教示をいただき、とりわけ白石・齋藤両氏には分析の労をとっていただいた。

瓦	上原　真人	（京都大学大学院文学研究科）
	志賀　崇	（京都大学大学院）
	清野　陽一	（京都大学大学院）
	藪中　五百樹	（興福寺）
	渡部　明夫	（前香川県埋蔵文化財センター所長）
	渡邊　誠	（高松市教育委員会）
三彩・緑釉・灰釉陶器	高橋　照彦	（大阪大学大学院文学研究科）
古代・中世土器	山本　悦世	（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）
	福田　正継	（岡山理科大学総合情報学部研究員）
中世・近世土器・瓦	乗岡　実	（岡山市教育委員会）
銅印	北條　朝彦	（宮内庁書陵部）
銅製品成分分析	齋藤　努	（国立歴史民俗博物館）
壁土・石製品	白石　純	（岡山理科大学自然科学研究所）
石材鑑定	鈴木　茂之	（岡山大学理学部）

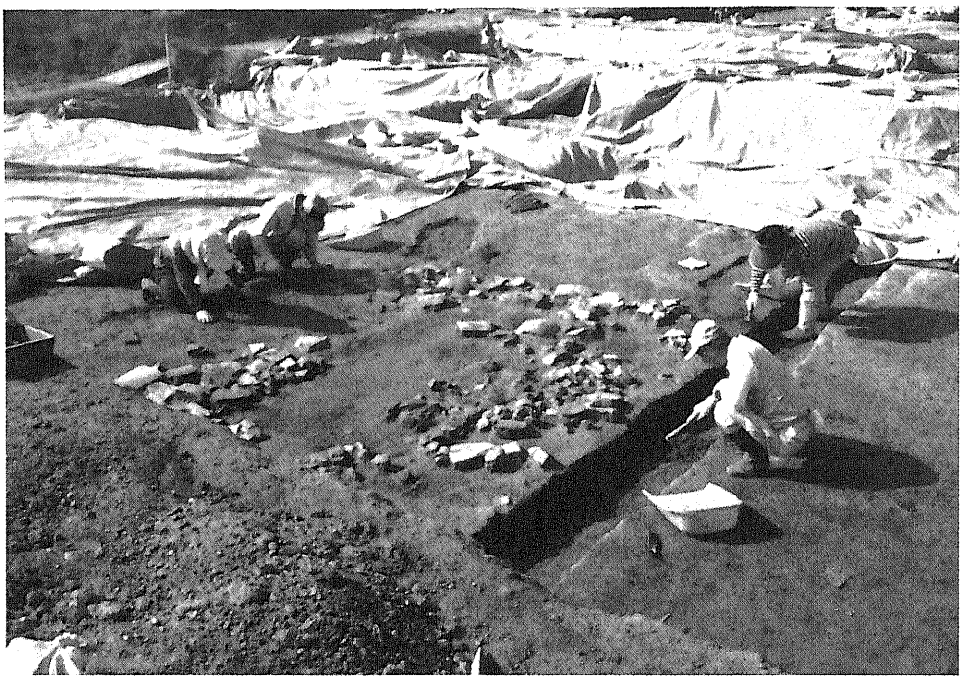


写真２　発掘調査状況

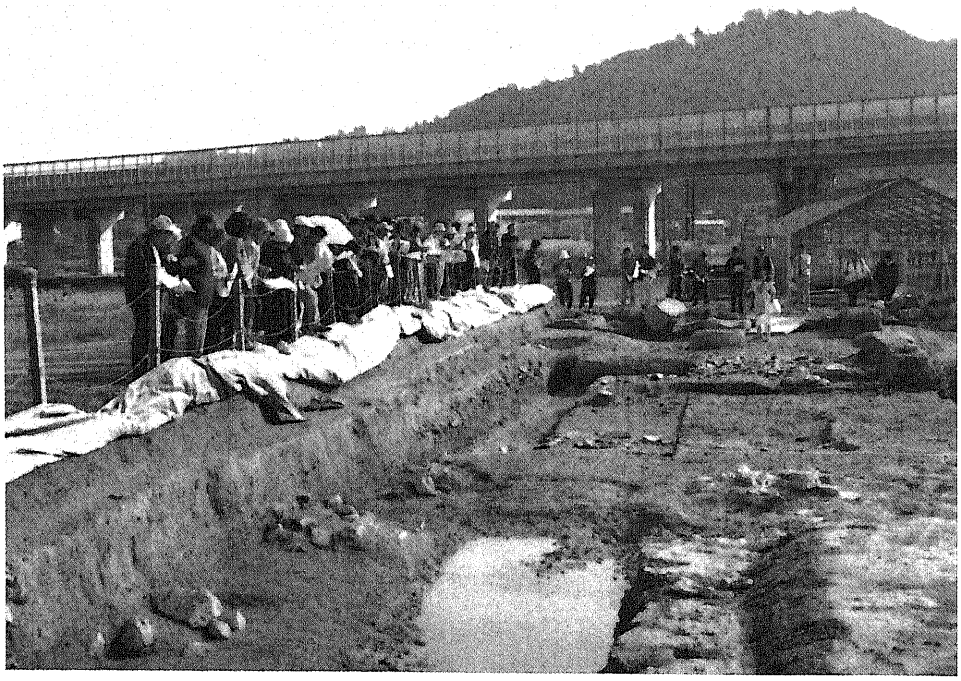


写真３　現地説明会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的歴史的環境

（１）地理的環境（図１・２）

備前国分寺跡は、岡山県赤磐市馬屋に位置する古代から中世にかけての寺院跡である。

赤磐市は岡山県東南部、沖積平野の北側に位置しており、市域は北側の吉備高原から続く赤磐丘陵地が広がり、市域の東端では吉井川が南流し、西端に近接して旭川が南流する。また、赤磐市西部には砂川が貫流しており、これらの河川や支流に沿って盆地状の平野が形成され、丘陵と平地が入組んだ地形となっている。遺跡の多くは河川に沿って

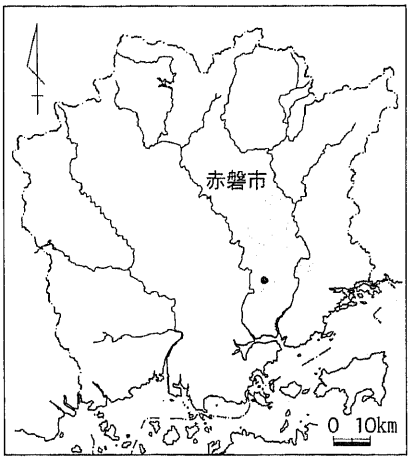


図１　位置図

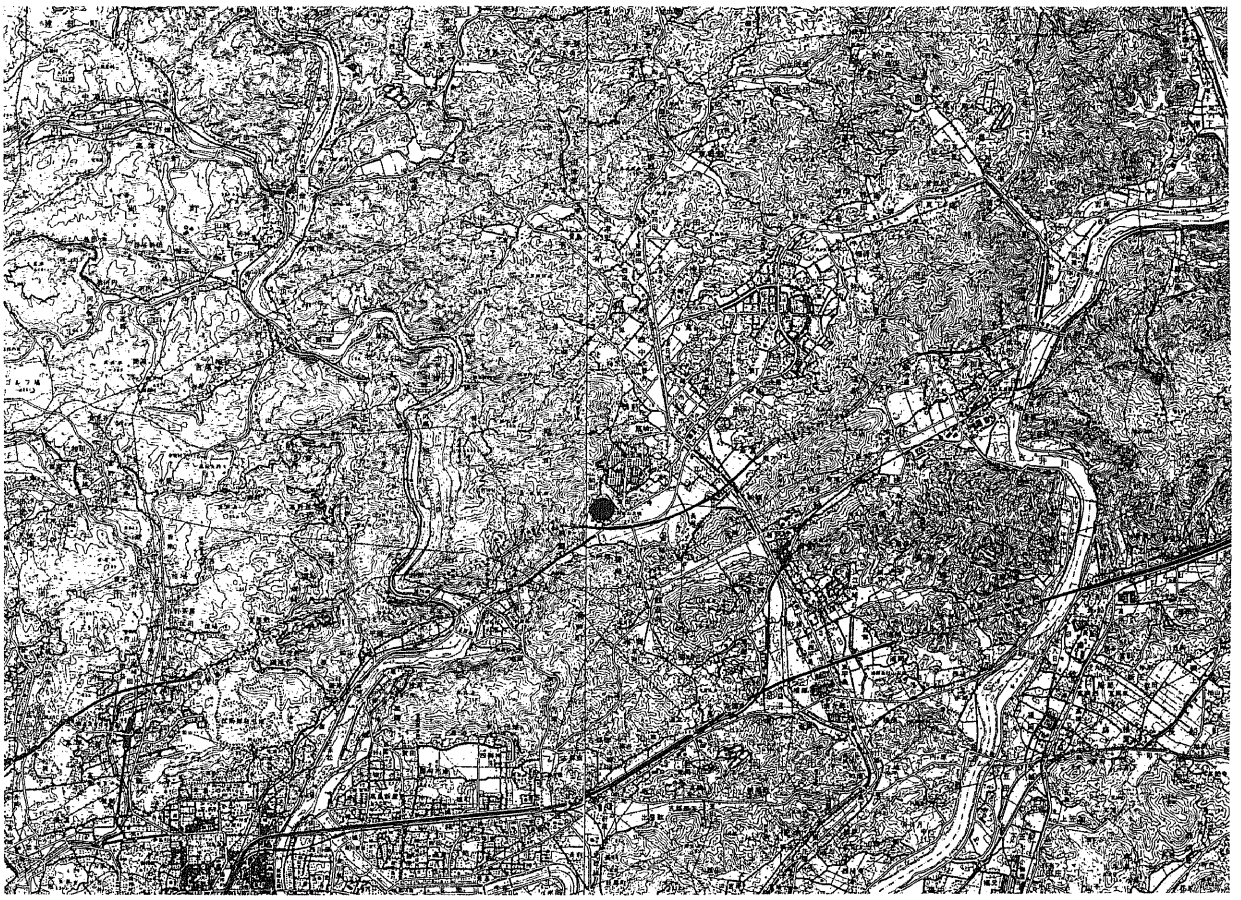


図２　備前国分寺跡位置図（1/150,000）

形成された平野もしくは平野に面した丘陵の先端に形成されており、備前国分寺跡も砂川中流域に沿って形成された平野上に立地している。

この赤磐市の南西部に広がる砂川中流域の沖積平野は、東西約5.5㎞、南北約6.3㎞をはかる。海抜は11～25m、周囲を標高200～300mの山々に囲まれ、東側の丘陵は比較的低い。東には可真の盆地状平地、南には岡山市瀬戸町北西部の盆地状平地、南西には龍ノ口山塊を隔てて旭川下流域東岸平野が広がっている。

（２）歴史的環境

旧石器時代・縄文時代（図３、図版50-４・52-２）

備前国分寺跡の所在する赤磐市南西部の砂川中流域の沖積平野では、旧石器時代の明確な遺跡は現在確認されていない。

備前国分寺跡の発掘調査では、国分寺建立以前、縄文時代から古墳時代にかけての遺物も少量出土しており、図３にそれらを掲載した。１・２は縄文土器の深鉢、８は有舌尖頭器、９は石鏃、10は石錘である。中でも８は縄文時代草創期の遺物である。なお、これらはいずれも奈良時代以降の包含層からの出土である。

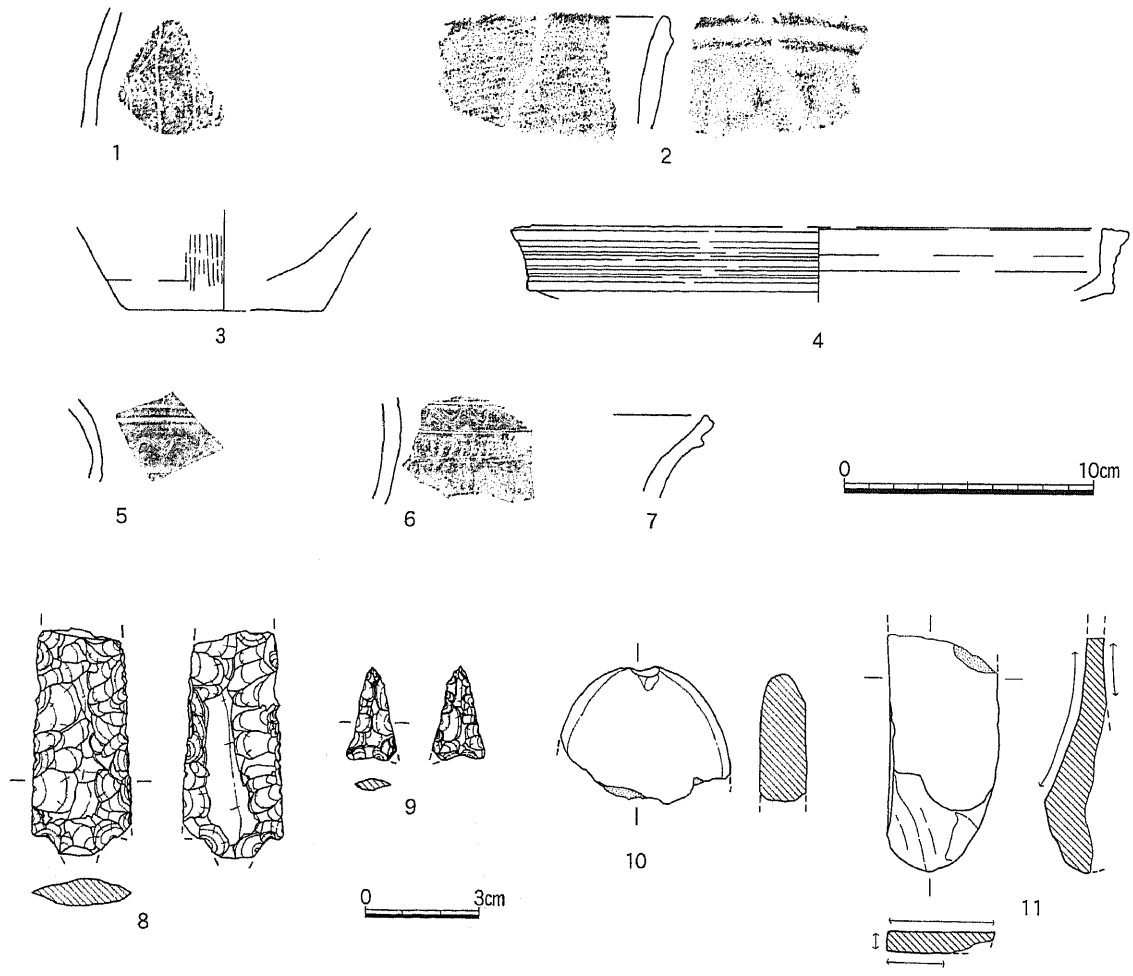


図３　古墳時代以前の出土遺物（1/3・1/2）

また、斎富遺跡（２）からは縄文時代後期の土器の他、土壙状の遺構から晩期の土器と軟玉製丸玉が出土している。南方前池遺跡（３）からは堅果類を貯蔵した晩期の貯蔵穴がまとまって検出された。吉原遺跡（４）からは晩期の石棒が出土した。

弥生時代（図４）

弥生時代前期の土器は南方前池遺跡のほか、山陽小学校遺跡（５）からも出土しており、集落が沖積平野へと進出・増加していったようである。

中期以降、数多くの集落が出現したことが確認されており、中期中葉から後期初頭にかけての遺跡は丘陵の尾根や斜面等、比較的高所に立地している遺跡が多い。備前国分寺跡の北東、東高月丘陵に立地する中期後半の集落遺跡として、数多くの竪穴住居が確認された用木山遺跡（６）・竪穴住居群が検出された惣図遺跡（７）・弥生時代中期から古代にかけて続く門前池遺跡（８）等が知られる。

備前国分寺跡の南東に位置する穂崎中次戸遺跡（９）・穂崎鳥井遺跡（10）・穂崎塩辛遺跡（11）からは弥生時代以降の遺物が出土している[1]。弥生時代後期の土器が中心を占めるが、中期まで遡る可能性がある。石鏃16～18は穂崎中次戸遺跡、壺口縁部12と石鏃19は穂崎鳥井遺跡、甕口縁部13・高杯脚部14・器台口縁部15・石鏃20は穂崎塩辛遺跡出土の遺物である。

後期の遺跡は中期に対して、谷口や山裾の微高地などに立地する大規模な集落が多い。中期から続く門前池遺跡の他、門前池東方遺跡（12）や弥生時代から中近世にわたる集落跡の斎富遺跡、大量の土器が出土した浦山遺跡（13）等が確認されている。

墳墓も数多く確認されており、中期の墓群である四辻峠遺跡（14）、後期の方形台状墓９基等が検出された愛宕山遺跡（15）、特殊器台・壺を伴う土壙墓群が検出された便木山遺跡（16）等がある。

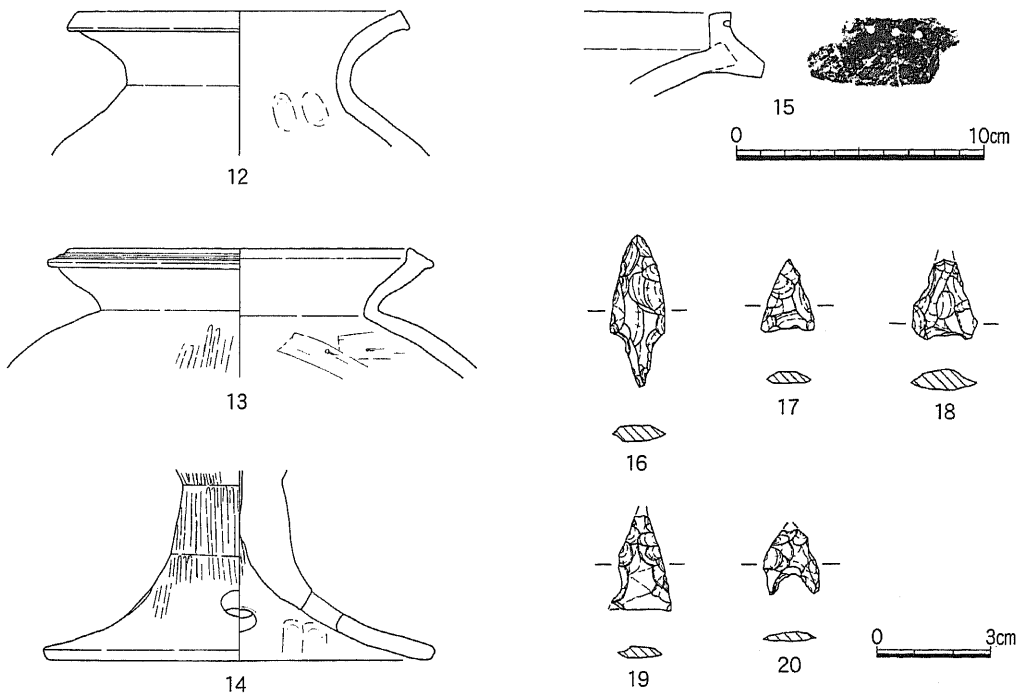
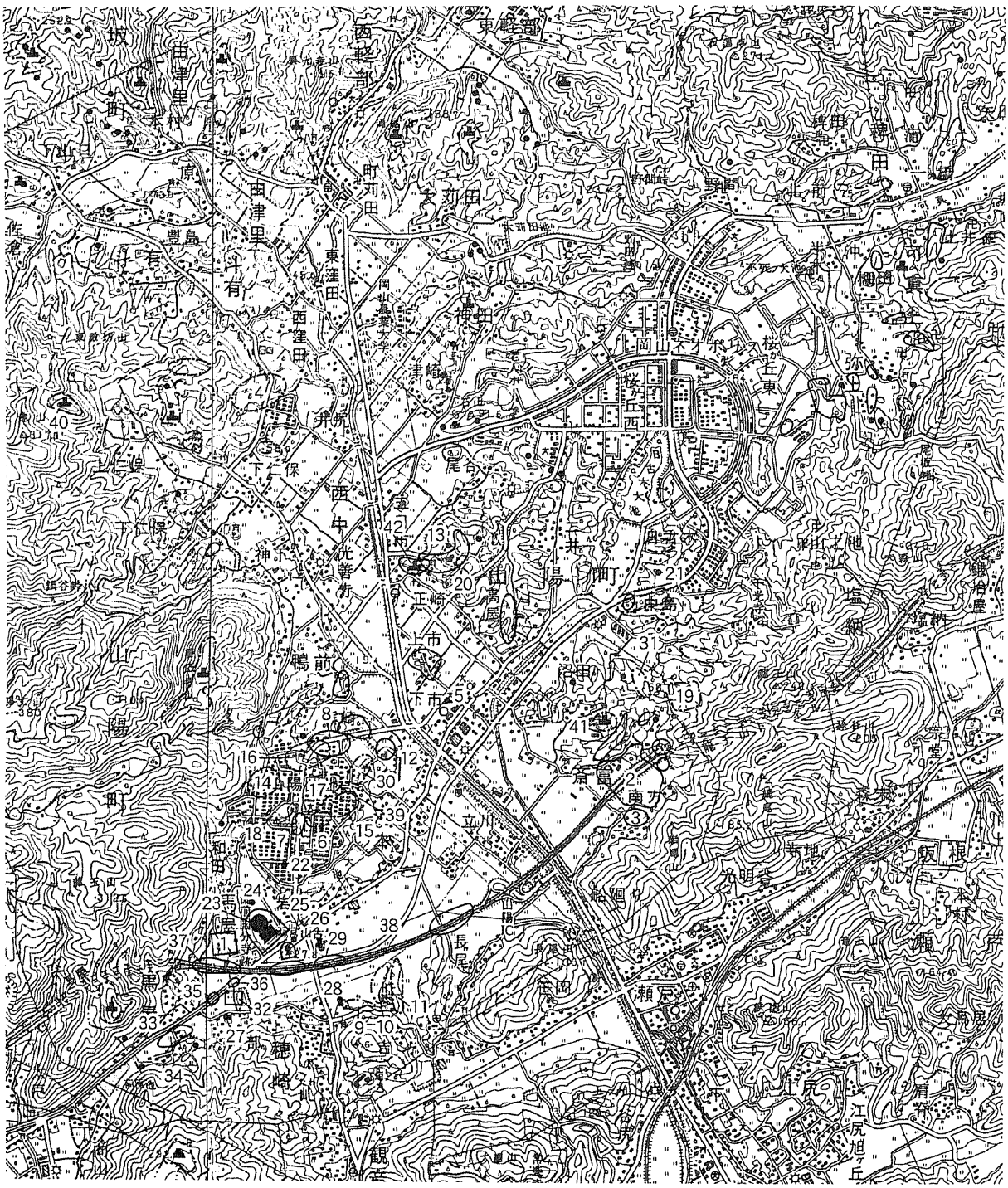


図４　穂崎中次戸・鳥井・塩辛遺跡出土遺物（1/3・1/2）



1. 備前国分寺跡
2. 斎富遺跡
3. 南方前池遺跡
4. 吉原遺跡
5. 山陽小学校遺跡
6. 用木山遺跡
7. 惣図遺跡
8. 門前池遺跡
9. 穂崎中次戸遺跡
10. 穂崎鳥井遺跡
11. 穂崎塩辛遺跡
12. 門前池東方遺跡
13. 浦山遺跡
14. 四辻峠遺跡
15. 愛宕山遺跡
16. 便木山遺跡
17. 用木古墳群
18. 野山古墳群
19. 斉戸池東古墳群
20. 正崎古墳群
21. 中島１号墳
22. 岩田３号墳
23. 両宮山古墳
24. 和田茶臼山古墳
25. 正免東古墳
26. 森山古墳
27. 朱千駄古墳
28. 小山古墳
29. 廻り山古墳
30. 宮山古墳群
31. 別所古墳群
32. 備前国分尼寺跡
33. 高月駅家推定地
34. 馬屋森向遺跡
35. 馬屋出水遺跡
36. 馬屋長田遺跡
37. 馬屋遺跡
38. 高月条里遺構
39. 三蔵畑遺跡
40. 葛木城跡
41. 沼田城跡
42. 正崎城跡

図５　周辺遺跡分布図（1/50,000）

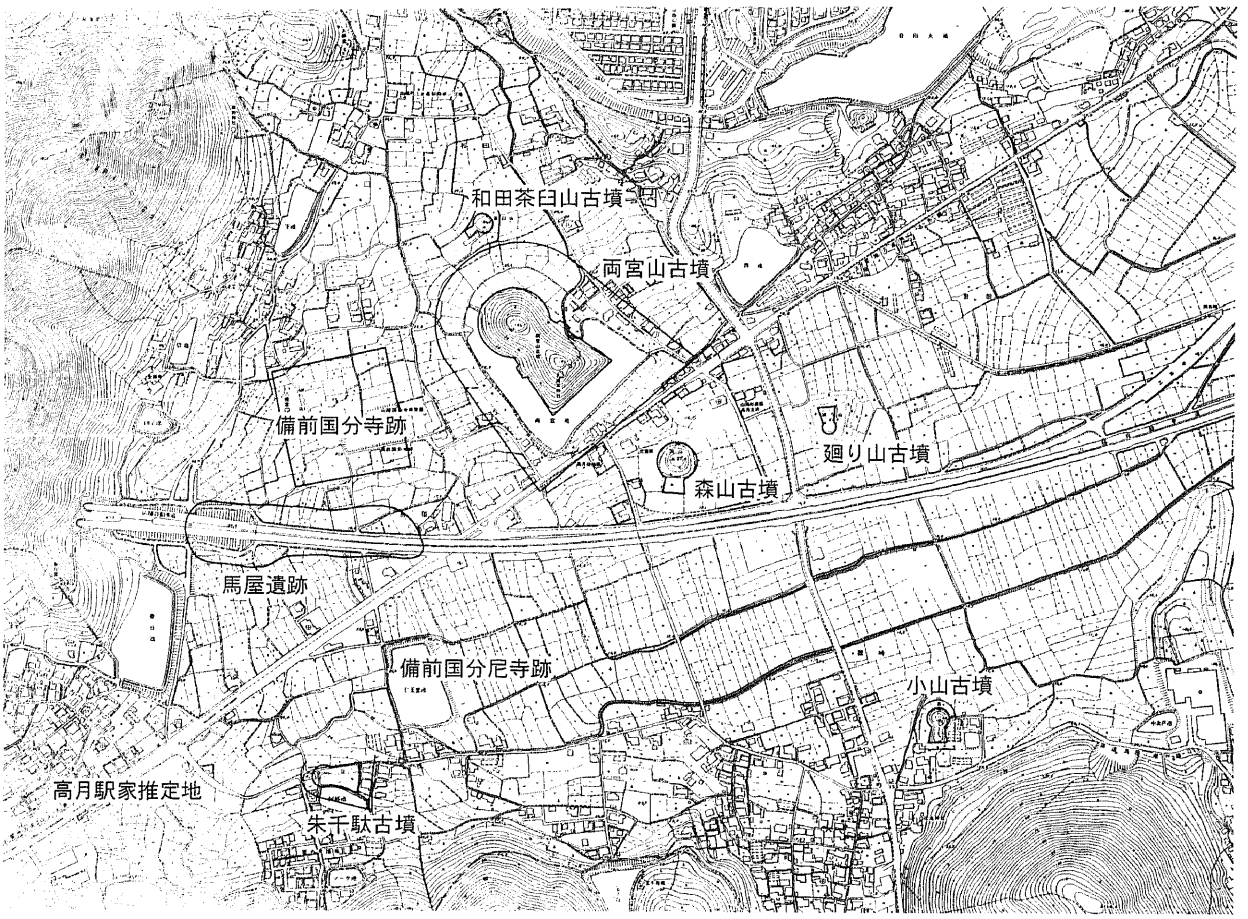


図６　周辺遺跡位置図（1/12,000）

古墳時代

東高月丘陵上では用木古墳群（17）の出現以後、数多くの古墳が築造された。13基の古墳からなる野山古墳群（18）、斉戸池東古墳群（19）なども前～中期古墳の可能性が強い。発掘調査の行われた古墳としては正崎４号墳（円墳・13m）（20）や、墳裾を取り巻くように木棺・土壙墓が多数設けられていた中島１号墳（円墳・18m）（21）が挙げられる。中期中葉には岩田３号墳（方墳・21m）（22）が築造され、中期後葉には吉備の三大巨墳の一つ、全長206mをはかる巨大な前方後円墳の両宮山古墳(23）が築造される。両宮山古墳は後円部径116m、後円部高さ23.6m、前方部長110mをはかり、墳丘を囲う二重周濠の外濠と内濠の間に幅25m前後の中堤がめぐる。両宮山古墳に近接して、二重周濠を有する和田茶臼山古墳（帆立貝形古墳・全長55m）（24）・正免東古墳（円墳？・約25m）（25）・森山古墳（帆立貝形古墳・82m）（26）が築造された。中期末には朱千駄古墳（前方後円墳・85m）（27）、続いて小山古墳（前方後円墳・58m）（28）が築かれ、後期前半には廻り山古墳（前方後円墳・47m）（29）が築かれた。

その他、首長墳とは異なるが、銅鏡、三環鈴、鉄刀、甲冑など様々な副葬品が出土した径約20×16mの円墳の正崎２号墳（20）、宮山４号墳（方墳・19×14m）（30）、別所古墳群（31）などがある。

古墳時代の集落では、門前池遺跡、朝鮮系の遺物が多数出土した門前池東方遺跡、斎富遺跡などが挙げられる。

古代（図７）

備前国は、和銅６（713）年に備前北部の６郡を割いて美作国が置かれた後、邑久・赤坂・上道・御野・津高・児島の６郡となる。養老５（721）年に邑久郡と赤坂郡を割いて藤原郡が置かれて７郡となる。藤原郡は５年後には藤野郡と改称、天平神護２（766）年には邑久郡・赤坂郡・上道郡を割いて藤野郡の郡域を拡大し、神護景雲３（769）年には藤野郡から和気郡に再度改称、延暦７（788）年に和気郡を分割して新たに磐梨郡が置かれ、８郡51郷となる。

この備前国の中で、現在の赤磐市域にあたるのが、赤坂郡周迊・宅美・軽部・鳥取・高月郷、磐梨郡佐伯・珂磨郷、和気郡新田郷である。

天平13（741）年の聖武天皇の詔勅を受けて造営された備前国分寺跡（１）と備前国分尼寺跡（32）は、当時の赤坂郡高月郷（現　赤磐市大字馬屋・穂崎）に位置している。

備前国分寺跡は上道郡に位置する備前国府推定地（現　岡山市国府市場）から北東の離れた場所に位置している。備前国分寺と備前国府とは古代山陽道では繋がってはおらず、備前国府は北に位置する山陽道に面していた備前国分寺跡とは支路で通じていたものと考えられている。

備前国分寺の南西部、砂川中流域平野部と旭川によって形成された沖積平野の境界をなす、低い鞍部に古代山陽道高月駅家推定地（33）が所在する。高月駅家は赤磐市松木の集落周辺に想定される「珂磨駅」(2)と「津高駅」の間に位置する駅家である。

備前国分寺跡の位置する平野の南西部周辺には、大字馬屋、小字鴻ノ巣、馬屋奥、寺谷、原井、片山、柿木、笠井、塔上、塔下、鍛冶屋後、出水、長田、沖田、大字穂崎小字仁王堂、長田、阿部、竹ノ鼻、大字和田では助成、回りなどの字がある。

これらの字の中には、駅家との関係を窺わせる大字馬屋の他に、大字馬屋には塔上や塔下、鍛冶屋後という小字が、大字穂崎には仁王堂という小字が残る。

高月駅周辺に立地する馬屋森向遺跡（34）では、平安時代以前の古道と推測される遺構が検出された他、平城宮式（6225型式系）の１点を除く軒丸瓦はすべて備前国分寺の創建瓦と同文であった。馬屋出水遺跡（35）・馬屋長田遺跡（36）からは官衙との関係が推定される奈良時代の遺物・遺構が検出されている。奈良時代から室町時代前半を中心とした集落跡の馬屋遺跡（37）からは多数の建物群と共に、備前国分寺と関連すると推定される奈良時代以降の溝２条も検出されている。

さらに馬屋地区から河本地区にかけての水田地帯では、高月条里（38）が残る。

この他、門前池遺跡からは奈良時代から平安時代にかけて10棟以上の建物跡が検出され、陶硯等も出土している。斎富遺跡では、奈良時代の掘立柱建物24棟や区画溝の他、平安時代の火葬墓等が検出されている。

中世以降

平安末期に鳥取郷は、在地領主であった葛木氏によって鳥取荘と呼ばれる荘園として開発され、後白河法皇の持仏堂である長講堂領となった。建久２（1191）年の長講堂所領注文によると、鳥取荘には御簾・御座・砂・布・門兵士・移花などが課せられていたことが分かる。

備前国分寺の南側に位置する馬屋遺跡では古代より室町時代前半まで続く広大な集落および墓が検出されている。三蔵畑遺跡（39）では鎌倉時代の土師器窯跡が確認されており、土師器土鍋類を中心に数多くの遺物が出土した。弥生時代から中世まで続く斎富遺跡でも、室町時代後半期と思われる掘立柱建物15棟が確認されている。

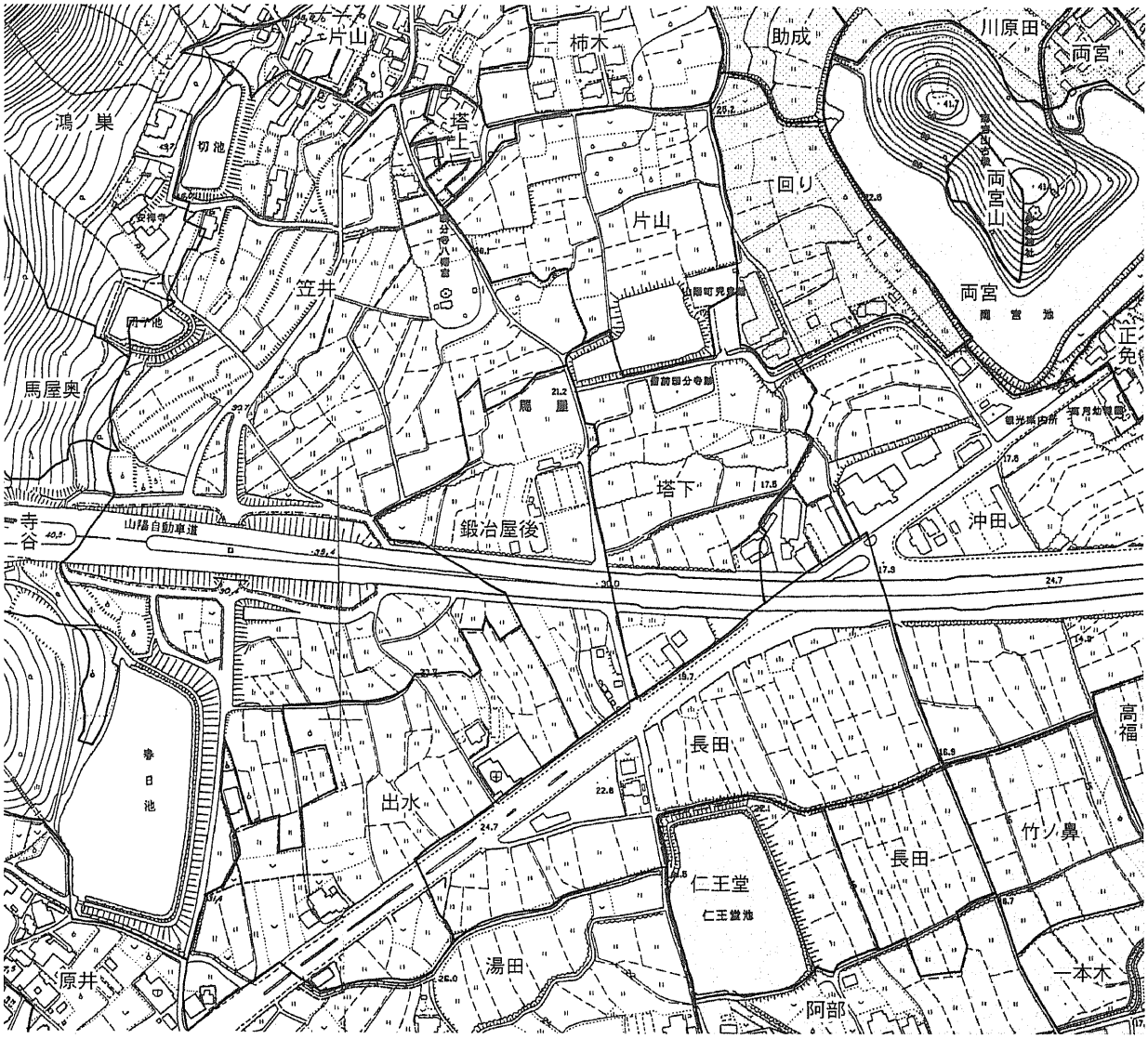


図7　国分寺周辺の字名（1/5,000）

また、葛木氏が在城したと伝えられる葛木城跡（40）をはじめとした中世山城が築かれるようになる。戦国時代に下ると、浦上氏の勢力が伸びてきて沼田城跡（41）や正崎城跡（42）などが築かれていった。

註

（1）試掘調査は穂崎地区ほ場整備事業に伴って平成12（2000）年6月～8月に実施された。

（2）珂磨駅は延暦7（788）年に和気郡を割いて磐梨郡が置かれた際に設けられたもので、分割以前は和気郡内に藤野駅が置かれていた。

参考文献

伊藤晃ほか1995「松尾古墳群　斎富古墳群　馬屋遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会

宇垣匡雅1989「山陽町馬屋地区確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19　岡山県教育委員会

宇垣匡雅2004『森山古墳　両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第２集　岡山県山陽町教育委員会

宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第１集　岡山県赤磐市教育委員会

宇垣匡雅2008『史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書』赤磐市文化財調査報告第２集　岡山県赤磐市教育委員会

神原英朗1971～1977『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』（１）～（６）岡山県山陽町教育委員会

近藤義郎ほか1995『南方前池遺跡』　山陽町教育委員会

新東晃一・松本和男・枝川陽1975「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』９　岡山県教育委員会

下澤公明ほか1996「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105　岡山県教育委員会

椿真治1990「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20　岡山県教育委員会

則武忠直ほか1986『山陽町史』山陽町教育委員会

則武忠直ほか1989『正崎２・４号墳 付 浦山遺跡ほか』岡山県山陽町埋蔵文化財発掘調査概報
（則武忠直ほか2004『正崎２号墳』山陽町文化財調査報告第１集 山陽町教育委員会 に再録）

赤坂町誌編集委員会1984『赤坂町誌』赤坂町

吉井町史編纂委員会1991『吉井町史』史料編上　吉井町

熊山町史編纂委員会1996『熊山町史』通史編　熊山町

第２節　既往の研究

備前国分寺は江戸時代には完全に失われ、寺域は水田や畑に変わっていったとみられる。

寛政２年から４年にかけて諸国の一宮・国分寺等を参詣してまわる日本廻国をおこなった人物の記録には、寛政３（1791）年に備前国は円寿院、八幡宮、吉備津宮の３箇所に参ったことが記されている（小嶋2000）。円寿院は国分寺西側の馬屋集落内に所在する寺院で、備前国分寺の法統を受け継ぐと伝えられるが、江戸時代中期には備前国分寺にかわる寺院として扱われていたことを示している。なお、ここに示される八幡宮が国分寺八幡宮を指すのかどうかは不明である。

備前国分寺の故地についての研究もこのころにはじまる。安永７年に備前の旧跡を記した『寸簸之塵』を著した土肥経平は、備前国分寺について七重層塔と付近の古瓦、国分寺八幡宮の存在や地元の伝承から現位置に備前国分寺を推定した。また「にうもんの池」がありそこに仁王門の礎石があると記す（土肥1778）。

また、岡山藩士松本亮は地誌『東備郡村誌』（江戸時代後期）において土肥と同様の見解を述べ、そのなかで「にふもんの池」は小さい池であること、礎石はこの池の上にあると記す。「にふもんの池」は調査で検出した中門を掘削して設けられた池であり、礎石は南門に遺存する礎石を指すとみてよい。そのほか、現品は失われているが、天明年間に塔付近から銅製の小塔が出土したと伝える。小塔は三重で、長さ4.5寸（13.6cm）、基部径3.1寸（9.4cm）程度の大きさで、側面に文字があるが荒れて読むことができず、底面に宝亀元（770）年春３月慈圓奉詔と記されていたと記し、奈良時代に製作された百万塔の一つではないかと述べた。示された図は方形の平面であるが、文中では径が用いられており円形の平面であったとも考えられる。百万塔は木製であるが、同様の形状の銅製品が製作され、それが出土した可能性もあろう。

その後、現地調査を実施し具体的な検討を行ったのは永山卯三郎である。氏は現地の検討をもとに国分寺八幡宮境内北側に所在した高まりを寺域北辺の築地と考え、また、境内の西側に所在する水路を西辺とみなした。つまり、国分寺八幡宮境内の北西隅を寺域の北西隅と考え、東辺は現在の史跡指定範囲東縁、南辺は南側に所在する東西方向水路と想定した。現在の知見とくらべれば東側に広すぎ、また、大きく南に偏ったものとなってはいるが、現地に残る地割から寺域を想定した作業として重要である。また、これにあわせて講堂・金堂に遺存・残存した礎石、塔心礎および心礎上の七重層塔の報告、出土瓦の紹介などを行った。この際の聞き取りでは、幕末ごろに水田区画の拡大がなされたこと、明治27、28年ごろ国分寺跡南側の県道工事に塔跡付近の土や礎石が用いられ心礎の割り取りがなされたとの話が得られている（永山1925）。

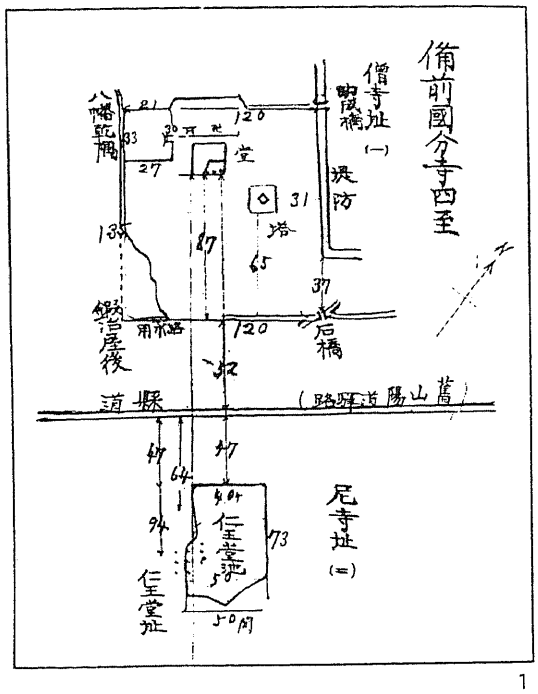
なお、永山は備前国分寺に続いて備前国分尼寺跡の記載を行い備前国分寺跡の南に所在する仁王堂池を前記「にうもんの池」として記載し、また、この池付近に奈良時代の瓦が多量に散布し礎石も遺存すること、さらに池の名称が尼寺の転訛によると考えてこの位置に備前国分尼寺を比定した。この比定の当否も検討する必要があるが、江戸時代の文献に記された池の比定に関しては、仁王堂池：にのうどう池と、「にうもんの池」の名称が似ていることに加えて、「にうもんの池」が幕末～明治の間に埋められて消滅したことによって、池の取り違えを生じたことになる。

これ以降の郷土史研究者として荒木誠一氏がおり、『改修赤磐郡誌』において備前国分寺にもふれ

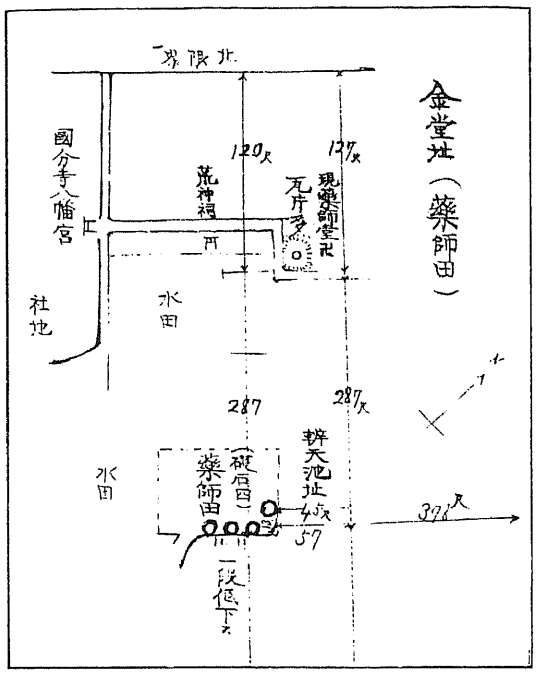
る（荒木1940）が、寺域の解釈などは永山のそれを踏襲している。

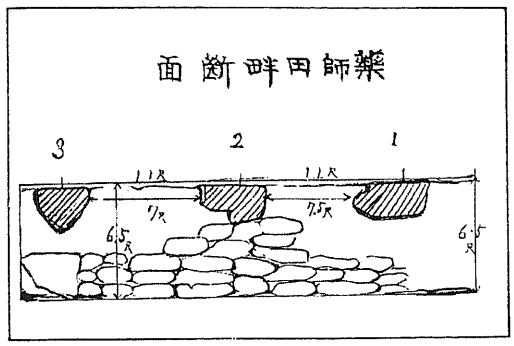
また、玉井伊三郎は『吉備古瓦図譜』を刊行し吉備の出土瓦の紹介を行うが、そのなかには備前国分寺跡採集の資料を含む（玉井1941）。

戦後、国分寺跡の研究は特になされることはなかったが、1974年に備前国分寺跡に生じた宅地造

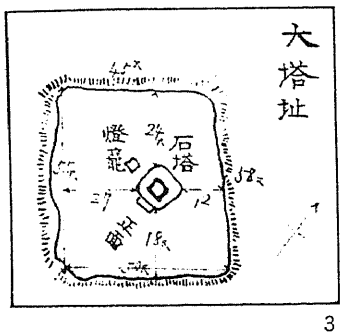


1

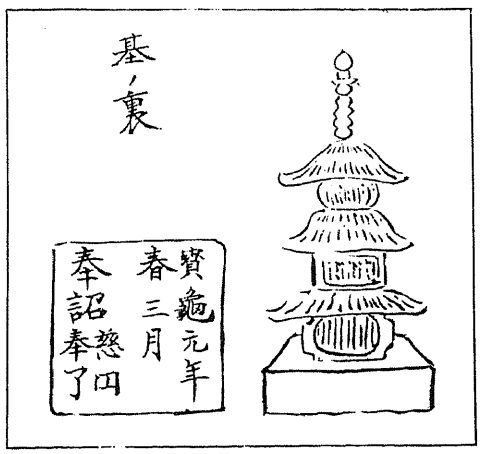




2



3



4

1．備前国分寺四至（永山1925）
2．金堂址（薬師田）（永山1925）
3．大塔址（永山1925）
4．三重小塔（松本『東備郡村誌』）

図８　先行研究における備前国分寺

成計画をきっかけに確認調査が実施された。調査は岡山県教育委員会が主体となり、春成秀爾氏、小野昭氏など県内の研究者が参加し、また、奈良国立文化財研究所が協力して行われた。

調査に際しては国分寺八幡宮西側の水路・畦畔線を寺域西縁、南縁を先述永山氏の推定位置よりもかなり北側に想定して中軸線を推定し、それにもとづいて寺域を縦断する南北トレンチと、塔付近、築地想定位置へのトレンチなどによって寺域の把握と各伽藍の規模の把握をめざした。調査によってこの寺域推定が妥当であることが明らかになり、各伽藍のおおむねの規模と廃絶年代が判明したが、回廊の位置や規模、寺域の北端などについては課題として残ることになった。報告書作成期間の関係で軒瓦以外の出土遺物については十分な整理・検討はむずかしかったようである（備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975）。

この後、先述の調査成果にもとづいて伊藤晃氏が備前国分寺の概要をまとめている（伊藤1991）。

以上、備前国分寺跡の研究史を概観した。ここを備前国分寺の跡であるとする根拠は奈良時代にはじまる大規模な寺院で国分寺式伽藍配置をとるという発掘調査成果以外に多くはない。名称を今に伝

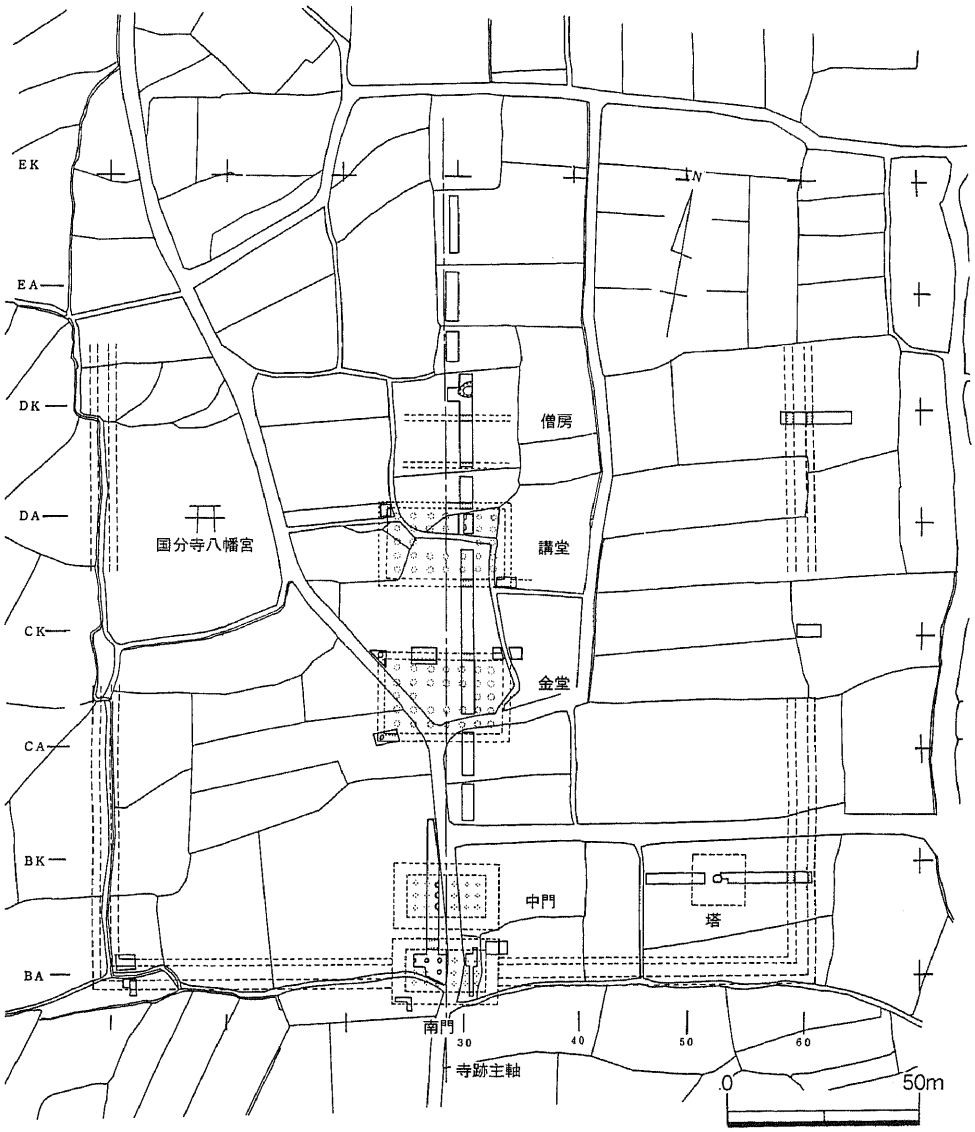


図９　昭和49（1974）年度確認調査による伽藍配置

えるのは国分寺八幡宮であり、江戸時代の地誌にもその名が見え、明治14年銘の鳥居にそれが刻まれている。

参考・引用文献

荒木誠一1940「奈良時代の寺跡」『改修赤磐郡誌』　岡山県赤磐郡教育会

伊藤　晃1991「備前」『新修国分寺の研究 第４巻 山陰道と山陽道』吉川弘文館

小嶋博巳2000「日本廻国の旅と信仰」『浅草寺仏教文化講座』第44集　浅草寺

玉井伊三郎1941『吉備古瓦図譜』第弐輯

土肥経平1778『寸簸之塵』

永山卯三郎1925「備前国分寺址」「備前国分尼寺址」『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第５冊　岡山県史蹟名勝天然記念物調査会

備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』10　岡山県教育委員会

松本亮　江戸後期『東備郡村誌』

第３章　遺構

第１節　遺構の概要

（１）遺跡の立地と現状（図10）

備前国分寺跡は、岡山市と赤磐市の境界に位置する本宮高倉山（標高458m）の南東麓に形成された扇状地の南向き緩斜面に築かれている。遺跡の東方約2.5kmには砂川が南北に流れ、盆地状の平野が広がる。遺跡はこの平野の西部に立地し、平野の西端は高倉山山塊と龍ノ口山塊に挟まれた約150mの谷筋となる。龍ノ口山塊は遺跡の南側にひかえた山並みで、これによって備前国府推定地が所在する旭川下流域東岸平野と備前国分寺の所在する平野が隔てられる。

国分寺跡の南には古代山陽道が通っていたと考えられており、山陽道は上記の谷筋を西に抜けて旭川を渡ることとなる。周囲には、高月駅家跡や備前国分尼寺跡の推定地が存在する。

遺跡の北東には、現在山陽団地となっている低丘陵が舌状にのびており、東に隣接して５世紀後半の両宮山古墳（墳丘長206m）が築造されている。現在、古墳の外濠は埋没し水田化しているが、創建当初、古墳と築地塀の最短距離は約70mであった。

このように、古代山陽道に面し、南向きの緩斜面に占地していることは、国分寺建立詔を反映した結果であるといえる。

遺跡西半部の地山は黄色の粘質土であるが、高倉山山塊から南東に派生した谷や流路の堆積にあたる東半部は礫を含む黒褐色粘質土となる。なお、寺域北東部では弥生時代の黒褐色粘質土の堆積が基盤面となっており、遺跡外北方で弥生時代の集落が営まれていたとみられる。隣接する両宮山古墳の墳丘盛土下からも弥生時代後期前葉の土器が出土しており、該期の遺跡の広がりがあることがわかっている（宇垣2005）。

こうした遺跡周囲の地形を背景に、現状で寺域には棚田状の水田が広がる。標高は北西部で29.0m、南東部で19.0mをはかり、北西から南東に向かって傾斜する。ただし、北西部は山麓に近く傾斜が強い。寺域北東部から南東部にかけてはなだらかな斜面を呈す。

水田以外には、神社や祠等の建造物が計４箇所みられる。寺域西辺中央付近に国分寺八幡宮の社叢がある。八幡宮の本殿および鳥居から東へ真っ直ぐのところに二つの祠が祀られている。東側の祠は調査によって講堂のほぼ中央に位置することがわかり、伽藍の中で最後まで残った講堂の最終的な姿といえる。また、祠の西には講堂の瓦片が塚状に集積されている。講堂、金堂付近においては、礎石が水田の畦畔や農道の法面に石垣として転用されており、調査以前から大型の礎石建物の存在がうかがえた。

そして、寺域南東隅の塔心礎上に、鎌倉時代後期の作と考えられる石造七重層塔が立ち、塔の所在を示す。

さらに、現在寺域南辺中央から寺域北西隅に向かって市道が設置されており、南門から金堂までは

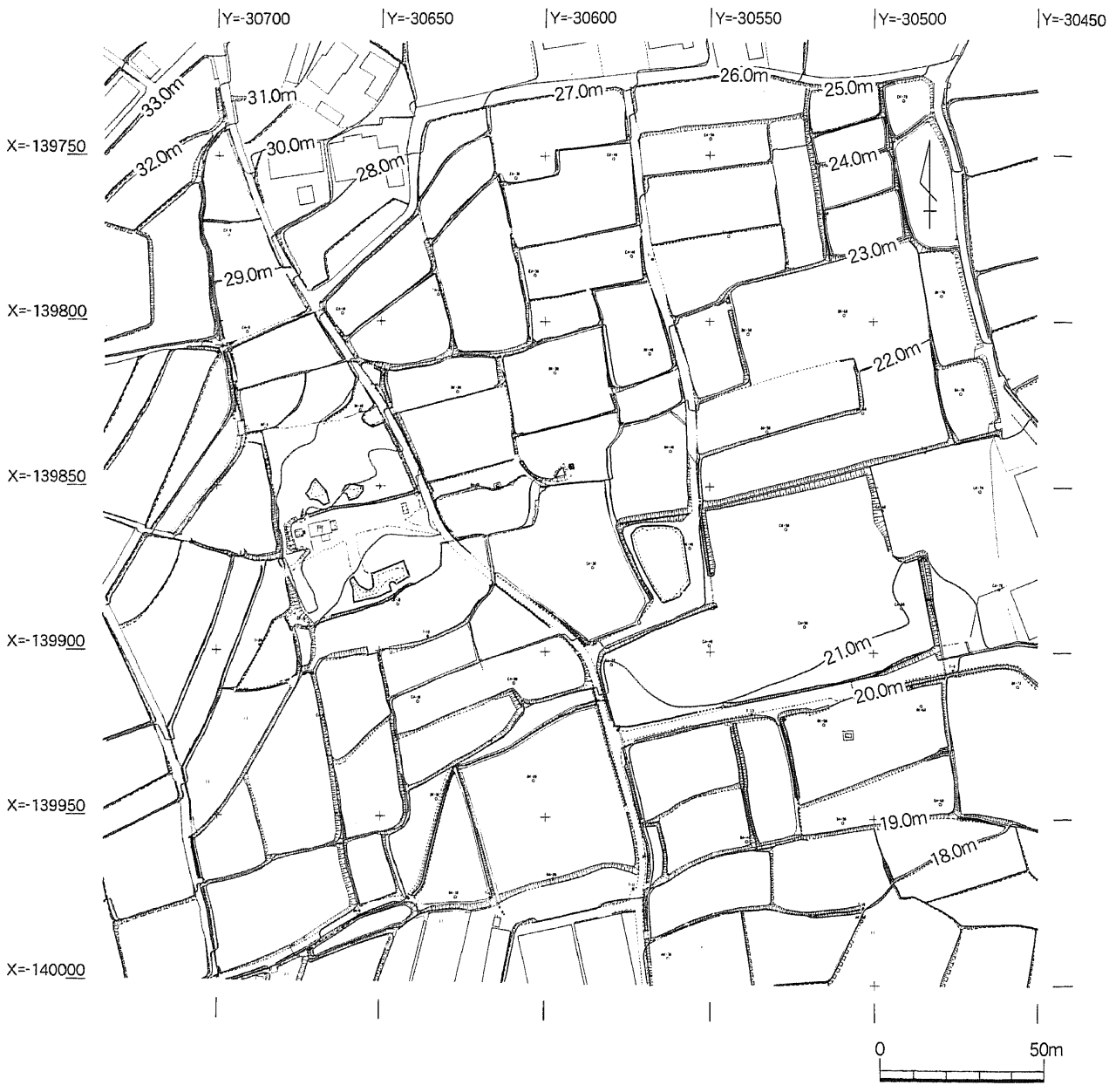


図10　遺跡の地形図（1/2,000）

それが中世の参道の名残をとどめているものと思われる。寺域範囲についても、南・西・東辺で水田畦畔が一直線に続くところがあり、築地塀の線をはっきりと残している状態である。南辺は約180mにわたってほぼ直線状に畦畔が認められ、西辺も南西隅から国分寺八幡宮の北西隅まで約150mにわたり、直線の畦畔が続き、それを境として西側は地形が高くなる。北辺については、調査によってその所在が明らかとなったが、水田の段差が顕著となるものの、現状で畦畔からその位置を想定するのは難しい状況である。

国分寺の廃絶後、棚田状に水田化が進み、礎石等が耕作時の障害となり移動させられていたり、遺構が大幅に削平されたりしているが、寺域全体としては著しい改変が少なく、比較的良好に遺構が遺存している。また、寺域の造成に際しては、原地形の緩斜面をそのまま利用して堂塔の配置を行っており、緩斜面に築かれた往時の景観は損なわれていない。

（２）調査区の概要（図11）

調査の経緯で述べたように、伽藍の概要が昭和49年度の確認調査でほぼ把握されているため、調査はこの成果をふまえて行った（備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975）。

調査区は、昭和49年度調査で設定したグリッドを踏襲して設けた。概報によると、まず、航空写真、地籍図などから、築地の南側と西側の線が水田の畦畔によく残されていると推定し、これから寺域一辺600尺（180m）を想定している。そして、南側築地線にあたる畦畔が突出した部分（西側築地線から300尺）を南門と考え、この300尺（90m）のラインを寺域南北の仮主軸として、グリッドを区切っている。

グリッドは、アルファベット２文字と数字の組み合わせで表記される。寺域南西隅（BA-０）から南へ60mを起点AA-０とする。Ｘ軸はAAラインから北へ３m毎にアルファベット２文字目をB・C・D…とし、かつ北へ60m毎にアルファベット１文字目をB・C・D…とする。Ｙ軸は０ラインから東へ３m毎に１・２・３…とする。なお、仮主軸は、30ラインから４m西となる。

調査開始の段階では、昭和49年度に想定された伽藍主軸が妥当であると考えていたが、調査の過程で、この仮主軸に若干の誤差があることが判明した。今回調査における伽藍造営主軸の復元は第５章でまとめているので、参照されたい。調査においては主軸の再設定は行わず、グリッドをそのまま使用した。

１ヵ年毎の調査経過は第１章で述べたとおりである。金堂や塔等の主要堂塔は建物の1/3から3/4の範囲で平面的な調査を行い、僧房や回廊、築地等はトレンチ調査を実施した。トレンチは２～13・15～19Bまでの計18本である。Ｔ１・14は平成18年度の第４次調査において調査したため、本書では欠番となっている。

（３）検出遺構の概要（図11）

調査によって検出した遺構は、主要堂塔においては金堂・講堂・南門・中門・僧房・塔である。これらは既に述べたとおり、昭和49年度の調査で確認済みであり、調査ではその詳細な構造・規模を把握した。南門・中門・金堂・講堂・僧房は一直線に並び、塔は寺域の南東隅に配置される。昭和49年度調査報告で南門と中門が極めて近接していると指摘されているが、両者の位置についての所見は変わらない。

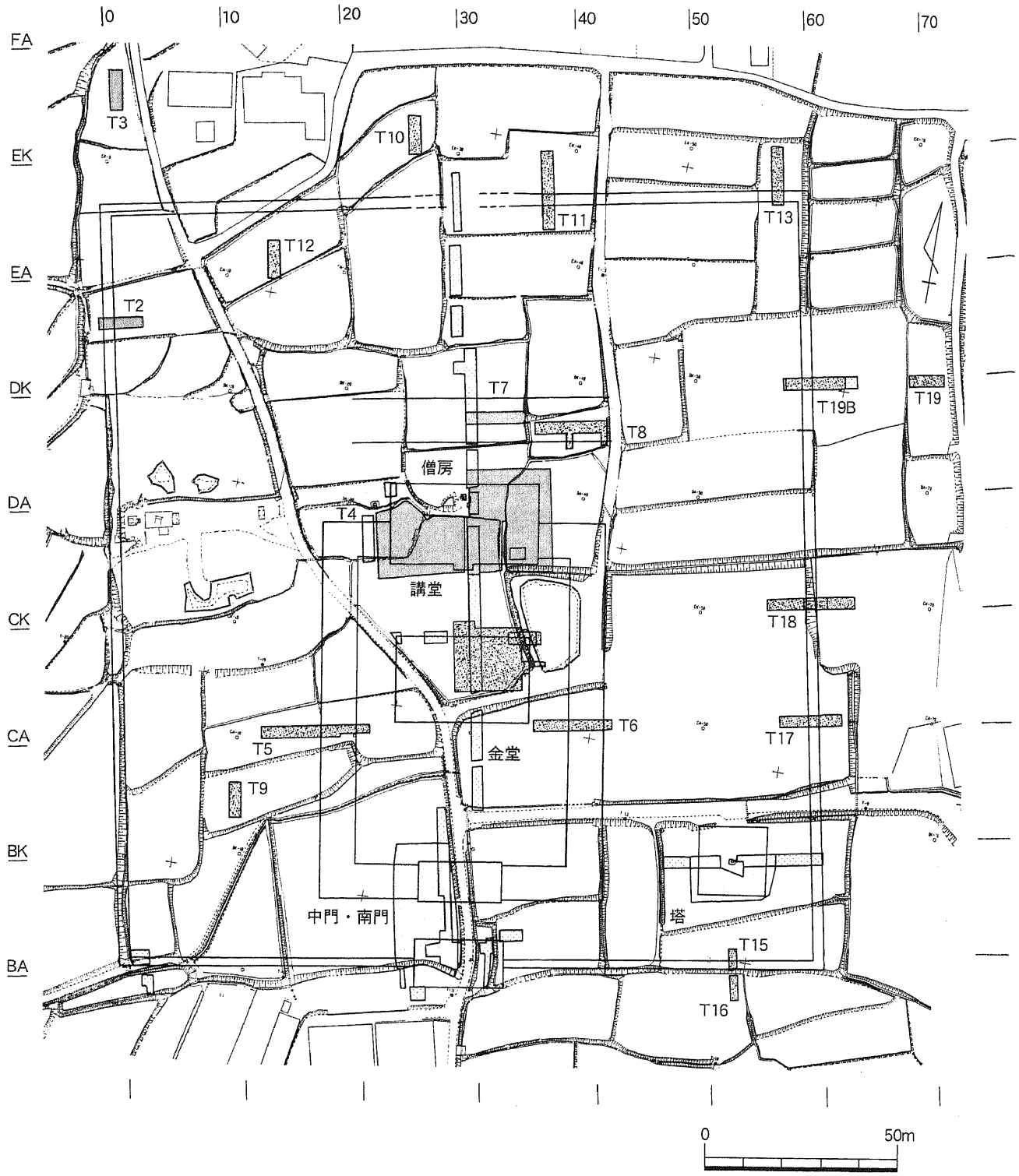


図11　調査区の配置（1/1,500）

また、金堂を囲繞して中門と講堂を結ぶ回廊を確認している。回廊は、南門・中門調査区内の中門西側で南面回廊、講堂調査区とＴ４で北面回廊、Ｔ５で西面回廊、Ｔ６で東面回廊をそれぞれ検出した。

寺域範囲については、明瞭に築地塀の痕跡を確認できていないが、雨落ち溝等から南門・中門調査区内とＴ15で南面築地、Ｔ17・19Ｂで東面築地、Ｔ11・13で北面築地の所在を認めた。しかしながら、西面築地はＴ２で確認した近世の溝や現在の用水路等によって遺構が削平され、検出することができなかった。西面築地は、昭和49年度に調査した寺域南西隅のＬ字状の曲がりをその手がかりとするほかない。したがって、調査によって寺域範囲は遺構として南・東・北面を確認したことになり、全体としてその復元が可能となった。

築地区画の門は、今回調査では南門以外検出していない。東辺ほぼ中央に設定したＴ18において遺構面は大きく削平されており東門は確認できなかった。そのため、この周囲においても削平により東門の検出は困難であると判断した。西辺の国分寺八幡宮南西隅付近には南北に細長い長方形状の水田区画があり、その付近に西門を想定していたが、平成18年度の調査で、南北方向の大溝（近世）が掘削されており、その内側の遺構面は大幅に削平を受けていることが判明している。そして、平成18年度の調査において、Ｔ11の西方25ｍの地点で築地北側の雨落ち溝が途切れたところに礎石抜き取り穴１基を検出したため、これを北門と判断した。四至の出入口である門は、南北両端は確認できたが、東西については削平が大きく検出できなかった。なお、西門想定地と北門の調査成果は次回報告書に掲載する。

このほか、寺を構成する諸施設、例えば食堂や鐘楼、経蔵などは検出するに至っておらず、今後の調査課題である。

引用・参考文献

宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告１　赤磐市教育委員会

備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』10　岡山県教育委員会

第２節　遺構各説

（１）金堂

現況と遺存状況（図12）

金堂は寺域中央よりやや南に位置する。現在、南門上から国分寺八幡宮東を通って寺域北部へ抜ける市道が金堂南辺から西辺を横断している。また、金堂南辺付近で市道から農道が東辺方向へ派生している。この農道と市道に挟まれた北側から講堂に至る水田は、永山卯三郎の報告にあるとおり、古くから「薬師田」と呼ばれ、南畦畔に礎石３基、東南畦畔に礎石１基が存在する（永山1925）[1]。南畦畔に残る礎石３基は農道の法面石垣として利用されたもので、二次的に動かされている。東南畦畔の礎石１基は、調査区内礎石15のことで、ほぼ原位置を保っている。

現状では、この「薬師田」の南側に沿って先述の農道が付設されており、農道より南側、つまり金堂基壇の南東部分は「薬師田」より一段低くなっている。表土面での比高差は約0.9mをはかり、遺構面は大きく削られている。

調査区は、「薬師田」と呼ばれた水田上の、基壇北東隅を含む金堂の約３分の１の範囲（南北16m・東西17m）に設定し、調査を行った。調査の過程で、基壇北東隅と東辺の確認のため調査区を拡張し、また調査区北西隅で石敷１の検出により北へ２m拡張した。

昭和49年度の確認調査では、礎石２・５・６・12および雨落ち溝１を含む南北に長いトレンチ（幅３m）と基壇南西隅、北西隅、北東隅に設けた調査区により、基壇規模等を推定している。このトレンチで検出した礎石３基は動かされたもので、柱間寸法等の細部は把握できていなかった。今回の調査区は、昭和49年度の礎石２・５・６・12を検出したトレンチと基壇北東隅のトレンチの再調査を含み、計15基の礎石抜き取り穴や落とし込み穴、根石等を確認し、その状況から建物規模の復元が可能となっている。

礎石は１基がほぼ原位置をとどめている可能性が高く、６基が抜き取り穴、８基が落とし込み穴である。これらは耕作の支障となり、除去もしくは埋め込まれたものであるが、残存する根石等の状況から元あった礎石の近辺に掘られており、柱位置の推定につながっている。

礎石が耕作の支障となっていることからわかるように、基壇土の上部は水田造成の際に削り取られている。しかし、基壇下面から残存する基壇上面までは比較的良好に基壇土が遺存しており、版築の状況がよくわかる。また、基壇築成の過程での礎石据え付け方法が土層断面から確認できた。そして、昭和49年度には北辺から若干南に向かう基壇の屈曲を北東隅と認定していたが、これが後世に掘られた水田耕作に伴う溝２の西側面であったことが判明し、基壇の東西幅がさらに約4.5m大きくなることがわかった。

基本層序（図13～17）

耕作土と床土を取り除くと、調査区南部は基壇土が現れる。北部は一段下がっており、さらに厚さ36cmの水田造成土、そして旧水田層・包含層を経て基壇土が検出される。はじめ北部が水田として造成されたが、その後その水田を埋めて田面を上げて南部にまで拡大し、現況の一枚の水田に改変されたとみてよい。一段下がった北部の礎石はすべて抜き取られ、抜き取り穴の痕跡が若干残るのみとな

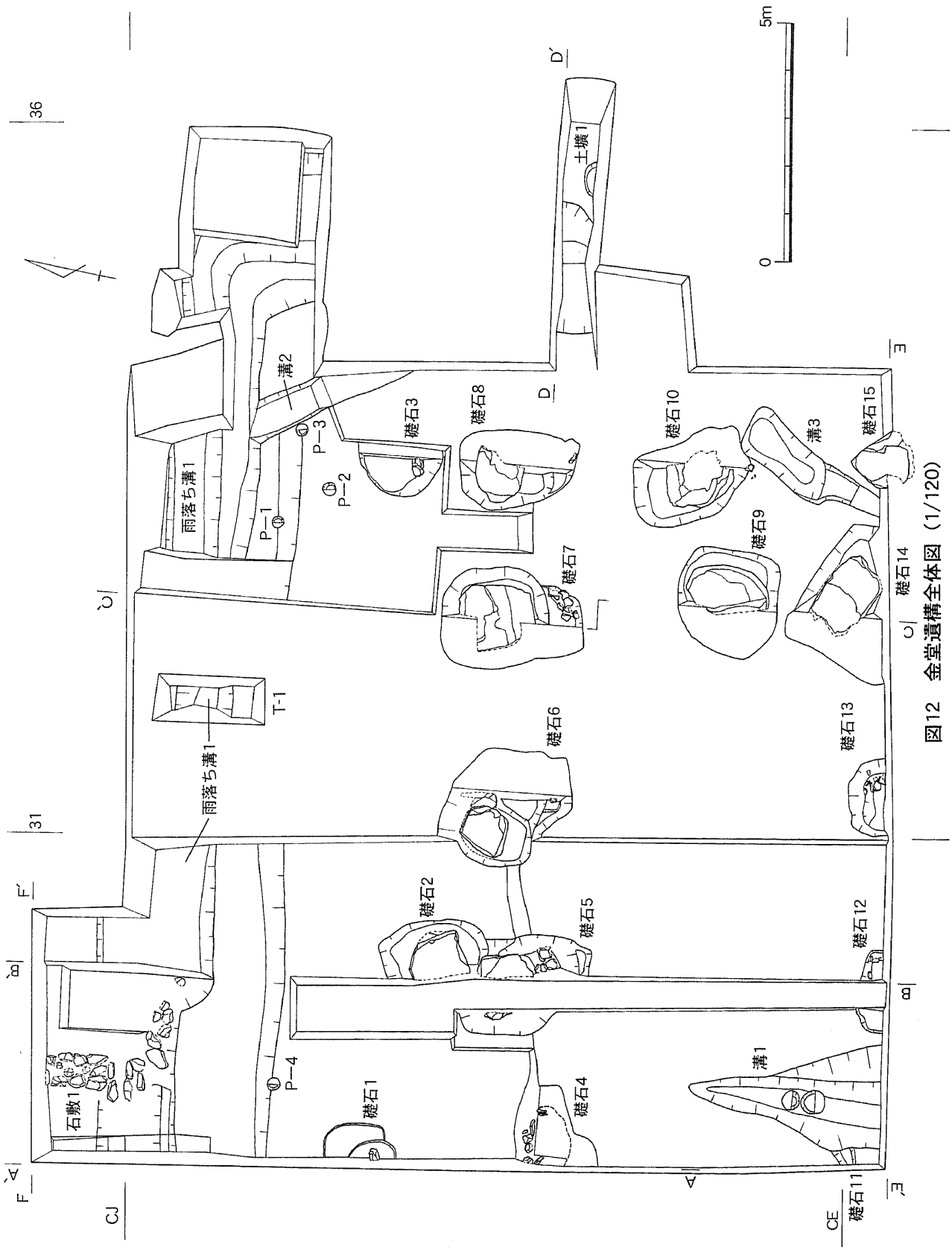


図12　金堂遺構全体図（1/120）

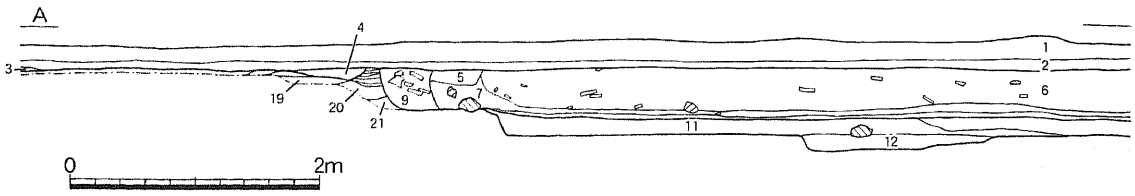
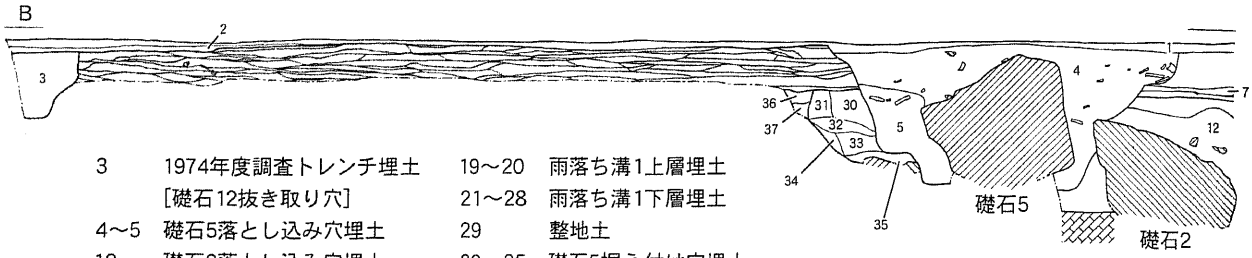


図13　A-A'断面（1/60）



3　1974年度調査トレンチ埋土
[礎石12抜き取り穴]
4～5　礎石5落とし込み穴埋土
12　礎石2落とし込み穴埋土
19～20　雨落ち溝1上層埋土
21～28　雨落ち溝1下層埋土
29　整地土
30～35　礎石5据え付け穴埋土

図14　B-B'断面（1/60）

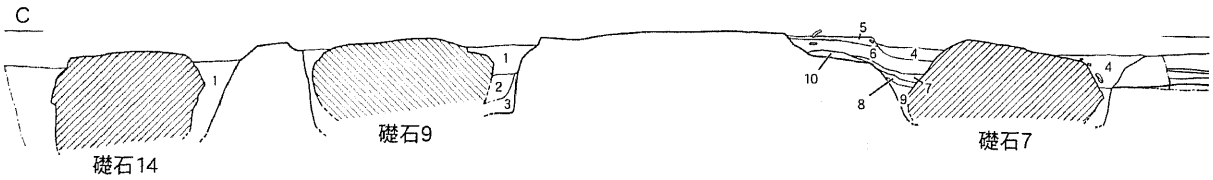


図15　C-C'断面（1/60）

っている（礎石１・３・４）。礎石２は大きく落とし込まれている。さらに、一枚の水田に改変する際に、南部の礎石５～10・14は落とし込まれ、礎石11～13は抜き取られている。

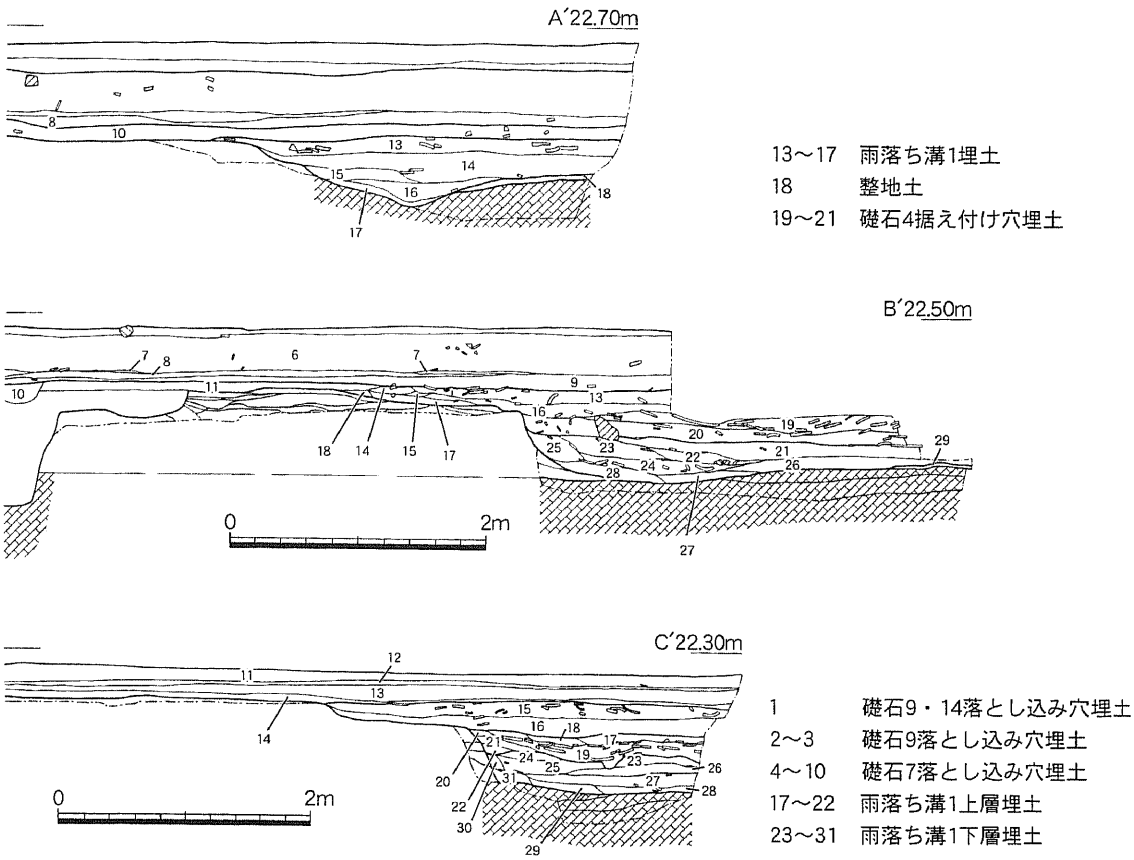
地山は調査区北部で21.3m、調査区東部で21.1mと若干南東方向に向かって傾斜している。地山上に版築により基壇が築成されている。また、調査区北部を中心に基壇周囲には大きく２時期の瓦だまりが形成されている。

礎石（図12、図版12-２～13-１）

廂の側柱６基と身舎の入側柱９基で、礎石の抜き取り穴や落とし込み穴等が検出され、柱位置を知ることができる。礎石１～３・８・10・15が廂の側柱で、礎石４～７・９・11～14が身舎の入側柱である。

礎石１・３・４・11～13は抜き取り穴の痕跡が残り、根石が残存する。礎石５～８は根石の残る礎石据え付け掘りかたの位置から北側に大穴を掘って落とし込んでいる。よって、実際の礎石は現在落とし込まれている礎石の南側に設置されていたと考えられる。礎石２・９・10・14は礎石が落とし込まれており、据え付け掘りかたが付近にみられないのでその掘りかたを壊して落とし込み穴を掘っていると考えられる。言い換えれば、礎石据え付け掘りかたより一回り大きい落とし込み穴を掘り込んでいる。

礎石15は現地表面から上面部分が出ており、図17E-E'断面で観察できるとおり、石の西側面は基壇版築土と接している。ただ、東側面は水田の畦部分となっており腐植土が入り、明確に原位置とは言い難いが、礎石の上面が柱を据え置いた平坦面となっていることを考え合わせると、ほぼ原位置を保っている可能性が高い。礎石上面高は22.7mである。



13～17　雨落ち溝1埋土
18　整地土
19～21　礎石4据え付け穴埋土

1　礎石9・14落とし込み穴埋土
2～3　礎石9落とし込み穴埋土
4～10　礎石7落とし込み穴埋土
17～22　雨落ち溝1上層埋土
23～31　雨落ち溝1下層埋土

礎石はすべて加工がみられず、自然石を使用している。礎石15で上面長さ1.3m・高さ90cmの大型石材を用いており、他の堂宇の礎石より大型である。落とし込み穴にみられるものでも、礎石７で長軸1.5m以上・短軸1.35m、礎石９で長さ1.7mをはかる。

また、根石には礎石３で長さ25cm、礎石４で長さ20cmの石材を使用しており、総じて15～25cm大の石材を使用している。

基壇構造と礎石据え付け掘りかた（図13～18、図版５-３）

基壇は地山（黄褐色土）上に構築されており、掘り込み地業は行われていない。一部、基壇北部の石敷１付近では地山が黒色砂質土となる。地山直上には約15cmの厚さで暗褐色粘質土が基壇北辺、北東隅、東辺において確認される。黒色を帯びているので、旧表土ともみられなくはないが、しまりは強く基壇盛土の初層と考える（標高約21.2～21.35m）。その後、標高21.7mあたりまで黄色土と黒褐色土でやや厚めの版築（約10cm）がなされる。以降、基壇版築は２～８cm程度の薄層を積み上げている。基本的に、黄色土と黒褐色土が縞状にみられる（図18）。昭和49年度の確認調査では、標高21.7mより上部の版築の一層単位が薄くなった部分のみを版築層と考えていたが、基壇は基底部からすべてが版築層によって構築されていることが判明した。

礎石４（図13A-A'）と礎石５（図14B-B'）の版築基壇を一部断ち割った箇所で、礎石が基壇版築の途中で据え付けられていることを確認できた。

礎石５は後世に穴が掘られ礎石を落とし込まれているが、その南部に根石を伴う礎石据え付け掘りかたを検出した。この掘りかたが設けられたのは標高約22.0m付近となり、掘りかたの深さは70cm以上をはかる。その上面には礎石据え付け掘りかたを覆うように版築土が盛られている。掘りかたを

覆う版築層の残存厚は36cmである。

礎石４は抜き取られているが、抜き跡の下面に根石が残存している。ここでも、据え付け掘りかたの上部には残存厚15cmで版築土が盛られている。すなわち、基壇築成の途中で礎石を据えさらに周囲に盛土する構築法をとっている。そのため、残存する基壇上面では据え付け掘りかたは検出できない。

礎石据え付け掘りかた内の埋土（図14B-B'30～35層）は黄褐色土を基調としている。礎石抜き取り穴および落とし込み穴には瓦片が含まれるが、据え付け掘りかた内の埋土には瓦片は含まれていない。

上面に版築土を積んだ痕跡は確認できなかったが、礎石６についても礎石据え付け掘りかたを一部検出できた。

基壇外装（図19）

基壇側面には外装の痕跡は認められなかった。周辺では凝灰岩片や塼、瓦などの基壇外装を想定させる部材の出土はなく、またそれらの据え付けや抜き取りの痕跡も検出できなかった。石敷１に向かって10個弱の礫がみられるが、瓦が間に入り込み、基壇から遊離している状況である。基壇北東隅においては、一切石材がみられないため、乱石積であったとも考えにくい。したがって、基壇外装を元々設けていなかったか、もしくは遺存しにくい木製の外装であった可能性を想定できる。外装がないとすれば基壇はただの土壇であったことになり、その外面保護に支障がなかったのか疑問が生じる。

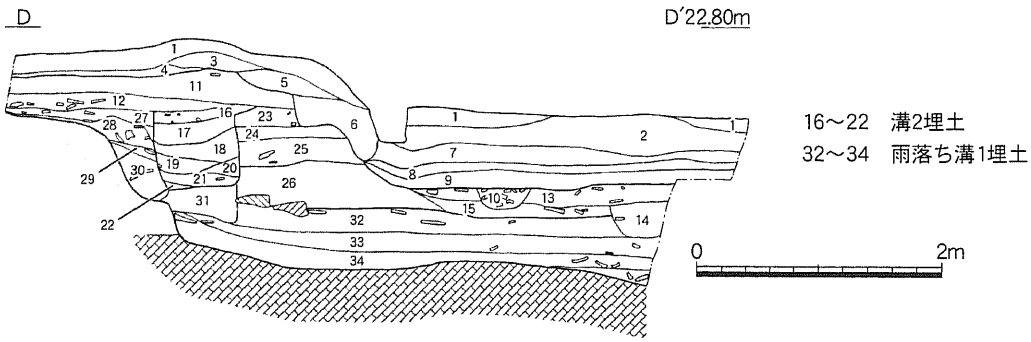
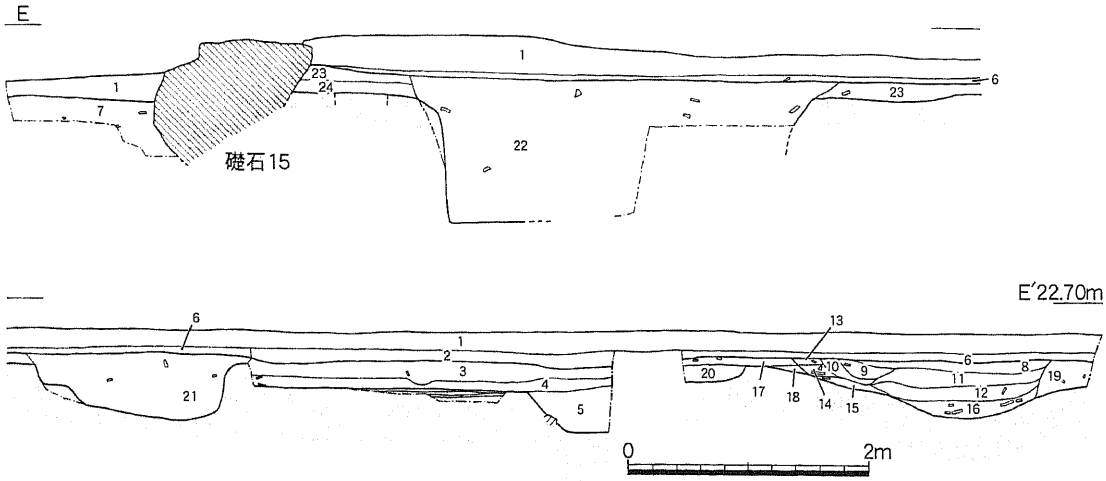


図16　D-D'断面（1/60）



2～4　1974年度調査トレンチ埋土
5　1974年度調査トレンチ埋土
[礎石12抜き取り穴]
8～16　溝1埋土
19　礎石11抜き取り穴埋土
20　礎石12抜き取り穴埋土
21　礎石13抜き取り穴埋土
22　礎石14落とし込み穴埋土

図17　E-E'断面（1/60）

基壇側縁の形状については、現状で基壇北辺には調査区西端から長さ約３ｍ・幅約60㎝の張り出し部（図19ａ）が認められ、北東隅および東辺において基壇側縁（図19ｂ）を検出した。なお、昭和49年度に北東隅と認識していた基壇の屈曲は後述の溝２の西側面である。新たに判明した北東隅では北側縁は建物や寺域の軸と斜交しており、崩落ないし削平されているものと考えられる。一方で、北東隅付近で基壇側縁に微弱ではあるが段状の痕跡が認められる（図19 c）。この段状の痕跡ｃは建物の東西軸と平行しており、北辺中央部の張り出し部ａとほぼ直線で結ぶことができる。

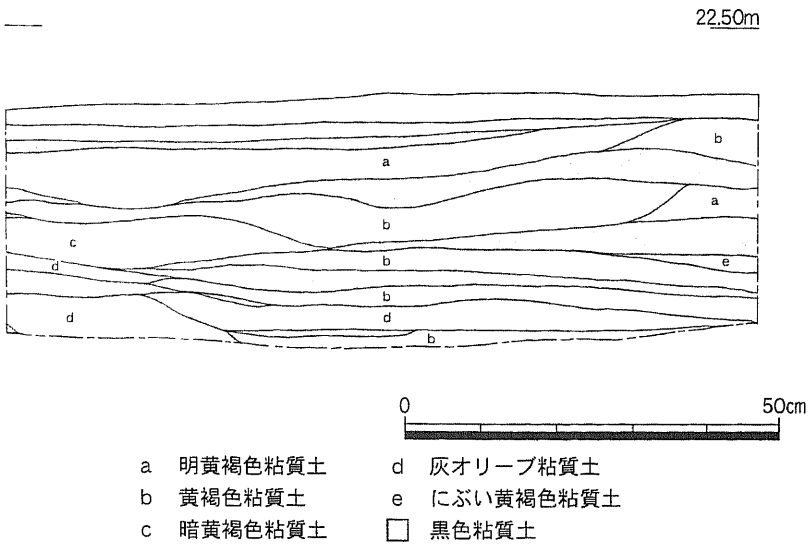


図18　版築断面（1/10）

検出した遺構の状況と基壇外装の問題を考え合わせると、本来基壇はａとｃを結ぶ線のところまであってそれがｂまで後退したのか、もしくはｂとｃの間に何らかの外装があったものが、外装が失われｂの状態となったと考えられる。後者の場合、先述のとおり木製の外装が想定できるのではないか。木製の基壇外装については近江国庁をはじめ三河や遠江の国分寺で確認されているが、それぞれに掘りかたや炭化材等が検出されているので、この場合は奈良県吉備池廃寺で想定されている「壇正積の木製基壇」があてはまるのではないかと考えられる。吉備池廃寺の場合も外装の痕跡が認められず、「切石の壇正積基壇の石材を木におきかえたような構造、すなわち地覆材（土台）に束（柱）を立てて、比較的厚い横板材を束のあいだに落とし込む構造」を想定している（箱崎2003）。推測の域を出ないが、木製基壇が失われ現在の状況となったものと推定される。

なお、基壇外装の痕跡は他の堂塔でも同様に検出できておらず、特異な状態であるため、第５章の総括で再び検討したい。

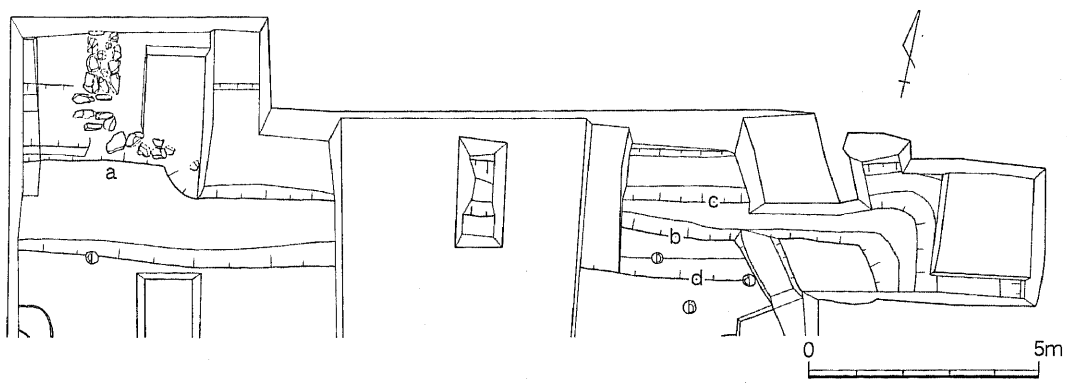


図19　基壇北辺（1/160）

瓦だまりの形成（図12、図版13-3）

基壇外周には雨落ち溝1がめぐる。雨落ち溝と称してはいるが、基壇側面下部の斜面と段差をもって区分されるようなものではなく、一連の斜面をなしており、外側肩部の上がりは10cm程度と浅く明確でない。深く本格的な溝を設けていないことから、基壇が構築された地形が傾斜をもつため、容易に排水ができたものと考えられる。

基壇周囲の土層堆積に注目してみると、3段階の堆積過程が認められる。瓦だまりについても、上下で2回の大規模な形成状況を確認した。

先述のとおり、基壇周囲には本格的なものではないが雨落ち溝がめぐり、土師器小片を主体として包含する褐色系の砂質土層がはじめに堆積している（図13A-A' 16層、図14B-B' 21～28層、図15C-C' 23～29層、図16D-D' 33～34層）。

その上に、瓦だまりが認められ、これを下層瓦だまりと呼ぶ。瓦はほぼ完形に接合できるものを含む。下層瓦だまりは図13A-A' 14層、図14B-B' 19～20層、図15C-C' 19層、図21F-F' 8層にあたり創建瓦を主体とするもので、この段階で大きく創建時の建物が倒壊したものと考えられる。そして、この屋根瓦の堆積により基壇周囲の標高21.7mまでが埋まってしまっている。

さらに上層に時期を異にした瓦だまりが認められる。これを上層瓦だまりと呼ぶ。瓦は大形の破片が多い。この段階で現況の基壇端bから約1m内側まで瓦だまりの範囲が広がる（図13A-A' 13層、図14B-B' 13層、図15C-C' 15層、図21F-F' 7層）。この瓦だまりには、奈良時代の瓦（創建瓦）以外に平安時代後期の瓦が認められる。それと対応するように、上層瓦だまりの範囲において残存する基壇北辺（図19b）から内へ1mほどのところで、基壇に段差が生じている（図19d）。これは基壇の北辺中央から北東隅に近づくほど顕著に認められ、図15C-C' 断面では約14cmの高低差をもつ。すなわち、上層瓦だまりの形成時点では少なくとも基壇端が約1m内によったか、もしくは建物自体、厳密に言えば軒の出が縮小した建物に造り替えられた可能性が考えられる。しかしながら、後に調査区北部は大幅に基壇を削って水田に改変されてしまっているので、基壇がどのような形状になったのか復元し難い。

また、基壇周囲の雨落ち溝1では基壇北辺中央付近において、北側の肩に沿って整地土が認められた。この整地土は黄色粘質土で、地山上に約2～5cmの厚さで盛られている。図13A-A' 18層、図14B-B' 29層、図21F-F' 13層がそれにあたり、さらに北の講堂方向へ続くようである。

石敷1（図12・20・21、図版5-1・13-2）

基壇北辺中央部の外縁に設けられた石敷である。図19aの北側、建物中央間の中央に位置し、講堂方向へ続く。南側に東西方向の暗渠を設け、これに直交して礫を3列もしくは4列ずつ並べている。暗渠と石敷は同時に構築された一連のものである。

暗渠は横長の礫をたてて両側面とし、その間に10cm大の瓦片と5cm大の小礫を詰めている。中には暗橙褐色の砂質土がみられ、暗渠として機能していたことがうかがえる。幅約50cm、残存長約80cmで石敷部の外にはのびない。暗渠に直交する石敷には約40cm大の礫が用いられ、上面高約21.6mでほぼ水平に置かれている。東西の両側面が直線になるように礫が置かれており、幅は約70cmをはかる。図21F-F' 断面で観察できるように、石敷を設置するために、地山に掘りかたを穿っている。掘りかたは黄色粘質土の整地土から掘り込まれており、瓦片を包含する。また、石敷の上面とその間には暗褐色の砂質土（図21F-F' 9層）、さらにその上面に下層瓦だまり（図21F-F' 8層）がみられる。

石敷１の構築時期は創建当初ではなく、かつ下層瓦だまりが形成される以前と判断される。石敷は調査区の北、さらに講堂方向へ続くとみられ、金堂から講堂へ向かうための通路として造られた可能性が高い。

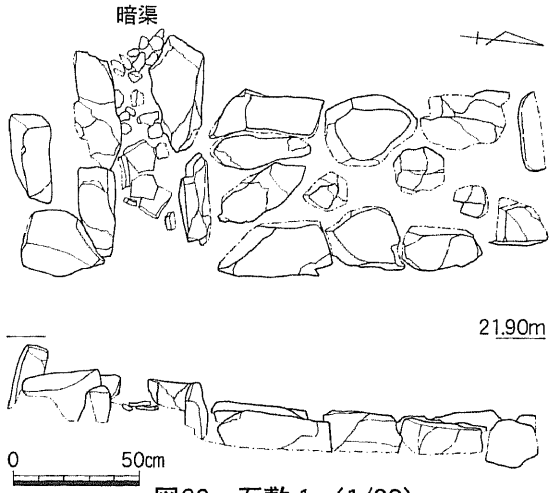
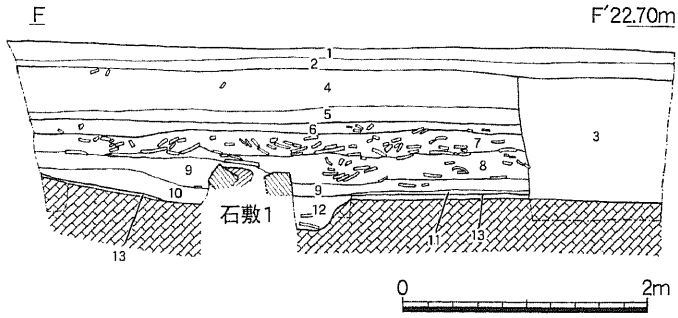


図20　石敷１（1/30）

柱穴（図12･22･23）

基壇上で、直径約25cmの柱穴４基を検出した。検出面からの深さはＰ－１で５cm、Ｐ－２で24cm、Ｐ－３で31cmをはかるが、柱穴の底面高自体は21.54～21.69mとなる。Ｐ－２の覆土からは鉄釘が１点、Ｐ－４からは瓦片が出土している。Ｐ－１は上層瓦だまりの下から検出したので、上層瓦だまりが形成される以前に掘られたものである。

創建時の足場柱穴とは考えにくく、金堂建物の補修あるいは平安時代後期に再建された建物にかかわるものとみられる。柱穴が平安時代後期に縮小した基壇の端付近（図19　d）に所在することからすれば後者の可能性が強い。



3　1974年度調査トレンチ埋土
7　雨落ち溝1上層埋土
8～11　雨落ち溝1下層埋土
12　石敷1掘りかた埋土
13　整地土

図21　F-F'断面（1/60）

階段（図12・19）

建物中央間の北に張り出し部a（図19）が認められ、これと基壇北東隅の段状の痕跡ｃとを結んだ線が本来の基壇側縁と推定してきた。しかし、実際には外装の痕跡も確認できておらず、推測の域を出ない。また、北に続く石敷１が創建当初のものでないとしても、講堂方向へ向かう通路のような役割があったとすれば、やはり金堂の階段が北辺中央部にあったと想定し得る。

図13A-A'断面において張り出し部ａ北の雨落ち溝１の断面を観察すると、基壇は緩やかに傾斜し、最深部の標高は21.26mと他の地点より高く弱いＶ字形を呈している。雨落ち溝１の他断面とは明らかに形状が異なる。したがって、この張り出し部ａが北面階段の痕跡である可能性を考えておきたい。

北辺の東第二柱間に階段が付くかどうか確認するためにT-1を設定したが、雨落ち溝１が検出されたのみで階段等の痕跡は認められなかった。

溝１・溝２（図12･16）

溝１は調査区南西隅に検出された溝で最大幅2.1m、深さ45cmをはかる。瓦を多く含み、礎石11の抜き取り穴埋土を切って設けられている。

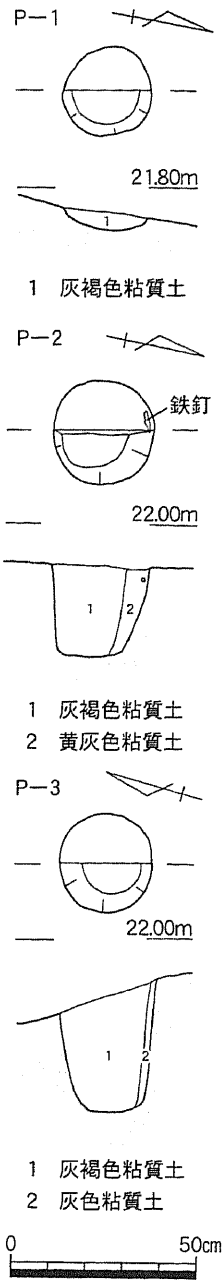


図23　柱穴（1/20）

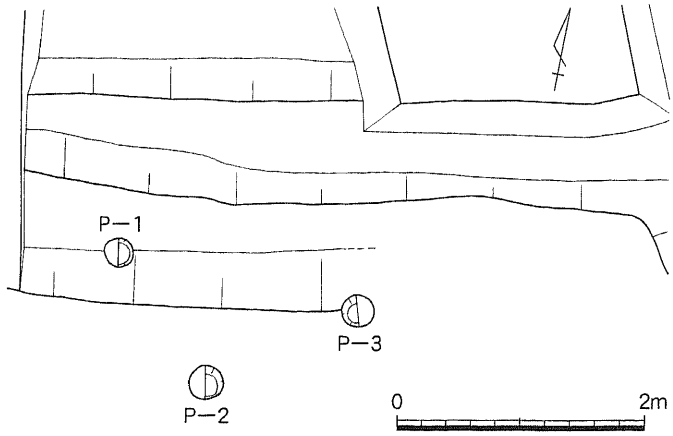


図22　柱穴配置図（1/60）

北に向かい途切れるので、後世に付近の礎石を除去する際に掘られたものである可能性もある。底面から柱穴2基を検出し、各々の直径は50cmと40cmである。

溝2は調査区北東隅、基壇北辺から東辺へ抜ける溝である。基壇の北東隅付近にあり、比較的垂直に側面が下がるので、昭和49年度の確認調査では基壇北東隅と認識されていた。しかし、調査区を東へ拡張した今回の調査では、溝2を隔てさらに東まで基壇が延長することが確認された。図16D-D'16～22層が溝の埋土である。溝の向きが現在みられる水田の畦に沿うので、後世の水田耕作に伴う溝と考えられる。

出土遺物（図24）

雨落ち溝1の最下層を中心に土師器の出土があった。基本的に椀・皿の小片からなる。平安時代に属すものが主体を占める。1は土師器の皿で、雨落ち溝1の上層瓦だまりから出土した。2・3は土師器の羽釜である。小片のため口径等は復元できていない。

金堂の復元（図25）

礎石および根石の位置情報と、礎石1と2の柱間中央に寺域の中心軸が通ることから、金堂は桁行7間×梁行4間の建物と想定できる。他国の国分寺等では桁行9間×梁行4間あるいは桁行5間×梁行4間といった規模も認められるが、桁行7間×梁行4間の事例が多いことからも妥当と考えられる。

比較的調査面積が広く、基壇の詳細把握ができた講堂中心から金堂中心までの距離を算出・設定し（135尺）、柱間寸法は桁行11・12・14・14・14・12・11×梁行11・12・12・11尺と復元できる。桁行の柱間は中央に向かって大きくなる。建物規模は桁行88尺（26.14m）×梁行46尺（13.66m）となる(2)。

基壇規模は検出した遺構と外装の状況から、東西116尺（34.45m）、南北74尺（21.98m）と推定できる。側柱からの基壇の出（軒の出）は14尺（4.16m）となる。

基壇は地山上に版築土を標高約22.0mまで盛ったところで、礎石を据え付けるための掘りかたを掘

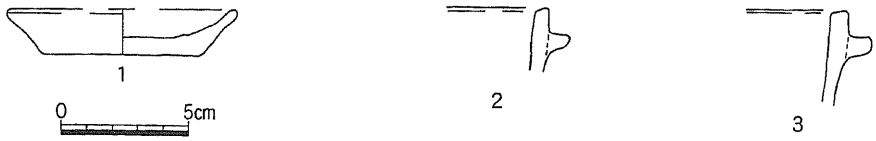


図24　金堂出土遺物（1/3）

削し、根石そして礎石を置く。礎石を置いた後に、さらに版築土を積み上げ、基壇を完成させたものと考えられる。

以上から、建物は四面廂で寄棟造もしくは入母屋造と考えられ、軒の出が大きいのでこれを支えるために三手先の組物が用いられていたのではないかと想定される。

昭和49年度調査では、基壇について雨落ち溝１から約40cm上までを地山の削り出しによって構築し、その上部１ｍを版築で構築したと考え、基壇高は推定1.4mとしていた。今回の調査では、過去に地山と認定した部分も版築層であると判断し、基壇すべてが版築土により構築されたと把握した。

礎石15が原位置を保っている可能性が高いことから、この上面高22.7mより基壇上面高を10cm低く見積もると、基壇上面高について22.6mという数値を基準として示すことができる。この他の礎石は抜き取られているか落とし込まれているので、基壇高の復元には採用できない。残存する基壇の最大高は22.38mである。

さらに、根石の残存する高さは21.65～22.2mと広範囲に及ぶが、使用された礎石の厚さによって根石の設置高も変化するものと思われる。礎石掘りかたの底面高についても21.45～22.05mと同様の様相が認められる。

落とし込まれた礎石は大きく、底面まで把握できたものはなかったので、その中でも薄いものを想定して高さ70cm程の礎石を底面高22.05mの掘りかたに入れた場合、礎石上面高は22.75mとなり、礎石15の礎石上面高とほぼ同じ高さとなる。したがって、礎石15から導いた基壇上面高22.6mの復元の蓋然性は高いと判断される。結果として、基壇の基底部（標高21.2m）から上面までの高さは平均約1.4mと推定できる。ただし、基壇基底部の標高が北辺で21.3m、東辺で21.1mと違いがあるので、復元基壇高はそれぞれ北辺で1.3m、東辺で1.5mとなる。削平され不明ではあるが、南辺はさらに基壇高が高くなる。

最後に金堂の変遷をまとめておく。基壇外周に堆積した２時期の瓦だまりは、ほぼ完形に接合できる破片や大形の破片が多く含まれるため、二次的に集積した状況でなく、屋根瓦の落下後に近い状況を示している。これらの瓦や土器から、創建後、金堂は平安時代中期に大きく倒壊していることがわかる。この時の堆積が下層瓦だまりで、焼土や被熱した瓦は認められないため、倒壊は火災によるものではないとみられる。上層瓦だまりには、奈良時代の創建瓦以外に平安時代後期の瓦を含んでいるので、建物は平安時代後期に改修あるいは建て直しがなされていると考えられる。平安時代後期に改修、建替えが行われた金堂の廃絶がいつの時点であったかは不明であるが、金堂に確実に伴う鎌倉時代以降の瓦はみられないので、平安時代末に講堂とともに廃絶した可能性が強い（第４章第１節参照）。

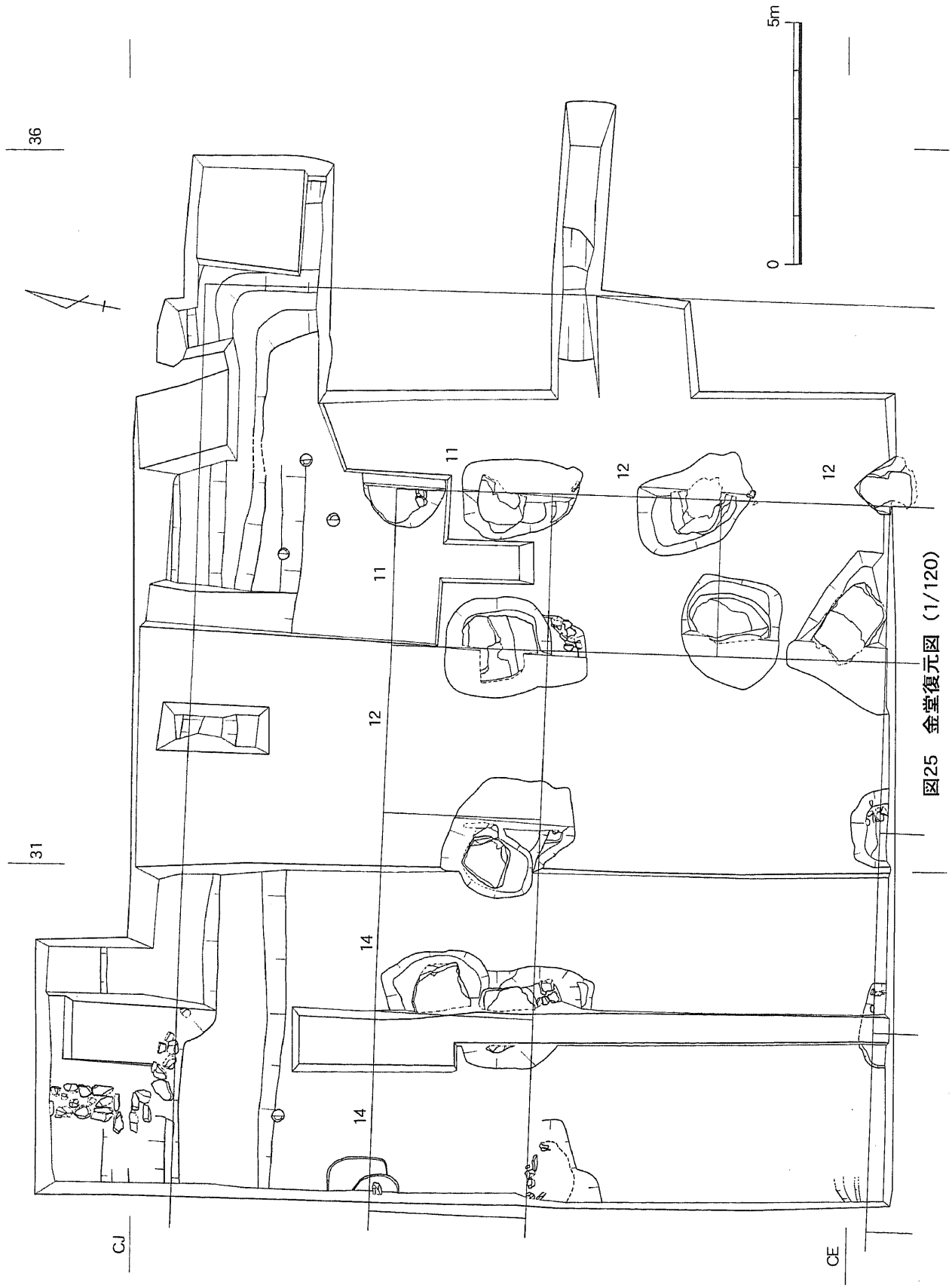


図25　金堂復元図（1/120）

（２）講堂

昭和49年度調査において礎石２基と北雨落ち溝を確認したトレンチを含む調査区である。調査区西半には、調査着手以前から原位置をとどめない講堂礎石３基が露出していた。講堂は金堂の北に位置し、中心やや北側に小堂が建てられている。

現地形が高低差のある棚田状を呈していることからもわかるように、遺構の残存状況には場所によって差があった。水田面の標高が高い調査区北東では、鎌倉時代以降に再建された講堂の基壇、礎石が良好に遺存する一方、調査区南では、水田形成によって再建講堂基壇はもちろん、創建時の講堂基壇も削平されており、礎石はすべて原位置をとどめていなかった。礎石抜き取り穴内に残る根石がかろうじて礎石の位置を示すのみであった。

また、調査区の東西で講堂に取り付く北面回廊を確認している。北面回廊西側は遺存状況がよく礎石が残るが、東側は溝15が回廊上に同方向で掘られ、また上面が削平されており根石のみが残る状況であった。なお、講堂調査区で検出した北面回廊の西に土手を残して設定したＴ４についても、ここであわせて述べていく。

１．講堂

基本層序（図27～31）

遺構面までは浅く、基本的に耕作土と黄褐色土の包含層を取り除くと遺構面に達する。

北東部では基壇上面を包み込むような形で、瓦を敷きつめて形成された暗渠状遺構が広がる（図29C-C’５層、図30D-D’８層）。そして、その下に創建期の講堂基壇と、平安時代末に焼失後これを再利用して鎌倉時代以降に再建された講堂に伴う遺構が認められる。

また、南端部では基壇南端を削平して形成した旧水田とその造成土（図27A-A’11～13層、図28B-B’15層、図31E-E’19層）が基壇との間にはさまれる。

基壇盛土下には、Ｐ－５～９の講堂基壇構築前のものと考えられる掘立柱建物の柱穴（図27A-A’45・46層）、古墳時代のものと考えられる４条の溝、溝４～７（図27A-A’48～51層）が設けられている。

このほか、調査区内を近現代に属す溝が東西南北に掘られ、このうちの溝15からは図202の文字瓦274が出土している。

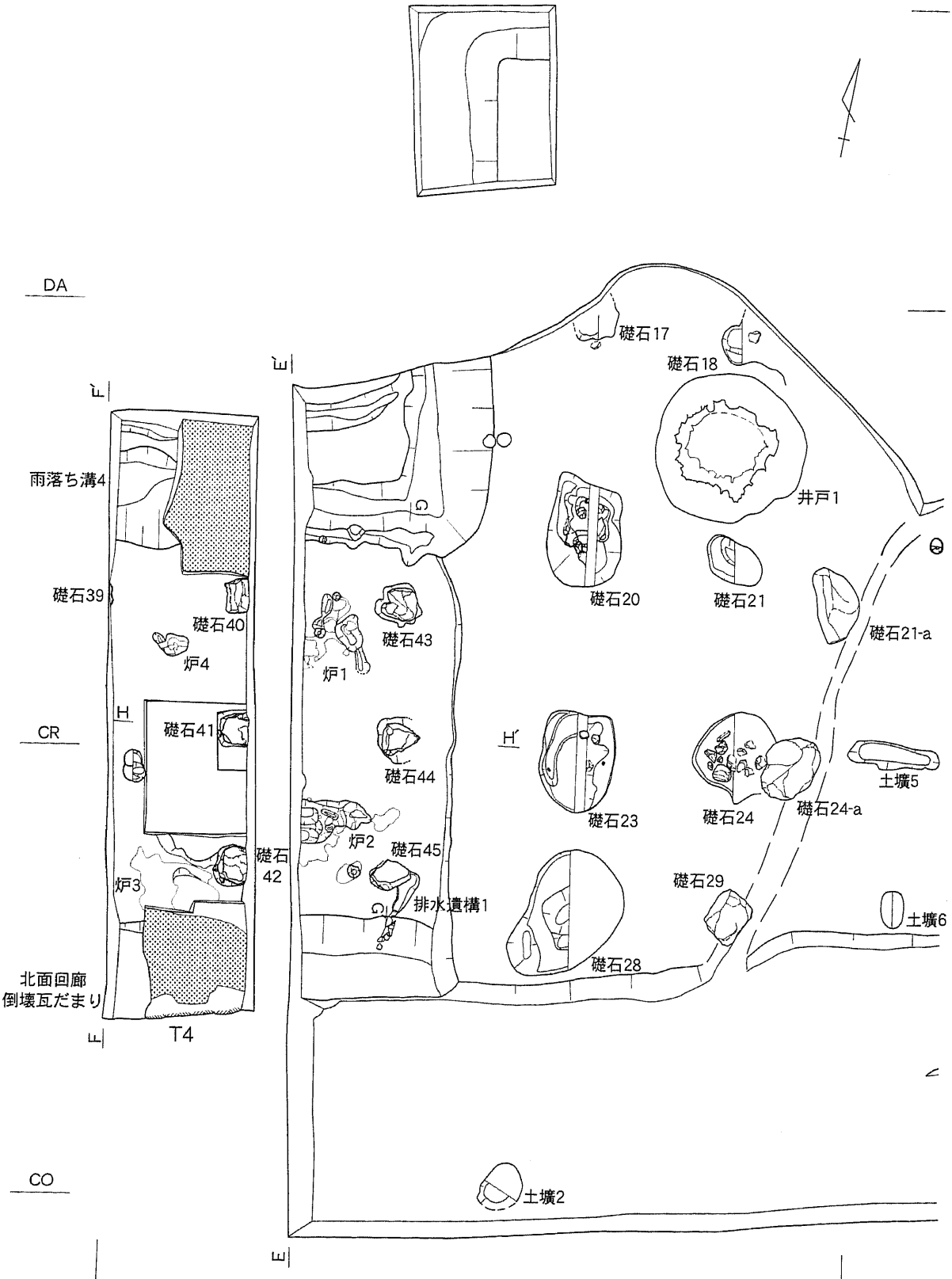
礎石（図26）

奈良時代、創建時の建物に用いられた礎石は、後世の水田耕作によって動かされたと考えられ、原位置をとどめるものはないが、礎石抜き取り穴（礎石16～26・28）や礎石落とし込み穴（礎石27・30～31）によっておおまかな礎石位置を確認している。礎石抜き取り穴のなかには、根石が残る例（礎石20・23など）もあれば、それらも完全に壊され、瓦の廃棄土壙となった例（礎石16・19・22）もある。

なお、後述のように礎石32～36は講堂建物再建時に据え直されたものであり、当初のものではないことが判明した。

礎石据え付け掘りかたは認められず、基壇構築過程で根石と礎石を置いていく工法をとったと考えられるが、大形の礎石には掘りかたを伴う可能性もある。

礎石落とし込み穴や動かされた礎石（礎石21－a・24－a・29）から礎石には長さ1.3～1.4m、高さ


21
26
DC
DA
礎石17
礎石18
井戸1
礎石20
礎石21
礎石21-a
雨落ち溝4
礎石39
礎石40
炉4
炉1
礎石43
H
CR
礎石41
礎石44
H'
礎石23
礎石24
礎石24-a
土壙5
炉2
礎石45
礎石42
炉3
排水遺構1
礎石29
土壙6
礎石28
北面回廊
倒壊瓦だまり
T4
CO
土壙2

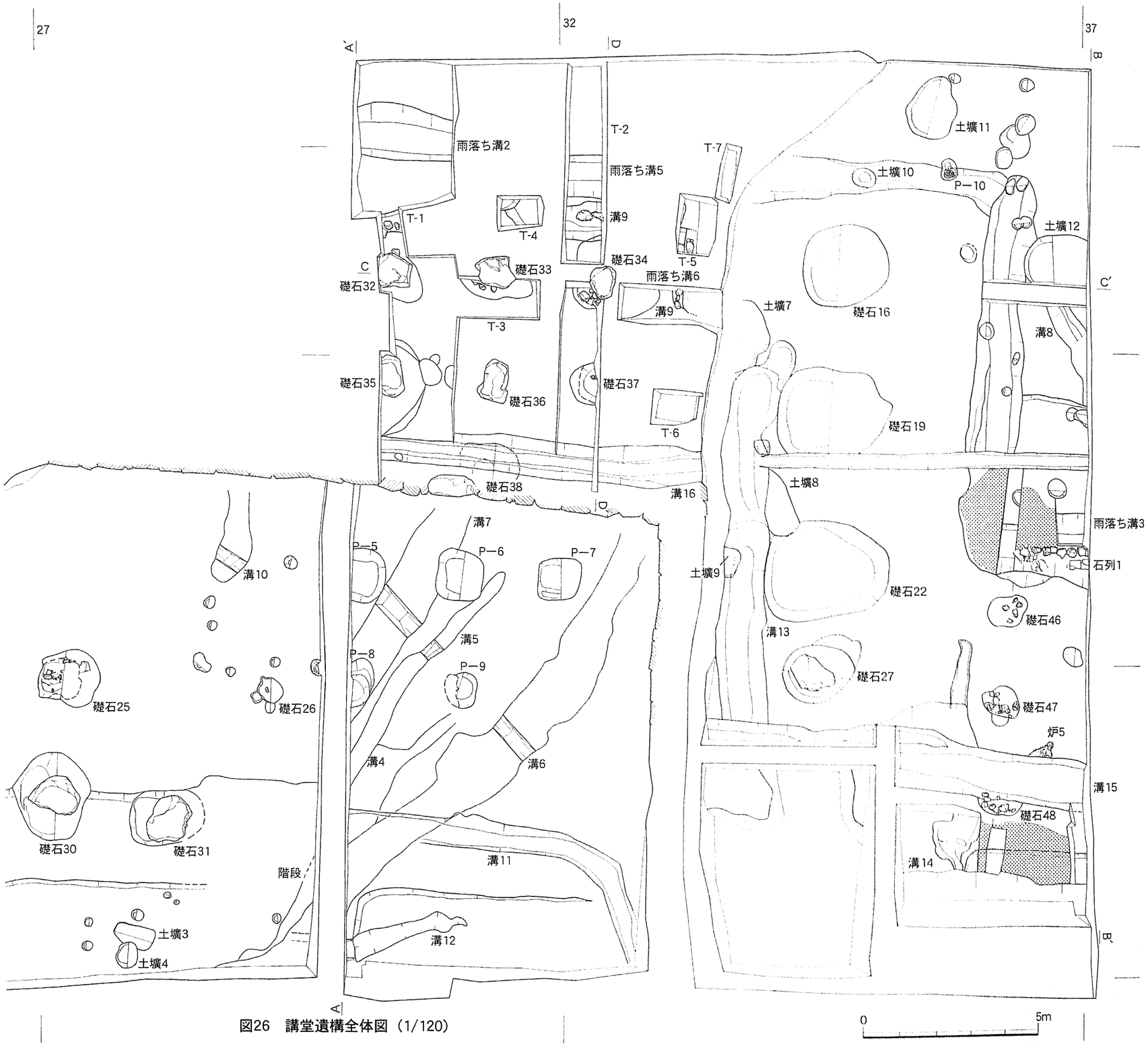


図26　講堂遺構全体図（1/120）

70cm程度の石を、また、礎石抜き取り穴内の根石から根石には20～40cm大の石を使用したことがわかる。また、礎石には自然石を利用し、柱座等の加工はしていない。

遺存している根石の標高と礎石高から、講堂基壇高は80cm（基壇上面高23.1m）と復元できる。復元した基壇上面高は再建講堂の基壇上面高と近似しており、このことからも再建講堂が創建講堂を踏襲して築かれたことがわかる。

基壇構造（図27・30）

奈良時代の基壇は、鎌倉時代以降に講堂が再建された際に手が加えられているが、大規模な改変ではなかったため基壇端以外はよく遺存しており、構造自体も変わらない。

基壇の構築過程をみていくと、地山と基壇の間に旧表土が認められないため、基壇構築に際して整地が行われ、このときに旧表土は削平されたものと考えられる。掘り込み地業は行わず、明黄褐色土あるいは黒褐色砂質土の地山を基壇の基盤としている。もっとも良好に基壇が遺存する地点で基壇土の構築過程を連続した層として確認できていないので確実ではないかもしれないが、図27A-A'の44層と図30D-D'南端の基壇の土層から推定すると、基壇土は基底部から版築で基壇を構築していくのではなく、最初は一定の高さまで20～30cm程度の厚さで明黄褐色土の地山の掘り上げ土で盛土をし、その上をさらに５～10cm程度の厚さの明黄褐色粘質土とにぶい黄褐色粘質土で版築していったと考えられる。

ただし、地形が北西から南東に向かって傾斜しており、全体にわたって同様な盛土工法をとったのではなく、地形の傾斜に合わせて、低いところにのみ一定の高さまで大きな単位で盛土を行った可能性も考えられる。

雨落ち溝（図26・27・29・30、図版16）

雨落ち溝は、基壇の北・東・西の三方をめぐる。雨落ち溝２である。図27A-A'42層、図29C-C'23層は埋土で、地山を削り込んだ素掘りの溝であった。東西雨落ち溝ともにそれぞれ、北面回廊の雨落ち溝３、４に接続する。東雨落ち溝の北端に直交する溝は、深さ５cm程度のごく浅いたわみ状の遺構であるが、その位置から雨落ち溝２の底部と考える。

基壇上面が削平されているため、雨落ち溝の正確な規模は不明であるが、幅は北で1.2m、東西で1.4～1.6m、深さ50cm（底面高は北22.4m、東西22.2m）と北が高く南へ向かって低くなる。

基壇西側の雨落ち溝２の上層には瓦だまりが形成されている。瓦は外側に滑落しながらも位置関係を反映した状態で出土しており、下部では軒平瓦が５枚、一列に並んでいた。

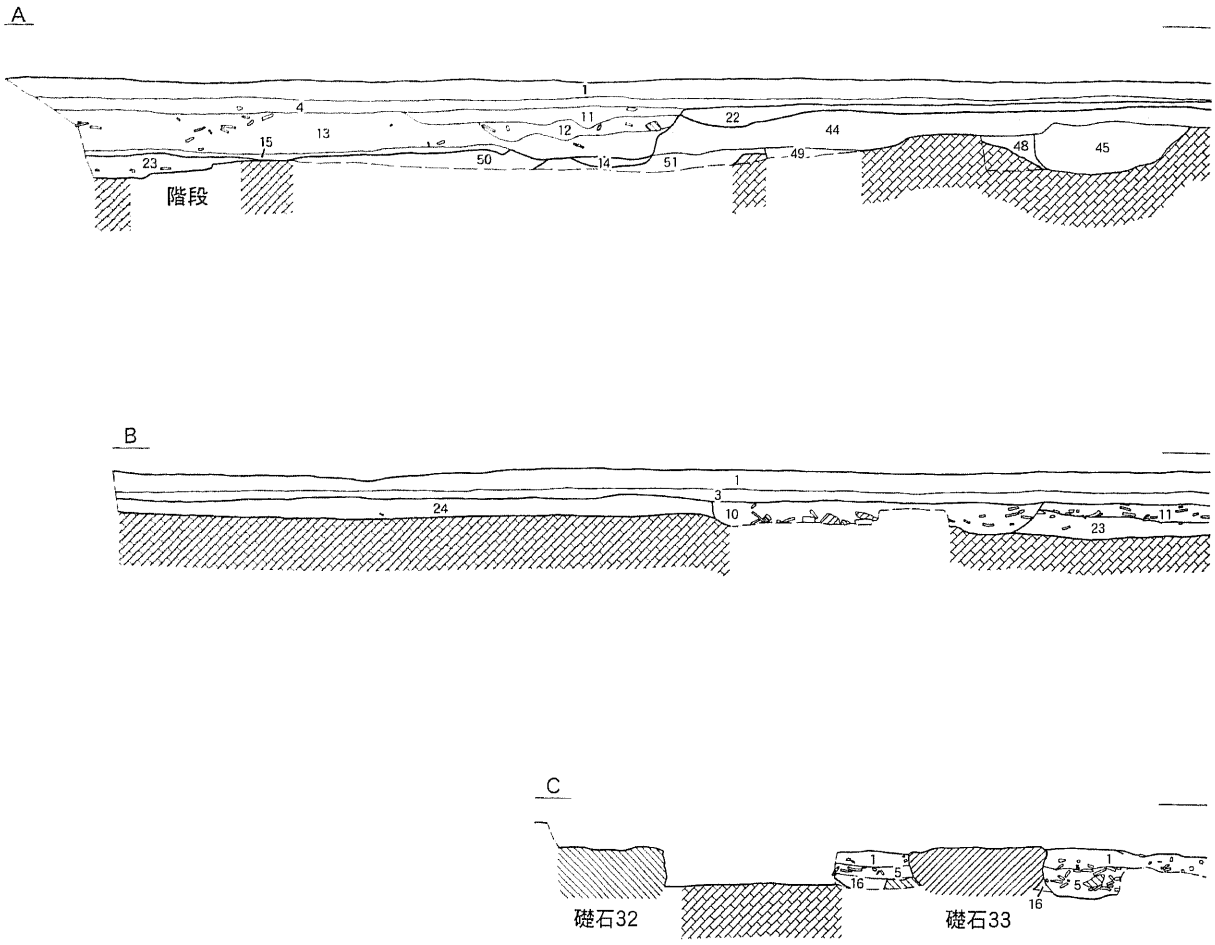
T-1・2、北東隅で確認している北面の雨落ち溝２を結ぶと、基壇端のラインがT-1では北に張り出す。これがT-1・2間で直角あるいは緩やかなカーブで張り出す階段の存在を示す可能性も考えられるが、復元基壇高から推定される階段の蹴上げの高さと段数、また側柱と張り出しの距離、南北の柱筋とそろわない、といった点から断定はむずかしい。

また、基壇の南と北面回廊より南の東西基壇端では雨落ち溝を伴わない。講堂前面の雨水排水は金堂背面の雨落ち溝や東西面回廊の雨落ち溝が受けていたと推定する。

なお、T-2では雨落ち溝２を踏襲して再建講堂の雨落ち溝５（図30D-D'29・30層）が設けられる。

基壇外装（図27・29）

講堂においても金堂等と同様に基壇外装の痕跡が認められなかった。基壇端が遺存しているにもかかわらず、基壇外装の基底部に使われた加工石材や石、あるいはそれらを抜き取ったり据え付けたり



した痕跡、さらには凝灰岩の断片、粉も出土していない（図27A-A'、図29C-C'）。また、加工石材や乱石積基壇に用いる石、塼、平瓦が大量に出土することもなかった。

したがって、乱石積や塼積、瓦積等の基壇外装は想定できず、木製基壇の可能性がある。これについては第5章において検討する。

階段（図26･27）

調査区南の中央間東側にあたる場所で、基壇端の南への張り出しと階段の基底部と推定される高さ3～4cmの段、2段分を、また、土手をはさんだ西側の土層断面でも、東側の2段目に相当すると考えられる段を確認している。このほかに、存在が推定される東西の両第二柱間につく階段は、南基壇端の遺存状況が悪いこともあって確認できていない。

構築の様子をみてみると、階段部の土手の東西で異なる。土手の東では地山を削り出して段を築くのに対し、西では基壇からのびる一層の盛土によってつくられている。これによって、地山が低いところでは階段と基壇とが一体でつくられたことがわかる。

上部を旧水田（図27A-A'15層）によって失っているが、復元基壇高から推定して、階段の出は1.78m（6尺）、幅5.05m（17尺）、蹴上げ20cm、踏面30cmの階段であったと推定される。

外装については、基壇と同様になんら痕跡が認められないことから、基壇外装と同様に石を用いな

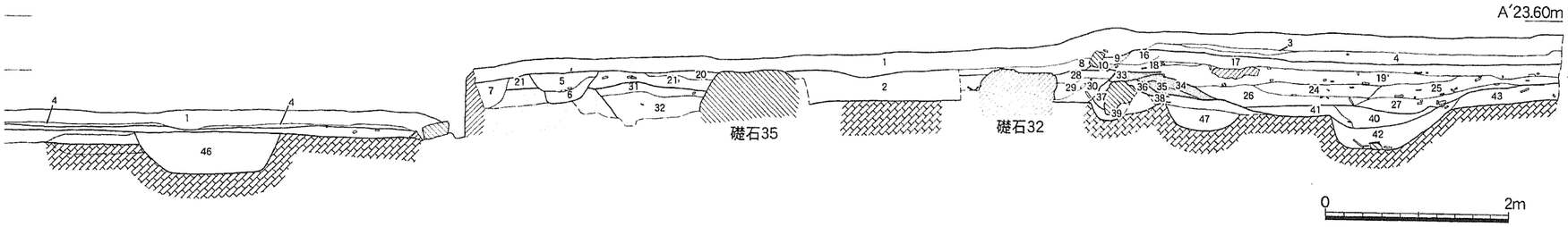


図27　A-A’ 断面（1/60）

5～6　溝16埋土
24～27　雨落ち溝6埋土
28～30　礎石32据え付け穴埋土
31～32　礎石35据え付け穴埋土
33～36　基壇盛土
37～39　溝9埋土
40～41　雨落ち溝5
42　雨落ち溝2埋土
45　P－8埋土
46　P－5埋土
48　溝7埋土
49　溝5埋土
50　溝6埋土
51　溝4埋土

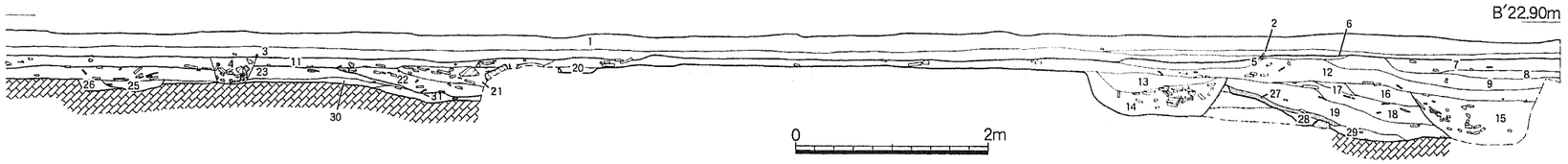


図28　B-B’ 断面（1/60）

10　土壙12埋土
13～14　溝15埋土
21～22　雨落ち溝3上層埋土
27　基壇盛土
28～29　基壇修復以前の堆積
31　雨落ち溝3下層埋土

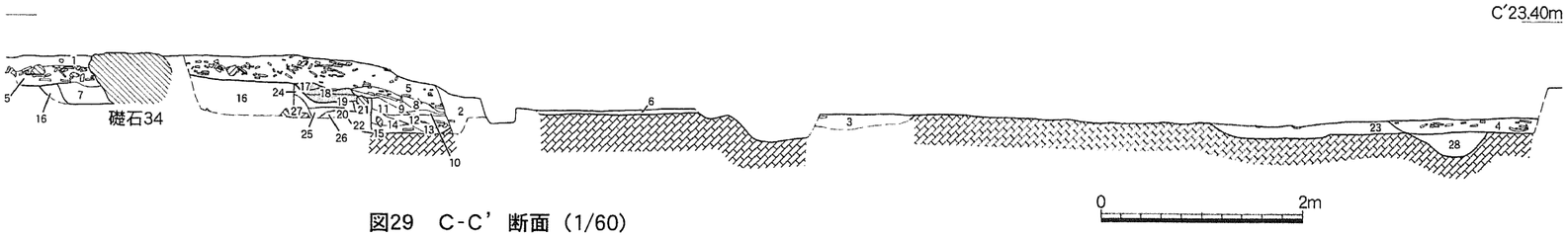


図29　C-C’ 断面（1/60）

3　礎石16抜き取り穴埋土
4　土壙12埋土
7　礎石34抜き取り穴埋土
10～15　雨落ち溝6埋土
16　礎石33・34据え付け穴埋土
17～19　基壇盛土
20～21　溝9埋土
22　雨落ち溝5埋土
23　雨落ち溝2埋土

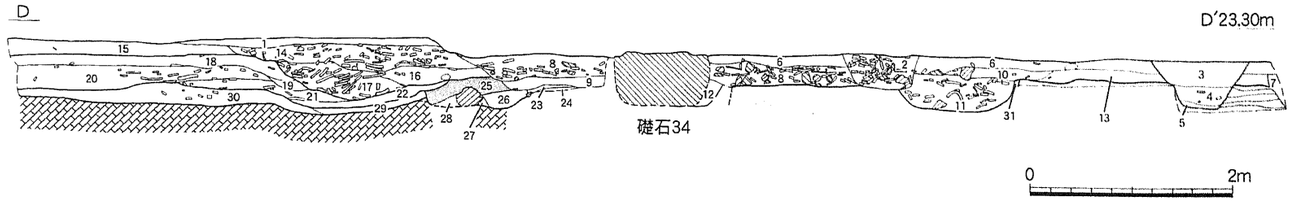


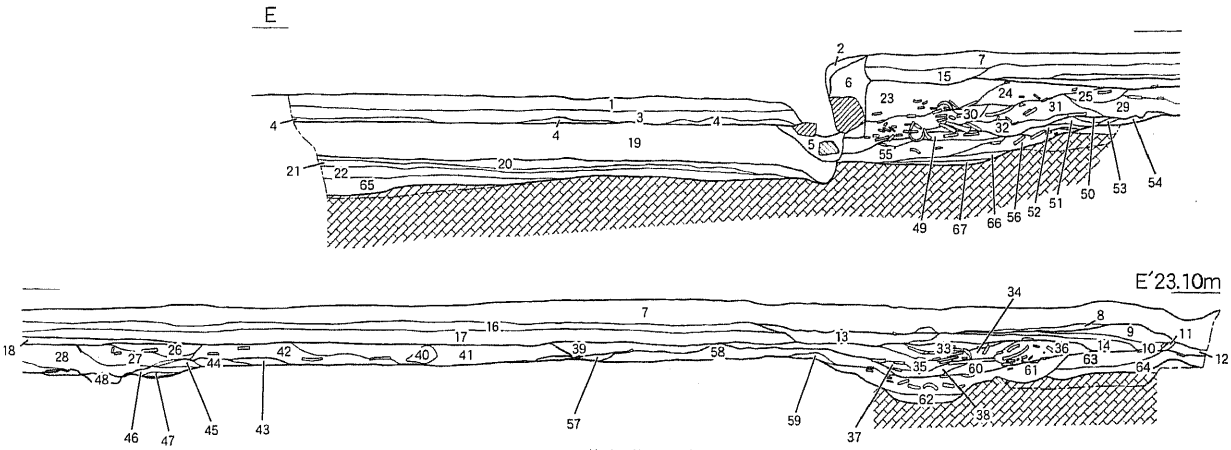
図30　D-D’ 断面（1/60）

3～5　溝16埋土
11　礎石37抜取り穴埋土
12　礎石34抜取り穴埋土
16～17　雨落ち溝6上層埋土
21～22　雨落ち溝6下層埋土
23～24　礎石34据え付け穴埋土
25　基壇盛土
26～28　溝9埋土
29～30　雨落ち溝5埋土
31　礎石37据え付け穴埋土

い、木材を用いた外装であったと推測される。

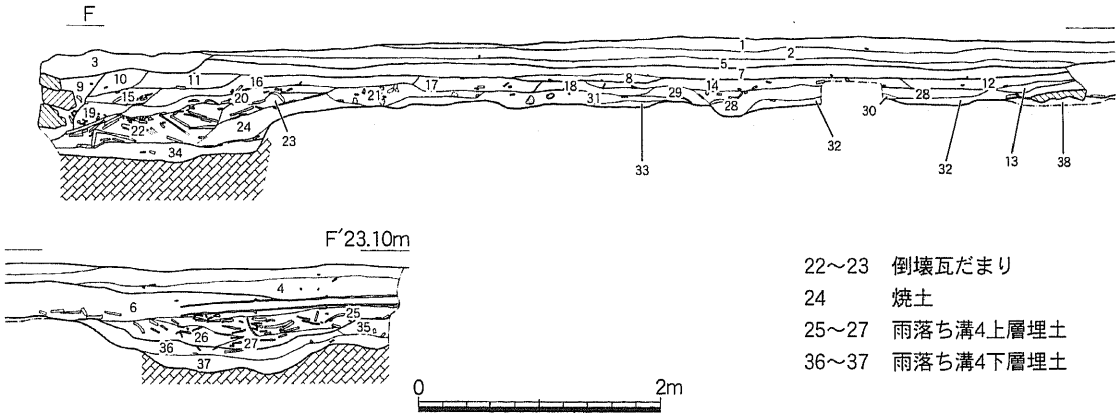
講堂の復元案（図35）

講堂の復元を行っていくにあたって、以下のような問題点があげられる。①現状で基壇外装がない



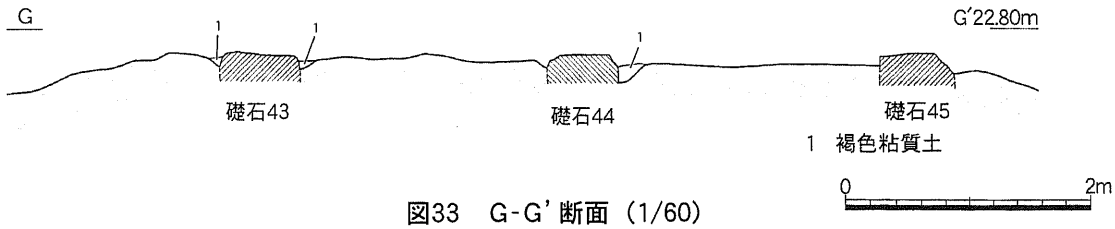
33～38　雨落ち溝4上層埋土
45～48　炉2埋土
62～64　雨落ち溝4下層埋土

図31　E-E′断面（1/60）



22～23　倒壊瓦だまり
24　焼土
25～27　雨落ち溝4上層埋土
36～37　雨落ち溝4下層埋土

図32　F-F′断面（1/60）



1　褐色粘質土

図33　G-G′断面（1/60）

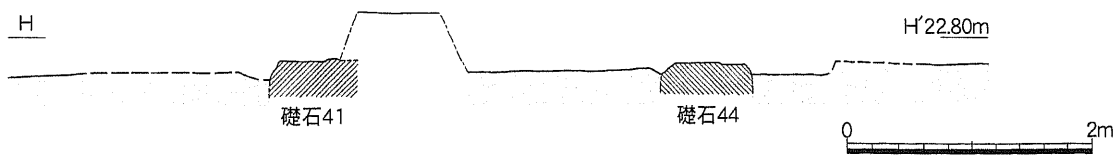
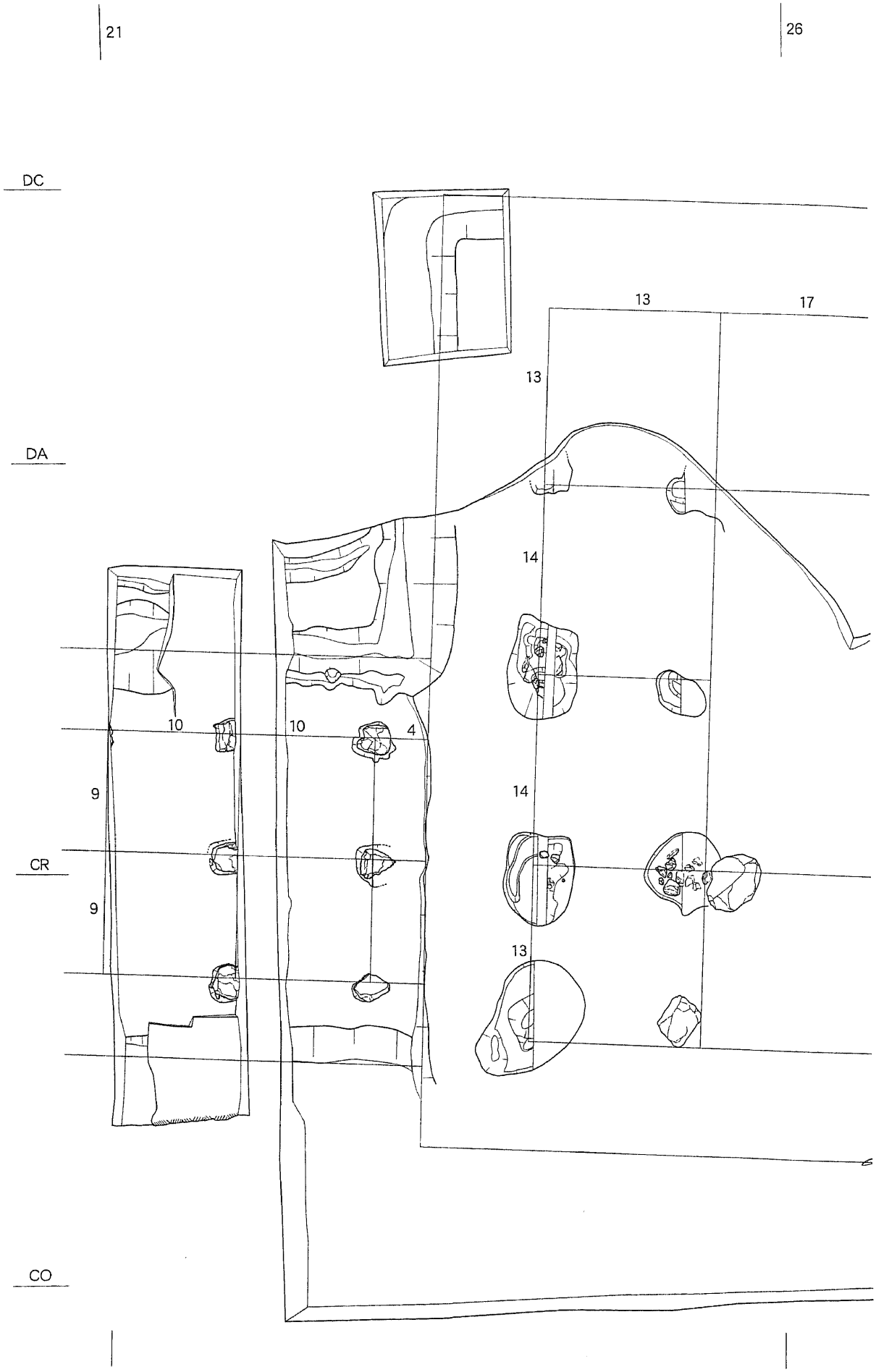


図34　H-H′断面（1/60）


21
26
DC
DA
CR
CO
13
17
13
14
14
13
10
10
4
9
9

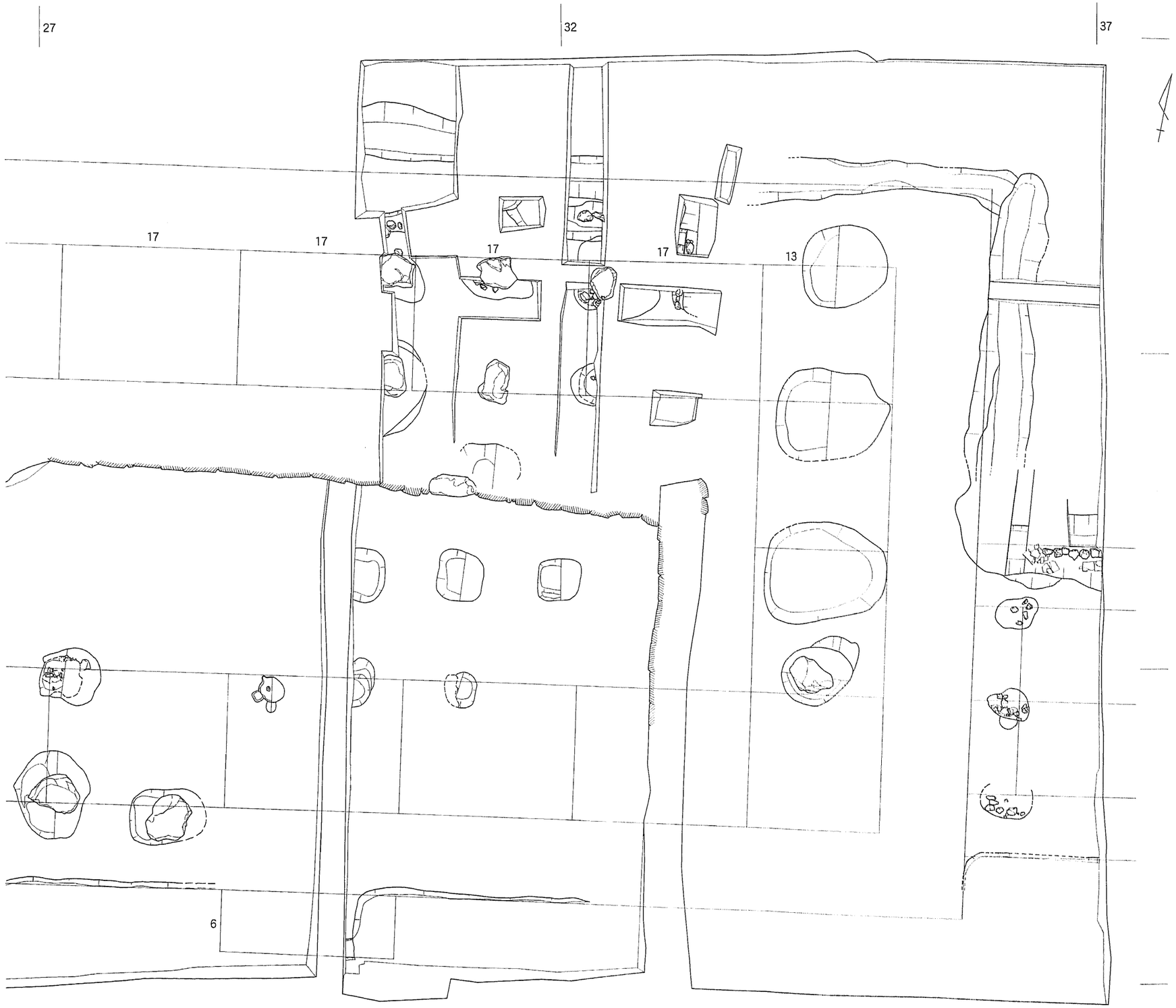


図35　講堂復元図（1/120）

ため、雨落ち溝や基壇の下端を基準とすることになるが、この場合それが本来の位置を示しているとは限らないこと。②原位置の礎石がないため、礎石抜き取り穴内に残された根石で復元することになり、柱心がおよその位置になること。③北東部が再建講堂によって改変されている可能性があること。これらの問題を踏まえたうえでの基壇規模、建物規模の復元の必要がある。このため遺存状況の良い遺構を基準に、かつ建物として妥当である規模になるように復元を試みることとした。なお、１尺＝0.297mとする。

講堂は、西半の礎石抜き跡（礎石17･18･20･21･23･26･28･31）を基準に、また礎石抜き跡と落とし込み穴（礎石16･19･22･27）を建物東限の手がかりとして復元した。

まず講堂と回廊の関係であるが、一般的に講堂に複廊の回廊が取り付く場合、講堂の扉口との関係上、講堂の棟通りと回廊棟通りが合致する可能性が高い。しかし、検出した回廊中央礎石と講堂棟通り位置の礎石との関係は明らかに合致しない。むしろ、講堂南入側柱筋と回廊棟通りが合致する。この結果をもとに、基壇端までの距離を考慮にいれながら前述の礎石抜き跡に展開すると、講堂の規模は、桁行７間（13・17・17・17・17・17・13尺）×梁行４間（13・14・14・13尺）、東西32.97m×南北16.04mとなる。

一方、基壇規模は南・西基壇端を基準に雨落ち溝２の下端も考慮に入れて、桁行127尺×梁行70尺、東西37.72m×南北20.79mとなる。そして、講堂の中央間の南に幅17尺（5.05m）、６尺（1.78m）の出をもつ階段がとりつく。

またこの場合、基壇の出は８尺（2.38m）となる。軒の出のことを考えると講堂としては広くなる。しかし、講堂本体の規模が他の国分寺講堂と比較しても大きな規模であることから考えると、立派な組物をもっていたと考えてもおかしくない。ここでは、軒の形式が二軒で、組物は出組であったと推定する。

なお、昭和49年度調査時に基壇東南隅に接する別の建物の基壇として考えられている遺構は、溝15によって分断された講堂基壇である。

２．北面回廊

北面回廊の東西で遺構の遺存状況は異なる。西側が講堂を含めた最終段階の様子を示す遺存状況のよいものであったのに対し、東側は削平により礎石抜き取り穴しか残っていなかった。

講堂東西基壇への取り付き口、北面回廊西側３列目までの礎石列（礎石39～45）と東側１列目の礎石抜き取り穴（礎石46～48）を確認した。これらから、中央柱筋を講堂の南入側柱筋と同じくする、講堂の南よりにとりつく複廊構造の回廊であることが判明した。

西側回廊上面、特に講堂基壇に近い１列目と２列目の間からは、炭、焼土に混じって多量の土器、銅板片102が出土した（図54）。この土器のなかには、白磁椀65・66もあった。

基本層序（図28･31･32）

北面回廊西側の調査によって、回廊は12世紀半ば～後半に火災によって講堂とともに倒壊していることが明らかとなった。包含層は大略で火災前の堆積、火災による堆積、火災後の片付けによる堆積に分かれる。

南基壇下がりでは図31E-E' 49～56層、図32F-F' 34層が、雨落ち溝４では図31E-E' 58～62層、図32F-F' 36～37層が火災以前の堆積である。南基壇端のなかでも講堂基壇に近い場所では、この堆積以前に一度

基壇の補修をしたと考えられ、初期の堆積土（図31E-E' 67層）の上に基壇盛土（66層）を行っている。

図31E-E' 30～32層、図32F-F' 22～23層は火災時に崩落した瓦の堆積層である。後述するが、なかでもＴ４で検出している倒壊瓦だまり（図44）は、屋根に葺かれていた様子を如実にあらわしている。また、図F-F' 24層は焼土層で、この層はトレンチ倒壊瓦だまり下でも同様の厚みで認められることから、瓦を固定するための土葺の土が焼けたものである可能性がある。

図31E-E' 33～38層、図32F-F' 25～26層は、雨落ち溝４上層に落ち込んだ火災による崩落瓦である。ここでも図31E-E' 38層、図32F-F' 26層と焼土層が認められる。

焼土層は回廊上でも認められ（図31E-E' 39層、図32F-F' 28･29層）、この焼土層下で４基の炉（図36）が確認され、また礎石41周囲に設けたサブトレンチから鉄器が出土している。このような状況から火災で焼け落ちる以前に回廊内では鍛冶が行われていたとみられる。

図31E-E' 25～29層は火災後の片付けによって形成されたと考えられる、炭や焼土を多く含む層で、銅板102（図54）もこの層から出土している。

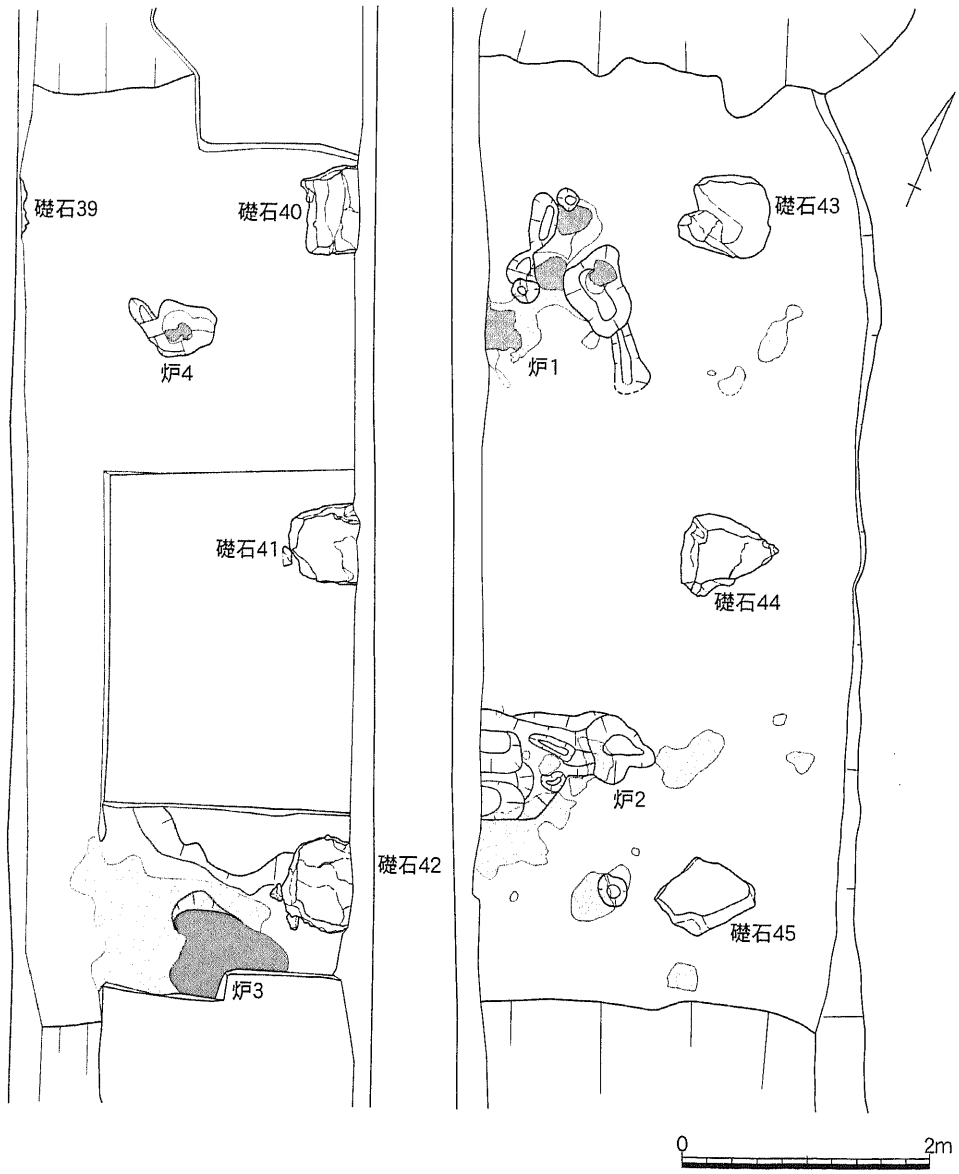


図36　北面回廊西側遺構図（1/60）

一方、北面回廊東側では、図28B-B’16層で１cm以下の焼土粒を多く含む程度で、上記ほど顕著に火災を示す痕跡は認められない。

礎石（図26･36、図版15-１・18-１）

礎石は、先述のとおり北面回廊西側では原位置で礎石を、東側では礎石抜き取り穴を確認している。礎石は長軸70～80cm、短軸60cm、高さ20cm程度の自然石を使用しており、柱座等はない。なお、基壇の遺存状況のよい礎石43～45では礎石据え付け掘りかたは認められないが、周囲の基壇土が流失している礎石42では認められる。このことから、基壇構築過程で礎石据え付け掘りかたを設け、20～30cm大の根石を置き、再び基壇土を構築し、礎石の設置を行うという工程が復元される。

また後述するが、礎石45には、排水遺構１が後補されている。

なお、礎石41の周囲に設けたトレンチ内から図51・52のような鉄器がまとまって出土した。

基壇構造と基壇外装（図28･31･34）

地山上に旧表土がないことから、基壇は整地した地山上に盛土を行い、基壇端と雨落ち溝４の基底部は、地山を削り出して築く。なお基壇を断ち割っていないため、版築の様子、また、講堂基壇と回廊基壇取り付き部の構築過程はわからない。

もとは講堂推定基壇と回廊上面の比高差は60cm前後あったと考えられるが、講堂との取り付き部は現状で７～８cmの段としてしか遺存していない（図34H-H’）。１列目の礎石と講堂基壇端との距離や土器などの出土状況から考えて、取り付き部がスロープ状になっていたとは考えにくい。よって、講堂と回廊の取り付き部には木製の階段等が設置されていた可能性を想定しておく。

基壇外装の痕跡は、講堂と同様に認められない。講堂と同様に当初は木製基壇があったが、のちに失われてしまった可能性がある。基壇外装がなくなったのちに基壇土の流失が著しくなったのか、雨落ち溝３の肩口では石列１（図37）によって補強を、また基壇法面を盛土（図28B-B’27層、図31E-E’66層）で補修している。

また、中央柱筋に地覆石や塼、瓦などはなかった。

雨落ち溝（図26）

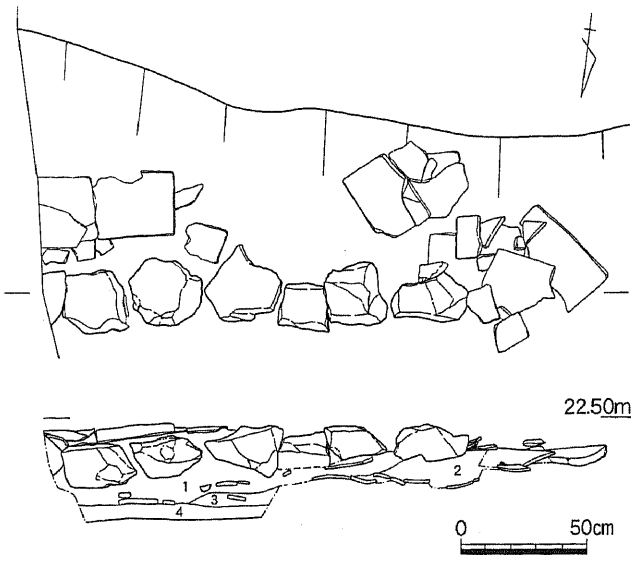
雨落ち溝３が回廊東側の北雨落ち溝、雨落ち溝４が回廊西側の北雨落ち溝である。いずれも上下層に分層される、現状で素掘りの溝である。

雨落ち溝３は幅1.8m、深さ35cm（底面高22.0m）の溝で、後述する石列１が瓦を含む埋土上に築かれる。

雨落ち溝４は幅1.2m、深さ20cm（底面高22.2m）の溝である。

石列１（図26･28･37、図版17-３）

北面回廊東側の雨落ち溝３上につくられた石列である。講堂との取り付き部から東1.7m付近を始点に、20～30cm角、



1　黒褐色土　　3　黒褐色土
2　暗灰黄色土　　4　黒褐色微砂質土

図37　石列１（1/30）

厚さ15～20cmの自然石６個を東西一直線状に並べる。石を据え付けた掘りかたや整地した痕跡がないことから、石列の設置にあたり特段の造作は行わず、雨落ち溝３の堆積土１・２層上に直接置いたと考えられる。検出延長は1.6mであるが、調査区内では収まらずさらに外へのびる。西端の石は講堂との取り付き部よりのびる瓦だまりの瓦を踏む。このことから回廊、あるいは講堂がすでに傷んでいた時期につくられたと推測される。

石列が構築される以前、回廊の基壇端は南へ30cmほど後退し、そこに堆積した土砂によって雨落ち溝３は浅い溝となっていた（図28B-B’21層）。そこで、これ以上の浸食を防ぐために基壇保護を目的につくったのがこの石列であったと考えられる。石列はちょうど創建時の復元回廊基壇端にあたる。石列構築時、回廊屋根の軒の出を意識し、基壇端をもとの創建時の位置まで戻したのではなかろうか。

また、石列１の南にはこれと平行するように、２枚のほぼ完形の平瓦が、凸面を向けて列状に並べ置いた状態で出土している。さらに70cm離れた場所から、この瓦列の並びとは遊離した状態でほぼ完形の平瓦が１枚出土している。平瓦列を構成していた１枚に含まれるかもしれない。この平瓦列の用途は不明であるが、石列１に関わる付帯施設と考えられる。

排水遺構１（図26・33・38）

北面回廊西側の礎石45の東にとりつき、南基壇端に向かってのびる遺構である。全長約1.7mで、北半は深さ５cm程度の溝で、南半は丸瓦を一列に並べる。丸瓦列は、基壇端法面に堆積した褐黄色土上につくられ、礎石45付近から始まるゆるい傾斜上に位置する。溝が浅く、丸瓦列との接続部分までしかないことから、回廊内に何らかの原因でたまる水を排水するという明確な意図をもって掘削した溝ではない可能性がある。むしろ、自然に形成された溝である可能性を考えたほうがよいであろう。他の礎石でも、礎石際をめぐる浅いくぼみが認められる（図33G-G’）。これが大きくなったものと考えられる。

丸瓦列は、重なり方から完形の丸瓦を南から溝南端に向かって重ね置きしていったものと考えられる。現状では２枚分が遺存している。暗渠として設けたのか、基壇の流出を防ぐための土留め的な役割で設けたのかはっきりしない。

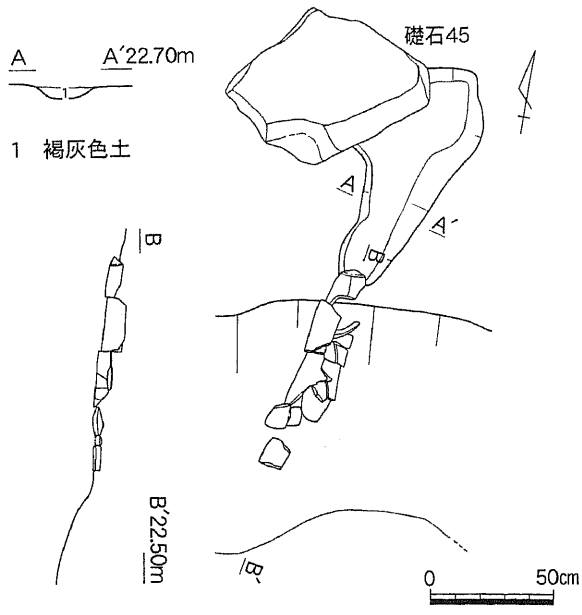


図38　排水遺構１（1/30）

炉（図26・36、図版７・8-1・2）

北面回廊西側で４基、東側で１基の計５基の炉を検出している。形は不定形で、大きさもそれぞれ異なる。いずれの炉も、火災で倒壊する以前の遺構である（図31E-E’、図32F-F’）。したがって、まだ講堂・回廊が存続していた時期に回廊で鍛冶が行われていたことになる。いずれの炉も壁がある中央柱筋近くは避け、側柱と側柱の間の比較的広い空間がとれる場所に築いている。

回廊に炉を築く理由として、回廊が人工的な造成土の上であることから、その上に築けば、鍛冶炉が嫌う湿気を防ぐ除

湿構造を下部に築かなくてもすむことがあげられている（杉山ほか1997）。

なお炉２については、特に項目を設けていないが、調査区枠の断面、図31E-E'において幅20cm、厚さ２cmの赤褐色の硬化面を29層下で、幅30cm、厚さ３cmの褐赤色の硬化面を27層下で確認している。また、後者の下部で、現状で長軸1.4m、短軸0.9mの土壙を検出している。

（１）炉１（図26・36・39・40、図版７-２）

礎石40と43の間に位置する。被熱・硬化面をＡ～Ｄに分けると、Ａ～Ｃでは貼り付けられた長軸径20～30cm、短軸径25～30cm、厚さ１cmの粘土が被熱、硬化して黄色や燈色、黒色を呈しほぼ一列に並ぶ。またＤでは、長軸径60cm、短軸径40cmの土壙の壁面から底部にかけて、厚さ３cmの粘土の被熱痕跡と硬化が認められる。さらに、それらの周辺も被熱して暗黄色を呈する。Ａ～Ｃは現状ではほぼ平らであるが、図31E-E'中のＣの断面から、低く緩やかに立ち上がる壁面があったと推定される。

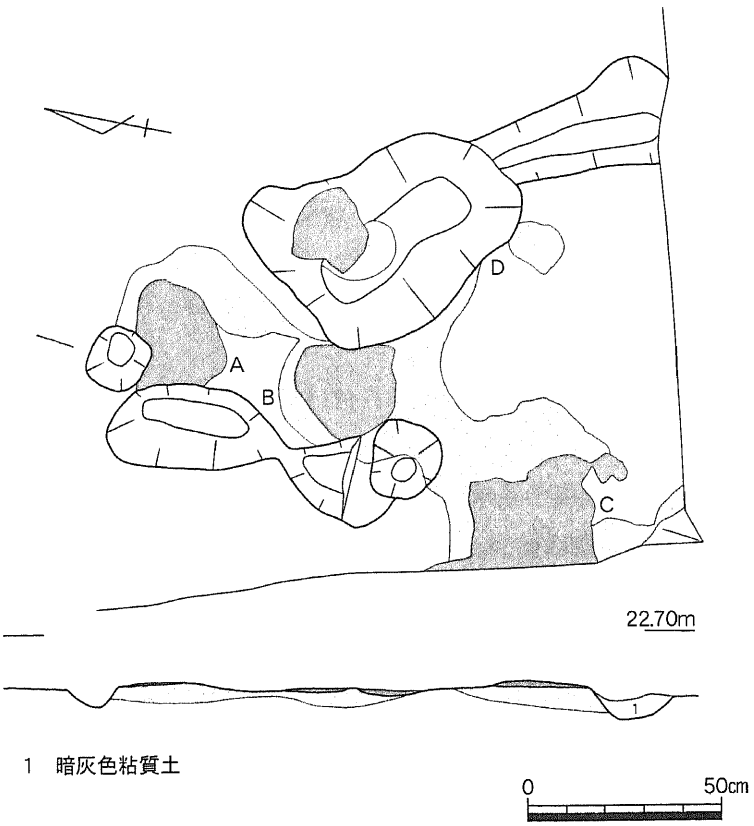


図39　炉１（1/20）

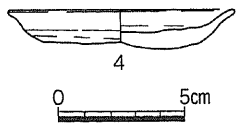


図40　炉１出土遺物（1/3）

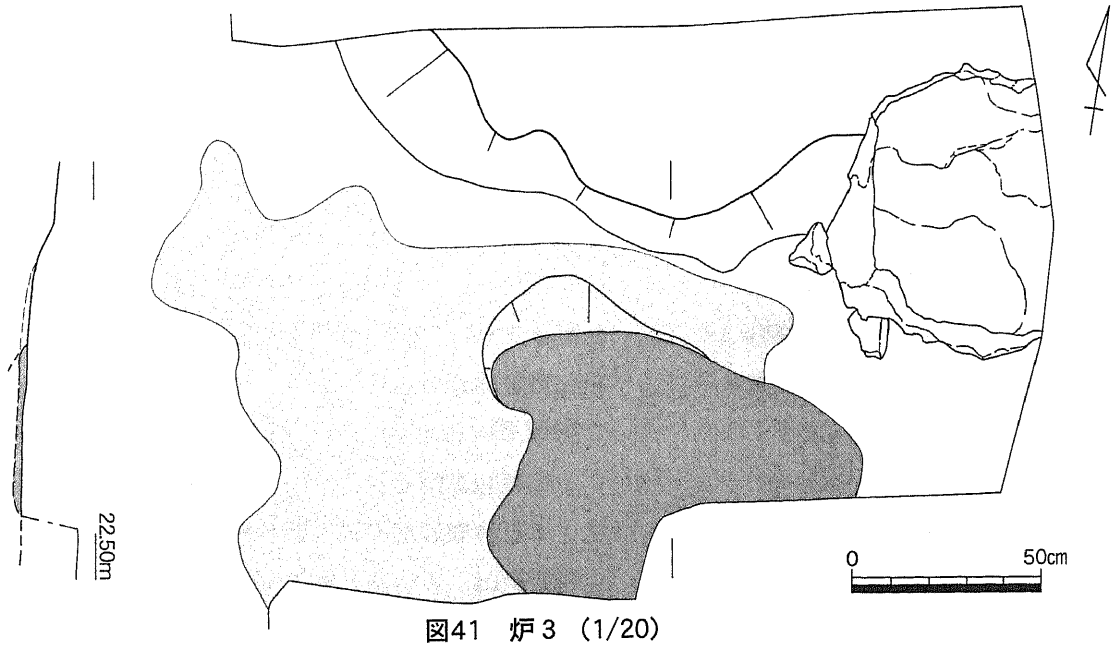


図41　炉３（1/20）

下部構造はないが、Ａ・Ｂの西側に円形、あるいは楕円形の土壙が認められる。

遺物は、Ｄ底部の硬化面上から土師器の皿が出土している（図40）。口径8.7cm、器高1.5cmで、底部には板目圧痕が残る。

（２）炉３（図26･36･41、図版８-１）

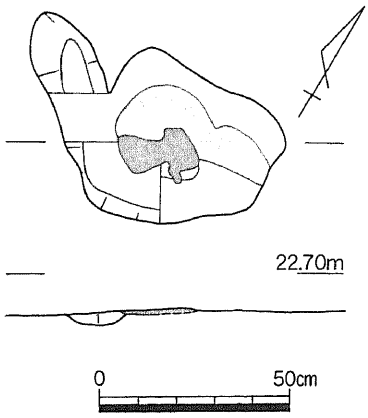
礎石42西に位置する。礎石42から基壇肩口に向かってトレンチの幅全体にわたって基壇土が流失しており、この広く浅いくぼみに築かれている。炉３の南を倒壊瓦が覆うため、炉底の北半分のみ検出を行った。

現状で長軸径１m、短軸径0.7m、厚さ２cmの平坦な粘土の被熱、硬化が認められる。赤褐色や暗灰黄色を呈する。また、この硬化面から西側に向かっては、現状で1.1～1.7mの被熱痕跡が広がる。硬化面下で下部構造とみられる下がりを確認している。

（３）炉４（図26･36･42）

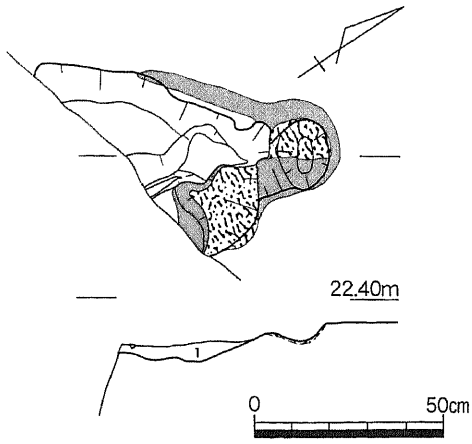
礎石39と40の間に位置する。炉底の一部と下部構造を検出している。長辺20cm、短辺10cm、厚さ１cmの平坦な粘土の被熱、硬化が認められる。硬化面は、褐色を呈する。この硬化面の北から東にかけて淡褐色から暗褐色を呈する被熱痕跡がみられる。

下部構造は、硬化面下ではごく浅く、ほぼ基壇土に直に粘土を貼り付けていると考えられる。ただし、炉底の西側は長軸径55cm、短軸径15cm、深さ３cm程度の長楕円形に浅く掘り窪め、黒褐色粘質微砂で埋めた後、粘土を貼り付けている。



1　黒灰色粘質微砂

図42　炉４（1/20）



1　黒褐色土

図43　炉５（1/20）

被熱痕跡の上面から鉄滓が出土している。

（４）炉５（図26･43、図版８-２）

北面回廊東側の礎石48の北東に位置する。南半分を溝15によって失う。長軸径20cm、短軸径15cmの楕円形のピットに短辺40cmの土壙が取り付いた形である。両者の底部には高低差があり、ピット部のほうが６cm程高くなる。被熱痕跡と硬化は、ピット部分とその周辺の土壙部分でも浅い箇所で顕著に認められる。また、炉５は炉１～４とは異なり、硬化面が黒色を呈し、より粘土が焼きしまる。黒色を呈するのは、ピットの半分と土壙部分の浅く平坦面をなす部分で、それらの周囲の被熱痕跡は赤褐色を呈する。土壙内のその他の部分は斑状に灰色を呈しており、弱いもののいくらか熱影響をうけているものと考えられる。

土壙部分から瓦片が１点出土している。

倒壊瓦（図26･32･44、図版３･18-２）

北面回廊西側（Ｔ４）の南側基壇斜面上に、火災によって倒壊した屋根に葺かれていた状態をとどめた瓦列を検出している。図32F-F' 22～24層がこの倒壊瓦に伴う層である。基壇外では地山との間に、土師器の

図44　北面回廊倒壊瓦（1/20）

細片を含む34層をはさむ。24層は焼土層で、下層になるにつれて22層と混じり、境が不明瞭となる。この層はサブトレンチ内の倒壊瓦だまり下でも同様に15cmの厚みで認められることから、瓦下の土葺の土が焼けたものである可能性がある。また24層は、炉３上に堆積する。

倒壊瓦の上層には、大量の瓦の小片が堆積する。この細片からなる瓦だまり層下で、トレンチ東端から西端までの間に南北1.3m程の幅で、南北（縦）最大８枚分、東西（横）10列の平瓦とその間に置かれた丸瓦の東西（横）７列分を検出した(3)。丸瓦は平瓦ほど遺存状況がよくないが、破片ながらも旧状を示すものであった。50cm間隔を置いた東側の調査区においては、このような瓦列は認められていない。また、西に行くほど南北（縦）の平瓦の枚数は少なくなる傾向にある。したがって、この倒壊瓦列は未調査地内で始まり、検出した部分がもっとも遺存状況のよい場所であったと推定する。南端は、石垣とその裏込め、水路によって壊され、不明となっている。軒の部分はトレンチ外になるが、現地形でＴ４との間に比高差があることから推測して、すでに耕作によって失われている可能性が高い。

倒壊瓦列の遺存状況の良い東端を現状で保存したため、瓦列下の詳細な状況は不明だが、検出状況からある程度倒壊時の様子を復元できる。倒壊瓦列北端付近では平瓦の密な重なりが認められるが、瓦全体が基壇側縁の斜面を覆うように落ち、平瓦が斜立していないことから、屋根の倒壊時に瓦がすべり落ちたのではなく、燃えた柱が屋根の荷重で折れ、屋根全体が一気に落ちたと考えられる。また、平瓦の東西（横）列の目地から、北面回廊の軸に対し南南西の方向へ向かって、垂直に近い状況で崩落したと推測する。

創建講堂と北面回廊の最後の様子を物語る良好な遺構と言える。

出土土器（図45～50、図版17-２・47・48）

北面回廊西側の上面とその基壇外周からは、土器をはじめ鉄製品、銅製品、壁土などの多量の遺物が出土している。

図45～48は北面回廊西側の上面、図49は雨落ち溝４、図50は北面回廊西側の基壇南外周から出土した土器である。

北面回廊西側の上面から出土した土器は、その堆積層位から大きく二分される。図45が下層で回廊が機能していた段階、図46～48が上層、火災による焼土層中出土の土器である。

５～10は土師器の皿である。法量は口径9.0～9.9cm、器高1.5～1.8cmにおさまる。５・６の底部は指頭押圧で調整されており、全体として器形は丸味を帯びている。７は体部が口縁部に向かって強く外反している。底部はヘラ切り後、ナデ調整している。８は底部ヘラ切りで、９は白色を呈し、底部はヘラ切り後、板目痕跡が残る。10は底部糸切りである。

11は口径14.5cm・器高3.5cmの土師器の杯Ａで、底部はヘラ切りである。12・13は高台付きの杯Ｂである。12は底部に板目の圧痕、外面に丹塗りの痕跡が残る。13は９と同じ胎土・焼成で白色を呈す。口径は15.0cm、器高は5.4cmをはかり、高い高台をもつ。

土師器の鍋（14・15）は口縁部から胴上部にかけてススが付着し、指オサエの痕跡が認められる。16は土師器の甕で、外面は口縁端部付近までハケメがみられる。

17は須恵質土器の椀である。口径15.4cm、器高5.9cmをはかり、底部は糸切りである。重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。時期は、12世紀中頃～後半と考えられる。18は黒色土器の椀で、内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。口縁部内面に１本の沈線を施している。口径は15.1cm、器高は4.8cmである。

上層からは、土師器（19～59）、吉備系土師質土器椀（60）、須恵質土器（61～64）、白磁（65・66）が出土した。土師器19～37は皿、38～59は杯である。

皿の法量は、口径8.1～9.6cm・器高1.1～2.0cmにまとまる。19・20の底部は指頭押圧により調整され、淡褐色で体部は丸味帯びる。21～27の底部にはヘラ切りが外周を中心に認められる。28は白色を呈し、底部にヘラ切りがみられる。32～35は底部中心までヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。37のみが高台をもつ皿である。

杯は杯Ａ（38～50）、底部内面が屈曲して段をもつ杯Ｃ（51～53）、杯Ｂ（54～59）に分けられる。

杯Ａは口径12.7～15.5cm、器高2.5～3.6cmである。38はヘラ切り後、指頭押圧を施している。39は板目の圧痕が残る。42は外周にヘラ切りの痕跡がみられ、43はヘラ切り後、ナデ調整を施している。44～48は外周ヘラ切りで、一部ナデもみられる。49・50は底部糸切りによる。

杯Ｃは、円盤状の粘土の外縁に口縁部および体部を取り付けたもので、内面底部と体部との間に大きな屈曲部が形成されている。そのため、底部内面には大きな凹み部がみられる。52・53は底部に糸切り痕が明瞭に残り、51は糸切り後、ナデを施しているように思われる。法量としては、51が口径14.4cm・器高4.0cm、52が口径15.4cm・器高3.7cm、53が口径15.5cm・器高4.1cmをはかる。51と52は胎土が同一である。

高台をもつ杯Ｂは、口径14.8～15.2cm・器高4.1～5.5cmにまとまる。

吉備系土師質土器椀（60）は焼土層の上部、火災後のかたづけとみられる層から出土した。口径15.0cm、高台径6.3cm、器高5.6cmである。口縁部外面に横ナデがみられ、端部は肥厚し外反する。器

壁は薄く丁寧なつくりで、定型化した高台をもつ。外面は磨滅しているが、ミガキが施されている可能性がある。時期は12世紀半ば～後半と考えられる。

61は須恵質の高台付き椀である。62は須恵質の皿で、底部に静止糸切りの痕跡が残る。口径は8.7cm、器高2.4cmである。63・64は須恵質椀で、底部は糸切りである。63は口径14.6cm・器高5.8cm、64

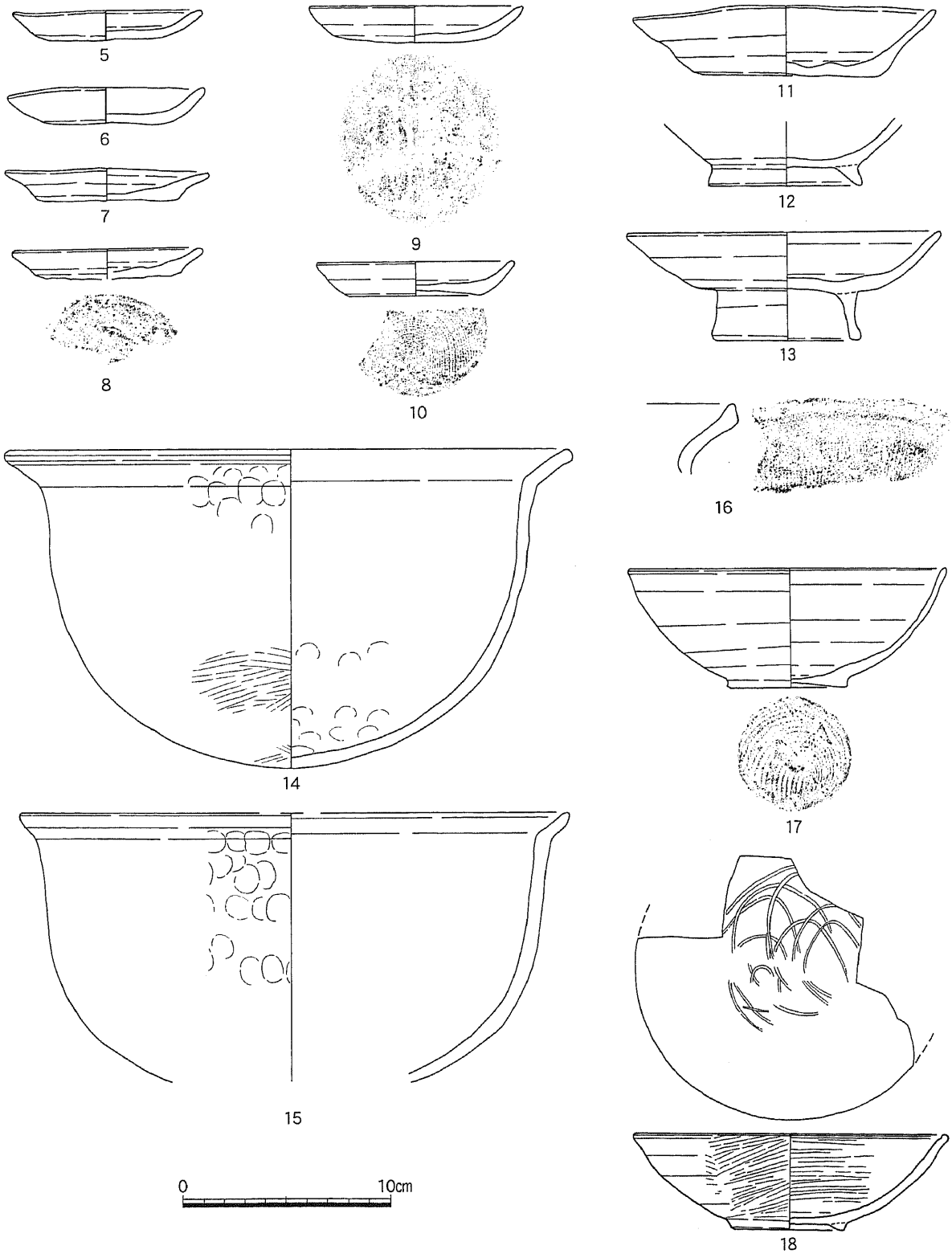


図45　北面回廊下層出土遺物（1/3）

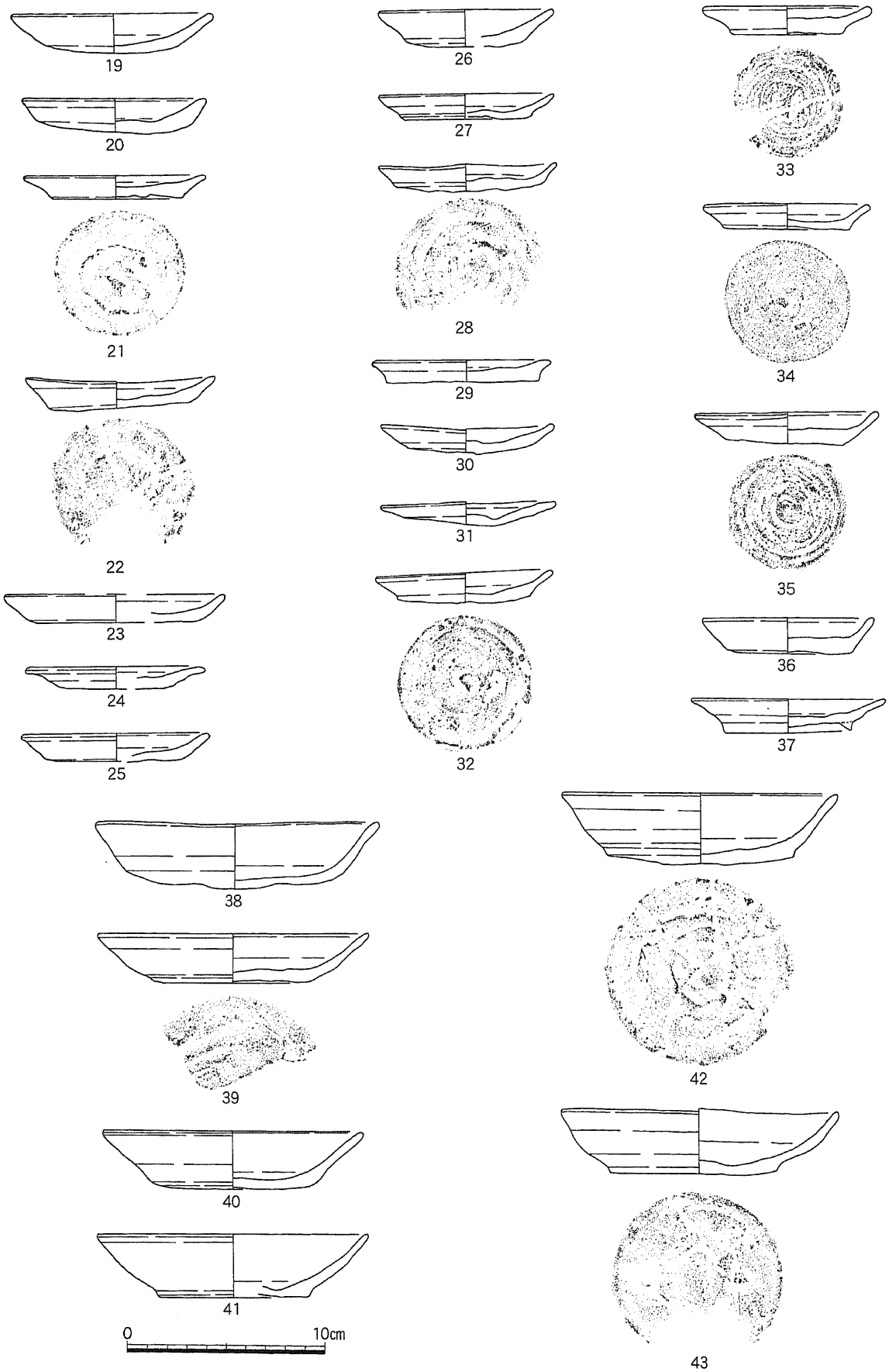


図46　北面回廊上層出土遺物（１）（1/3）

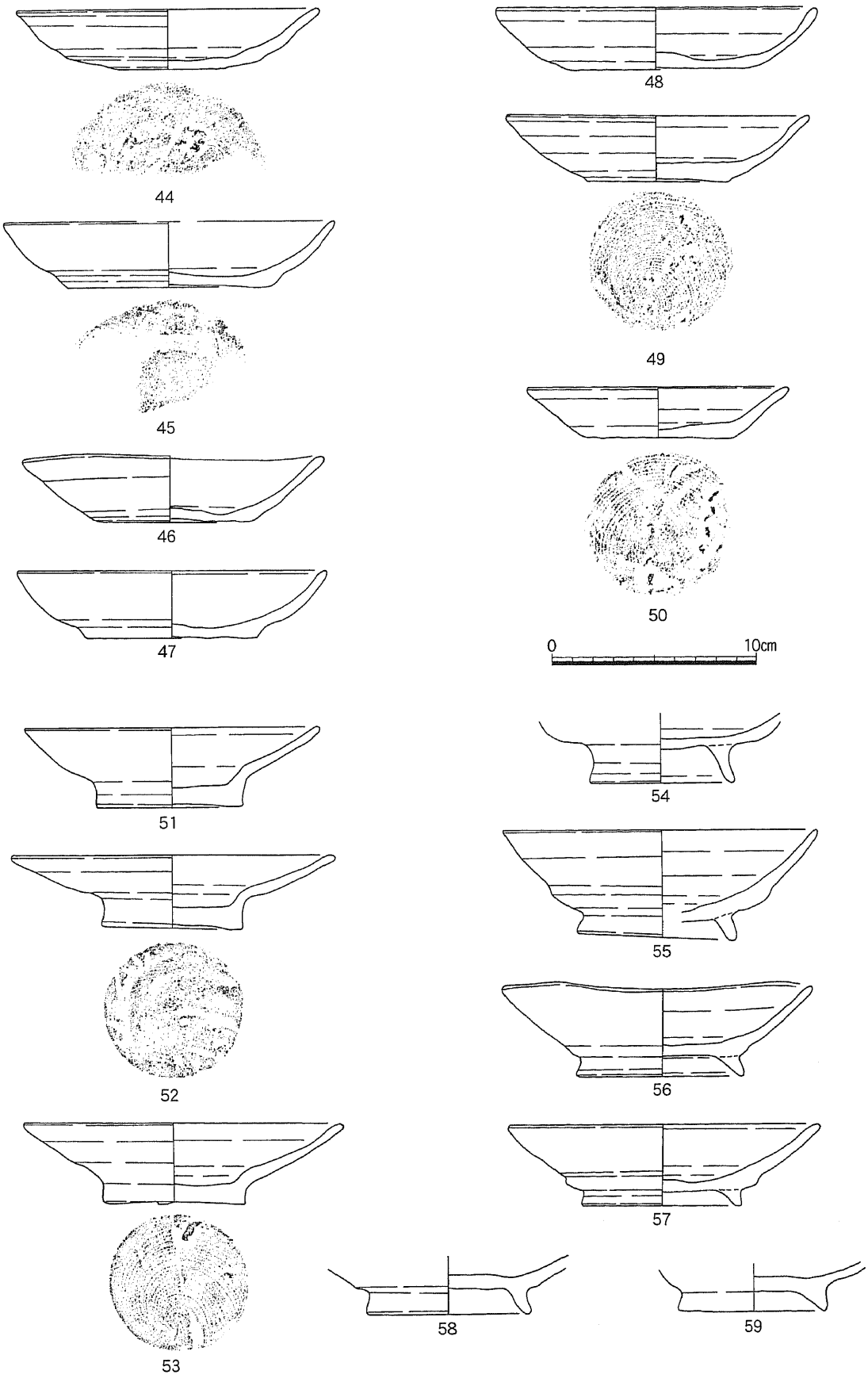


図47　北面回廊上層出土遺物（2）（1/3）

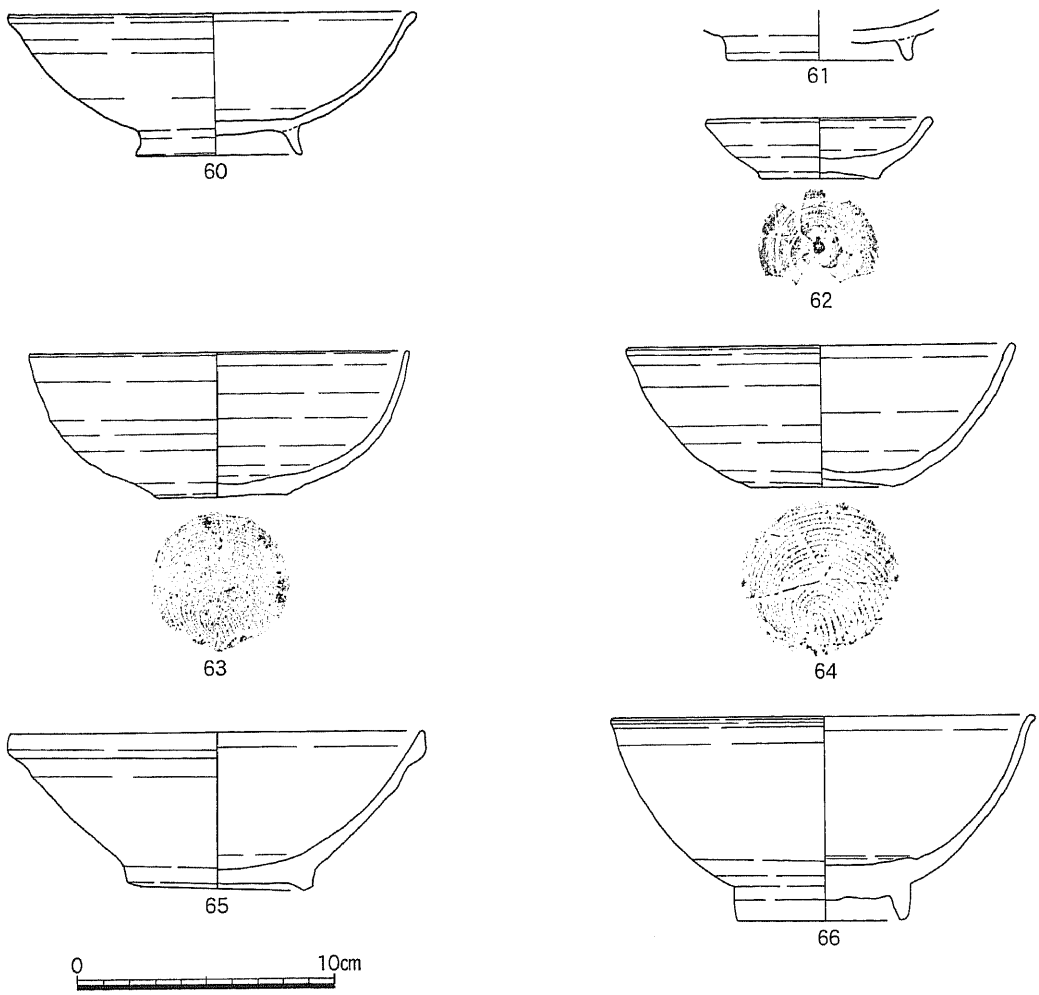


図48　北面回廊上層出土遺物（３）（1/3）

は口径15.0cm・器高5.6cmをはかる。これらの須恵質土器は12世紀後半の所産と考えられる。

白磁の椀（65・66）は、ほぼ完形品である。65は口縁が玉縁状で、高台は削り出しが浅く低い逆台形を呈する。椀Ⅳ類に該当する。口径は15.9cm、器高は6.3cmである。66は口縁端部が外反し、内面見込みに沈線がめぐる。高台は深く掘られており、外面は直線的で内面は斜めに削られている。口径は16.3cm、器高8.0cmをはかる。椀Ｖ類に該当する。いずれも、底部外面が露胎である。時期は11世紀後半～12世紀である。

図49は雨落ち溝４から出土した土器で、土師器の皿（67～73）、土師器の杯Ａ（74～77）、土師器の椀（78）、瓦器椀（79）からなる。

皿の法量は、口径8.5～10.1cm・器高1.2～1.9cmの範囲におさまる。67・68は底部調整が指頭押圧によるもので、淡褐色を呈し器形は丸味帯びる。69～73までは底部ヘラ切りで、73は明瞭に底部中心までヘラ切りの痕跡が残る。

杯Ａ（74）は口径13.6cm・器高4.0cmをはかり、底部はヘラ切り後、ナデ調整をおこなっている。75は口径14.8cm・器高2.7cmで淡褐色を呈し、底部は指頭押圧による。76は口径15.0cm・器高2.7cmで、ヘラ切り後板目の圧痕がみられる。77は口径13.7cm・器高2.9cmである。78は高台をもち、器高5.2cmをはかり、底部は糸切り後ナデ調整されている。

図50は北面回廊西側の基壇南側斜面から出土した土師器で、落下した瓦の下面からの出土である。皿（80）は口径9.3cm、器高1.1cmとかなり浅いもので、底部は外周ヘラ切りである。81・82は底部のみの出土であるが、杯Ｂであろうかと考えられる。杯（83）は底部糸切りである。84は大型器種の口縁部で、外面にススが付着する。

これらの土器は主に12世紀中頃～後半に属すと考えられ、北面回廊の焼失時期を示している。

鉄製品（図51・52、図版52-１）

図51・52は、北面回廊西側から出土した鉄製品である。

備前国分寺跡から出土した鉄製品は大半が鉄釘で、その他には釘隠しや飾り金具等が出土している。

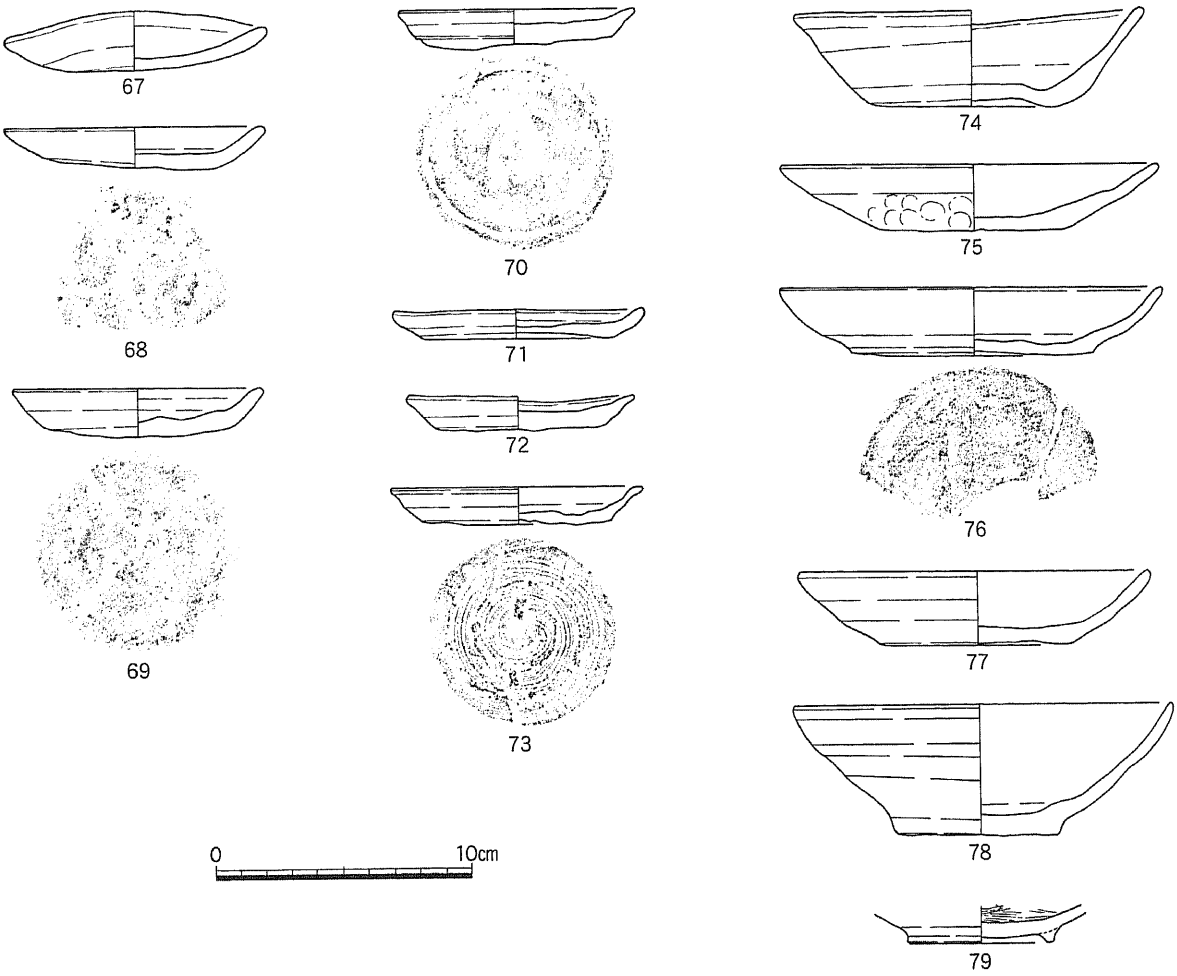


図49　雨落ち溝４出土遺物（1/3）

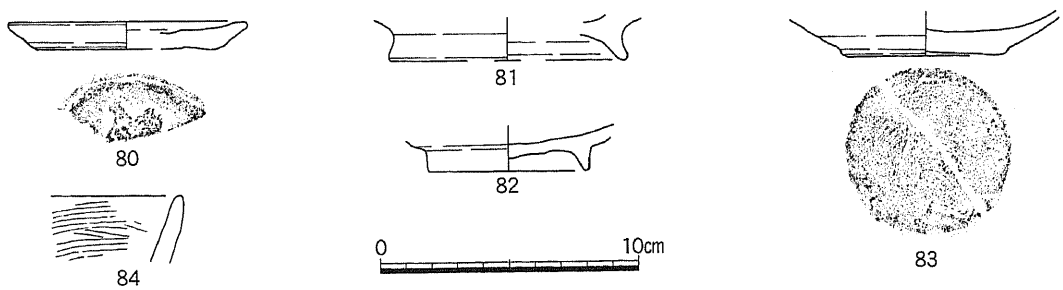


図50　北面回廊南側基壇斜面出土遺物（1/3）

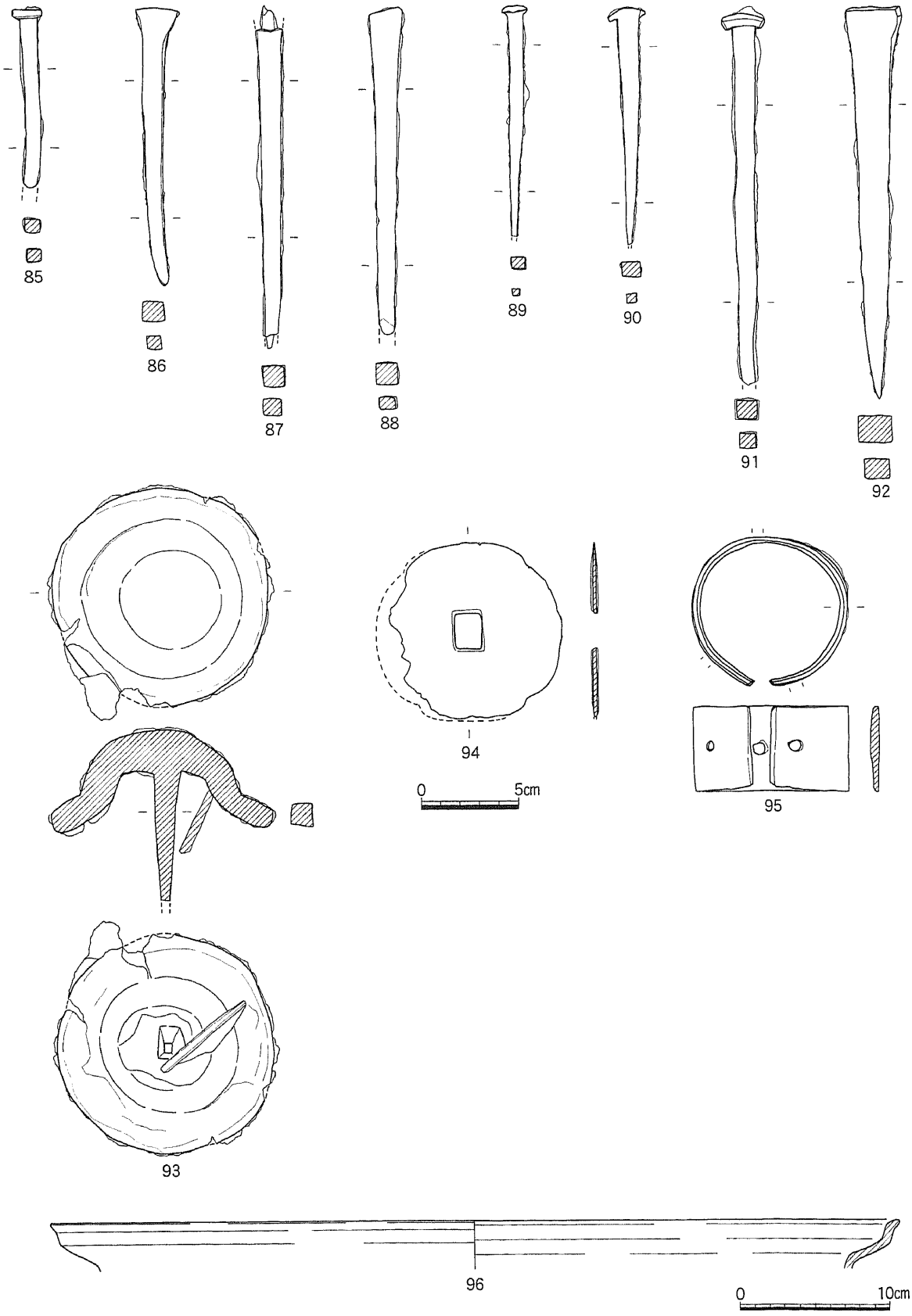


図51　鉄製品（１）（1/3・1/4）

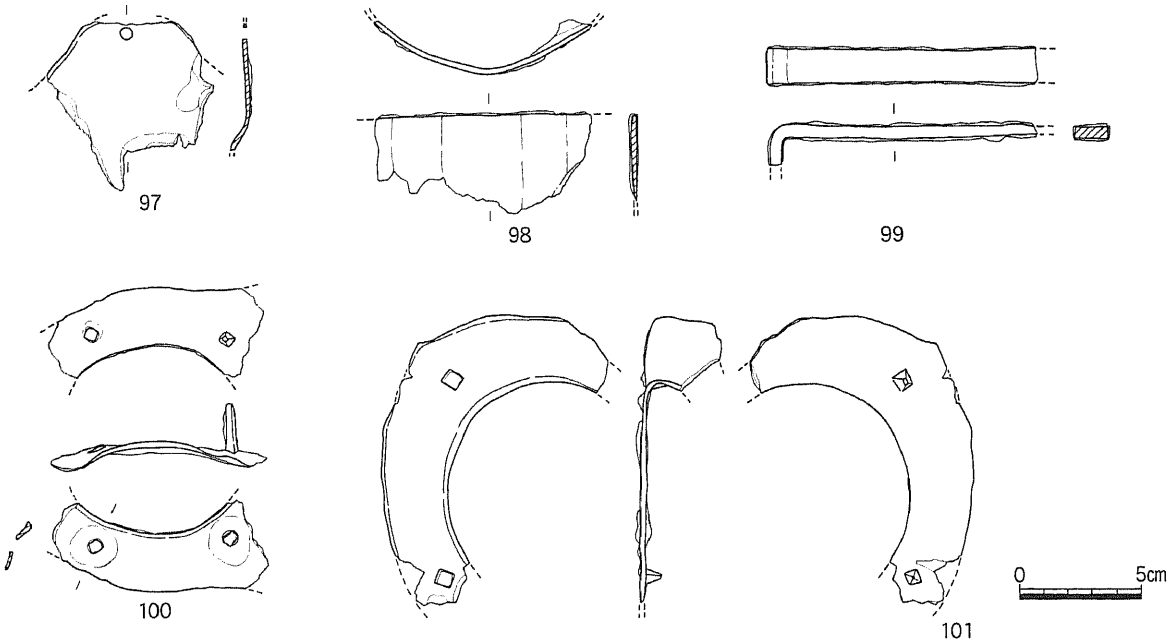


図52　鉄製品（２）（1/3）

鉄釘についてはどの調査区からも出土したが、遺構の遺存状況が最も良好であった北面回廊西側で最多の出土数がある。また、その他の鉄製品についてもこの北面回廊西側でのみ出土している。鉄製品の全体について概観しながら記載する。

鉄釘については全調査区から総計226本が出土したが、完形のものは少なく、状態が良好で完形品もしくは完形に近いものを実測対象とした。各調査区の出土数は、金堂40本（18％）、講堂51本（22％）、南門・中門22本（10％）、塔８本（３％）、僧房13本（６％）、北面回廊西側83本（37％）、他９本（４％）である。北面回廊西側では鉄釘の大部分が焼土層中からの出土である。

鉄釘の85～88は雨落ち溝４から、89～92は回廊上面から出土した。全長は86が14.2cm、89が11.8cm、90が12.1cm、92が19.9cmをはかる。全長については、完存する例が少なく、全体の傾向はつかみ難い。長さ７cm、12cm、15cm、20cm程度のものが多くみられる。頭部の形態については、90や91のようなＴ字形、86や92のような逆台形が確認される。

93は平面円形、断面円弧状で、裏側中央に釘がつく。すなわち、半円球とその端部を外側に開いた形状を呈し、鋲と呼んでもよいかもしれない。直径11.3cmで、釘を含めた残存高は8.8cmをはかる。内側に銅板102の破片とみられる銅板が付着している。形状から釘隠し（唄金具）と思われる。

94は中央に1.8×1.3cmの方孔をもつ板状製品である。方孔には釘頭がおさまるものと推測される。長さ9.9cm、最大厚0.4cmで、明確でないが花弁状に４ヶ所の屈曲をもっており、座金と考えられる。

95は直径7.6～7.9cm、幅4.3cmのリング状の鉄製品である。全周せず0.9～1.1cmの間隔があいている。また、三方に径0.6cmの円孔が設けられている。建築部材を覆う飾り金具であろうかと考えられる。

96は鉄鍋の口縁部である。頸部でくの字状に屈曲し、外側に開き、さらに上方に向かってのびる。口縁端部は若干外反する。口径は57cmと復元される。

97は破損が激しく、二次的に変形しているが、鉄製の風招とみられる。残存長6.7cm、残存幅5.7cm、最大厚0.2cmをはかり、中央上部に直径0.5cmの円孔が認められる。

98は厚さ0.2cmの板状製品で円弧状に屈曲する。鎹状の形態を呈する99は残存長11.8cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmをはかるが、破損しており全形を把握することができない。

100・101は釘をともなう、円弧状をなす鉄製品である。二次的に変形しており、破損が激しい。100は長さ2.0cm以上の釘１本が遺存し、心々距離で5.5cmはなれて釘孔がもう一個みられる。釘の頭部上面は0.6×0.4cmの長方形である。また、残存長8.7cm・幅2.4cm・厚さ0.2cmで、内径は4.1cmと復元される。101は残存長11.5cm・最大幅3.6cm・厚さ0.2cmで、変形がひどく正確には言い難いが、内径4.4cmと復元できる。釘は100のものより短く長さ0.9cmで、四角錐に近い形状をとる。頭部上面は0.6cm四方の正方形で、２本の釘の心々距離は8.0cmをはかる。

95・96・98・100・101は北面回廊礎石41周辺からまとまって出土した鉄製品である。鉄鍋（96）を除いて、93～95および97～101は堂宇に用いられた各種の建築金物等とみられる。

銅板（図53･54、図版６-２）

102は北面回廊が講堂に接続する位置の近く礎石45の北西、炉２の上方にあたる位置から出土した銅板である。平安時代末の火災による炭・焼土層上部からの出土である。最大の破片は長さ36.5cm、重さ約６kgを測り、長さ15～25cmの破片数点がこれに重なり、さらにやや小さい破片が周囲に所在する状態で出土した。検出位置の西側に土層観察の土手があり付近全体を完掘したわけではないが、破片の散布範囲はおおむね調査範囲に収まっている。図示した以外に接合できない破片がある程度の

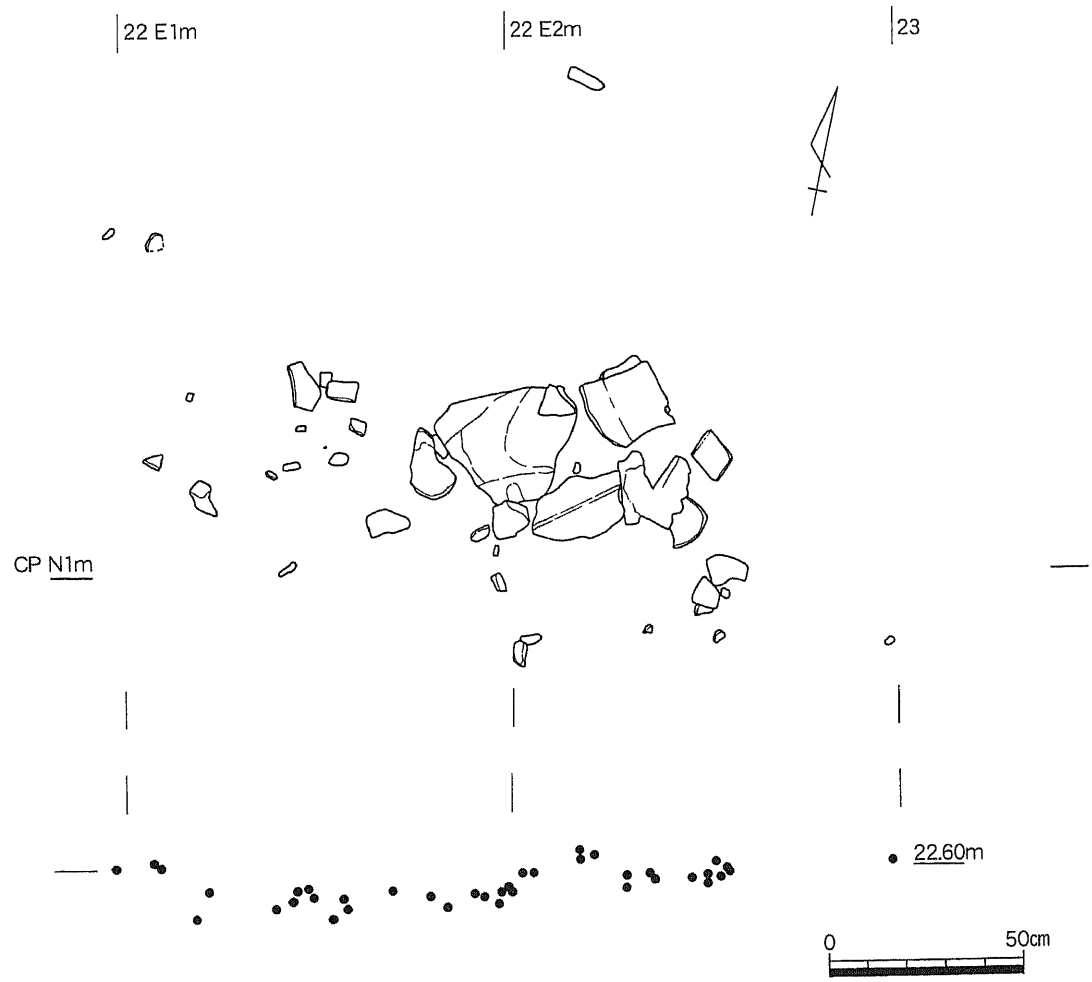


図53　銅板出土状況図（1/20）

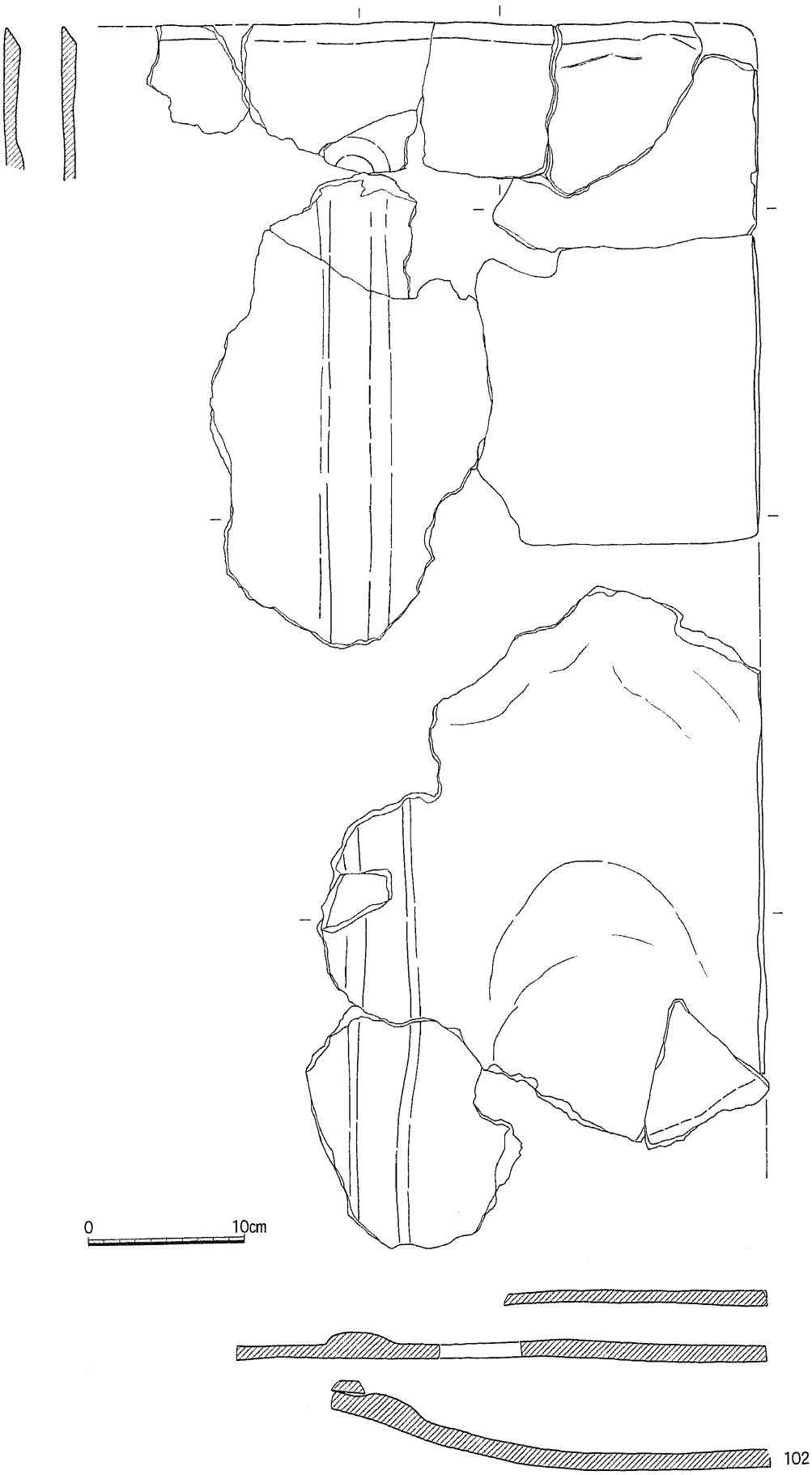


図54　銅板（1/4）

数ありすべての破片が埋没していなかったとみられることや、長さ１cm以下の微細な破片が周囲2.3mの範囲に散在していること、さらに、別地点から同一個体の可能性のある破片が出土していることなどから、火災時にこの位置で破損・埋没したのではなく、焼亡後の片付け時に焼土ごとやや離れた位置から運ばれて埋められた可能性が強い。

破片は火災の熱によって変形しており、復元はできるが接合はむずかしい状態にある。

銅板は幅40cm以上、長さ80cm以上の大きさで、長方形をなす可能性が強い。基部幅4.5cm、高さ７mmで蒲鉾形の断面をなす突帯が設けられており、短辺近くで丸くおさめている。この突帯が中央になるとすれば復元幅は54cmとなる。表面には突帯以外に装飾は認められない。線彫等の可能性を考えX線撮影も行ったが、文様は確認できなかった。

端部のうち短辺は断面が鋭角をなし、長辺では直角の断面である。短辺付近での厚さが７mmであるのに対し、図54下側部分では11mmと厚さは一定ではない。これは意図的なものではなく、大形品鋳造の技術が高くなかったことによるのではないかと思われる。

銅製品としては有数の大きさであるが、用途・器種を明らかにしがたい。仏像の台座に使用された可能性を考えている。

北面回廊の復元（図35）

回廊は、講堂基壇端から第一列目の礎石までの距離は４尺（1.19m）、柱間は、桁行10尺（2.97m）、梁行９尺（2.67m）、軒の出６尺（1.78m）と復元できる。なお、北面回廊の桁行は東西各５間あるが、10尺の柱間が３間、その先のコーナー部２間分は９尺となり、中門へ向かって南へ折れる。

北面回廊は講堂とともに12世紀半ば～後半に火災に遭い、倒壊している。基壇上に堆積する焼土層や基壇の南側斜面に落下した屋根瓦の状況が、それを明瞭に示している。

さらに、前述のように基壇上からは倒壊以前の一括性の高い土器群がまとまって出土し、平安時代末の良好な土器様相をうかがうことができる。器種は、主に土師器の杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿、須恵質土器椀・皿、吉備系土師質土器椀、黒色土器椀、白磁椀で構成される。この時期の集落跡においては吉備系土師質土器椀の出土が顕著であるが、備前国分寺跡ではその割合は低く、高台が付く土師器の杯Ｂの出土割合が比較的高い。白磁椀は11世紀後半～12世紀を通して認められる型式である。また、須恵質土器はいわゆる初期の備前焼と考えられるもので、12世紀中頃から後半に属する。

そして、倒壊以前には炉が検出されたことからもわかるように、基壇上で鍛冶が行われていた。北面回廊は平安時代末の焼亡後、再建されることはなかった。

３．再建講堂

再建講堂は、北東部の一段高くなった範囲で検出している。なお、T-1が昭和49年度に調査されたトレンチである。このとき確認し、講堂礎石としている礎石32・35の位置は、再建講堂の柱間に伴うものである。

礎石上面は基壇上面から30cmの高さがあり、礎石が高く据えられたか基壇上面がある程度削られたかのいずれかであろう。

また、T-1～3・5の土層断面より、講堂は鎌倉時代以降に再建されたのち16世紀後葉に廃絶するまでの間に、基壇端で１回ないし２回の改修が行われており、最終の基壇改修の際に礎石も据え直している可能性が強い（図27A-A' 28～30層）。創建講堂基壇の北辺をほぼ踏襲して縮小、再利用してお

り、北東隅部分、全体のおよそ1/4にあたる部分の遺構を検出していると推定している。

なお、この地点では先述のとおり、基壇上面に瓦を敷きつめて形成した暗渠状遺構が広がるため、T-2～7のようなトレンチを設定して調査した。

各時期の基壇の様相

再建講堂についてⅢ時期にわけ、各時期の遺構について述べることとする。

〈Ⅰ期〉

図27A-A'40～41層、図29C-C'22層、図30D-D'29～30層が、再建時の基壇端および雨落ち溝5である。T-1では創建講堂の雨落ち溝2埋土上に位置し、T-2では、創建講堂の雨落ち溝と重なる。雨落ち溝5は、幅1.4m、深さ15cm（底面高22.4m）の規模である。また、基壇北東隅は検出できなかったが、T-3東端のC-C'22層が基壇東側縁外の埋土に相当する。基壇東辺は、創建基壇を掘り込んで構築したと考えられるが、Ⅲ期の雨落ち溝6が重なることや、T-3の東側全体が後世の水田造成によって削平されていることから、再建当初創建講堂基壇とどのように併存していたのかは不明である。このように北辺は創建講堂の基壇端をほぼ利用する一方、東辺は大幅に縮小している。Ⅰ期以降の改修にあたっては、このときの講堂基壇がベースとなっており、この後大きな基壇規模の変更はない。

基壇外装、またその痕跡も認められない。創建講堂の基壇外装は、廃絶までの間に失われたものと推測されるが、その後の再建に際しても同様に基壇外装は設けなかったと考えられる。基壇外装を設けなかったことが、この後の基壇改修へとつながったと推測される。

この時期の礎石の配置については不明である。

〈Ⅱ期〉

溝9（図27A-A'37～39層、図29C-C'20～21層、図30D-D'26～28層）を築いて基壇を掘り込み、基壇北辺を雨落ち溝5よりも南とし、T-5内で南へ折れ、東辺はⅠ期の基壇端を踏襲する。東辺の下がりは雨落ち溝5埋土上に掘り込まれる。ただしT-3内で東へと緩くカーブして張り出し、T-6へは続かない（図26）。規模は幅0.8～1mで、深さ15～20cm（底面高22.5m）で、途切れる箇所もあるが14～47cm大の大小さまざまな石からなる石列が設けられる。

この石列と溝の関係を、溝単体で一時期とみる場合と溝と石列を並存したものとする場合によって溝9の性格、時期も変わり、それによって以下のような性格であった可能性が考えられる。前者の場合は、雨落ち溝（①）で、後者の場合は、乱石積基壇の基底部（②）、あるいはⅢ期の盛土による基壇修復の際に行われた基礎地業（③）である。

①の場合、現状の礎石から大きくは動いていないと考えられる柱位置と溝9の距離が近いこと、また、部分的な検出ではあるが、蛇行する溝の形状に雨落ち溝としての機能上問題がある。

②の場合も①と同様に溝だけでなく石列も基壇北辺が曲線になり、基壇の形状上問題がある。また、1段目しか遺存していないのもおかしい。

したがって、可能性としては③が高いと考えられる。T-1･2･3の土層にみられるように、溝9埋土とは異なる土質の基壇修復盛土（図27A-A'33～36層、図29C-C'17～19層、図30D-D'25層）が石列直上を覆う。このような構造は、時期は異なるが、北面回廊東の南側基壇下がりの修復盛土でも認められる（図28B-B'27層）。また、基壇修復に伴うものであるならば、溝や石列が直線になる必要はない。基壇を掘削し、いわば暗渠状の遺構を基壇端に設けるその意図が不明であるが、これを可能性として指摘しておきたい。

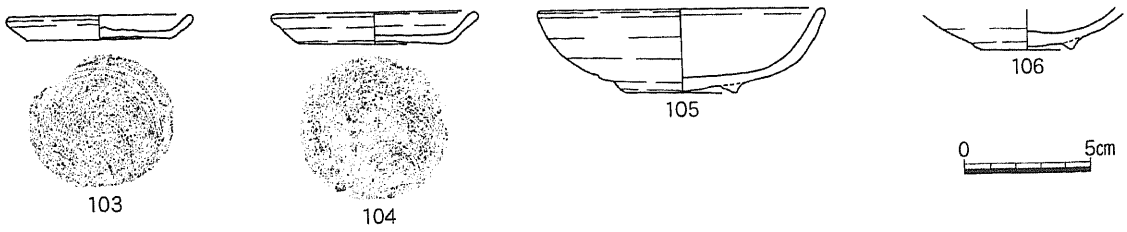


図55　再建講堂出土遺物（1/3）

①②であった場合は次のⅢ期の段階としたものを含むことになるが、③の場合は、基壇の改修は再建後この１回のみで、この際に礎石も据え直し（図27A-A’28～32層）、また、基壇修復の盛土後に東雨落ち溝をⅠ期よりも東で新たに掘削して構築したことになる（図29C-C’10～15層）。

〈Ⅲ期〉

Ⅱ期で規模を縮小した基壇を拡張するために、①の場合は雨落ち溝である溝９を石と土で埋め、盛土をする、②の場合は、遺存する基壇外装の石列上を盛土で被覆したことになる。そして、先述のとおり礎石の据え直しと東雨落ち溝の掘削をおこなったと考えられる。

礎石（図26）

礎石は、創建講堂の礎石を転用していると考えられる。礎石32～36・38が再建講堂の礎石である。礎石34は若干動かされていると考えられる。また、礎石37はすでに抜き取られ、礎石38は石垣の石へ転用され、溝16下で礎石抜き跡を検出している。

据え付け掘りかたは、基壇上面から最大で長径約2.5mの楕円形に掘りこみ、20～30cm大の根石と長軸1.1～1.2m、高さ約50cmの礎石を置き、基壇土がブロック状に混じる土で埋め戻している。埋土中には、瓦、土器、焼土、炭などが混じる。

なお、修復基壇盛土上面と礎石据え付け掘りかた埋土の上面（図27A-A’28・33層）は、礎石32上面とほぼ同じ高さである。この高さが、再建講堂最終段階の基壇面の位置と推定する。

出土土器（図55･56）

図55の土師器皿（103・104）、吉備系土師質土器椀（105・106）は再建講堂周辺から出土したもので、後者は14世紀代に属する。皿はいずれも底部糸切りによる。103は口径6.7cm・器高0.9cm、104は口径7.6cm・器高1.2cmである。

105は完形で、口径10.8cm・器高3.3cm。105・106は口径・器高ともに縮小が進んだ段階の14世紀前半に属す、吉備系土師質土器椀の終末段階のものである。

図56は講堂出土の中近世に属する土器で、包含層・瓦だまり等からの出土である。これらは再建された講堂の存続時期を示すと考えられる。備前焼（107～109）、土師器皿（110～112）、瓦質土器（113～115）、美濃焼（116）、唐津焼（117）、染付（118）からなる。

107は甕の口縁部、108・109は擂鉢で15世紀後半～16世紀初頭に属す。113は隅丸長方形の体部の四隅に脚が取り付く。脚外面には×が掘り込まれている。体部外面には把手がつき、丁寧なハケ調整が認められる。114は火鉢である。115は隅丸長方形の体部をもち、内面にはハケ調整がなされている。美濃焼116は折縁菊皿で16世紀末、唐津焼の皿117は17世紀初頭の所産である。118は明の染付で16世紀中葉～後葉に属すと考えられる。

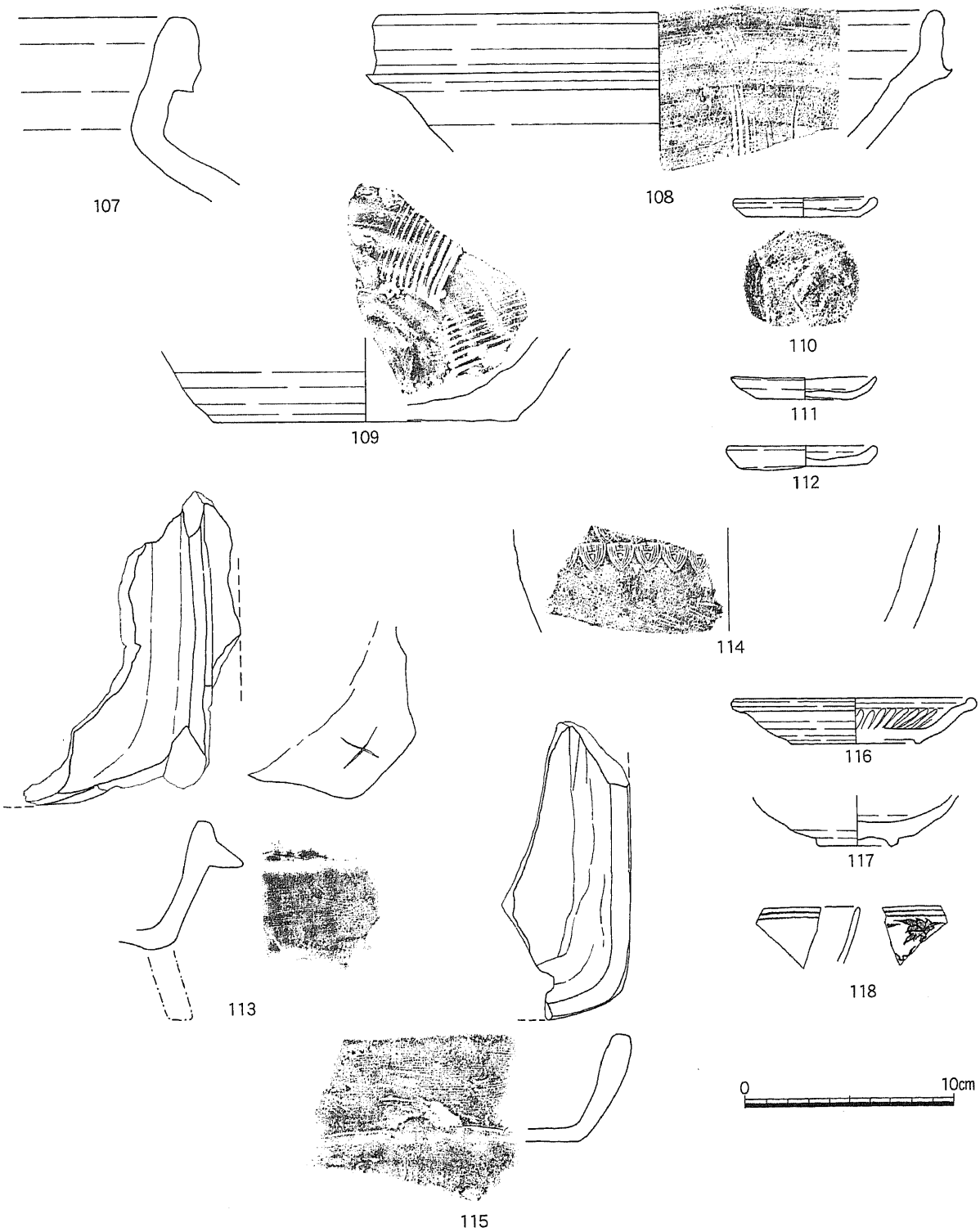


図56　講堂中世・近世遺物（1/3）

再建講堂の復元案（図57）

再建講堂の全体の１/４である北東隅のみの確認であること。再建後１～２回の改修が考えられるが、その過程が明確でないこと。検出している現状の礎石が最終段階の講堂の柱間を示すものであること。以上のような制約のため、最終段階の講堂の復元のみ試みた。

ただし、室町時代の寺院建築は、古代の寺院建築と異なり多様な形式が存在するため、遺構のみからの復元が困難であった。そこで、現在講堂上に建つ小堂が、備前国分寺の諸堂宇の中でも最後まで残る講堂の本尊の位置、つまり桁行の中央間をある程度反映している可能性を積極的に評価し、礎石32～38の柱間、基壇の出とを講堂復元の参考とした。

小堂が桁行中央間に位置するとなると桁行は５間となる。桁行中央間にあたる礎石35の南に礎石が存在しないことから、礎石35・36・38に囲まれる空間が本尊を安置した場所になると想定される。この場合、講堂の形式として古代の寺院建築と同様の身舎と廂をもつ形式と鎌倉時代以降に普及した内陣と外陣をもつ形式の２形式が考えられる。どちらであるのかは即断できないが、南にある礎石落とし込み穴（礎石30・31）の位置が再建講堂の礎石の位置とも関係がある可能性があるため、図57では後者で復元している。なお、いずれの場合にしても祠が梁行では北へ移動していることになる。

１尺＝0.297mとして復元すると、講堂規模は、前者の場合、桁行５間（10・11・11・11・10尺）×４間（10・11・11・10尺）、東西15.74m×南北12.47mとなり、後者の場合、内陣３間×２間、外陣５間×２間そして脇陣と後陣がある桁行５間（10・11・11・11・10尺）×梁行５間（10・11・11・10・10尺）、東西15.74m×南北15.44mとなる。また、基壇の出は８尺（2.38m）で、組物は出組あるいは二手先であったと考えられる。

したがって、基壇規模は、身舎－廂形式の場合、桁行69尺×梁行58尺、東西20.49m×南北17.23mとなり、内陣―外陣形式の場合、桁行69尺×梁行68尺、東西20.49m×南北20.20mとなる。

なお、雨落ち溝６はT-3で東へ張り出す。T-6で雨落ち溝が認められないことから、この張り出しは柱間１間分ではおさまらないものであったと考えられるが、詳細は不明である。

講堂は瓦の出土状況から、平安時代末に創建講堂が北面回廊とともに焼失した後、鎌倉時代前半に再建、復興され始めた様相が認められる。その後、中世を通して維持され、16世紀後葉に廃絶したとみられる。また、15世紀後半以前の瓦が小形であったものが、15世紀後半に大形で滑り止めをもつ瓦に変化しており、屋根全体の状況が変わったことがわかる（第４章第１・３節参照）。これらの屋根瓦の変化と遺構との関連性は明確に把握しがたいが、基壇は１回ないし２回の改修を受けており、また礎石の据え直しもなされており、再建後も改修を重ねながら建物が維持されたと考えられる。

出土した土器には14世紀前半の吉備系土師質土器椀をはじめ、15世紀後半～16世紀初頭の備前焼や16世紀中葉～後葉の明の染付があり、再建された講堂の存続時期を示している。

４．その他の時代の遺構

Ｐ５～９（掘立柱建物）（図26）

１～1.5m四方の隅丸方形の柱穴。深さは40cm。掘りかた埋土は、明黄褐色微砂質土で基壇土と類似する。またＰ－６・７・９には、黒褐色土あるいは灰黄褐色土の埋土をもつ柱抜き取り穴がある。５世紀後半とみられる土師器小片が出土している。

これらの掘りかたを同じくする柱穴は、創建講堂、再建講堂のいずれとも柱通りが合わない。基壇

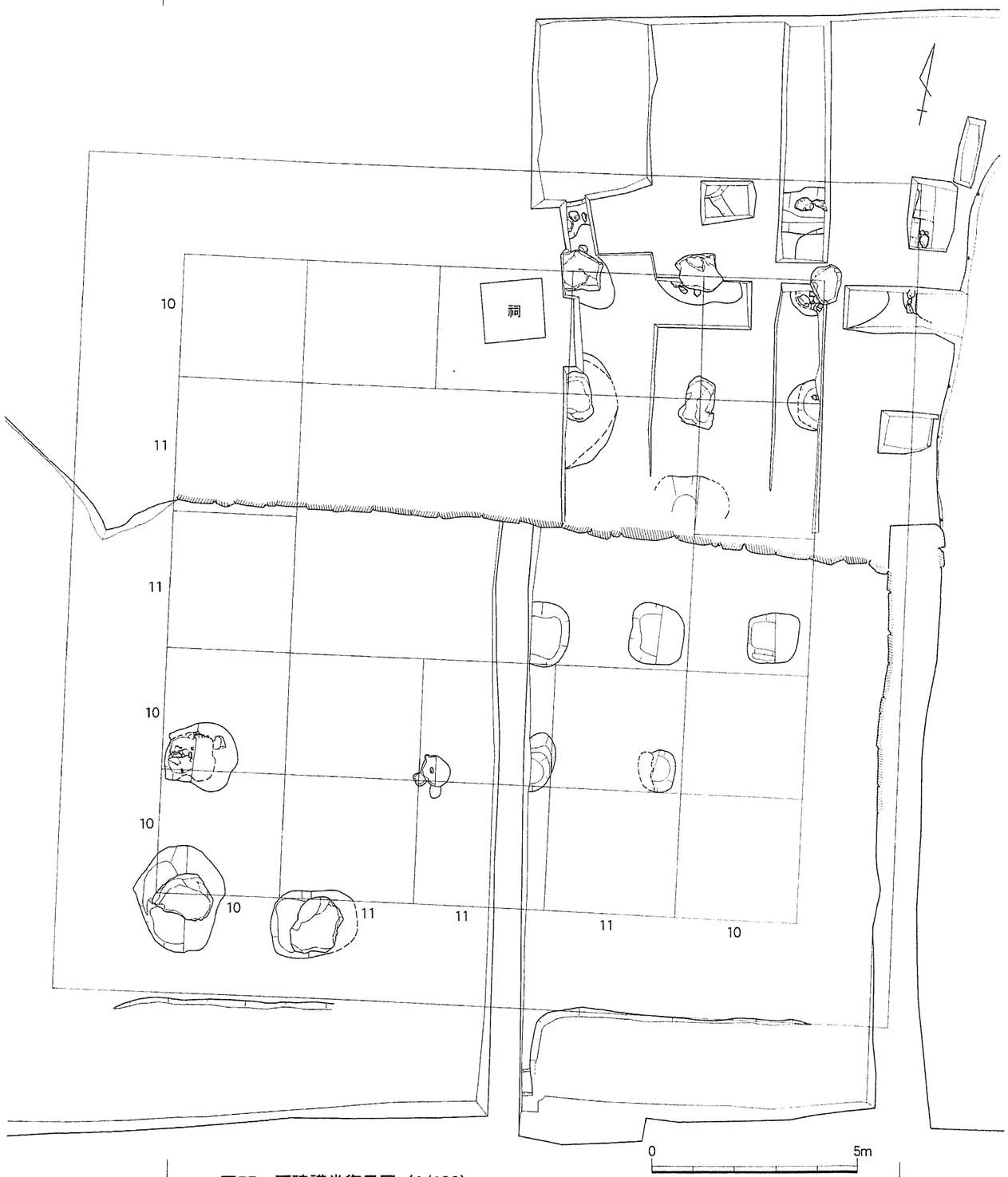


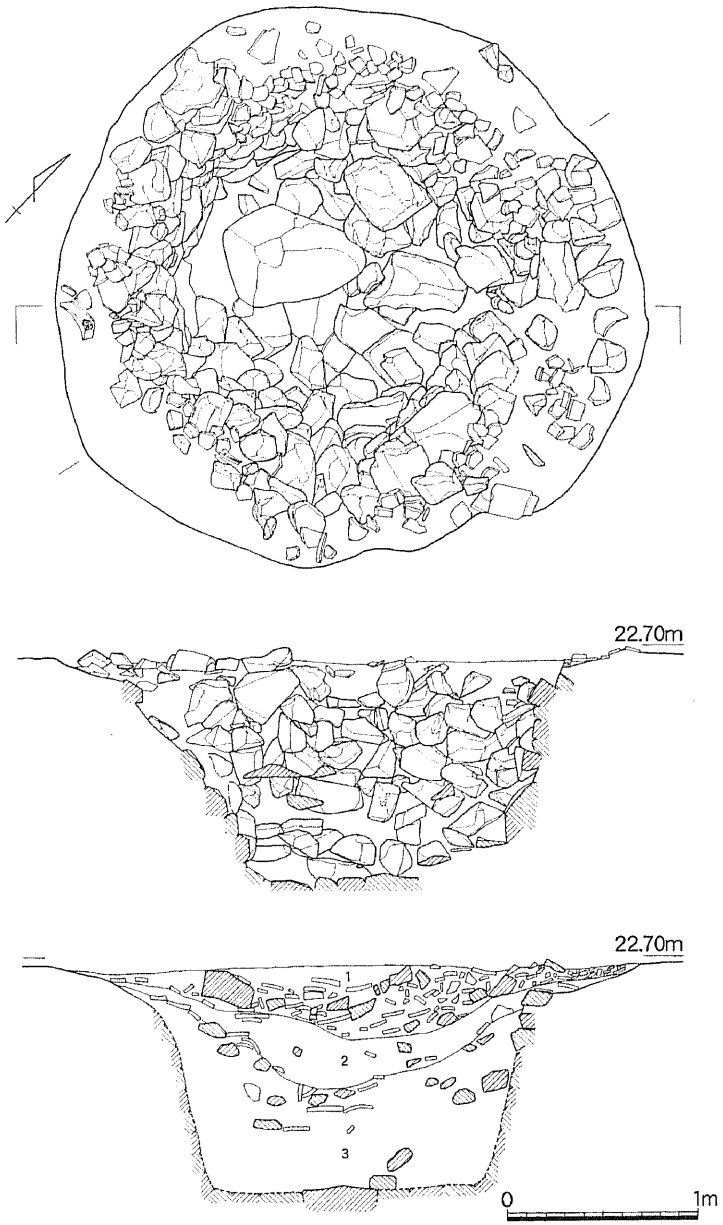
図57　再建講堂復元図（1/120）

土（図27A-A'44層）がＰ－８の掘りかた埋土（図27A-A'45層）を覆うこと。Ｐ－５・６・８が古墳時代の溝５、７を切って築かれていること。以上の点から創建講堂以前の柱穴と判断した。講堂建設以前に他の堂宇、例えば、金堂などを建設している最中に建てられた掘立柱建物である可能性がある。

井戸１（図26・58）

講堂西半、礎石18と21の間に築かれた井戸。径２ｍ、深さ1.2ｍの石組みの井戸である。掘りかたの径は３ｍで、掘りかた埋土中に大量の瓦片を含む。石組みは北半分では崩落が認められるが、南半分では良好に残る。石組みは、大小さまざまな石を用いて積まれている。石と石の間には隙間が認められ、丁寧に積んでいるとは言いがたいが、水平、垂直方向を意識して目地はそろえてある。

掘りかた内と同様に埋土中から大量の15世紀代の瓦片が出土しており、時期は近世以降であると考えられる。



1　明灰褐色粘土　　3　暗灰色粘土
2　黒灰色粘土

図58　井戸１（1/40）

５．その他の遺物

包含層出土土器（図59）

図59は主に包含層出土である。土師器（119～121・123・124・126～128・130～132・134）、瓦器椀（122）、吉備系土師質土器椀（125）、土師質土器（129）、須恵器（133）が出土している。

119は杯Ａで底部が厚く、口径13.5cm・器高3.2cmである。120は小型の杯であろうか。121は高台が付く椀で、口径11.2cm・器高4.4cmをはかる。123は底部糸切りの杯で、口径は10.8cmである。124は口径8.5cm・器高1.4cmの皿で、底部にはヘラ切り痕跡が残る。126・131は杯Ａ、128・130は杯Ｂである。127は甕で口縁部外面にタテハケ、内面にヨコハケがみられる。132も甕で、胴部上端にはハケ調整が施されている。134の杯Ａは口径15.4cmをはかる。

125は吉備系土師質土器椀であるが、底部のみの出土である。129は土師質の高台付きの椀であるが、吉備系土師質土器椀とは異質である。

須恵器133は内外面とも丁寧なナデ調整がみられ、下部内面に突帯がとりついている。水瓶の頸部であろうと思われる。

壁土（図60～62、図版53-２）

講堂と北面回廊からは、被熱した状態で壁土が出土している。

135～143はＴ４の北面回廊西側から出土した壁土である。主に平安時代末の焼土層から出土しており、被熱し赤色化している。135～138は表面に白色土が残る。また、135・136・139～142には建築

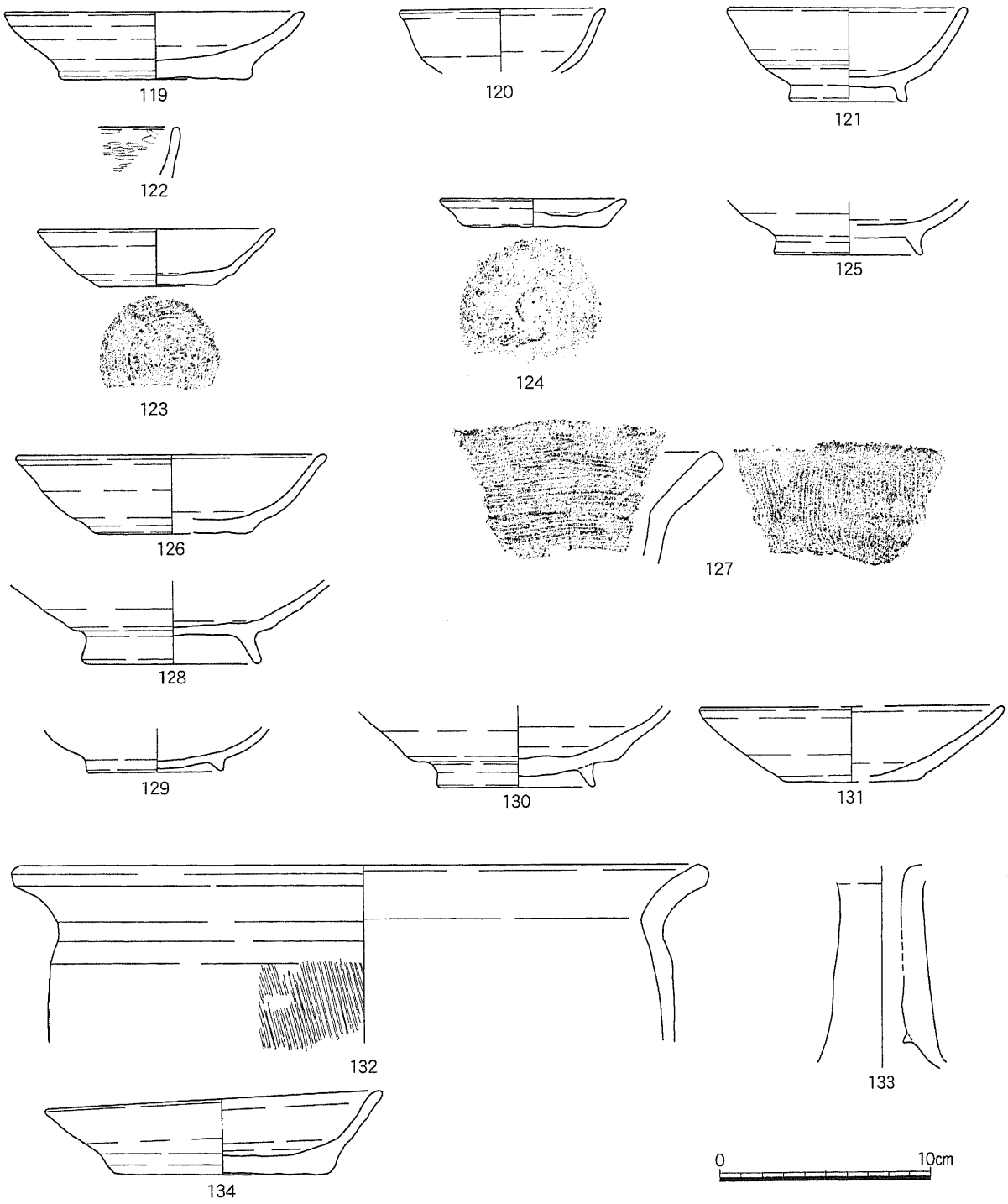


図59　講堂包含層出土遺物（1/3）

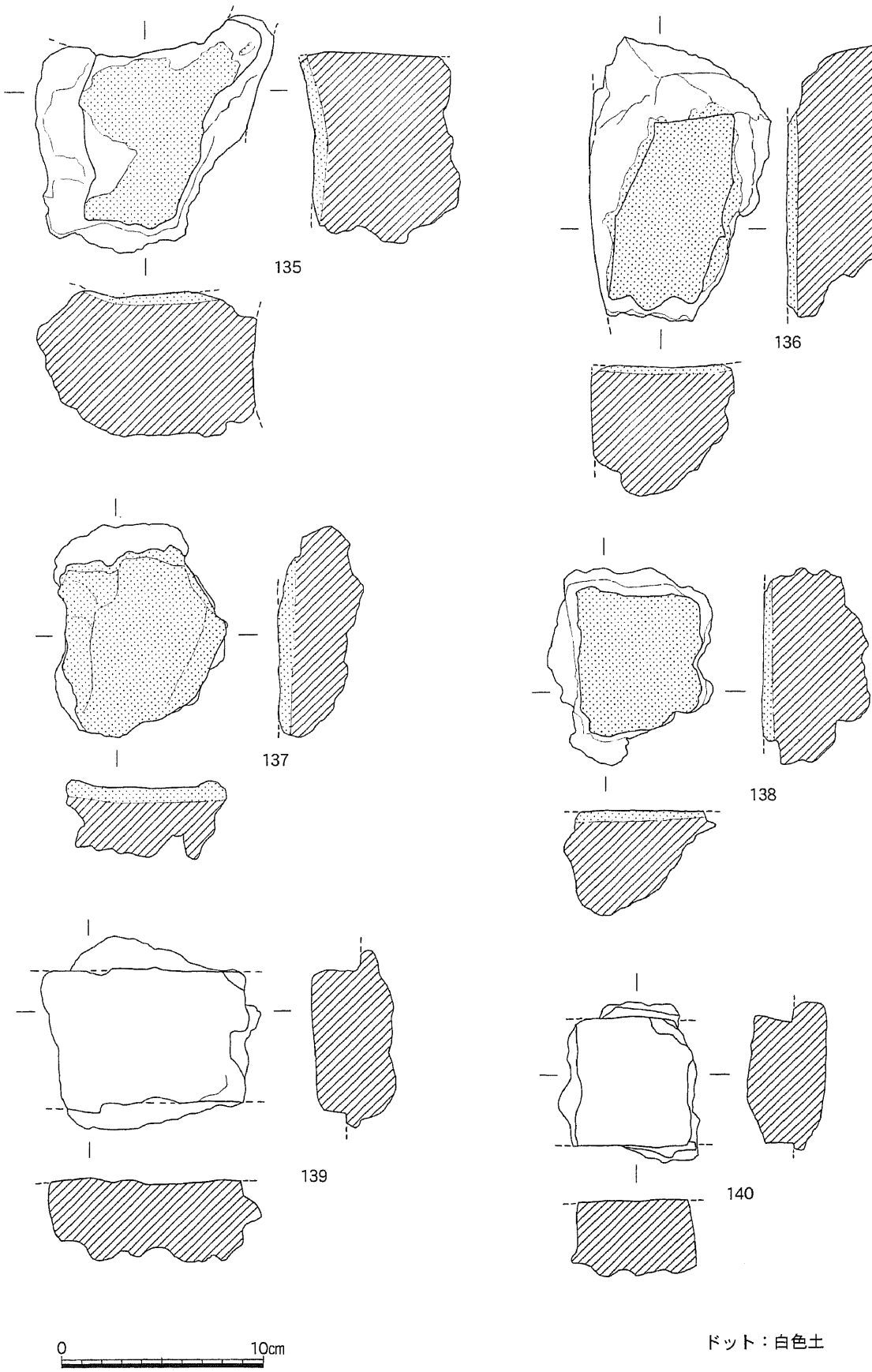


図60　壁土（1）（1/3）

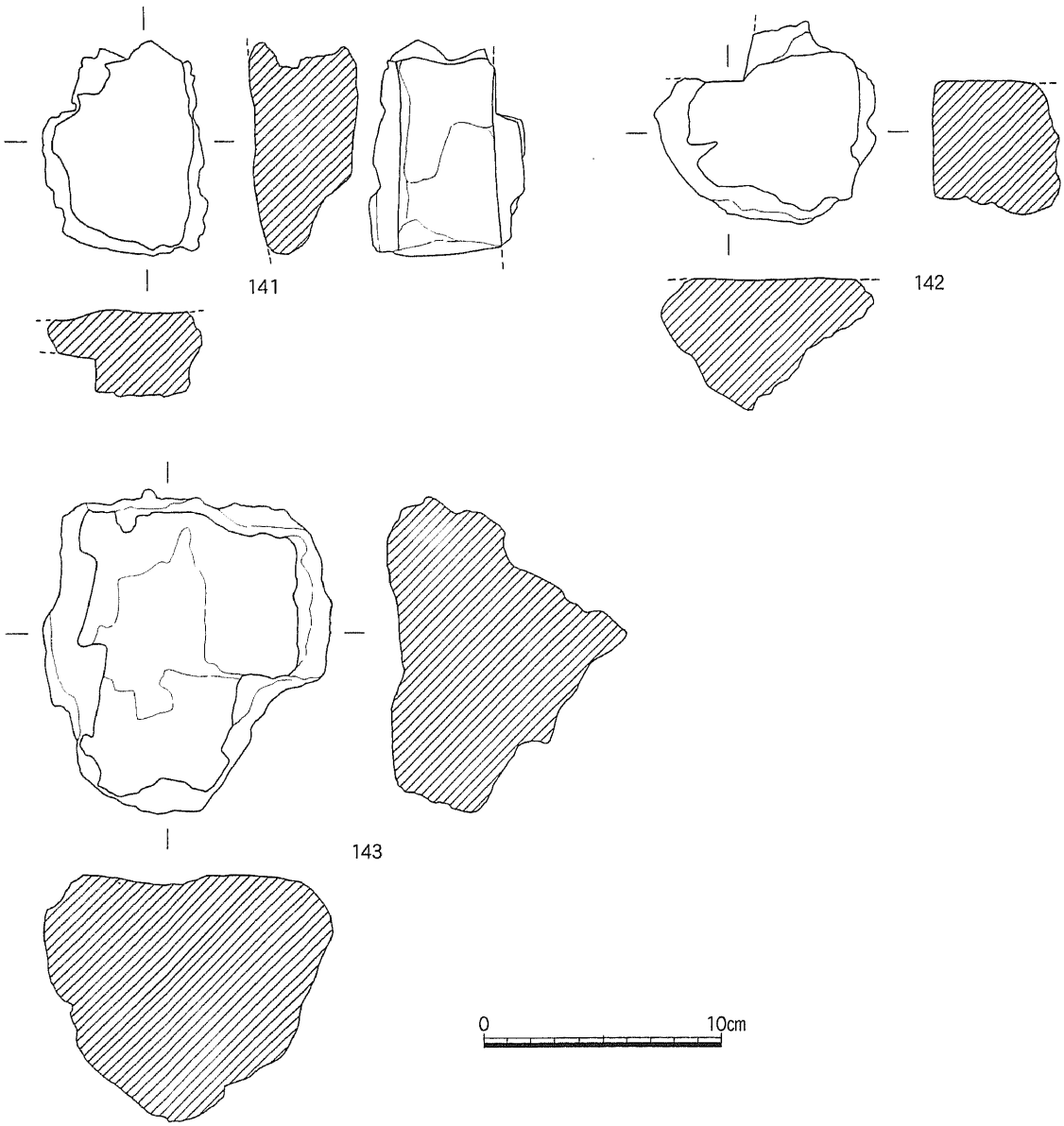


図61　壁土（２）（1/3）

部材や木舞と推定される角材の痕跡が認められる。建物の壁の構造をうかがうには良好な資料である。粘土には基本的に１cm大の礫やさらに小さな礫が混ぜられているが、中には2.5cmの大きめの礫も見受けられ、瓦片を含むものもある。

135は二面で丸太材が接しており、白色土が５～７㎜の厚さで塗られている。136は一方の側面が平滑で、壁面には白色土が塗られる。137・138にはいずれも５～７㎜の厚さで白色土が残る。

139・140は片面の両端に段差をもち、角材がそこに接していたものと考えられる。角材痕の間隔は6.5～7.0cmである。角材の方向と裏面の筋状痕跡は直交している。141についても片側に木材痕が明瞭に残る。

142も角材が接したと思われる痕跡が認められる。143は厚さが最大で10.3cmに及ぶ。

144～147は講堂北東部、再建講堂の礎石を検出した周辺から出土した壁土で、135～143とは時期が異なり、室町～戦国時代の堂に用いられたものである。0.5～1.0cmの礫を粘土中に含む。

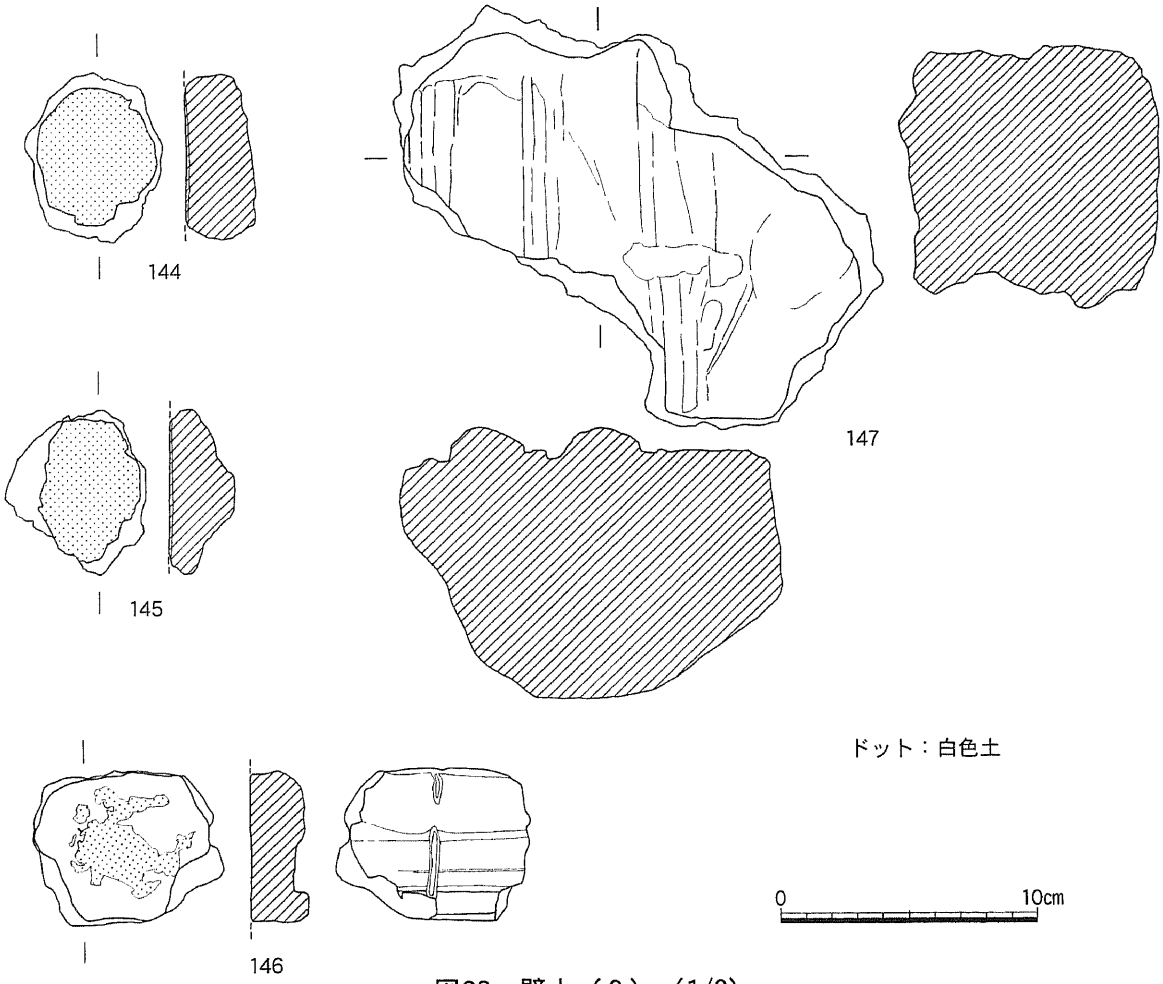


図62　壁土（３）（1/3）

144・145は約１㎜の厚さで白色土が塗られている。また、146についても白色土が薄く残存する。白色土が塗布された面の裏面に、幅2.0cmの木材が接していた痕跡が確認できる。

147は最大厚10.8cmで、同方向に数条の筋が入っている。

壁土表面の白色塗装の状況については、北面回廊西側から出土した奈良・平安期の壁土には５～７㎜の厚さで白色土が認められる。それに対し、講堂北東部から出土したものには１㎜の薄さで塗られている。講堂北東部出土のものは再建講堂に伴う壁土であり、この段階の建物には薄く白色土を塗布したことがわかる。兵庫県上郡町の古代山陽道野磨駅家跡と考えられている落地遺跡飯坂地区から出土した壁土においては、約４～５㎜の厚さで白色土が認められることから（小田ほか2006）、北面回廊出土の厚みのある白色土の塗布はより古い様相を呈していると思われる。白色土についての自然科学分析は付載において行っているので参照されたい。

また、木舞に用いられた材について触れておきたい。壁の下地には後世にみられるような竹を用いず、粘土にみられる喰い込みから角の張った木材を使用していることを明瞭に認めることができる。使用された木材自体の幅等ははっきりしないが、木材どうしの間隔は6.5～7.0cmであったと考えられる。以上のことから、壁には角材を組んで下地としていたようである。このように木舞材料に木材を使用している例は古く法隆寺や京都府平川廃寺で確認されている（山田1981）。

（３）回廊［Ｔ５・６］

現況と遺存状況（図63･64）

昭和49年度は寺域主軸の南北方向トレンチの調査が主体であったので、回廊の構造・配置等は把握できていなかった。しかし、前項で述べたとおり今回の調査において回廊が中門に派生し講堂に取り付く構造であることが判明した。

調査区設定の都合上、北面・南面回廊についてはそれらが取り付く講堂および中門の項でふれているのであわせて参照を願う。ここでは、東西面回廊の規模・構造等、そして配置を確認するために設定したＴ５・Ｔ６のトレンチ調査について概要を述べる。

Ｔ５は西面回廊の所在が想定される位置に、長さ28m・幅３mで設定した。Ｔ６はＴ５の東延長線で、東面回廊の所在が想定される位置に、長さ20m・幅３mで設けた。西面回廊が所在した場所の現

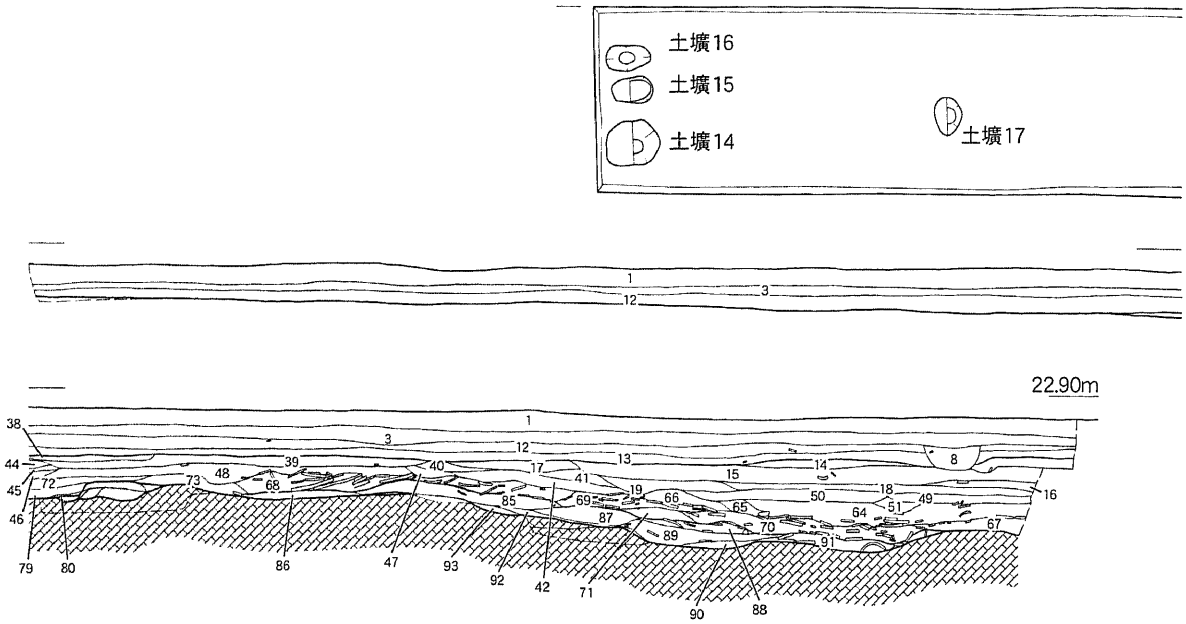
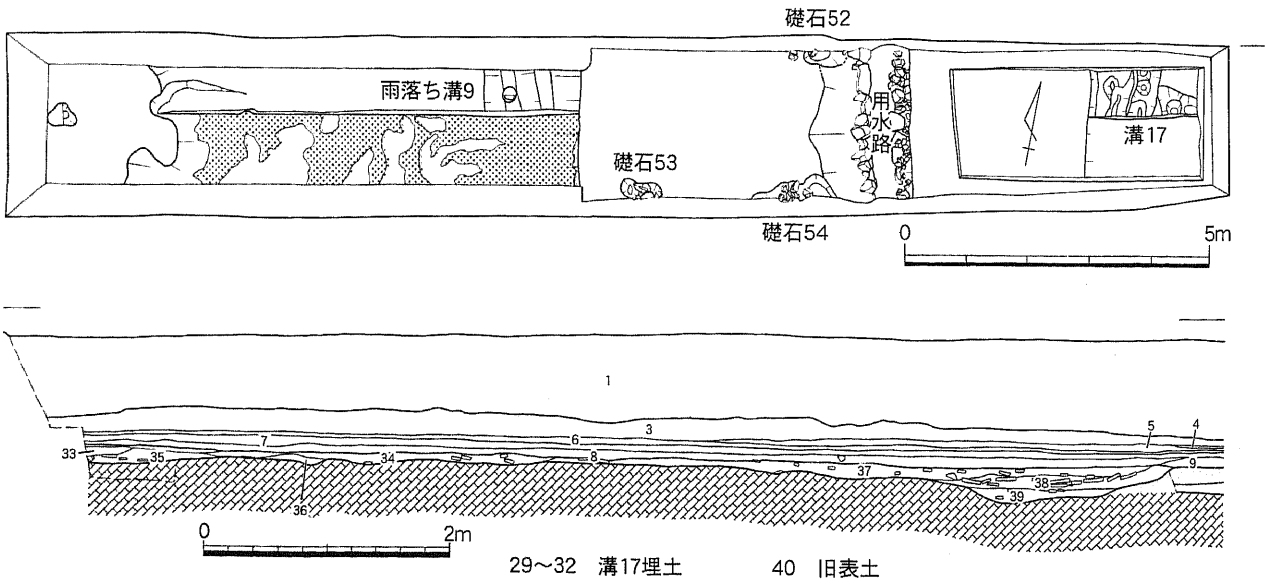


図63　Ｔ５（1/120・1/60）



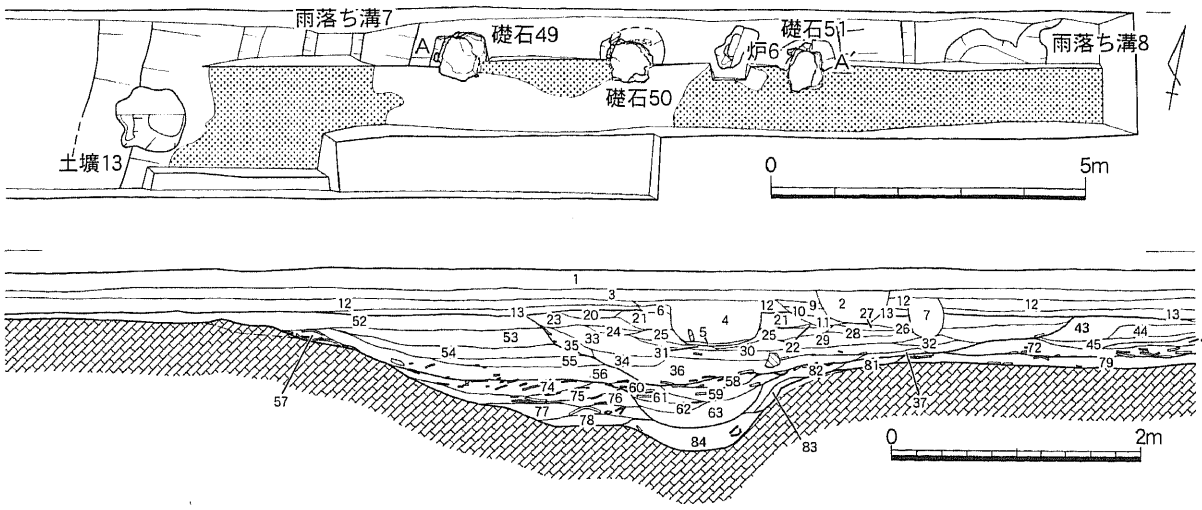
29～32　溝17埋土　　40　旧表土
38～39　雨落ち溝9埋土

図64　Ｔ６（1/120・1/60）

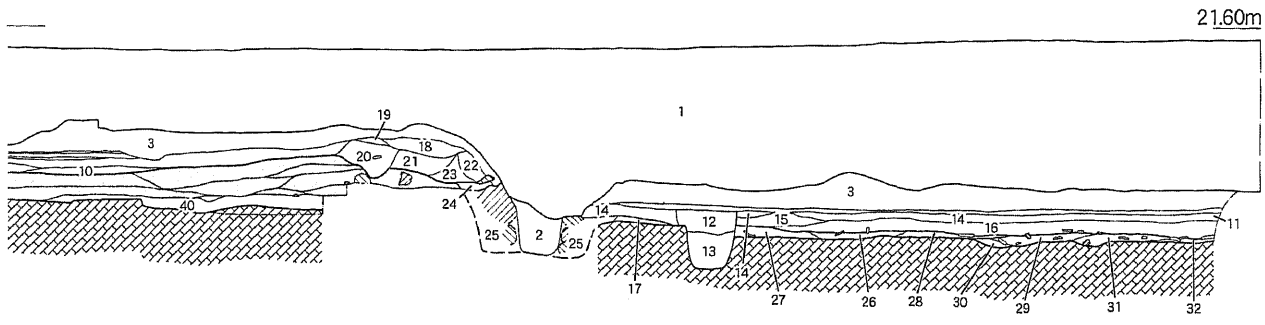
況は、水田が棚田状につくられ、全体として傾斜地となっている。また、東面回廊側は後世に大きく造成されており、北方で農道が設けられ、中央では盛土造成がなされている。Ｔ５・６の設定地点は、回廊南北の棟通りでは中央やや南に位置する。

遺存状況については、Ｔ５で検出した西面回廊は基壇上面東端がやや流出しているが、講堂西に接続する北面回廊と同様にかなり良好で、複廊式の礎石すべてが原位置で残存していた。また、基壇盛土の一部も遺存しており、回廊基壇の両端に沿って雨落ち溝が設けられている。そして、雨落ち溝および基壇上には瓦だまりが形成されている。礎石50と51の間に北面回廊の炉１～５と同様に炉６が築かれている。

一方、Ｔ６における東面回廊は後世の撹乱・削平がひどく礎石は抜き取られており、根石と浅い雨落ち溝を検出した。



20～37　雨落ち溝7上層埋土　　74～78　雨落ち溝7下層埋土
53～63　雨落ち溝7中層埋土　　82～84　雨落ち溝7下層埋土
70～71　雨落ち溝8上層埋土　　88～91　雨落ち溝8下層埋土



基本層序（図63･64）

Ｔ５は厚さ約35～50cmの水田耕作土や床土、旧耕作土等を除去すると、トレンチ西端から東へ11ｍの間には明黄褐色の地山が検出される。これは雨落ち溝７より西側、すなわち回廊外の基盤面である。

雨落ち溝７の上部には、旧水田に伴う南北方向の暗渠が３本掘られており（図63　２・４・７層）、また雨落ち溝の堆積過程において最低２回は、凹みを利用した溝が機能していた状況がうかがえる。図63　20～37層は雨落ち溝７の堆積土を掘削して設けられた幅3.6ｍの溝である。基壇外周の雨落ち溝には瓦が堆積し、基壇上においても礎石の周辺に瓦だまりが形成されている。基壇上から雨落ち溝８にかけての瓦だまり上部には、砂の堆積が認められる（図63 43～51層）。

雨落ち溝は地山を掘削して設けられ、基壇は基本的にそれによって削出され構築されている。基壇中央と東部で、基壇盛土が残存する。

Ｔ６は西半で約70cm、東半で約1.2ｍの厚さの造成がなされている。これを取り除くと、旧水田層が現れる。旧水田はトレンチ西端から東へ14m付近のところで、石組みの用水路（南北方向）を境に二枚に分かれる。用水路より東側の旧水田層は標高約20.15～20.35m、西側の旧水田層が標高約20.6～20.8ｍをはかり、西側が約50cm高く、遺構の残りもややよい。そのため、雨落ち溝９より東から石組み用水路までは回廊基壇土が残存し、上面に根石が検出されている。回廊基壇土は地山上に盛られているが、一部で旧表土が認められる。地山は明黄色を呈し、西半で標高約20.4m、東半で標高約19.9ｍの高さで検出され、全体として東に向かって下降している。

礎石（図63･64、図版19）

西面回廊上の礎石49～51は原位置をとどめ遺存している。礎石には長さ60～70cmの上面が平らな自然石を用いている。礎石の高さは基壇の断ち割りを行っていないので不明であるが、20cm以上をはかる。北面回廊西側で検出した礎石と同規模である。

回廊が倒壊した時点で基壇上面がやや流出し痛んでおり、礎石の周囲からは15～25cm大の根石が露出している。礎石周囲から0.9～1.0ｍの平面円形を呈す据え付け掘りかたが検出された。据え付け掘りかたの埋土は明黄褐色粘質土で、地山より灰色を帯びる。

東面回廊の礎石は既に失われていたが、礎石52～54において15～25cm大の根石を確認した。礎石52の梁行東西側、礎石54の東にあった礎石や根石は後世の削平により遺存していない。なお、大きく截ち割っていないため礎石および根石の据え付け方法は不明であるが、遺構面に掘りかたは認められない。礎石52付近の基壇土には平瓦片が含まれていた。

基壇構造と基壇外装

Ｔ５で検出した西面回廊基壇は雨落ち溝を側縁に掘削することによって削り出されている。また、基壇中央と東半の一部で盛土を施している状況がうかがえる。

地山の検出高は、雨落ち溝７より西方の回廊外平坦面で標高22.4m、回廊上は22.0m、雨落ち溝８

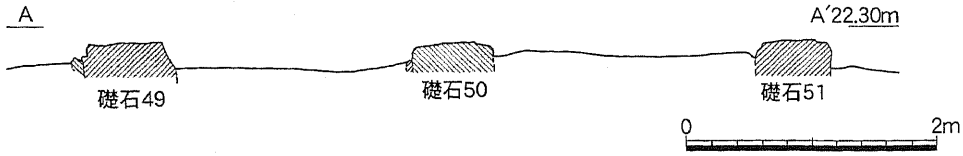


図65　Ｔ５A-A'断面（1/60）

より東で21.8mである。全体として西から東に向かって傾斜している。部分的に、最大15cmの厚さで明黄褐色粘質土の盛土が認められ、かつ礎石周囲に根石が露出していることから、地山から基壇を削り出した後に、一定の厚さで盛土し基壇を仕上げていたと考えられる。ただし、原位置を保つ礎石の上面高が22.17～22.20mであるので、その盛土の厚さは一部で検出した15cm内外であったといえる。

Ｔ６における東面回廊は、地山を掘削して雨落ち溝９を設けているが、その東肩から基壇にわたって盛土がなされている。

地山の検出高は、雨落ち溝９より西で20.4m、回廊基壇で20.2mをはかり東にむかって低くなる。礎石が失われており、大幅に基壇が削平されてはいるが、地山上に厚い盛土が認められることから、Ｔ６東面回廊基壇はすべて盛土によって構築されたと考えられる。

基壇外装の痕跡については、東西面回廊とも認められない。

雨落ち溝（図63・64）

雨落ち溝７・８は西面回廊に伴う。

雨落ち溝７は基壇側面下部の斜面から一連で、平坦面となる西肩までは幅3.3mをはかる。西肩からはやや緩やかに傾斜し最深部に至る。最深部付近は二段掘りの形状を呈し、この幅は1.0mである。深さは基壇上面から70cm、西肩からは1.0mをはかる（底面高21.30m）。前述のように溝の堆積は大きく数回に分けられる。74～84層と58～63層で黒褐色系の粘質土が堆積する。これら堆積層の上部を中心に瓦が大量に含まれる。

雨落ち溝８は幅2.3～2.5m、深さ18cm（底面高21.65m）とごく浅い溝である。

雨落ち溝９は東面回廊に伴うもので、幅1.6m、深さ15cm（底面高20.02m）である。トレンチ西端から雨落ち溝９にむかって遺構面は緩やかに下降する。灰色砂質土が堆積し、瓦片の堆積が広がる。

また、回廊を挟んだ東側に幅1.8m以上の溝17を検出した。検出面からの深さは約10cm（底面高19.85m）で２、３条の細い溝が平行する状況をなす。暗灰色土が堆積する。回廊基壇との距離から基壇東側の雨落ち溝とみてよい。形状が大きく損なわれ、基壇東肩から溝17底面に至る斜面が基壇東部とともに削平されている。一方、溝17の東肩は削られた状況がなく、薄いながら溝17から続く瓦だまりが東に広がっている。したがって、東の肩は本来の状況を残しており、東側の雨落ち溝はごく浅く小規模なものであったと断定できる。これは地形が東に下降するため西側では西外側の水も受けるのに対し、東側は回廊東半の屋根の水のみを受けるという差に起因すると考えられる。

炉６（図63・66、図版８-３）

Ｔ５西面回廊基壇上の礎石50と礎石51の間で検出した炉である。

層序から、この炉は西面回廊が存続している間に築かれたものである。長軸75cm、短軸40cmの不整形な土壙で、被熱して硬化し赤褐色～黒色を呈する。検出面からの深さは15cmである。黒色で焼き締まった高さ２cmの楕円形の炉底が残る。北面回廊上でも計５基の炉を確認しており、これらと同様の性格をもつと思われる。

埋土中から鉄滓のほか鉄釘が出土している。

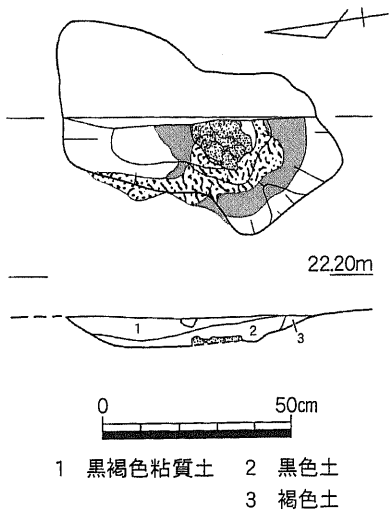


図66　炉６（1/20）

土壙13（図63）

Ｔ５雨落ち溝７の西肩から斜面にかけて設けられた不整円形の土壙。直径1.1ｍで、検出面からの深さは約10cmをはかる。上位は地山を掘削しているが、下位では雨落ち溝７堆積土を切って設けられているので、創建当初から存在していたものでない。底面についても水平とならず、雨落ち溝７斜面と同様に傾斜する。

土壙14～17（図63）

回廊外、Ｔ５東端で検出した計４基の土壙である。いずれも長さ60～90cmの楕円形を呈する。埋土は灰色を基調とする粘質土で他の後世の水田に伴う溝の埋土と似ており、後世の耕作に付随する土壙と考えられる。

出土土器（図67）

土師器（148～155）・須恵器（156）はＴ５西面回廊西側に位置する雨落ち溝７の最下層から出土したもので、土師器（157・158）・須恵器（159）は雨落ち溝７の下層から出土したものである。

148～151は皿で、白色を呈した150には底部に板目痕跡が残る。杯（152）はほぼ完形で口径14.4cm、器高3.4cmをはかる。内外面とも回転ナデが施され、底部付近の屈曲部が肉厚となる。153・154は高台付きの椀もしくは杯で、153はわずかに内外面とも丹塗りの痕跡が認められる。155は椀である。156は壺の口縁部と思われる。口縁部外面は「く」の字状に屈曲し、端部は尖る。

157は高台付きの椀で、158は器高2.75cmの杯である。159は端部が平坦で内外方向に若干突出する。器種は不明であるが、壺の口縁部と考えられる。

また、土師器の皿160は雨落ち溝８から出土した。ヘラ切りが底部中央まで及び、口径8.3cm・器高1.6cmである。

回廊の復元

回廊は北面回廊で確認しているとおり、複廊式である。つまり、梁行に３基の礎石が並ぶ。西面回

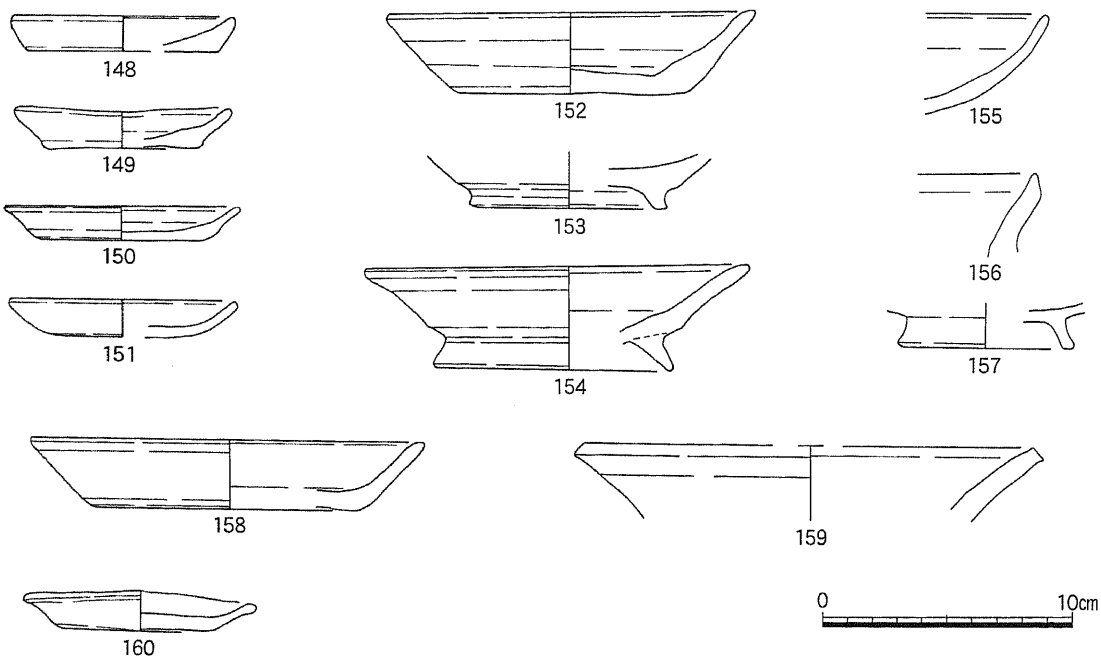


図67　Ｔ５出土遺物（1/3）

廊の柱配置から梁行は９尺（2.67m）等間である。東面回廊では礎石が失われているため詳細把握は不可能であるが、根石の配置から梁行９尺については追認できよう。

軒の出については、雨落ち溝７を勘案し６尺（1.78m）と考えられ、西面回廊の基壇規模は幅30尺（8.91m）と復元される。

基壇はＴ５とＴ６の状況から、旧地形（地山）によって構築方法が異なる。これは、回廊という性質上、建築範囲が広範なため、必然的に地形に応じた構築方法を選択したためである。地形は南東に向かって下降する。Ｔ５西面回廊では地山を削り出した後に、15cm内外の盛土によって築かれ、Ｔ６東面回廊は盛土によってつくられている。

また、西面回廊に伴う雨落ち溝７は他の基壇に伴う雨落ち溝よりも深く掘削されており、標高が高い西からの雨水等が回廊内に浸入しないような構造をとっていると思われる。

Ｔ５西面回廊の存続期間は、北面回廊と同様に原位置で良好に礎石が残っており、また鍛冶炉も築かれていることら、北面回廊が廃絶したと考えられる平安時代末までと想定される。しかし、北面回廊のように火災に遭った痕跡は認められない。

なお、回廊全体の柱配置等の復元については後述する（第５章参照）。

（４）南門・中門

遺存状況（図68･69）

昭和49年度調査において、中門礎石の根石と南門の基壇、礎石を確認したトレンチを含む調査区である。現在、市道が寺域の南北を貫いているが、当時の調査によって中門、南門周辺ではこの道がちょうど基壇中央を貫くと推定されている。また、道を境に東西で遺構の遺存状況は異なり、東では基壇上面が削平されていることがわかっている。

中門には、南はBA～BCライン付近から北は調査区外へとのびる近世につくられた池１が広がっており、この池の掘削によって中門基壇とこれに取り付く南面回廊基壇の一部は壊され、遺存状態の悪い場所では根石の一部が島状の高まりとして残るのみであった。ただし、調査区西端は池の掘削が及んでいなかったため遺存状態がよく、礎石が原位置をとどめ、基壇も良好な遺存状況であった。

一方の南門は北西半、全体のおよそ1/4の検出であったが、遺存状況は良好で、基壇、礎石ともに遺存する。T-3南端付近からT-5にかけて基壇を取り囲むように20～30cm大の石列が並ぶが、これは雨落ち溝12上層の瓦だまり上に置かれたものであり、南門に伴うものではない。また、南門にとりつく南面築地も部分的ではあるが、南門の西で確認している。

南門基壇の周囲には厚い瓦だまりが形成されているが、基壇上面には認められない。礎石が遺存していることから削平は考えにくく、平安時代末前後に建物が倒壊した後、再建に際して上面のみ片付けがなされた可能性がある。

基本層序（図70～72）

表土下は、調査区の北3/4にわたって池１が広がる。これによって中門基壇は削平されているが、中門の雨落ち溝やその他の南門・南面回廊の基壇は遺存している。中門と南門、南面回廊と南面築地の層序関係を把握している。

まず中門と南門との関係であるが（図70A-A'）、中門南の雨落ち溝10上層に広がる瓦だまり33層が、南門から北へと伸びる雨落ち溝12上層の瓦だまり41層の上へのりあがり、南門のほうが中門よ

りも早く倒壊していると想定される(4)。

また、中門と南門とがともに存続していた段階に、両者と南面回廊の基壇肩口（図70A-A'45～47層・図72C-C'63～65層)、そして中門と南門の間の空間（図70A-A'50層・図72C-C'58～62層）を造成して基壇周辺を整備している。層位から考えて、中門・南門間の平坦面造成が両者の雨落ち溝下層の埋土上に築かれること、中門、南門基壇肩口の造成土が同じくそれぞれの雨落ち溝下層の埋土上に築かれることから考えて、いずれも同時期に修復したと考えられる。

また、中門・南門間では、この造成土上面から柱穴（図70A-A'48･49層）が掘り込まれる。48層中には、径10cmの柱根が遺存する。これに伴う柱穴を確認していないため建物の性格等は不明であるが、南門の改修を行った際のものである可能性も考えられる。

次に南面回廊と南面築地であるが（図71B-B'）、南面築地から崩落したと推定される瓦だまり（100層）よりも上層から南面回廊の雨落ち溝11が掘り直されている（75～80層）ことから、南面築地よりも南面回廊が長く存続したことがわかる。

また、トレンチ内での確認であるため正確な規模がわからないが、雨落ち溝11上層を掘り直す前に径4.3m、深さ0.6mの軒丸瓦など比較的大きな破片の瓦を埋土中に含む土壙18が設けられる。

1．中門（図68、図版20-1）

基壇構造

池1の底面が地山まで達していたこともあり、基壇下の状況を知ることができた。

地山と基壇との間に旧表土が認められないことから、基壇構築にあたり整地が行われていると考えられる。地山を削り出したのち、基壇を構築する範囲だけでなく、その周縁部、基壇の北側4m付近までを造成する。そして、この後、およそ10cmの厚さの黄褐色粘質土で基壇を構築する。なお、中門と南面回廊の基壇は一連の工程で築かれており、池1による掘削面を観察しても盛土の断絶は認められない。

礎石59と中門基壇南西隅の位置関係からもわかるように、中門南西隅は回廊側から流れ込む雨水によって浸食され、もとの基壇端よりも東へ後退している。この基壇端の後退を繕うように、T-4の南基壇端では、雨落ち溝10下層が堆積したのち、褐色粘質土を盛って基壇を修復している（図70A-A'45～47層)。

推定基壇上面高は、20.3mである。また中門基壇と南面回廊基壇との接続部は、南面回廊の礎石・根石の高さから推定される基壇高と中門の復元基壇高から30cm程度の段であったと考えられる。

礎石（図68、図版20-2）

礎石55～61が中門に伴う根石である。礎石56・57は島状の高まりとなって遺存する。根石には15～35cm大の石が使用されている。礎石は遺存しないが、柱間などの規模から考えて、南門と同様の大きさの礎石が使用されたと考えてよいであろう。中門と南門の中間地点で、池1埋土中から0.8～1m大の石が3基出土している。これがもとは中門の礎石であったと考えられる。

礎石据え付け掘りかたについては、図70A-A'の基壇の構築状況をみてもわかるように、現状では不明である。地山には礎石据え付け掘りかたがあるのかもしれないが、基壇構築過程で根石と礎石を置いていく工法をとったと考えられる。この際、一律に水平に基壇土を盛るのではなく、根石部分の盛土は他よりもやや厚めに盛っており、山状に盛り上がる（図70A-A'77～82・87層)。

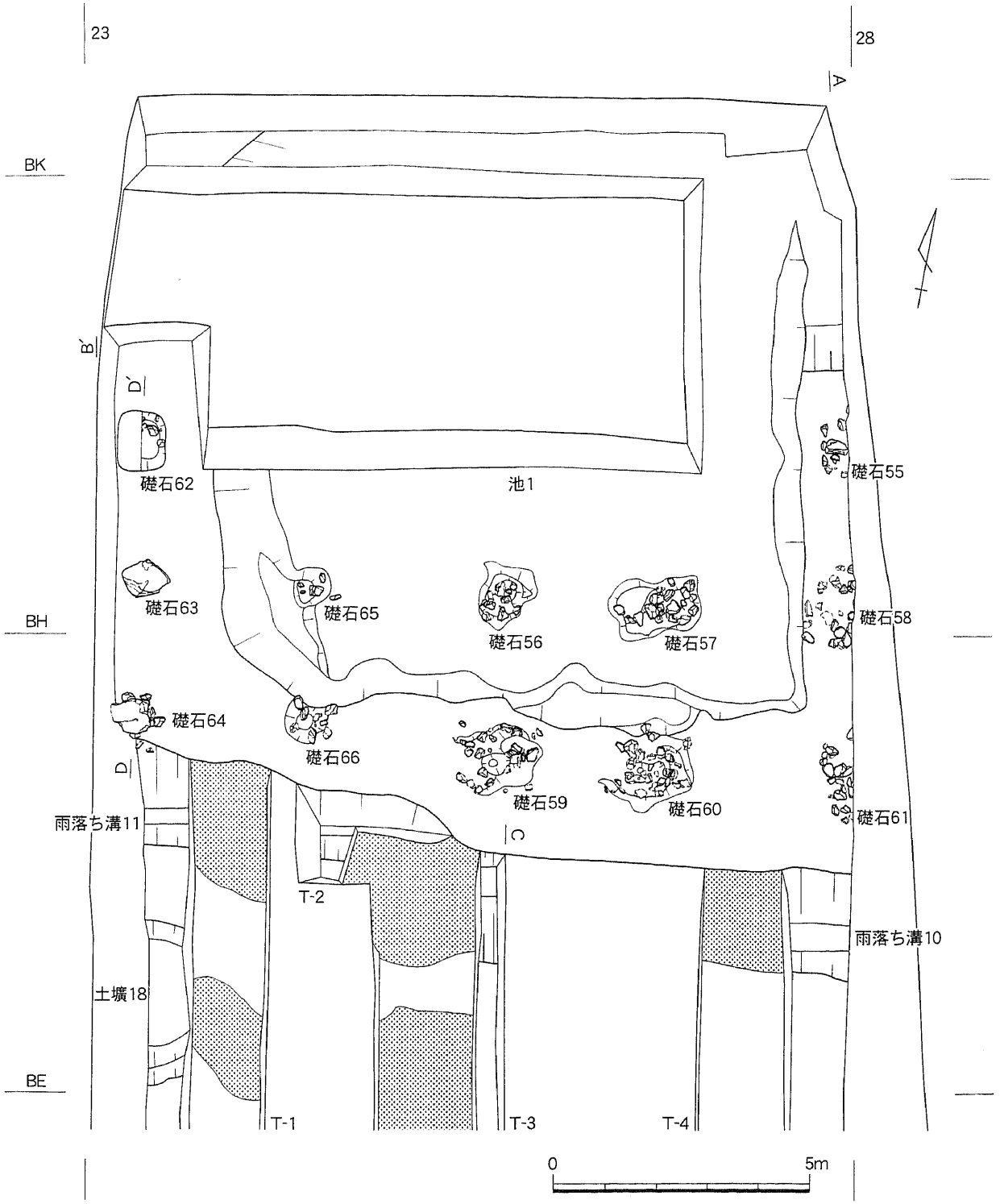


図68　中門遺構全体図（1/120）

雨落ち溝（図68）

中門の雨落ち溝は、基壇南をめぐる雨落ち溝10である。T-3・4で検出しているが、T-4ではごく浅い。T-2で南面回廊西側の南雨落ち溝、雨落ち溝11に接続する。幅約２m、深さは５～15cm（底面高19.26m）のごく浅い素掘りの溝である。

雨落ち溝10は、①基壇外装がなくなり素掘りの溝になった時期（図70A-A'69・70層）、②南門雨落ち溝12上層瓦だまり形成後（37・38層）、③中門廃絶時（33～35層）の３時期にわかれる。①と②の間に45～47層による基壇南肩口の修復、そして、中門と南門間の平坦面の造成も行われたと推定される。

なお、基壇北でもごく浅いたわみ状の遺構が認められるが、北側全体に設けられたものなのか不明であるため溝とはしていない。

基壇外装

基壇端には、基壇外装の基底部となる加工石材や石、板材、またそれらを抜き取ったり据え付けたりした痕跡などは認められない。そして、南基壇端では遺構上にじかに水成堆積の砂質土（図70A-A'69・70層、図72C-C'55・56層）が堆積し、北基壇端では瓦だまりが形成され、基壇斜面に瓦が貼り付く（図70A-A'40層）。また、これらの中から石材、瓦、塼などが大量に出土することもなかった。したがって金堂や講堂と同様に、木製基壇であった可能性が考えられる。それが中門がまだ存続していた最中に失われたと推定する。

２．南門（図69、図版21）

基壇構造

基壇は良好に遺存し、礎石も原位置を保つものがある。

基壇の構築過程について、T-3とT-4、5とで異なるありかたをする。T-3では、基壇下に厚さ20cmの黒褐色の旧表土（図72C-C'74層）が遺存するが、T-4、5にはない。つまり、同じ南門基壇であっても整地した場所とそうでない場所があることになる。旧表土が認められた堂宇は、このほかに南面築地塀だけである（図71B-B'143層）。備前国分寺の基壇のなかでも数少ない例である。

そして基壇版築は、基底部を15～20cm程の厚さで、上部は５～10cmのうすい厚さで丁寧に盛る。基壇基底部と上部で単位が異なる基壇土を盛る構築方法は、黄褐色土と黒褐色土を用いて縞状に盛る点で異なるが、金堂基壇の構築方法と似る。

また先述したが、T-3では北雨落ち溝である雨落ち溝12の下層の斜面部埋土上に、図72C-C'63～65層の盛土をし、基壇肩口を修復する。

T-5で、南門基壇と南面築地塀が取り付くが、この取り付き部上面は壊されており、土壙19までの間に築地塀基底部が高さ15cm程度遺存する。この遺存する築地塀と南門の基壇土の様子から、両者は一連の工程で築かれたと考えられる。

推定基壇高は約1.1mで、ほぼ盛土で築かれている。

礎石（図69）

原位置を保つ礎石67・68・71・72の４基のほか、根石を残す長径1.6m・短径1.3mの礎石抜き取り穴（礎石69）と根石の残らない礎石抜き取り穴（礎石70）を確認している。また、礎石71と72の間の包含層中から、動かされた礎石１基が出土している。

礎石は、長軸１～1.3m・短軸80～90cm・高さおよそ50～60cmの自然石である。また礎石69の礎

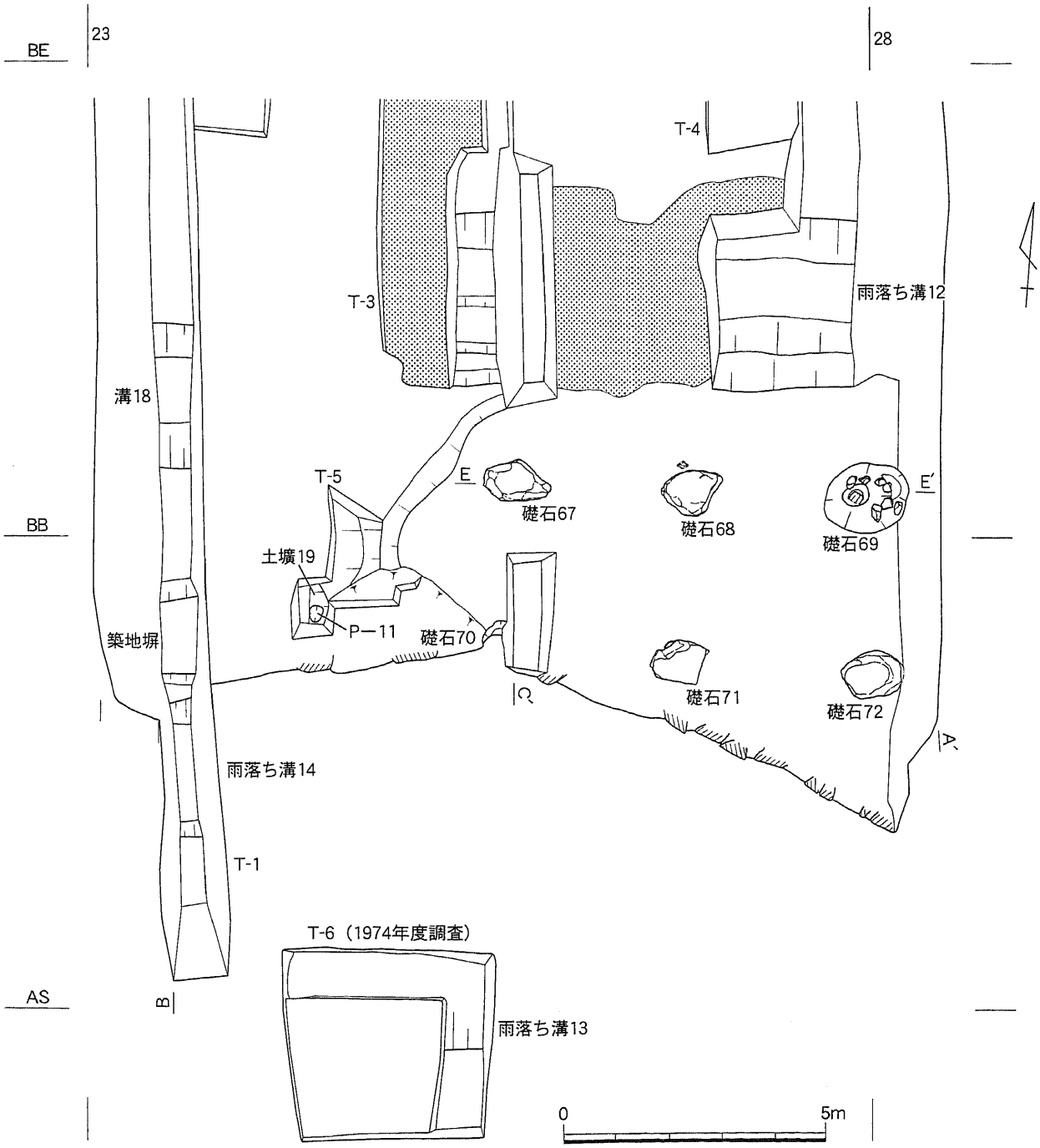
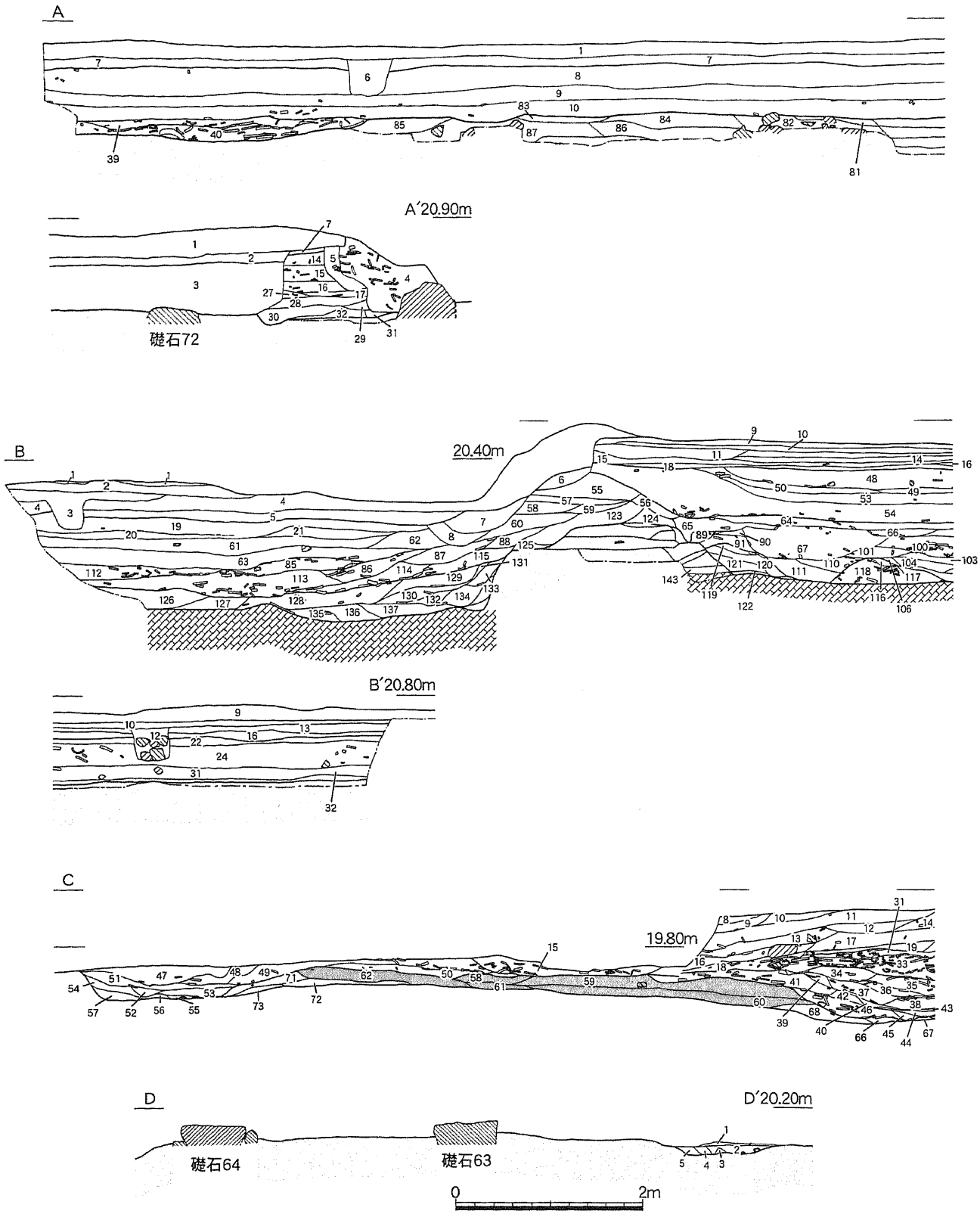
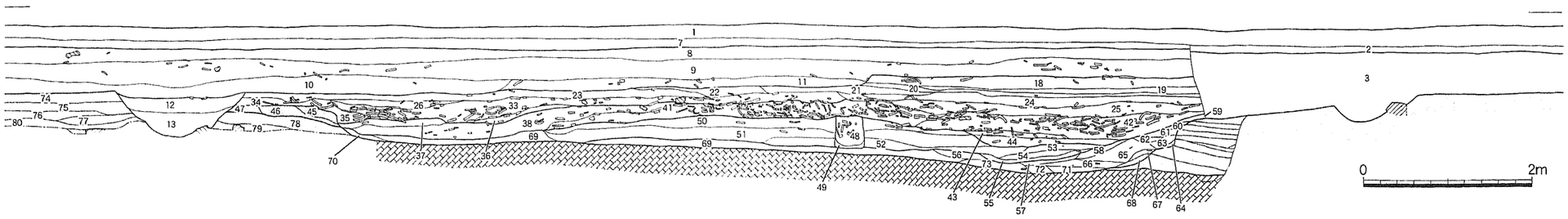


図69　南門遺構全体図（1/120）



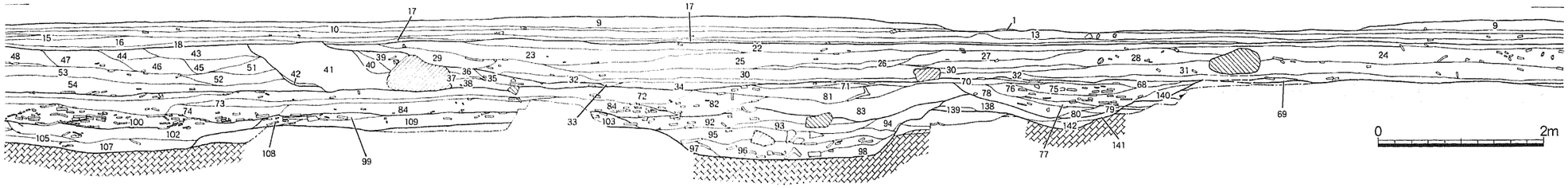
1　褐灰色砂質土　　4　褐色砂質土
2　灰色粘質土　　5　灰色粘質土
3　褐色砂質土

図73　D-D’断面（1/60）



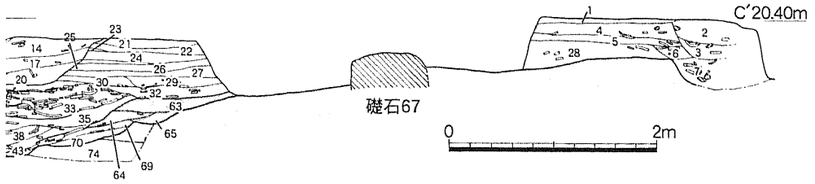
2～3　1974年度調査トレンチ埋土
8～10　池1埋土
33～36　雨落ち溝10上層埋土
37～38　雨落ち溝10中層埋土
43～44　雨落ち溝12上層埋土
45～47　基壇造成土
48～49　柱穴埋土
54～55　雨落ち溝12中層埋土
69～70　雨落ち溝10下層埋土
71～73　雨落ち溝12下層埋土

図70　A-A’断面（1/60）



25～54　池1埋土
75～80　雨落ち溝11上層埋土
92～98　土壙18埋土
102～107　溝18埋土
123～125　築地盛土
135～137　雨落ち溝14埋土
141～142　雨落ち溝11下層埋土
143　旧表土

図71　B-B’断面（1/60）



15～20　池1埋土
34～39　雨落ち溝12上層埋土
43～46　雨落ち溝12中層埋土
47～49　雨落ち溝10上層埋土
51～57　雨落ち溝10上層埋土
58～62　盛土
63～65　基壇盛土
66～68　雨落ち溝12下層埋土
71～73　雨落ち溝10下層埋土
74　旧表土

図72　C-C’断面（1/60）

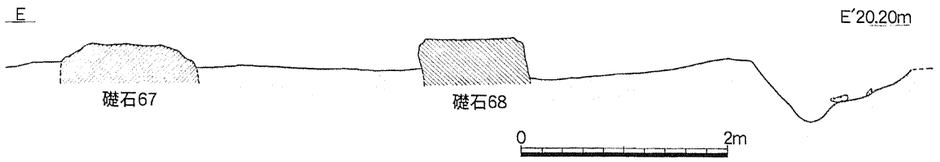


図74　E-E’断面（1/60）

石抜き取り穴内に残る根石から、根石には20～30cm大の石を使用していたことがわかる。

礎石68・71周辺の基壇は、遺存する４基の礎石上面から復元される基壇上面高20.0mよりも約30cm削平されており、根石が現れている。礎石の周囲には礎石据え付け掘りかたは認められない。したがって基壇構築後に礎石据え付け掘りかたを設けるのではなく、基壇構築途中に根石・礎石を置いていく工法がとられたと考えられる。

試みに礎石69で復元してみると、T-4で地山が約18.9m、最深部の根石が19.3m、復元基壇上面が20.0m、そして礎石の高さがおよそ50cmである。したがって、地山上40cm程度の高さまで基壇を構築し、その後、根石を置きながらの基壇盛土をおよそ30cmの高さまでおこない、さらに根石と礎石を置きながらの基壇構築をおこなう。このような構築過程を復元できる。なお、地山上あるいは基壇版築途中における礎石据え付け掘りかたの有無については判然としない。しかし、例えば礎石据え付け掘りかたを地山に掘り込んだ場合、礎石底面まで70cmもの高さで礎石を据えていくことになる。これは考えにくいのではなかろうか。可能性としては基壇構築途中で据え付け掘りかたを設ける、あるいは礎石据え付け掘りかた自体を設けない、この両者が考えられる。

雨落ち溝（図69、図版22-１・２）

雨落ち溝は、基壇北辺と南辺に設けられている。雨落ち溝12、13である。雨落ち溝13は、昭和49年度調査時に調査したT-6で確認した遺構である。再調査をしたわけではないが、基壇南端の参考とするために含めた。ここでは深さ40cm（底面高18.3m）の素掘りの溝を確認している。

雨落ち溝12は、幅約3.3m、深さ20cm（底面高19.0m）の浅い、素掘りの溝である。堆積の様子から雨落ち溝12は、砂層からなる素掘りの溝になった時期（図70A-A’55～73層・図72C-C’66～70層）、中門・南門の基壇やその両堂宇間の平坦面を造成した時期（図70A-A’43～44層・図72C-C’34～46層）、瓦だまりが形成された廃絶時（図70A-A’41～42層・図72C-C’33層）の３時期に分かれる。

また、基壇の北西にあたる位置で検出しているT-1の溝18は、南門が存続している最中の溝で雨落ち溝12に接続する可能性がある。断面観察によるとこの溝は、創建時に南面築地塀の北側の空間に広がっていた平坦面に、運んできた土を盛って、あるいは堆積土（図71B-B’116～122層）を利用して南北に新たに２本設けた溝（図71B-B’110・111層・図71B-B’104～107層）のうちの１本（北）である。溝18のT-1・3間でのあり方がはっきりとしないが、単独の溝と考えるよりは雨落ち溝12に接続すると考えるのが妥当であろう。

なお、溝18が設けられる以前の雨落ち溝12の行方についても気になるところである。西雨落ち溝が存在するのか不明であるため即断はできないが、溝18の基盤層が地山であることから、創建時から雨落ち溝12は溝18に接続していた可能性も考えられる。

基壇外装

南門は、備前国分寺の他の堂宇と比較して基壇が良好に遺存しており、T-3とT-4で基壇北端を、T-5で基壇西端を確認することができた。

基壇北西隅に近いT-3の基壇端では、創建時の南門基壇と後に盛土を行って基壇を修復した、後世の基壇端が確認できている。

創建当初の基壇端上部は、盛土が流失して後退しており、10～15cmの高さをもつ３つの段になっている。礎石67からの軒の出の距離から推測して、基壇端は現状の最下段ではなく、１段目の図72C-C’74層（旧表土）上の平坦面にあったと推測される。しかし現状では、ここに雨落ち溝12下層と

同じ水成堆積による粗砂層が形成されており（図72C-C'70層）、仮に基壇外装がここにあったとしても、抜き取られるなどして失われ、のちに一定期間、水が流れる溝となっていたと考えられる。このように創建時の基壇外装の痕跡は遺存しない。

また、基壇を修復した際の基壇外装についてであるが、修復基壇は雨落ち溝12下層（図72C-C'66～70層）の堆積土上と基壇端の２・３段目上に築かれており（図72C-C'63～65層）、このときの基壇外装についてもその痕跡は遺存しない。

一方、T-4にはT-3のような修復基壇はなく、創建当初の基壇端が遺存する。この基壇端上部はT-3と同様に流失して高さが下段から10、20、30cmの３段の段状を呈する。基壇端は、軒の出を勘案して１段目の平坦面上にあったと推測される。この平坦面上には、基壇の崩落土とみられる68層（図70A-A'）が堆積し、基壇外装もその痕跡も遺存しない。

T-5南端部は撹乱が入っており、基壇の上面を大きくえぐられて土壙状を呈する（図75）、この撹乱以下、土壙19までの間はおおむね南門廃絶時の基壇を残す。この基壇が遺存する箇所に1つの段がある。この段の上面が西基壇端となる。この段上には、黄褐色粘質土の基壇の崩落土が堆積し、基壇外装やその痕跡は遺存しない。

このようにいずれのトレンチにおいても基壇外装やその痕跡は認められず、それは他の堂宇と同様である。

３．南面回廊

基壇構造と基壇外装（図68）

調査区西端で比較的良好な状況で基壇が残っている。

南面回廊の基壇構造は、基本的に中門と同じで、整地の後、地山上に基壇を構築している。基壇が中門と一連の工程で築かれていることから考えても、整地は同時期であろう。基壇版築には厚さ５～10cmの黄色粘質土と暗褐色粘質土を用いる。

また、T-2では雨落ち溝11内にたまった砂層上に堅くしまった黄褐色粘質土で基壇を修復している。中門で行われた修復と同時期の可能性がある。

なお、回廊北側では雨落ち溝も基壇端も認められなかった。礎石62北の本来基壇端となる位置、さらにその北側においても、現基壇面がほぼ同一の高さでのびる（図71B-B'）。本来の推定基壇上面と残存基壇上面との高さの差は15cm程度しかないため、削平によって基壇端が失われているとは考えにくい。

寺域の北西が高く南東が低いため、雨水は西面回廊外溝によって回廊の外を南に流下し、回廊内の水は南東隅に集まることになるため、この付近では雨落ち溝はごく浅く、南面回廊東半で深いものになると推定される。

基壇外装は、北面回廊と同様にその痕跡は認められない（図71B-B'）。

また、北面回廊と同じく、中央柱筋の地覆石や塼、あるいは瓦などは認められなかった。

礎石（図68、図版20-３）

礎石は、中門との取り付き部から２列目までの礎石62～66を検出している。１列目の北側柱は未掘部分にあたる。中央・南側柱の礎石65・66は、池１によって削られ、根石のみが残る。２列目は、池１の底が一段高くなっていたため基壇の遺存状況が良く、礎石63・64が原位置をとどめる。北側

柱である礎石62は礎石抜き取り穴である。

礎石は、長軸・短軸ともにおよそ70cm、高さおよそ25～30cmの自然石を使用している。礎石を支える根石は、20～25cm大の自然石である。礎石据え付け掘りかたは基壇上面でも、また基壇が後退して根石が現れている雨落ち溝11の斜面上（図71B-B'）においても認められない。しかし、北面回廊の礎石42では礎石据え付け掘りかたが存在することを考えると同様の工法をとったと考えるのが妥当であろう。南面回廊においても、基壇構築過程で据え付け掘りかたを設け、基壇構築中に基壇土と一緒に根石・礎石を設置していく工法をとったと考える。

なお、南面回廊の棟通りは中門の棟通りと一致する。

雨落ち溝（図68）

基壇南側で雨落ち溝11を確認している。上層には中門から一連で広がる瓦だまりが形成されている。

溝底部は、20cmほど地山を削り出して築かれる。素掘りの溝である。創建時は、幅約1.2m、深さ約20cm（底面高19.3m）の浅い溝（図71B-B' 138～142層）であったが、T-1ではのちに埋土を掘って、上層に幅1.7m、深さ40cm（底面高19.45m）の雨落ち溝（図71B-B' 75～80層）をつくり直している。

一方のT-2では、溝の掘り直しはないが、かわりに砂層の埋土上に黄褐色粘質土を盛って基壇修復を行う。この修復基壇に溝は伴わない。

4．南面築地

T-5で南門との取り付き部を、T-1南端で築地塀とその南の雨落ち溝14を確認している。

壁体構造と規模（図69）

基壇構造はT-1とT-5で異なり、T-5では地山を削り出して整地したのちに築地を築くのに対し、T-1では整地をせずに直接表土上に築地を築く。このため後者では、旧表土層（図71B-B' 143層）が認められる。ただし、このT-1の築地北斜面で認められる旧表土層は南斜面には現れない。築地の南北斜面間で、基盤層は地山を削り出した整地面へ変わる。雨落ち溝14も地山を削り出して築かれた素掘りの溝である。築地の南北で地山は30cm低くなっている。

なお、掘り込み地業は行われていない。

T-1の土層観察から、築地は、地山上あるいは旧表土上から厚さ10cm程度の黄褐色粘質土と明黄褐色粘質土の版築によって築かれていることがわかる。また図71B-B' 123～125層は、版築層と比べてしまりがない土層であるが、堆積状況や質感から築地を構成する版築層の一部である可能性がある。

T-1での築地の残存基底部幅は約2.8m、残存高は北で約54cm、南で約85cmである。

なお、築地構築の版築作業に用いられる堰板痕跡や、この堰板を支える掘立柱の添柱穴は認められない。

雨落ち溝（図69）

創建当初、雨落ち溝は南にのみ設けられ、築地北は平坦な空間が広がっていたと考えられる。のちに雨落ち溝を設けている。

築地南に設けられた溝が、雨落ち溝14である。地山を削り出して設けられた幅2.1m、深さ20cm（底面高18.7m）の素掘りの溝である。雨落ち溝14は、図71B-B' 135～136層の堆積によって規模を縮小しながらも存続するが、137層によって完全に埋没してしまう。その上層には、132～134層といった築地塀からの崩落土による堆積も認められる。雨落ち溝14は再び掘りなおされることはなく、倒壊

時には平坦面となっていたと考えられる。倒壊時の土層は112～115層で、瓦だまりを形成する。

また、T-1断面観察から南門の雨落ち溝の項で述べたように、築地北には創建後につくり足した東西に設けられた溝が南北２本存在したことがわかっている。そのうちの南側の１本が築地北の雨落ち溝となる。これは、築地北斜面と築地から約１mの場所に、土盛り、あるいは堆積土（図71B-B' 116～122層）を利用してつくった幅１m、深さ30cmの溝である（図71B-B' 110･111層）。そして、この新たにつくられた溝埋没後に築地塀は倒壊する。この倒壊瓦だまり（図71B-B' 100層）が、築地南の112～115層の瓦だまりに対応するとみられる。

その他の遺構（図69･75･76）

T-5内では、築地塀上に掘られた備前国分寺には伴わない土壙19（図75　4～8層）下で、長径30cm、短径25cm、現状で深さ22cmの柱穴、Ｐ－11を確認している（図76）。築地塀構築の版築作業時に堰板を支えた添柱穴である可能性も考えられるが、後世の土壙19によって上面を壊されているため、築地塀に伴うものであるのかはっきりしない。また、復元築地塀からみるとやや築地塀の心寄りに位置し、また対になる柱穴も確認できていないため、現状では確定するのはむずかしい。

５．出土土器（図77）

土器は、主に中門および南門の周囲で検出された瓦だまり等から出土した。161・162は土師器の高

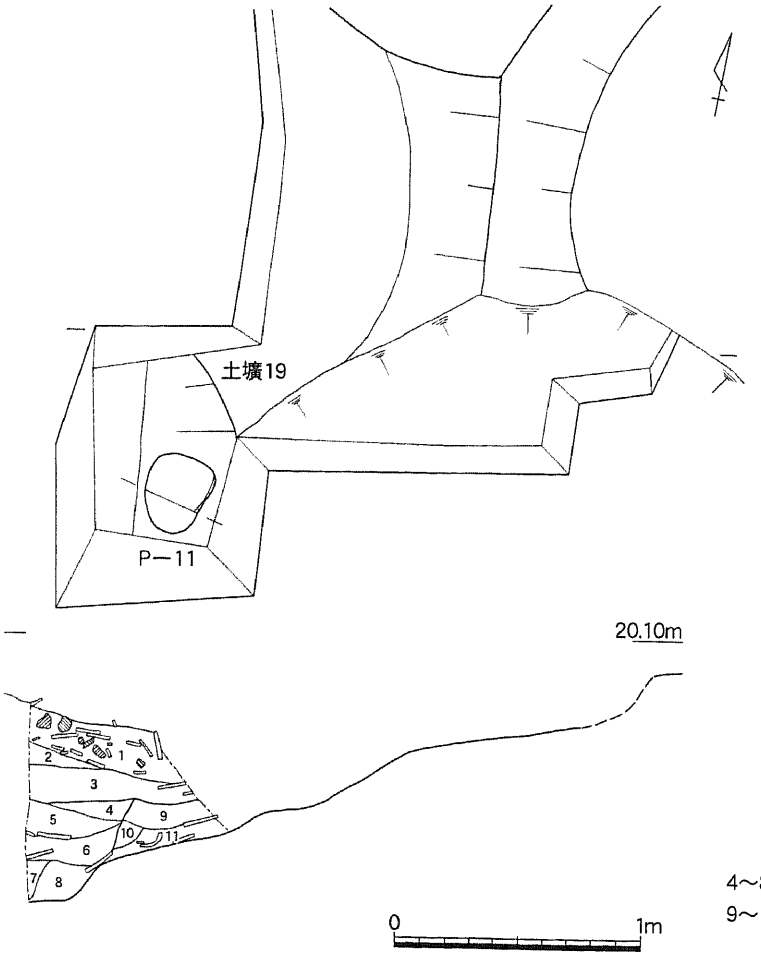


図75　Ｔ－５（1/30）

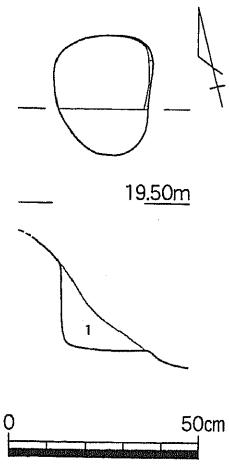


図76　Ｐ－11（1/20）

台付杯である。163は土師器杯で、底部にはヘラ切りの痕跡がみられる。164は土師器杯で底部は糸切りである。

165は吉備系土師質土器椀で、定型化した高台がつく。166は底部糸切りの須恵質の椀である。167は焼成前に穿った穴をもつ須恵器で、器種は不明である。168は玉縁口縁の白磁椀Ⅳ類にあたり、11世紀後半～12世紀に属する。

６．中・南門の復元案（図78・79）

中門、南門、南面回廊、南面築地の復元を行っていく。ここでもこれまでと同様に１尺＝0.297mを造営尺として使用することとする。

中門は、基壇外装が創建後に失われているうえ、池１による大規模な削平によって基壇が壊され、礎石が失われて根石しか残らないというように遺存状況が悪い。このため、中門の復元にあたっては、かろうじて遺存する根石と現状の基壇端を参考にして、金堂や講堂、南面回廊との位置関係のなかで復元していかなければならない。

まず、中門の西で確認している南面回廊と中門の棟通りが合致するため、これを桁行の大枠での基準とし、さらに講堂や金堂との心々間距離、北面回廊と南面回廊の中央礎石間の距離から、中門と南面回廊の棟通りの位置を確定させた。一方、梁行は、西面回廊（Ｔ５）と東面回廊（Ｔ６）の調査成果から東西両回廊の中央柱間の距離がわかっていたため、これと主軸の位置、南面回廊の柱間を考慮に入れて復元した。

中門の規模は、桁行５間（12・12・13・12・12尺）×梁行２間（12・12尺）、東西18.12m×南北7.13mとなる。基壇規模は、基壇の出が梁、桁ともに６尺（1.78m）と復元できるため、桁行73尺×梁行36尺、東西21.68m×南北10.69mとなる。

中門の構造は、平三斗の組物が軒を支え、屋根は単層の切妻造り、棟通りの中央３間を扉口とする五間三戸の門であったと推定する。

南門も、他の堂宇と同様に基壇外装が失われているが、代わりに原位置をとどめる礎石が遺存して

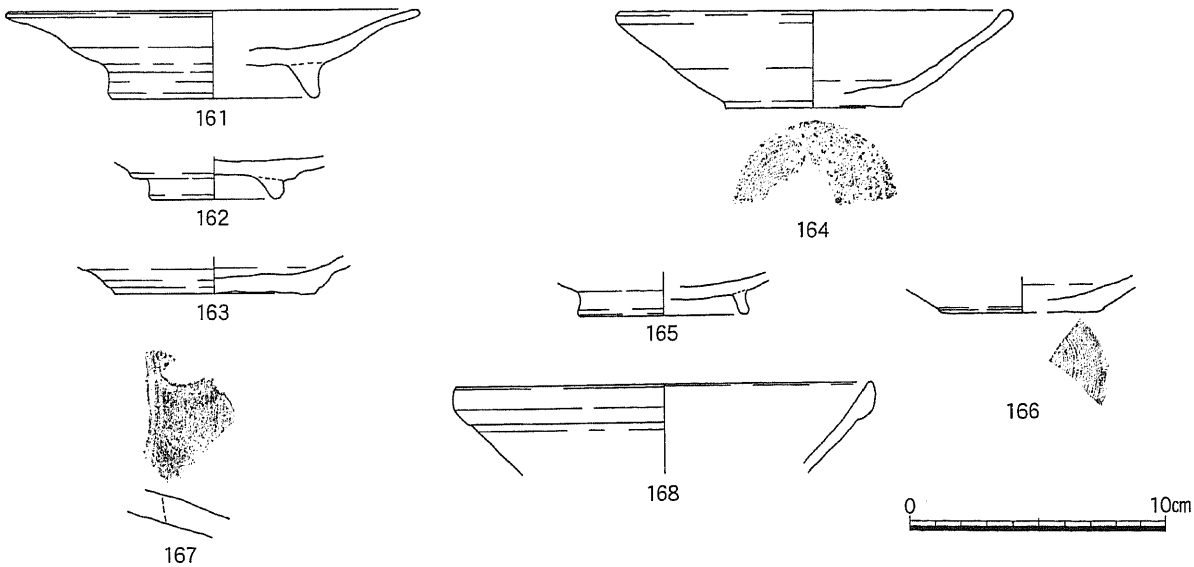


図77　南門・中門出土遺物（1/3）

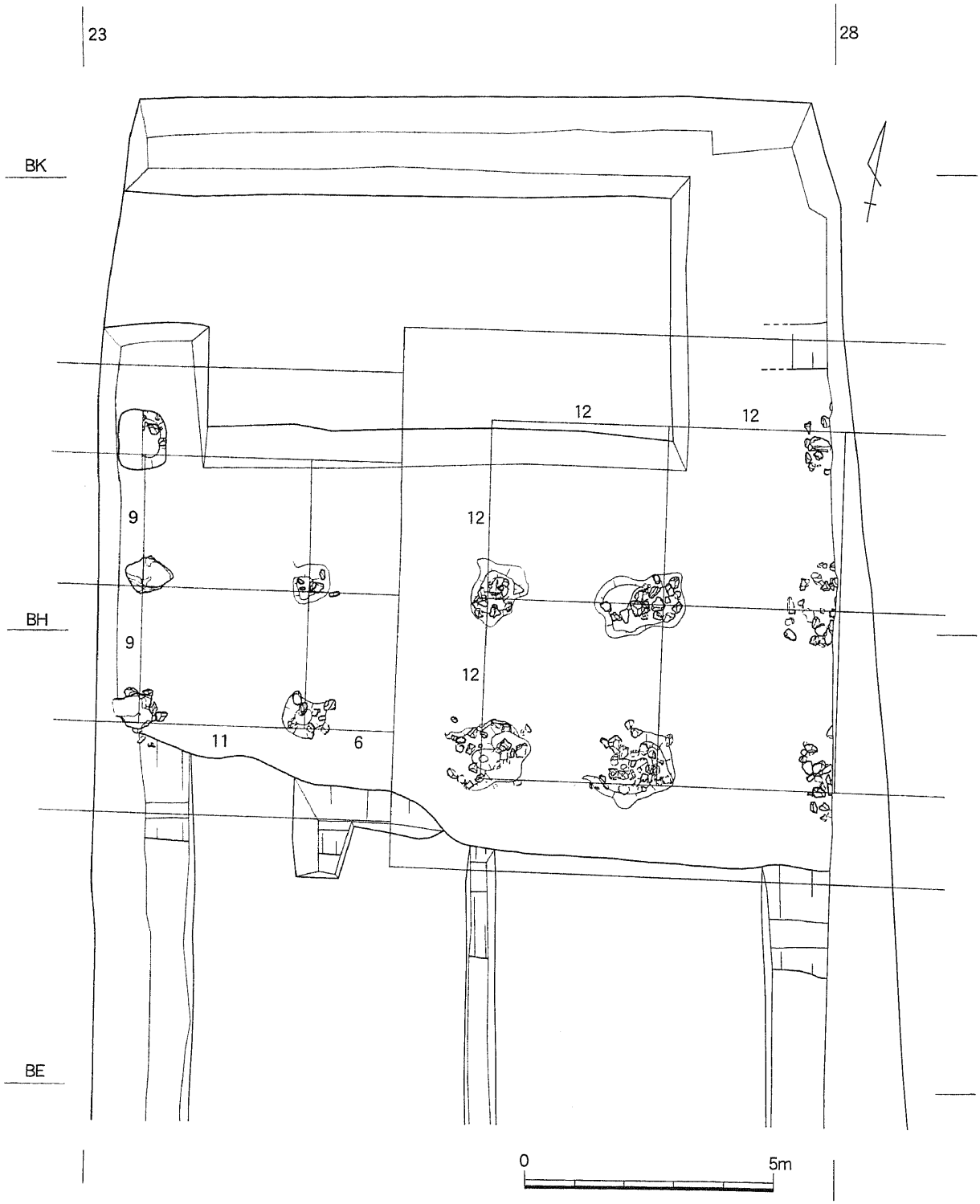


図78　中門復元図（1/120）

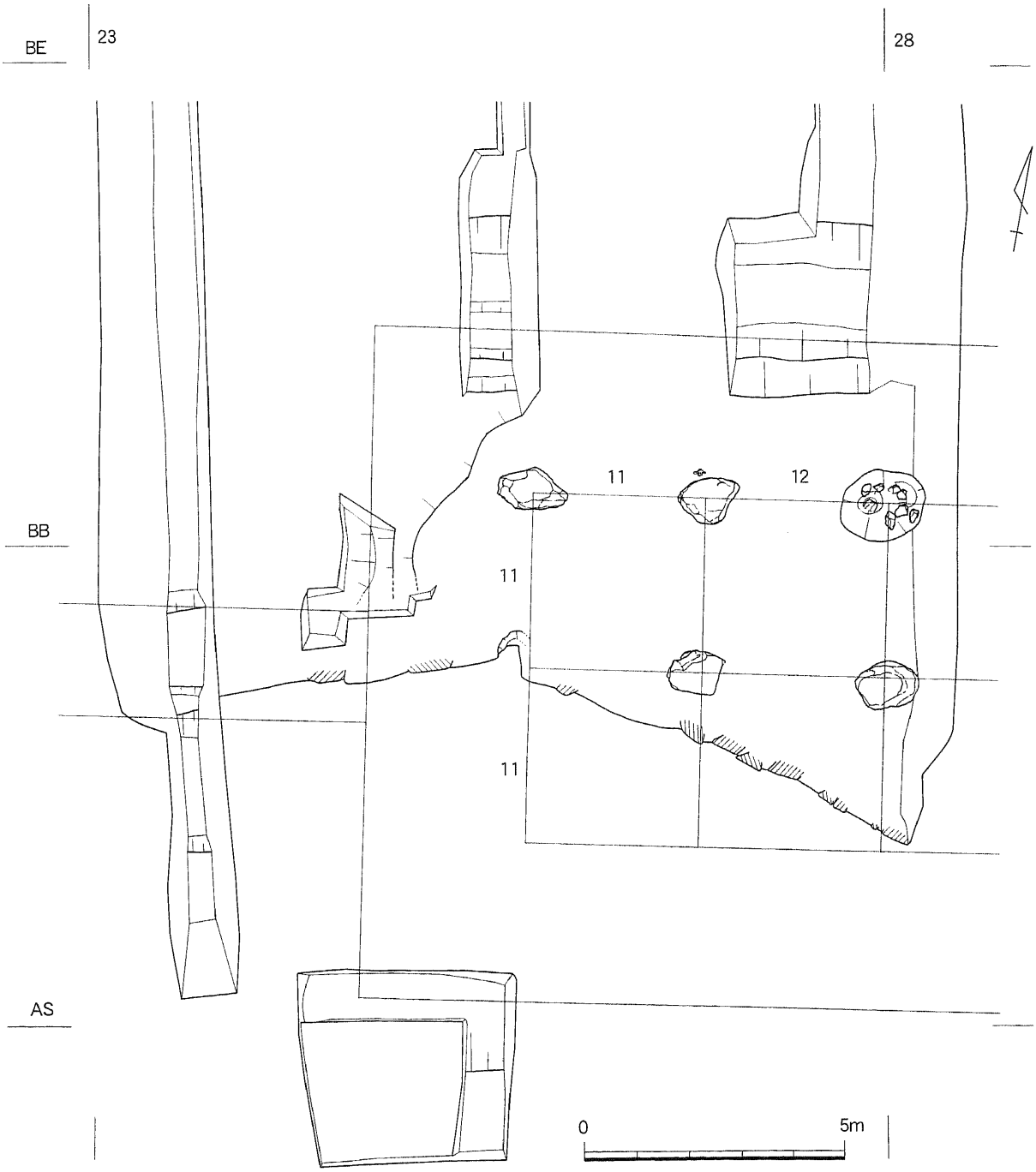


図79　南門復元図（1/120）

おり、南門復元の手がかりとなった。また、南面築地と南門の棟通りが一致し、さらに主要伽藍造営軸と直交すること、そして中門との心々間距離。これらを判断材料に復元した。

南門の規模は、桁行５間（11・12・12・12・11尺）×梁行２間（11・11尺）、東西17.23m×南北6.53mと復元できる。また、基壇の出は、梁、桁ともに10尺（2.97m）で、これによって基壇規模は、桁行78尺×梁行42尺、東西23.17m×南北12.47mとなる。

南門の構造は、二手先、あるいは三手先の組物が初層の軒を支え、屋根は重層の入母屋造り、そして棟通りの中央３間が扉口となる五間三戸の門であったと想定される。

建物本体の平面規模は中門のほうが大きいものの、基壇の規模、建物と屋根の構造などは南門のほうが立派なものであったと推定される。奈良時代の寺院などで用いられた門のなかでも、備前国分寺の南門で用いられた構造は高い格式をもつ門であった。

なお、南門中央間の心が主要伽藍造営軸から40cm東へずれており、南門の心が主軸上にない。建物の心が一直線に並ぶ金堂、講堂、中門とは異なる様相である。南門と南面築地の棟通りが主要伽藍造営軸に直交することを考えると、両者が寺主軸を無視しているわけではなく、これを踏まえたうえで築かれていることがわかる。それなのにずれが生じている理由として、即断はできないが、南門・南面築地塀と金堂・講堂・中門との間に建設順序の時間的な隔たりがあり、これに起因して主要伽藍造営軸とのずれが生じた可能性が考えられる。

南面回廊は桁行２列目に礎石が遺存しており、根石とあわせて柱間を復元するにあたり有効であった。複廊である南面回廊は、先述のとおり中門の棟通りと一致し、中門の梁行の中央に取り付く。中門の西側柱から南面回廊１列目の礎石列までは12尺（3.56m）である。したがって基壇端からの距離は６尺（1.78m）となる。１列目以降の桁行の柱間は11尺（3.27m）で、コーナー２間分が９尺（2.67m）となる。梁行の柱間は９尺（2.67m）である。これは、北面回廊の桁行の柱間が10尺（2.97m）であったのと異なる。

また、南面回廊の軒の出は６尺（1.78m）に復元できる。先述のとおりT-1では認められないが、回廊途中からコーナーへ向かって設けられている可能性が考えられる。この場合、南面回廊の基壇規模は梁行30尺（8.91m）となる。

図79で示した南面築地塀の復元線は、南門の棟通りと南面築地塀の心が一致することを考慮して、同様に南面築地塀を検出したＴ15と昭和49年度調査で検出している南西隅の肩口を結んだものである。したがって、南面築地塀の心と傾きを示すものであって、基底部や本来の築地上面を示すものではない。

南面築地の心は南門棟通りと一致し、南門の梁行中央に取り付く。基底部幅は、残存基底部幅が約2.8mであることから、少なくとも10尺（2.97m）はあったものと考えられる。

（５）僧房［Ｔ７・８］

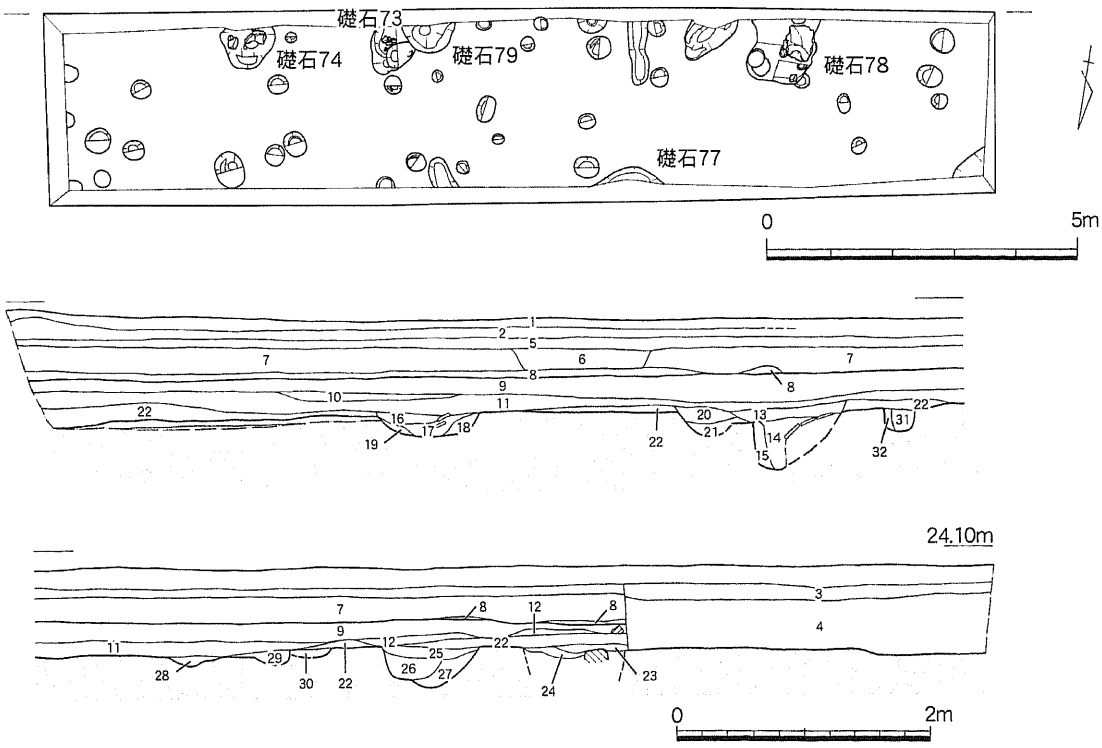
現況と遺存状況（図80･81）

僧房は講堂の北方に位置する。昭和49年度調査において、礎石75・76・81・82（計４基）と基壇外周に平行した２条の雨落ち溝15・16を検出している。建物の南北規模は推定しているものの、正確な規模・構造の把握には至っていない。

そこで、僧房の規模・構造を把握するため、トレンチ２本を設けた。昭和49年度確認調査のトレンチと接続し直交するＴ７（長さ15m・幅３m）とその東にＴ８（長さ18m・幅３m）を設定した。Ｔ７の西端３mは昭和49年度調査区の再調査となる。Ｔ７とＴ８の位置関係については、Ｔ７の南壁とＴ８の北壁が東西方向でつながり、Ｔ７東端からＴ８西端までは３mの間隔があいている。Ｔ８では基壇南端と雨落ち溝を確認するため、礎石85・87の南側を拡張した。

現況で、Ｔ７とＴ８は畦畔で隔てられた別々の水田に位置し、表土面において約60cmＴ７の方が高い。遺構面はＴ７で標高23.2～3m、Ｔ８で標高23.0～23.1mをはかり、削平度合いはＴ８の方がやや大きい。遺構面までは、Ｔ７で表土から70～80cm、Ｔ８で40cmで達する。両トレンチとも礎石は大部分が失われ、根石と柱穴が遺存している。後で詳しく触れるが、当初礎石建ちであった建物を掘立柱建物に建替えを行ったことが推定される。

礎石の抜き取り穴と柱穴を中心とした遺構はＴ７で全面にわたって、Ｔ８では礎石80・85までの



3～4　1974年度調査トレンチ埋土
13～15　礎石79抜き取り穴埋土
16～19　礎石74抜き取り穴埋土
20～21　礎石73抜き取り穴埋土
23～24　礎石78抜き取り穴埋土

図80　Ｔ７（1/120・1/60）

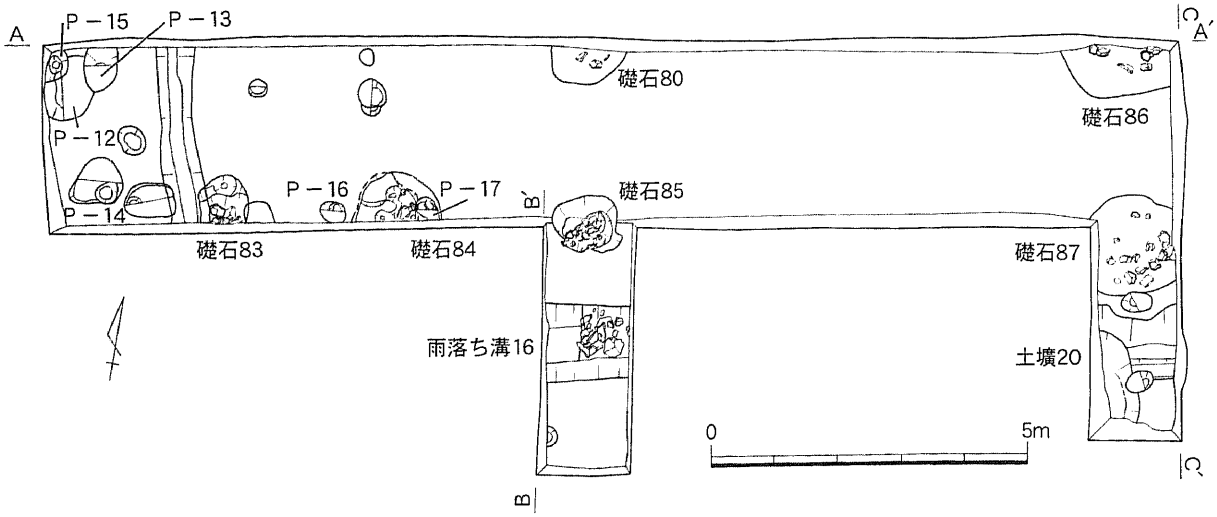
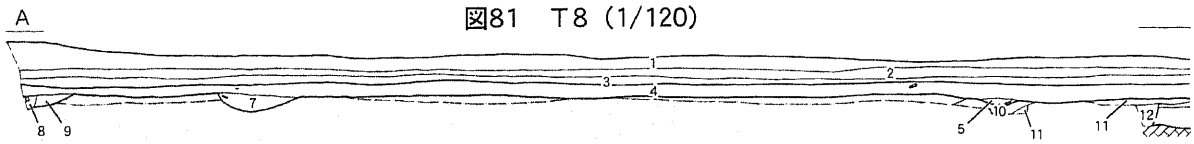


図81　Ｔ８（1/120）



8～9　Ｐ－15埋土
12　　礎石80据え付け穴埋土

図82　A-A'断面（1/60）

西半に集中する。Ｔ８東端では礎石86・87の抜き取り穴２基が検出されたが、礎石80・85以西の建物とは別建物の礎石である可能性が強い。

基本層序

Ｔ７では厚さ約25cmの耕作土（図80 １・２・５層）と約20cmの水田造成土（７層）を除去すると、包含層（９～11層）を介して遺構面となる。遺構面は小礫を含む黄色の基壇土である。

Ｔ８は厚さ約25cmの耕作土および床土（図82A-A' １～３層）下の包含層（図82A-A' ４層）を除去するとすぐに基壇土に達する。基壇土は灰黄褐色系の土層を厚さ30～40cm程度盛っており、標高約22.7mで地山となる。

礎石（図80･81･85･86、図版25-２・３・27-１）

昭和49年度調査区で礎石75・76・81・82、Ｔ７で礎石78を確認しており、礎石自体が残存するものは５基を数える。礎石75は長軸90cm×短軸40cmで、礎石81は長軸65cm×短軸55cmである。礎石78では長軸55cm×短軸45cmをはかり、これらの礎石は他の建物に用いられた中で最小規模の回廊礎石（長さ70cm）より小振りである。

据え置かれていた状態ではないが、Ｔ８雨落ち溝16の上層から平坦面をもつ自然石が出土している。この石は長軸1.0m×短軸90cm×厚さ15cmをはかるもので、その出土位置から僧房建物で使用されていたものが二次的に動かされたものと推定される。これは昭和49年度調査区とＴ７で検出された礎石（75・76・78・81・82）より大きい。

また、礎石の抜き取り穴として確認されたものが、Ｔ７の礎石73・74・77・79、Ｔ８の礎石80・83～87である。そのほとんどに根石が残存し、その石材には10～20cm大の礫が用いられている。礎

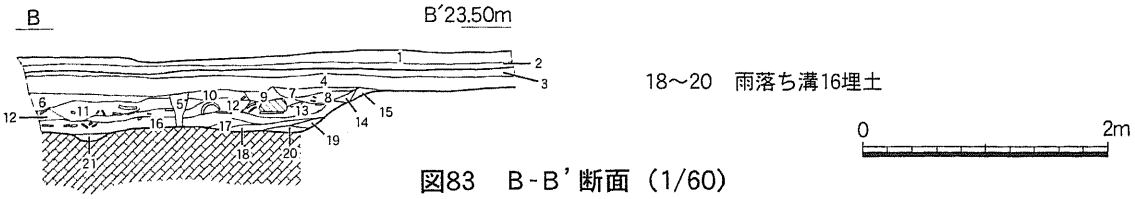


図83　B-B’断面（1/60）

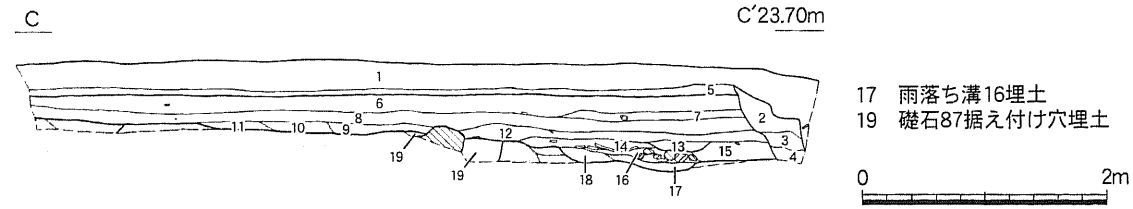
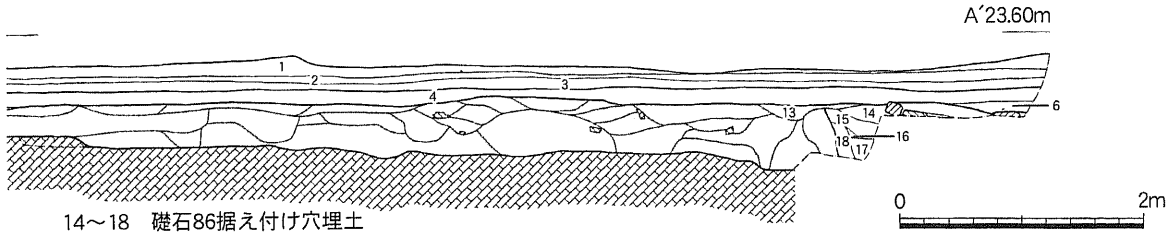


図84　C-C’断面（1/60）



石85では根石に混じって塼の破片が出土し、根石の素材として塼を使用したようである。礎石80において、平面検出では判断が難しかったが、土層観察（図82A-A’12層）によって基壇構築途中に直径1.1m程度の礎石据え付け掘りかたを設けていることがわかった。礎石83～85は建物の南側柱にあたり（桁行２間分）、礎石85の北には礎石80があり、同一建物を構成している。

そして、Ｔ８東端の礎石86・87において、大型の礎石据え付け掘りかたとその根石を確認した。トレンチ西半の礎石と比較して根石の大きさはほぼ同じであるが、礎石据え付け掘りかたは径1.6mと大型である。より大きな礎石と上屋構造をもった建物が想定される。

基壇構造

Ｔ７は柱穴等が濃密に検出されたので基壇の断ち割りは行っていない。したがって、Ｔ８における基壇の観察を中心にその構造をみていく。基壇は、整地された地山上に盛土によって築かれている。盛土は一定の単位で水平に盛られたものでなく、礫を含む土や含まない精良な土を大雑把に埋め立てたようである（図82A-A’東半）。金堂・講堂・南門等が一定の単位で水平に盛土し基壇を構築しているのとは様子が異なる。

なお、Ｔ７の基壇土上面は、掘り上げた地山を基壇土としたようで、黄色を呈している。

図83B-B’において、基壇外周の雨落ち溝16底面が地山であり、その上部に盛土を施すことで、基壇を構築していることが確認できる。礎石の据え付けは、この基壇盛土に掘りかたを設けることによって、根石等を設置した上で行われている。

そして、Ｔ８における僧房基壇は遺構の途切れる礎石80・85までで終わることなく、間隔を置いた礎石86・87まで一連である。また、その南に設けられた雨落ち溝16も同様に連続する。

雨落ち溝と基壇外装（図版26-２）

基壇の南外周に雨落ち溝16を確認した。幅75～90cm、深さ５cmの浅い、現状素掘りの溝である。残存する基壇端の肩から溝の南肩までは約1.2mをはかる。上層には20～30cm大の礫が瓦に混じって大量に出土している。これらの礫が僧房の基壇外装に用いられた可能性もあるが、出土状況からその確証はない。

柱穴（図80・81・85・86、図版26-３・27-２）

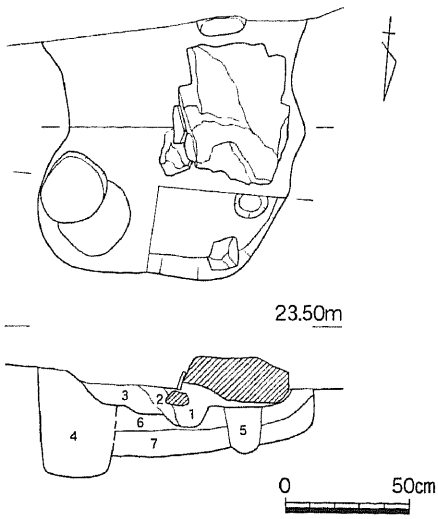
図86の礎石84は抜き取られており、根石が残存している。その東に重複してＰ－17を検出した。Ｐ－17には柱痕（図86　Ｂ１層）が残っており、その下層に礎石84の根石が存在している。切り合い関係から礎石84とＰ－17はＰ－17の方が新しいと考えられる。したがって、礎石84を抜き取った後にＰ－17を設けたものと想定される。

Ｐ－12はＰ－13・15に切られているが埋土から銅印（図229　421）が出土した。Ｐ－14からは緑釉陶器（図89 199・200）や土師器等が出土している。

また、礎石78の北東に所在する柱穴（図85　４層）は床束の可能性がある。床束とは床の加重を支える柱で礎石との位置関係からその可能性を指摘しておきたい。

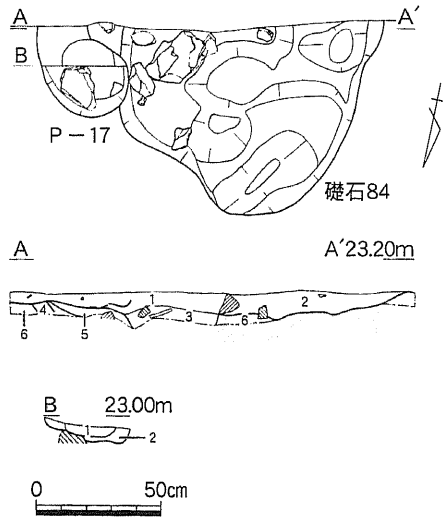
土壙20（図81）

礎石86・87の南、雨落ち溝16を切って検出された土壙である。トレンチ南西隅で検出されたためその規模は不明であるが、長軸1.4m以上、短軸0.5m以上をはかり、深さ約30cmである。その埋土には20～30cm大の礫や瓦片等を含む。最下層は黒褐色粘土でとても粘性が強い。その東に切り合う関



1　褐黒色土（炭粒含む）
2　黄色土と褐色土の混合
3　褐黒色土
4　褐黒色土
5　灰褐色土［柱痕］
6　黄色土（褐色土ブロック含む）
7　明黄色土

図85　礎石78（1/30）



礎石84断面
1　暗灰褐色粘質土（炭粒含む）
2　灰黄褐色粘質土［礎石84抜き取り穴埋土］
3　黒褐色粘質土
4　黄灰色粘質土［Ｐ－17掘りかた埋土］
5　にぶい黄褐色粘質土［造成土］
6　にぶい黄褐色粘質土

Ｐ－17
1　褐灰色粘質土［柱痕］
2　灰黄褐色粘質土

図86　礎石84　Ｐ－17（1/30）

係で検出した柱穴からは図89の土師器皿201が出土している。

僧房の建物構成と規模（図87）

昭和49年度調査区、Ｔ７、Ｔ８で検出した遺構から僧房の建物および基壇について考えてみたい。礎石の状況等から、建物は時期と配置の違いで４種類が想定されるので、時期の古いと考えられる方から列記してみたい。なお、僧房については調査面積の関係等から今回の調査では最終的に基壇東西規模や柱間等不明な点が数多く課題として残っている。第４～６次調査（平成18～20年度）で僧房を中心に調査を行っているので、詳細は次回報告にゆだね、現状（第１～３次調査）での成果から判断できることを述べることとする。

（１）礎石74・80・83～85ほかで構成される礎石建ち建物

創建時の僧房の建物と考えられる。礎石はすべて除去されているが、根石が残存する。礎石80からその据え付け掘りかたは直径約1.1mと推定される。桁行の柱間は礎石83～85から10尺（2.97m）と考えられる。梁行については、礎石80・85および雨落ち溝15との関係から２間もしくは３間が想定される。梁行の柱間寸法についても10尺もしくは11尺が想定可能である。なお、図87では梁行２間、柱間寸法11尺で復元線を引いている。

しかしながら、調査面積および遺存状況から建物の東西規模ならびに南北規模は不明である。ただし、前述したように、基壇はＴ８東端まで一連であるが、この建物は礎石80・85が東限の建物となる可能性が高い。

基壇は外周に雨落ち溝16と昭和49年度に検出された雨落ち溝15がめぐるので、その南北幅は38尺（11.29m）もしくは39尺（11.58m）程度と考えられる。

（２）礎石86・87ほかで構成される礎石建ち建物

礎石86・87以東に続く建物で、大型の礎石据え付け掘りかたをもつ。礎石据え付け掘りかたは礎石87で直径1.6mをはかる。礎石86と87との柱間は11尺（3.27m）と考えられる。また、礎石80・85とは８m以上離れ、その間は遺構が検出されていない。基壇は（１）の建物と一連であり、同時併存の可能性が高い。

（３）Ｐ－17ほかで構成される掘立柱建物

僧房調査区には無数に柱穴が検出されており、中には礎石78の北東に所在する柱穴のように床束と想定される柱穴も含まれる。しかし、礎石84が除去された後に掘られたＰ－17のように、いつの時点かは判断しがたいが、掘立柱からなる建物があった可能性がある。柱のならびは不明であるが、Ｐ－17の西約1.5mに位置するＰ－16がこの建物を構成する柱穴として適当であろうか。

（４）礎石75・76・78・81・82ほかで構成される礎石建ち建物

礎石自体が残存している建物で、昭和49年度調査区とＴ７西端で検出した。約45～65cm程度の小振りな礎石を使用しているのが特徴である。桁行の柱間８尺（2.38m）、梁行２間で柱間10尺（2.97m）等間と想定される。礎石の据え付けは、創建時の建物ほど頑強でない。時期は明確でないが、建替え後の僧房建物と考えられる。

出土土器（図88･89、図版49-１、54-２）

僧房からは、礎石の抜き取り穴や柱穴を中心に土器が出土している。169～189は礎石の抜き取り穴から、190～209は柱穴および包含層からの出土土器である。

169～172は礎石79出土である。根石は残っていないが、位置的には礎石建ち建物（１）の抜き跡

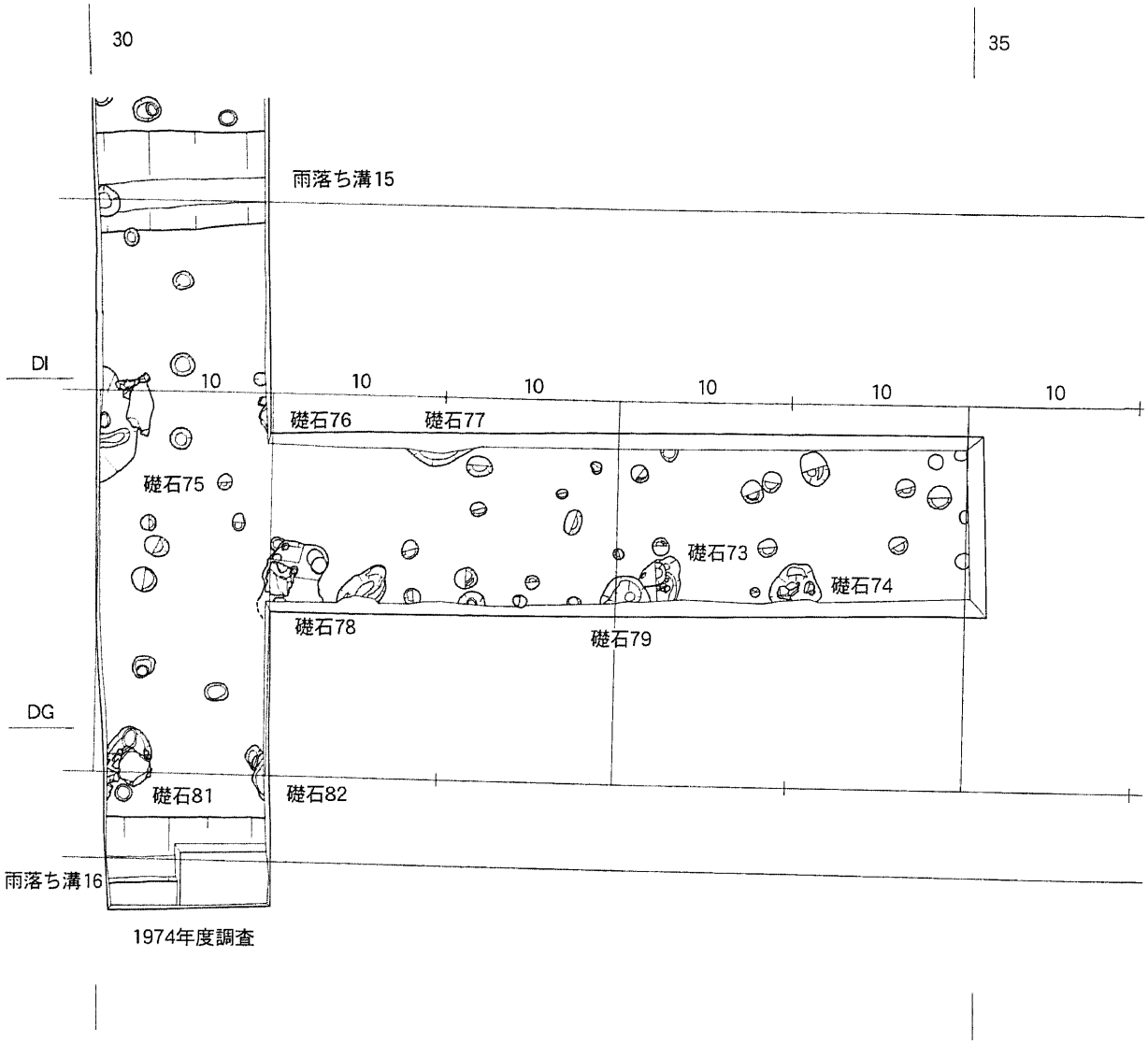
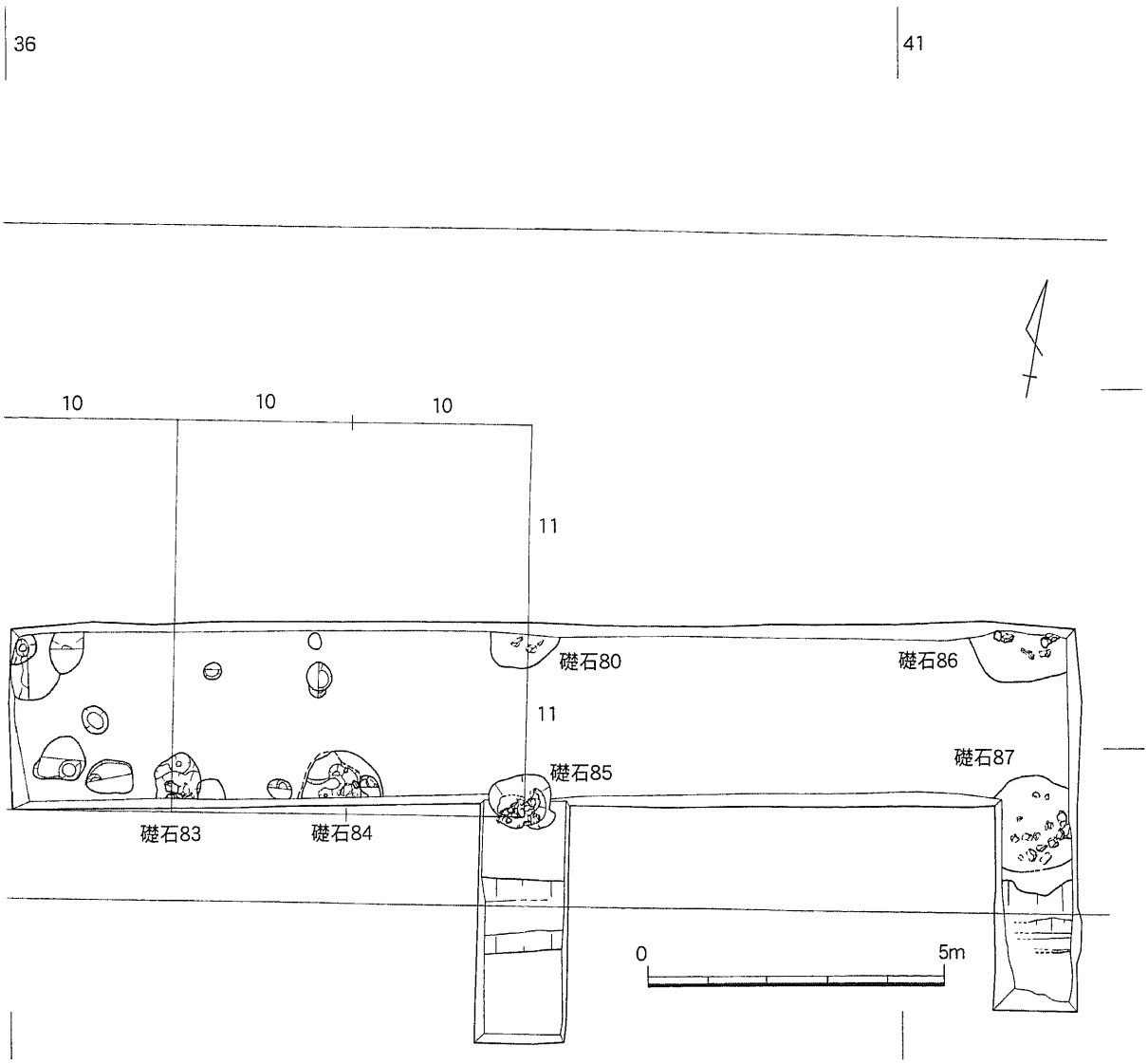


図87　僧房復元図（1/120）

の可能性がある。169は須恵器の杯Ｂ蓋で、口径14.4cm・器高3.0cmをはかる。つまみは碁石状の円形で直径2.2cm、頂部は尖らない。口縁端部付近で屈曲し、段をなしている。170は土師器の杯、171は須恵器の壺である。壺は口径4.5cm、底径3.6～4.0cm、器高9.7cmの小型品で、口縁部から胴部にかけて自然釉がかかる。なお、胴部はナデ調整され、底部は糸切りである。時期は９世紀後半～10世紀初頭と思われ、篠窯跡群の製品である。172は白磁であるが、小片のため全体像は判然としない。肩部に筋状の凹みをもつ小壺かもしれない。

173は礎石83から出土した土師器の杯で、体部は口縁部に向かって外反している。

174～182は礎石84出土で、土師器（174～177）、須恵器（178～180）、緑釉陶器（181）、灰釉陶器（182）からなる。土師器の杯（174～176）は、口径13.2～13.3cm・器高3.2～3.3cmの大きさにまとまる。外面は回転ナデ調整で、底部外周にヘラ切りの痕跡が残る。177は皿である。178は底径6.0cmの椀で、内面がよく焼き締まり、外面は橙褐色を呈する。底部は糸切りである。179は杯Ａで灰白色を呈する。180は杯Ｂで、体部から底部へ屈曲したところに断面逆台形の高台が貼り付けられている。緑釉陶器（181）は円盤削り出し高台をもつ。底部のみのため、皿か椀か判断しかねるが、９世



紀中頃で平安京周辺産である。灰釉陶器の椀（182）は口縁部のみの出土である。口縁端部は外反し、内面のみ施釉されている。黒笹14型式で、９世紀前半～後半の時期と考えられる。

183～189は礎石85から出土した土師器（183～186）、須恵器（187）、黒色土器（188）、吉備系土師質土器椀（189）である。杯（183）は口径9.2cm・器高2.0cmをはかる。底部には指頭押圧後、板目の痕跡がみられる。底部は全体として大きくへこむ。杯（184）は復元口径11.3cm、器高2.6cmで、底部は糸切りである。杯（185）は口径9.7cm・器高2.2cmで、底部ヘラ切りである。186は皿で底部に糸切りの痕跡が残る。187は須恵器の椀と思われる。188は黒色土器椀で、内黒である。189は高台径6.0cmの吉備系土師質土器椀で、高台端部は外側に屈曲する。

190以降は柱穴などから出土した土器である。

須恵器の杯Ｂ蓋190は、口径17.6cm・器高4.3cmをはかる。直径2.4cmで頂部が少し尖る扁平な擬宝珠形のつまみが取り付く。杯Ｂ蓋の169、190はともに時期は奈良時代後半である。191は須恵質の椀である。底部はヘラ切りで、高台を貼り付けている。

192はＰ－12から出土した、外面黒色の高台付き椀である。193はＰ－13出土で、壺の肩部に断面

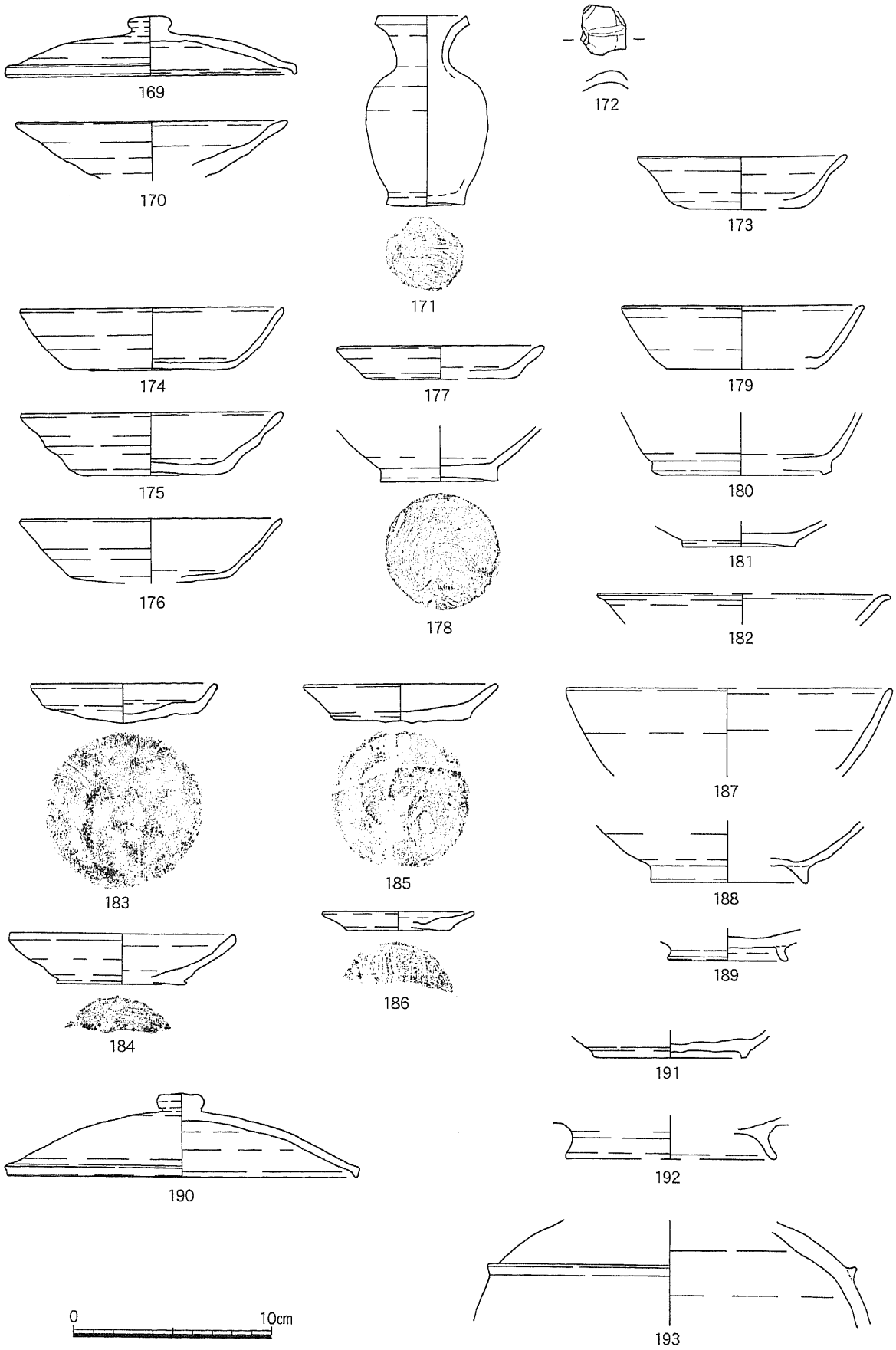


図88　僧房出土遺物（１）（1/3)

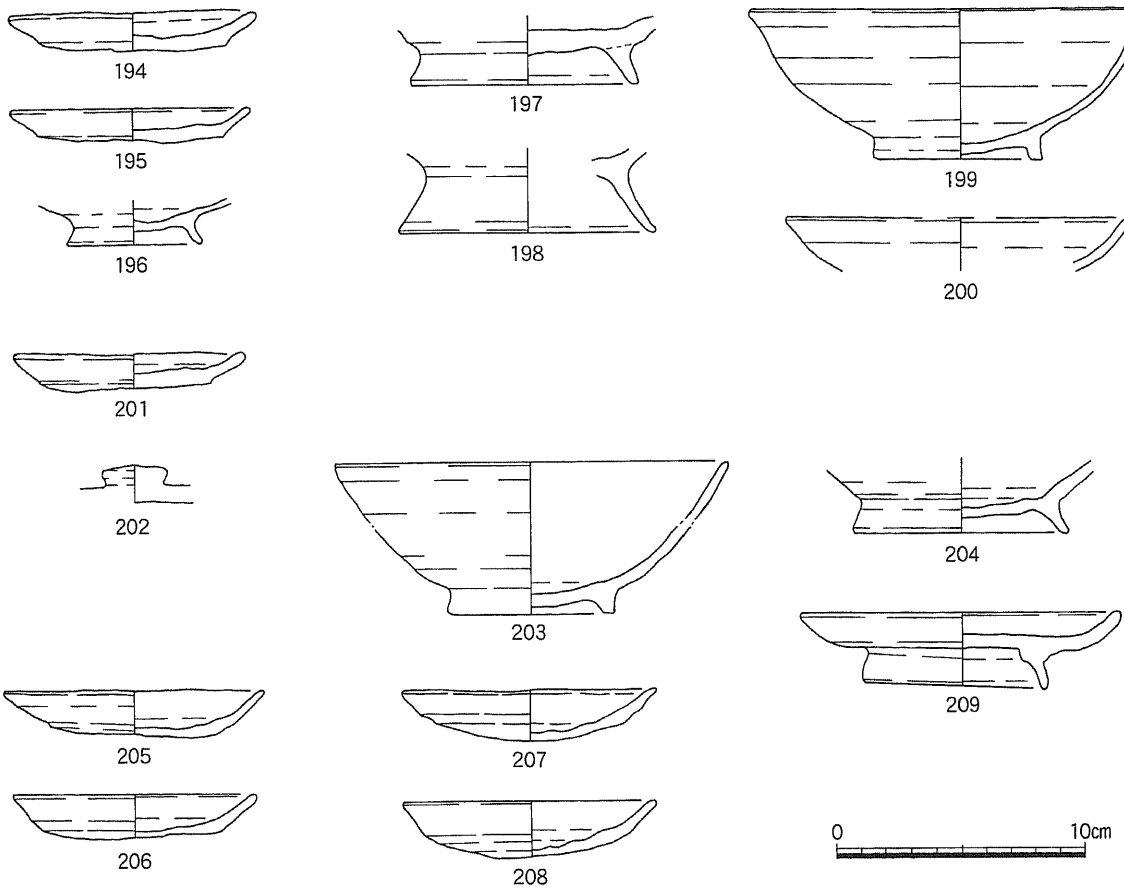


図89　僧房出土遺物（２）（1/3）

三角形の突帯が貼り付けられている。

194～200はＰ－14出土で、土師器（194・195・197・198）、土師質土器椀（196）、緑釉陶器（199・200）からなる。皿（194）は口径9.4cm・器高1.6cmで、底部ヘラ切りである。皿（195）は口径9.1cm・器高1.4cmで、底部はヘラ切り後に板目圧痕が認められる。196は定型化した吉備系土師質土器椀ではないが、復元高台径5.2cmで鮮やかな白色を呈する。白色を強く志向した土師質土器である。197・198は高台付の椀である。197は底部に数条の筋がみられ、板目の圧痕が残る。緑釉陶器の椀（199）は口径15.7cm・器高5.9cmをはかる。平安京周辺産で、前山２・３号窯段階の10世紀前半と考えられる。器壁は薄く、口縁端部は外反する。同一個体の破片がＰ－12・13からも出土している。皿（200）は体部に稜をもつものが退化したものとみられる。

土師器の皿（201）は完形で口径8.8cm・器高1.5cmをはかる。ヘラ切り後の板目圧痕が残る。

杯Ｂ蓋（202）のつまみである。直径2.6cmで扁平な擬宝珠形である。203は須恵器の高台付き椀、204は土師器の高台付き椀である。203は高台と内面底部が青灰色を呈し、その他は褐色を呈する。

土師器の高台付き皿（209）は、口径12.7cm・器高3.0cmをはかる。高台は内面に屈曲部をもって段をなし、外湾して端部に至る。

205～208は土師器の杯で、Ｔ７の基壇上面の柱穴とたわみ付近でまとまって出土した。法量は口径9.4～10.1cm・器高1.8～2.2cmである。205は赤褐色を呈し、底部には板目の圧痕が認められる。

206は２㎜以下の石粒をよく含み、淡褐色を呈す。207も赤褐色をなし、底部ヘラ切りである。208は淡褐色で底部ヘラ切りである。

僧房の存続時期

以上、僧房の建物構成および礎石抜き取り穴や柱穴から出土した土器をみてきた。そこで、時期的な問題を加え、僧房の変遷をまとめてみたい。ただし、礎石抜き取り穴などが中心で、出土した土器の時期幅は大きく、不確定な部分が多い。

礎石建ち建物（1）を構成すると考えられる礎石79、84からは緑釉、灰釉陶器や須恵器壺など、9世紀中頃から後半に比定される土器が出土している。土師器の杯（174～176）についても口径および器高から、岡山県津寺遺跡の平安時代土師器と比較して9世紀後半とみてよい(5)。しかしながら、礎石の抜き取り穴という性格上のためであろうか、礎石85では11世紀代に属する吉備系土師質土器椀189が認められ、礎石の抜き取られた時期に差があったと考えられる。

P－14からは10世紀前半の緑釉陶器199が出土しているが、土師器皿（194・195）および白色の土師質椀（196）は11～12世紀に属すと考えられる。

変遷をおおまかに捉えると、創建時からの礎石建ち建物（1）は、9世紀後半頃の段階で、大きく改修がなされ、掘立柱建物（3）もしくは礎石建ち建物（4）が建てられたと考えられる。

なお、礎石建ち建物（2）は礎石建ち建物（1）と同一基壇上に位置し、根石の据え付け状況が類似していることから、同時期に併存していたものと想定される。

建替えられた僧房は、礎石や柱穴の一部から、吉備系土師質土器椀が出土しており、破片のため詳細な時期は特定し難いが、古代末まで存続していたものと想定される。

（6）塔

現況

寺域南東の一角に花崗岩製の石造七重層塔（高さ約3m）が立っており、この層塔の土台となっている大石（長さ1.8m×幅1.4m×厚さ0.9m以上）が古くから心礎として知られてきた。層塔の周囲2m四方は高まりとなっており、西には石灯籠が、南には石地蔵が置かれ、現在でも地元住民の信仰の対象となっている。この層塔は鎌倉時代後期の作と推定され、木造塔が失われた後に築かれたものである。層塔を中心に塔跡周辺には昭和40年代に桜の木が植樹され、若干の整備がなされている。

昭和49年度の確認調査ではこの心礎を中心に四方で根石状の石を検出し、この大部分は二次的に動かされたものであると判断した。また、根石状の石の下にみられる凹みを礎石据え付け掘りかたの下部と推定し、3間×3間の塔を想定するに至っている。

この調査結果をもとに基壇の範囲と考えられる、心礎から南半について南北12m、東西22mの範囲で調査区を設定し掘り下げを行った。昭和49年度の調査区は幅3mで心礎を挟んで東西方向に設けられており、根石5ヶ所を残して基壇土を断ち割って調査を行っている。今回の調査ではこのトレンチを基準に南側に9m拡張した。そのため、今回調査区の北側の幅3mは昭和49年度調査の再調査となり、新規に調査した部分では基壇土等の断ち割りは最小限にとどめた。

遺存状況（図90）

基壇はその上部と西辺部が大きく削られている。中央部付近では基壇の遺存状況はよく、最大約65cmの厚さで基壇土を確認した。残存する基壇土の上面には礎石は失われているが、9ヶ所で根石を検出し、その構築状況を観察するには良好な遺存状況である。外縁に向かうほど基壇は削られており、平安時代中期以降に設けられた石列や集石が認められる。また一部水田耕作に伴う暗渠や土壙21・

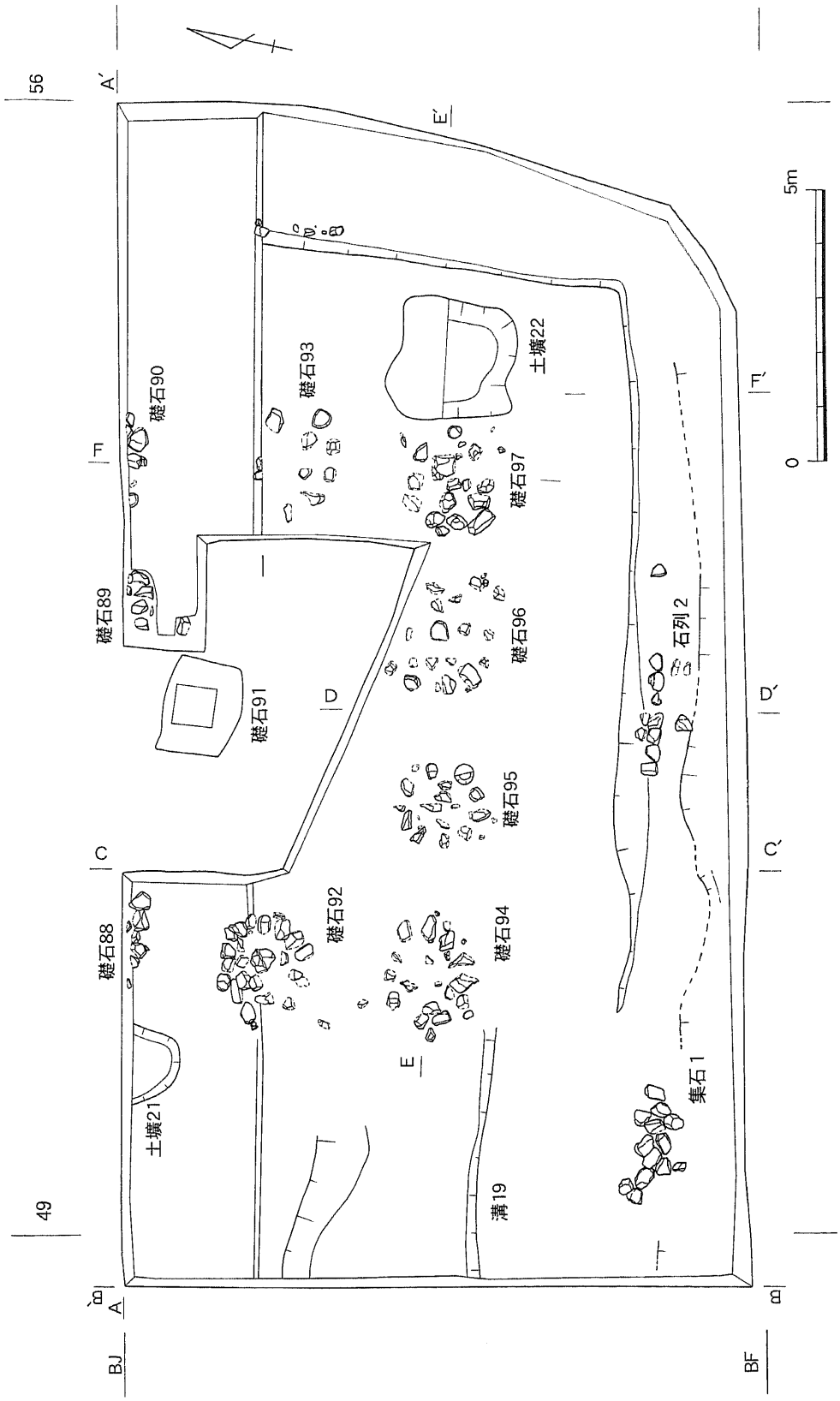


図90　塔遺構全体図（1/120）

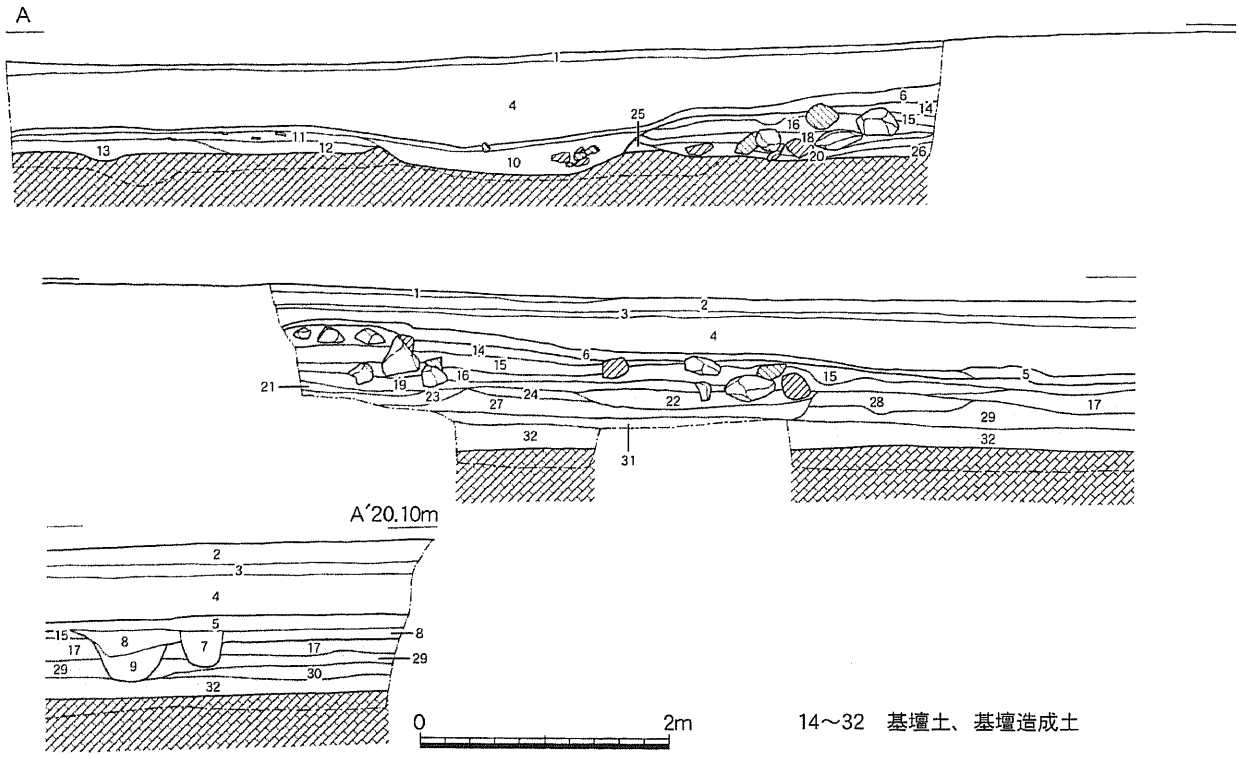


図91　A-A'断面（1/60）

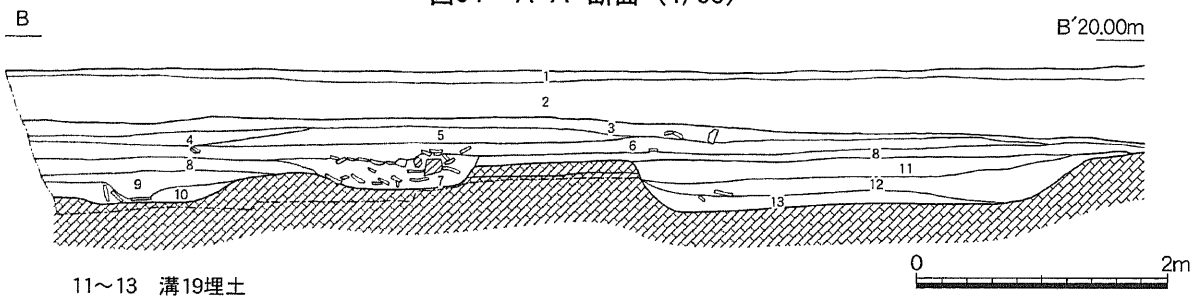


図92　B-B'断面（1/60）

22によって遺構面が壊されている。

塔基壇築成以前の遺構として、調査区西部で東西方向の溝19を検出した。また、調査区南端、基壇外周遺構面より下で、瓦を含む下がりを検出している。調査区外に広がるためその性格を確定できないが、溝19に平行する同様な溝が所在する可能性がある。

基本層序

表土層下には真砂土が厚さ40～60cmで盛られており、その下面に耕作土および真砂土造成以前の表土がみられる。そして、それらを取り除くと遺構面である基壇土が現れる。基壇土は金堂の版築と比べると粗いものである。旧地形（地山）は西から東に向かって下降する。基壇周囲には瓦が堆積し、瓦だまりを形成している。この瓦だまりは屋根からそのまま倒落した状況のものでなく、小片を中心として二次的に基壇外周によせられた様相を示している。なお、表土層下の真砂土層は国史跡指定以前、昭和40年代に塔跡周辺の整地に伴って盛られたものである。

基壇構造（図版5-2）

図91A-A'断面において、地山は調査区西半で標高19.1m、東半で標高18.75mと傾斜している。基

壇を構築するにあたり、地山が低い東半では基盤高を調整するため礫を多く含んだ土（図91A-A'31・32層）で盛土造成を施している。

残存する基壇の上面高は礎石89付近で最も高く、標高19.74mをはかる。残存基壇の上面には各礎石の根石が検出され、基壇東辺と南辺が確認できる。基壇は版築により厚さ10～15cm程度の土層を積み上げている。礎石位置では根石を巻き込みながら盛られ、版築層は黄色系と褐色系の粘質土がみられる。昭和49年度調査では、検出した根石より下位（図91A-A'19～27層）を版築層と考え、主に根石を含む14～18層は褐色が強いため二次的に動かされた土層とし、基壇土とはみなしていなかったが、基壇土は根石上部まで残存していると判断される。なお、黒褐色土には弥生土器細片が含まれており、弥生包含層が用いられたことを示している。

基壇の図91A-A'15層は黒褐色土で、礫をよく含む。その下層の16層は黄色土で、根石を包み込みながら盛られる。この2層は、検出したすべての根石の周囲でみられた。つまり、版築盛土の一層ごと、もしくは同質の盛土の範囲は基壇の広範囲にわたるといえる。

また、図91A-A'断面と礎石92・93を含む東西方向断面から、礎石88～90・92・93の根石下部に基壇盛土の凹みが認められる。この凹みは各礎石の根石の設置範囲にわたってみられる。根石の設置および凹みの構築は標高18.9～19.05mあたりから確認される。一方、地山の標高が高い西半の礎石88・92では地山を掘り込んで根石を設置している。

基盤高調整のための盛土造成から基壇築成までは、一連の過程で行われている。基壇版築は根石下部を凹状に構築し、根石を込め、根石を巻き込むようにさらに積み重ねている。この凹状の構築は根石の設置範囲にわたって認められるもので、礎石および根石設置にかかわる地業と考えられる。

基壇外周下面の標高は東辺で19.05～19.2m、南辺で18.9mであり、ほぼ根石下の地業が始まる標

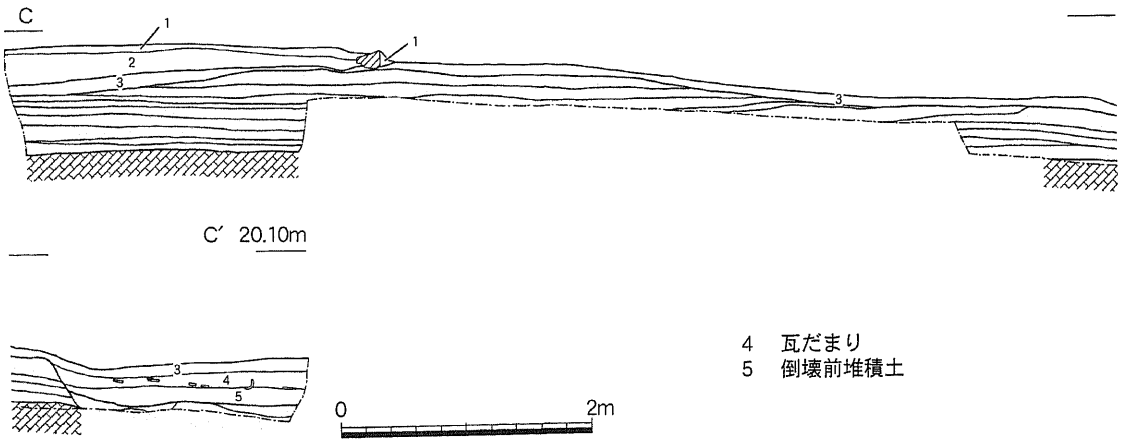


図93　C-C'断面（1/60）

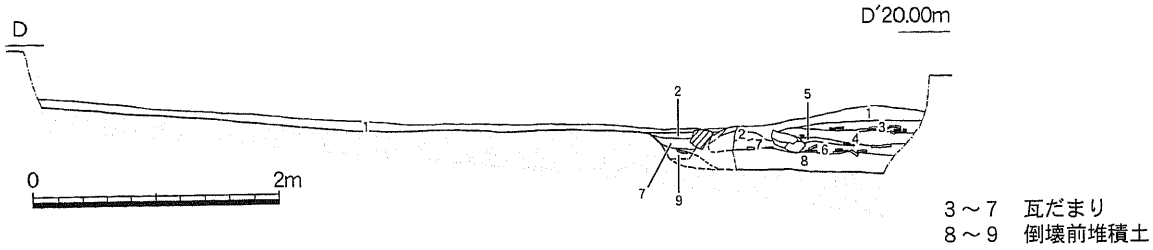


図94　D-D'断面（1/60）

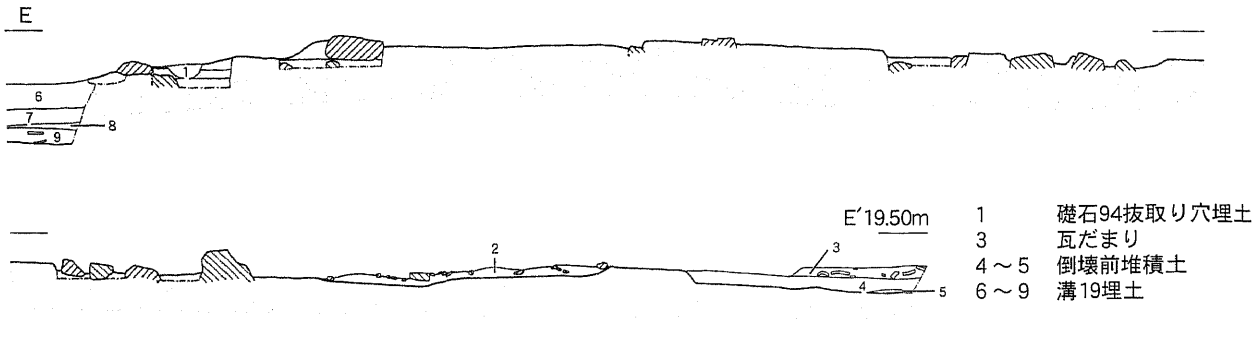


図95　E-E’断面（1/60）

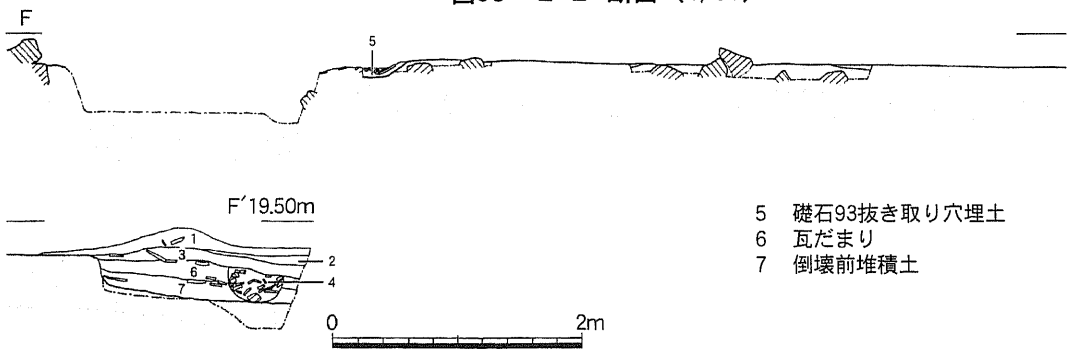


図96　F-F’断面（1/60）

高と一致するので、塔の基壇構築の基盤高は18.9～19.05mと考えられる。

根石（図90・97・98、図版23-２～図版24-２）

先述したとおり、９ヶ所で根石を検出した。四天柱の北東隅の根石１基と側柱の根石８基である。昭和49年度調査で検出されていた根石は礎石88～90および92・93の北部で、二次的に動いていると誤認しているが、図91A-A’断面等で根石を含み込む土層についても基壇土と確認できるので、根石は原位置で設置状況をよくとどめている。

根石は50cm強の人頭大の礫を直径約２mの範囲にわたって円形に配置している。根石の据え置きの厚さは礎石92で最大70cmに及ぶ。

根石の構造の代表例として、礎石92（図97）と礎石93（図98）の断面を示した。地山の標高が高い礎石92では根石下部の地山を掘り込んで地業している。根石を円形に設置しながら、盛土を積み上げており、現状で根石の積み上げは70cmをはかる。礎石92に関していえば、根石の積み上げは下部が広範で、上に向かって狭くなる円錐形を呈しているようにみえるが、上部が完全に残っているわけではないので断定はしかねる。

礎石93では根石下で盛土の凹みが認められる。この凹みは基壇上面から掘り込んだ礎石据え付け穴とは違い、基壇構築初段階のみで掘られたもの、もしくは盛土の過程で凹状に築き上げられた盛土層と考えられる。根石は盛土の中に埋め込まれている。１層は礎石抜き取り穴の埋土である。

唯一礎石の残る心礎（礎石91）については、腐植土の上にのっているものの、周囲から検出された根石の配置から、本来据え置かれていたであろう平面位置をほぼ保っていることが判明した。その他の礎石は、赤磐郡誌によると明治30年の県道改修の際に割って石垣として使用されたと伝えられているので残存しないが、他の堂宇と同様に自然石を用いたものであったと思われる。

石列２（図90）

南辺中央部付近で基壇と平行して東西2.25ｍの範囲で石列２を検出した。石列はその上面レベルをそろえて据え置かれており、石材は約30㎝大のものが用いられている。残りがよい一列のほかに、同一レベルで南北にも若干残存する。これらは一見すると階段の痕跡とも考えられるが、図94D-D'の断面観察によると基壇周囲に平安時代中期とみられる土師器片を多く含む８層が堆積した後に置かれたもので、創建当初からのものではない。

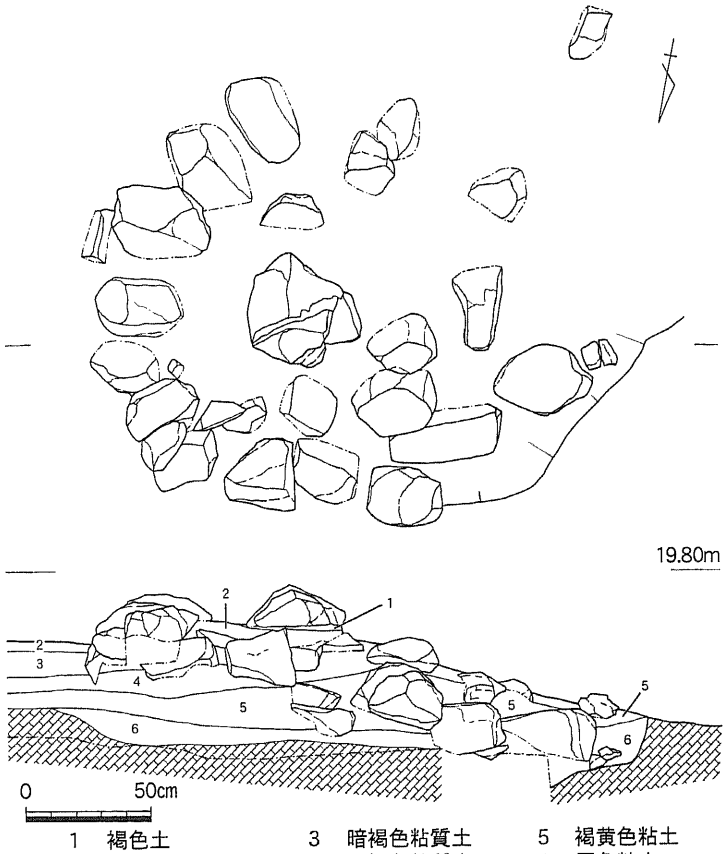
集石１（図90）

石列２と同様に南西隅にも長さ2.15ｍの範囲で礫の集積がみられた。南西隅は基壇が大きく削られ残存していないので、これらの礫は基壇とは遊離した関係となる。また、礫の大きさは根石とほぼ同じ大きさであるが、規則的に配置されたものではない。

基壇規模と外装

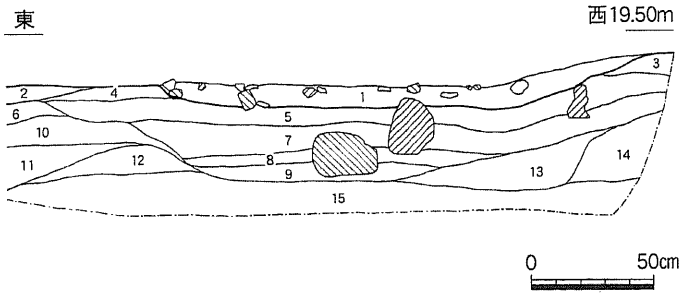
基壇の西辺部は大幅に削られているが、南辺と東辺は残存しており、外周には瓦の堆積がみられた。瓦の堆積を取り除くと、土師器小片を多く含む土層（図93C-C'５層）となる。図94D-D'では８層、図95E-E'では４層が対応する。この土層が堆積層の最下層であり、その下面が基壇外周の遺構面となる。通常は軒先の位置にあたり、雨落ち溝が設けられている箇所である。調査区内では溝の南肩の上がりを検出することができず、調査区外にさらに瓦の堆積が広がっている様子がうかがえた。講堂や僧房と同様、低くなる南側には明瞭な雨落ち溝は作り出していない可能性が強い。なお、南辺中央部の基壇端における残存基壇高は約35㎝である。

基壇外周の南部では遺構面下に黒褐色系の粘質土が基盤高まで認められ、瓦片を含む。この土層は、



1　褐色土
2　褐黒色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　黒褐色粘質土
5　褐黄色粘土
6　灰色粘土

図97　礎石92（1/30）



1　黒灰褐色砂質土［抜き取り穴埋土］
2　黒褐色粘質土
3　黒褐色粘質土
4　褐黄色粘質土
5　褐黄色粘質土
6　黄灰褐色粘質土（礫：１cm）
7　黄灰色粘土
8　灰褐色粘質土
9　褐灰色粘質土
10　暗褐灰色粘質土
11　黄褐色粘質土
12　褐色粘質土
13　暗褐色粘質土
14　褐色粘質土
15　暗灰褐色粘質土

図98　礎石93南壁断面（1/30）

基盤高をそろえるための造成土であると思われる。

基壇外装は他の堂宇と同様に認められなかった。外装が元々なかったのか、もしくは木製の外装を想定できるのか、詳細は不明である。

外装の痕跡が残っていないため、基壇規模は残存する基壇土の範囲により推定することとなる。基壇側縁は南東隅で直角とならず現状では削られているものと考えられる。また、図91A-A'断面でわかるように、基壇土は基壇中央部の残存状況がよく、東に向かって消失していっている（A-A'15層）。かつ、数本の暗渠排水（A-A'7～9層）によって撹乱され、東辺北部では基壇側縁が不明確となっている。そして、北部に向かって基壇外周下面（基壇下部から続く造成面）の標高が高くなり、残存する基壇土との違いが不明瞭となっていく。

検出した東辺南半と南辺の基壇側縁では側柱から側縁までの距離（軒の出）が異なっている。そこで、軒の出を側柱の根石から基壇東辺までの距離を選択して推定復元すると15尺（4.46m）となる。これを南辺についても復元すると、残存する基壇端より外になり、石列2と集石1までを含み込むことになる。この場合、基壇一辺は60尺（17.82m）と復元でき、基壇南辺は削られていることになる。これが推定復元できる基壇規模の最大の数値と考えられる。南辺の残存基壇を重視するならば、軒の出13尺（3.86m）、基壇一辺56尺（16.63m）となる。ここでは前者の復元を想定しておく。

溝19（図90、図版24-2・3）

調査区西部で検出した幅3.7mの溝で、礎石94の下に向かってのびている。断面形状は緩いU字状で深さ40cmをはかり、瓦片を含んでいる。底面は最も深いところで標高18.6mで地山を掘削して設けられている。底部に近い図92B-B'12・13層は、黒褐色粘土が堆積している。

礎石94との関係は図95E-E'断面で示している。礎石94の下までは調査していないので、溝19と基壇版築土との関係性は詳細にはわからない。溝の上層E-E'6層と礎石94の根石がほぼ同一レベルでみられ、さらに根石下に版築土が続くようである。また、礎石94の根石を含む版築土層が6層を切って盛られている。したがって、溝が埋まった、もしくは埋められた後に礎石88・92のように礎石94も基盤面から掘り込んで、根石の地業を行っていると考えられる。

この溝は寺域東西軸と平行して掘られており、塔基壇構築以前の基盤造成のための地割溝であった可能性がある。これを西へ延長していくと回廊の南東隅、そして中門へ至るので、それらとの位置関係を決める上での基準線と考えられるかもしれない。

なお、前述のように、調査区の南端で溝19に平行して東西にのびる下がりを確認した（図90　石列2の南側）。瓦片を含むが埋土は堆積層とは考えにくいものである。南側の肩は調査区の外になり溝19と同様の特徴をもつ溝が所在する可能性が強い。

出土遺物（図99）

基壇外周からは瓦と土師器が相当量出土している。土師器は小片が多く、実測可能なものは少ない。

基壇外周から出土した土師器210～212は高台付の椀もしくは杯であり、213は底部が残存していないので判然としないが、杯もしくは高杯と考えられる。時期を明確にすることは困難であるが、丹塗りされたものが認められ、平安時代においても前半の様相を示しているのではないかと考えられる。

また、塔調査区からの出土遺物として特筆されるものが隅木蓋瓦である（図143）。出土位置は基壇南東隅付近の調査区東壁である。基壇外周にみられた瓦だまりの上層にあたる。

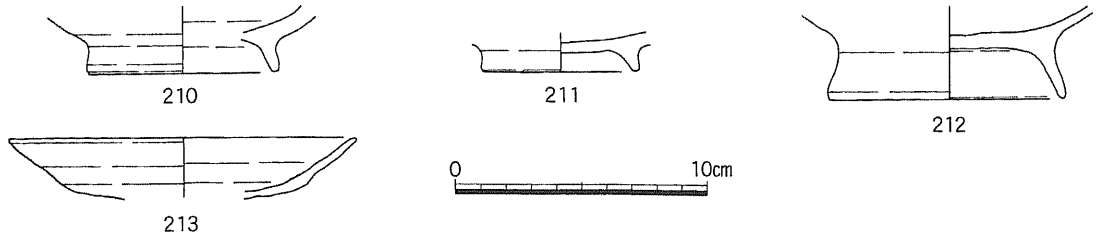


図99　塔出土遺物（1/3）

塔基壇の復元（図100）

建物の柱間は一辺ですべての根石を検出した南辺の側柱を基準に推定すると、10尺（2.97m）等間で、一辺の長さ30尺（8.91m）をはかる。

基壇は側縁が残る東・南辺から軒の出15尺（4.46m）と推定し、規模は一辺60尺（17.82m）と想定できる。根石下部を凹状に構築し、根石を設置しては盛土を敷きならすという方法による。検出された根石は他堂宇の根石の大きさに比して大型であり、根石の設置が頑強なものとなっている。高層建物である塔を支えるがゆえの構造であると考えられる。すなわち、基壇構築方法は金堂のそれとは全く異なり、礎石下の根石による根固め・地業に重点が置かれたものとなっている。

基壇上部が遺存していないので推測の域を出ないが、創建当初の基壇高を推定してみたい。心礎以外の礎石は既に失われているので、礎石の厚さを南門に残る礎石よりやや厚い60cmと仮定する。残存する根石上面高の最大値19.7mに60cmの礎石を置くと、礎石上面高は20.3mとなる。ただし、残存する根石上面が削平されている可能性があるので、礎石上面は20.3m以上となる。現状で心礎上面高が20.9mであるが、若干持ち上げられている可能性を考え、推定される礎石上面高は20.3～20.9mまでの間と考えられる。この数値から基壇上面高を礎石上面高より10cm低く見積もると、20.2～20.8mと推定できる。基壇の基盤高が19.0mであるので、基壇高は1.2～1.8mとなる。

登壇施設については明確な遺構を確認できなかった。石列２は後世の造作によるものと考えられるので、創建当初のものは不明である。基壇東西にも、基壇の張り出し等は確認できていない。石列２を積極的に解釈したとすると、南辺中央部には図94D-D’８層が堆積後もしくは塔廃絶後に、登壇のための構造物が存在したと考えてよい。

瓦片を包含し、基壇構築以前に設けられた溝19と基壇外周南の瓦片を含む造成土の検出により考えなければならないのが、塔がこの国分寺造営においてどの段階で造営されたかである。他国の事例では、遠江・美作で金堂が、武蔵・上野・下野・上総では塔が先行して築かれたことが確認されている（平岡2002・森1998）。現状で国分寺の前身寺院はなかったと考えられるので既に塔以外で瓦を葺いた建物の工事が始まっていたと考えてよいかもしれない。つまり、塔は他の堂宇より遅れて造営が始まった可能性がある。

なお、出土した瓦から、塔は固有の型式の軒瓦を使用しており、型式に古い様相と新しい様相が混在し、竣工が遅れた可能性がある（第４章第１節参照）。

また、塔の存続時期については、基壇外周の堆積層にみられる土師器から平安時代中期頃に廃絶したと考えられる。そして、検出した基壇や根石が創建当初から改変・補修がみられないので、木造塔はそれ以後建て直しがなされなかったものと思われる。

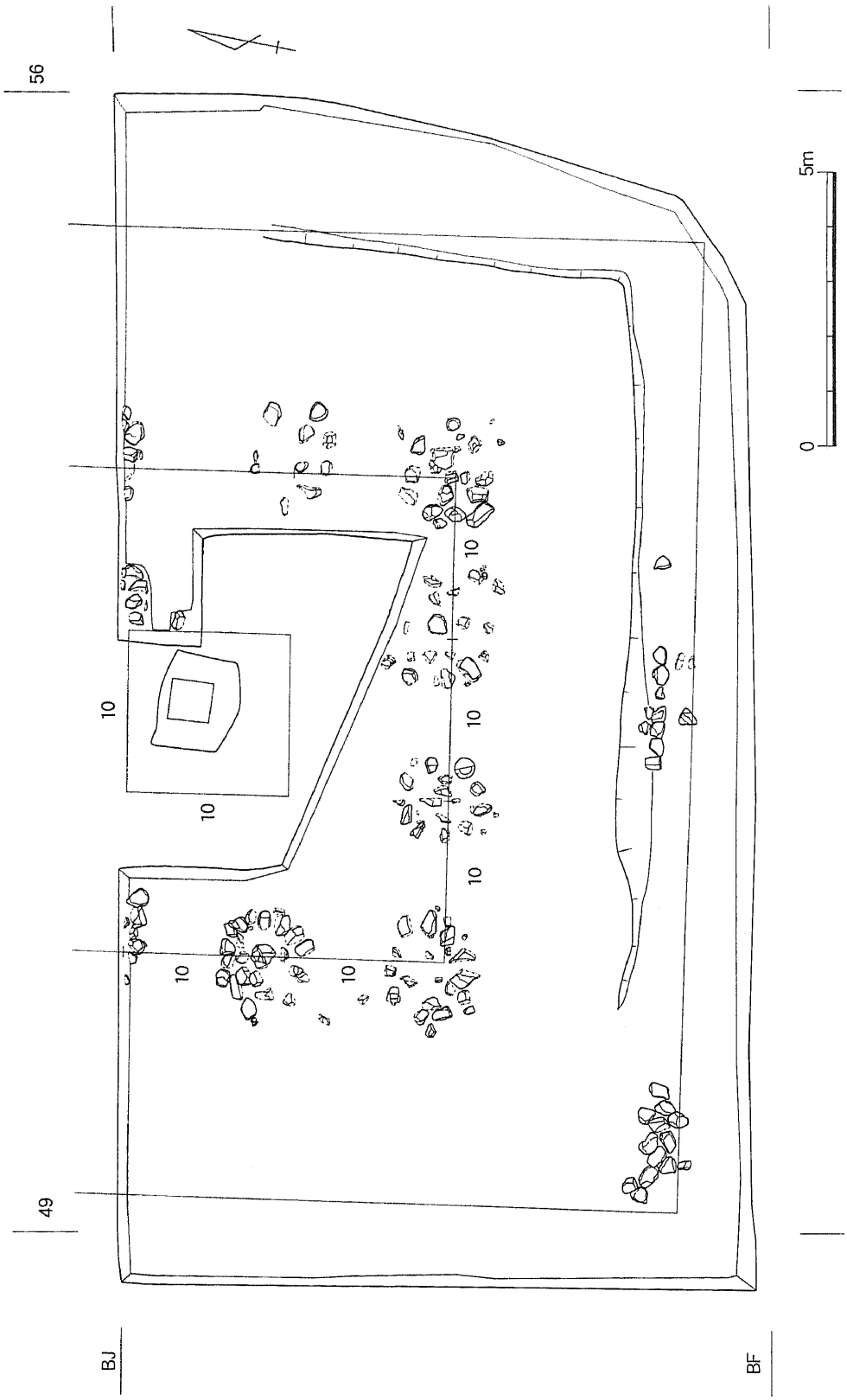


図100　塔復元図（1/120）

（７）築地

１．南面築地［Ｔ15・16］

現況と遺存状況（図101）

南面築地の線は水田の畦畔によく遺存しており、昭和49年度の調査では寺域南西隅にトレンチを設定し、平面Ｌ字形の高まりとその外溝・内側の落ち込みを確認している。この寺域南西隅と南門で検出した棟柱とを結んだラインで南面築地線を想定している。

おおよそBAラインに沿って東西方向に水田の畦畔と側溝がのび、BAライン北側の水田と南側の水田の比高差は約60cmに及ぶ。水田造成の際、畦畔には石垣を組んでおり遺構をかなり損壊しているものと思われる。南門の中心から約69m東で、塔基壇の南にあたる箇所に、BAラインを挟んで北にＴ15、南にＴ16を設け、あわせて長さ13m・幅2.2mのトレンチにより南面築地の確認を行った(6)。

畦畔より南のＴ16は大きく削平されており、地山は標高17.88mでほぼ水平に検出された。東西方向の浅い溝を２本確認したが、築地にともなうものではない。一方、畦畔より北のＴ15は約2.4mの幅で地山と盛土からなる基壇状の高まりを検出した。これが築地塀本体と考えられるのか、もしくは犬走りを含めた築地の基礎部分（基底部）となるのかは検証が必要であるが、東西方向にのびる遺構で南面築地の位置・構造を考えるには遺存状況がよい。また、築地遺構の北側には瓦だまりが形成されていた。築地遺構の北側の肩は確認できたが、南側の肩は畦畔の造成によって削られ消失していた。

基本層序

Ｔ15では厚さ約15cmの水田耕作土および床土を除去すると、厚さ約20cmの包含層を介して標高18.6mから瓦だまりがみられる。トレンチ北半は瓦の小片と小礫をよく含む。南半では完形に近い軒平瓦や平瓦がみられる。瓦だまりの下位には南半に残存高最大37cmで築地と考えられる遺構が検出され、それより北側には瓦だまりが形成されている。瓦は築地のほか塔からのものを多く含むとみられる。

Ｔ16では厚さ約20cmの水田耕作土と床土の下に溝21が掘られている。この溝を掘り込む際に、溝の北側を盛土し畦としているようである。また、調査区南端には溝20が掘られている。

地山はＴ15・16とも黄色粘質土である。

築地

前述のように、Ｔ15の南半で残存上面幅1.92m・残存底部幅約2.4mの築地と考えられる基壇状の高まりを検出した。この高まりの南側は水田の畦畔に伴う石垣とその裏込め石材によって壊されている。そのため、この高まりが南にどのくらい続くのかは不明である。北側は底部から平坦面が続き、雨落ち溝は認められない。高まりの残存高は最大37cmで、底部から高さ22cmまでは地山の削り出しによって構築されている。その上部の厚さ15cmは２～３cm大の礫をまばらに含む黒褐色粘質土を盛っている。

地山の削り出しと１層の盛土による築地と考えられる高まりは残存底部幅が約2.4mであるが、南側を畦畔によって削平されているため、その幅はさらに大きくなるものと思われる。

なお、上面で寄柱や添柱等と想定されるような柱穴は検出していない。

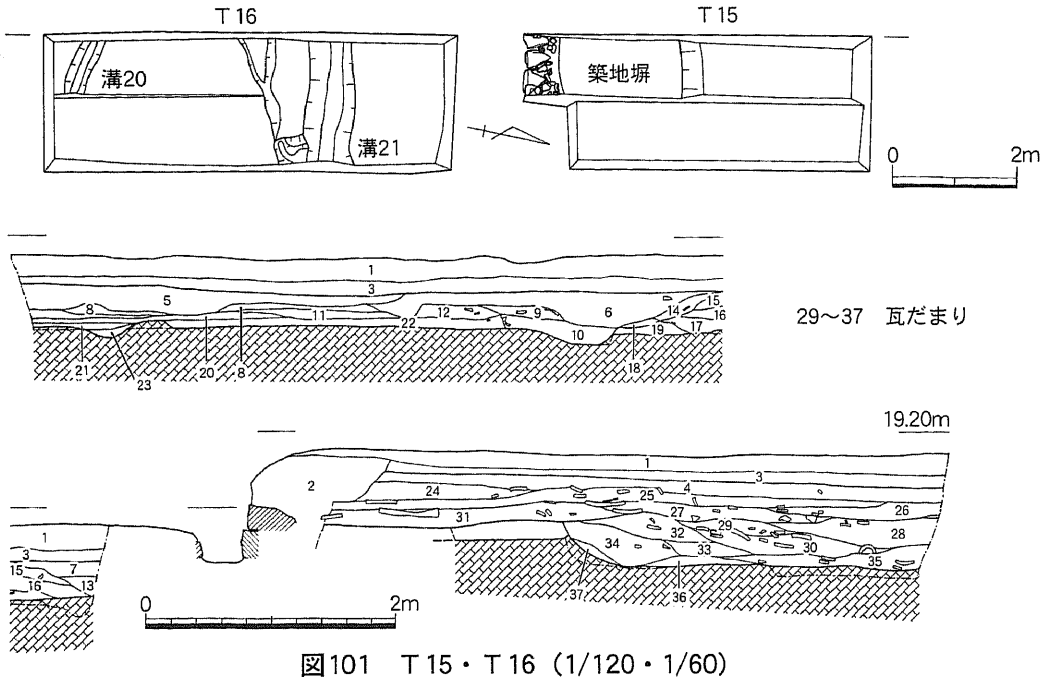


図101　T15・T16（1/120・1/60）

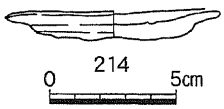


図102　T15出土遺物（1/3）

築地北側の瓦だまり

築地と考えられる遺構の北側は平坦面であり、雨落ち溝は設けられていない。図101　30～37層は灰色系の粘質土が堆積し、30層上面付近に比較的大きな瓦片で構成された瓦だまりが認められた。27～29層では瓦の小片と小礫が多く堆積していた。

T16（図101）

地山は標高17.88mでほぼ水平に検出された。T15において築地北側の下面の標高が18.12mであるので、畦畔を境に南側は水田を造成する際に削平されているとみられる。そのため、築地に伴う雨落ち溝等は検出されなかった。また、築地北側に比べると瓦だまりも遺存しておらず、後世に大きく改変を受けていると考えられる。

溝20は地山を掘り込んだ、幅38cm・深さ最大12cmの小規模な溝である。

溝21はその南側にも溝状の下がりが認められ、本来は南にもう少し幅が広い溝だったかもしれない。溝21の北側には14～19層が土手状に堆積している様子が認められる。これは、溝21を掘削した際に生じた土を畔もしくは土手とするために盛ったものであると思われる。

出土遺物（図102）

214は、T15の築地北側から出土した土師器の皿である。底部はヘラ切り、内面に沈線で円が描かれている。

南面築地塀の復元

通常、築地塀本体は版築工法によって築成され、その基底幅等の規模は囲繞する施設の格式・性格・位置・範囲によっていくつかのランクに分けられるようである。築地塀本体の基底幅は平城宮南面大垣で2.7mをはかる大型なものがある（黒崎1997）。他国の国分寺で検出された事例では、讃岐国分寺跡東面築地で幅3.6mの基底部両端に1.8mの幅を隔てて屋根から落下した状態で瓦列が検出されており、瓦列で挟まれた1.8mが築地塀本体の基底幅を示していると考えている（国分寺町教育委員会1996）。

但馬国分寺は添柱や寄柱と考えられる柱穴の間隔が約2.4mあることから、これを築地塀本体の基底幅と推定している（豊岡市教育委員会2007）。

トレンチで検出した南面築地の基壇状の高まりは残存底部幅が約2.4mであり、この北側には雨落ち溝が設けられていない。そのため、この高まり自体が築地塀本体と考えると、屋根からの雨水や排水等を直接築地塀が受けることとなり、築地塀が浸食されやすく、構造上問題があるのではないだろうか。また、築地塀の基底幅が2.4m以上であると、平城宮南面大垣に匹敵する規模となってしまい、やや大型過ぎる感がある。

そこで、南側が現状で削平されており、さらに底部幅がのびることを想定し、これが犬走りを含めた築地基壇（基礎部分）と考え、築地塀本体は消失し残存していなかったと推定したい。そのように考えると、築地基壇の底部は2.4m以上、築地塀本体の基底部はそれにおさまるくらいのものであったと考えられる。

２．東面築地［T17・18・19B］

現況と遺存状況（図103～105）

東面築地は、昭和49年度確認調査において南・北・西面築地よりも多くの情報が得られていた。３本のトレンチを設定しており、うち２本で築地に伴う雨落ち溝を検出している。それらをつないだ線を東面築地の線として推定している。東門については未確認である。

今回の調査では、昭和49年度調査区のうち細部が不確定な北側２本の再調査およびトレンチの延長（T18・19B）と新たにT17を設定し、東面築地の確認を行った。

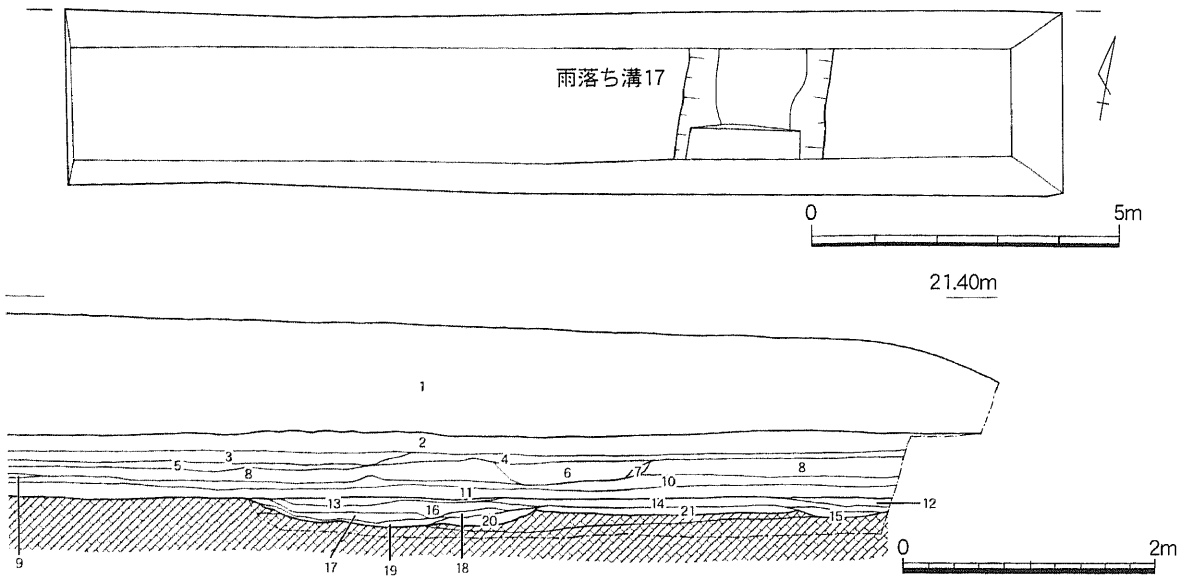
寺域東辺付近は南東隅から約40～100mの間については昭和50年代に厚く盛土造成されているが、それ以外は現状で水田である。T18より北部の水田においては南北方向の畦畔が部分的に東面築地の痕跡を残している。

T19Bでは以前の調査結果同様、築地の内溝および外溝と考えられる溝を検出した。T17においては削平が大きかったものの、築地外溝と推定される溝が浅く遺存していた。溝からは須恵器や瓦とともに青銅製品の鋳造に関する遺物が多数出土し、寺域外に国分寺の造営にかかわる工房等の存在をうかがわせる。T18では昭和49年度調査区を東西に拡張したが後世の削平がひどく築地に関連する遺構は認められなかった。

基本層序

T17として長さ16m×幅３mのトレンチを設定した。水田層の上部に1.1mの厚さで真砂土を中心とした造成がなされている。水田層の下に厚さ約36cmの堆積土がみられ、地山に至る。地山は黒褐色砂質土で部分的に礫を多く含む。地山を掘り込んで雨落ち溝17が構築されている。地山上面の標高は19.68～19.85mをはかる。雨落ち溝17埋土にはサヌカイト小剥片を含むが、これは本来地山に含まれていた可能性が強い。

T18は長さ22m×幅３mのトレンチであるが、西端から６m東で水田の石垣を検出し、それより東部は一段下がって別の水田となっている（比高差70cm）。水田の石垣から約1.5m東方から６mの長さで昭和49年度の調査区を確認した。すなわち、遺構等が確認されていなかった昭和49年度調査区は水田造成によって大きく削平された箇所に設けられていたことになる。T17と同様に約0.6～1.3mの厚さで昭和50年代の盛土造成がみられ、その下に水田層と床土を検出した。さらに下層には旧水田



13・16～20　雨落ち溝17埋土

図103　T17（1/120・1/60）

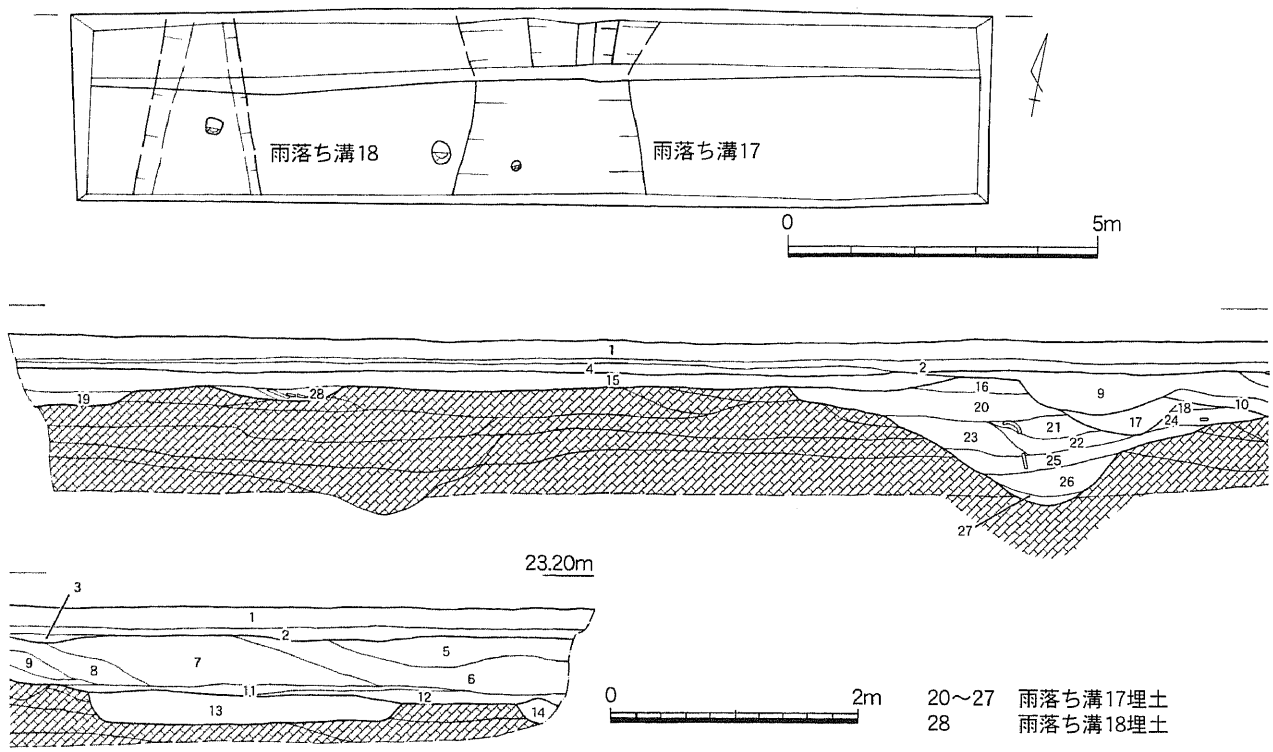


図104　T19B（1/120・1/60）

層も認められる。その下に黒褐色粘質土の地山を検出した。地山上面の標高は西端で20.96m、東端で20.48mである。

T19Bは長さ15m×幅3mのトレンチである。昭和49年度調査区と同一箇所であるが、築地等の詳細把握を目的とした。水田層および床土を除去すると、東半は厚さ約50cm（図104　3～12層）、西半は厚さ約20cmの水田造成土があり（4・15層）、その下に地山を検出した。地山は暗褐色系の土層で、これを掘り込んで雨落ち溝17・18が設けられている。

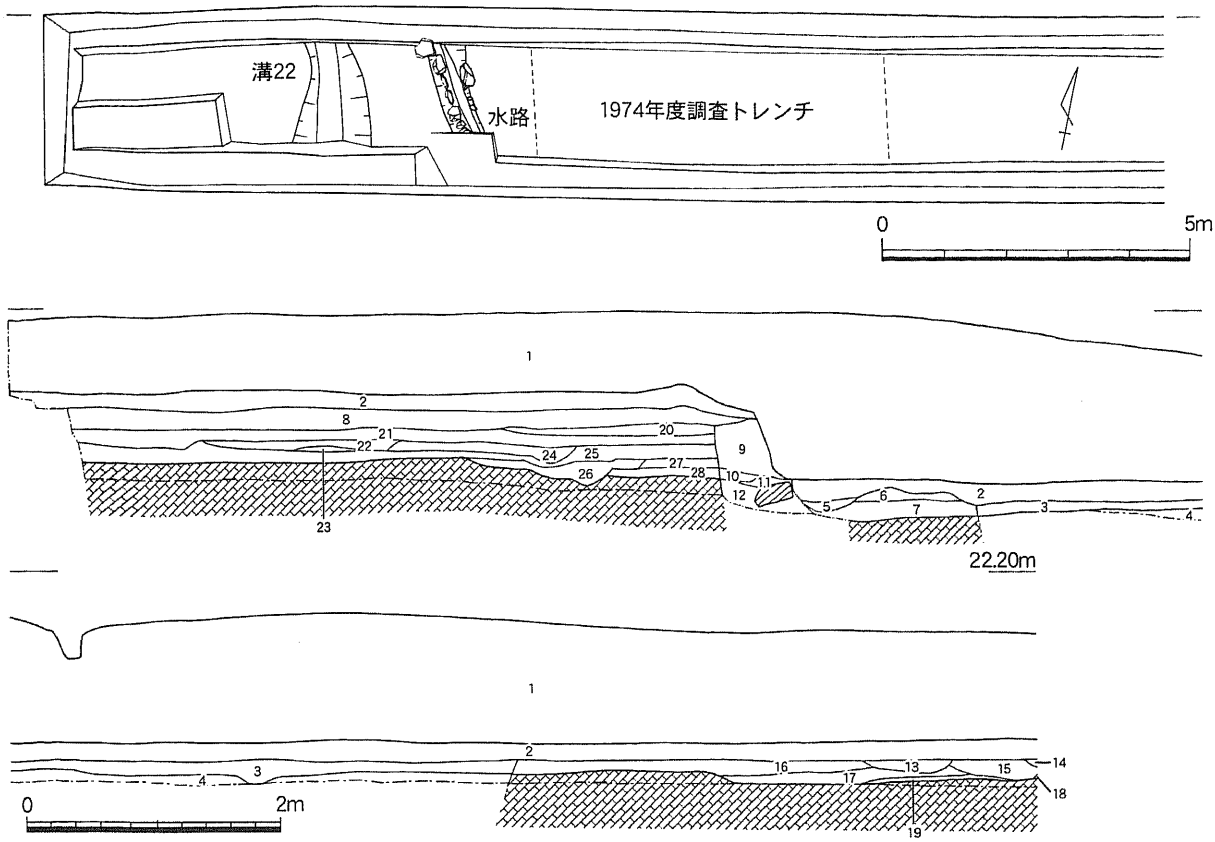


図105　T18（1/120・1/60）

雨落ち溝17（図103・104、図版28-2・3・29－3）

T17とT19Bで検出された。

T17では幅2.3mをはかり、断面の形状は浅い逆台形である。検出面からの深さは23cmで、図103 13・16～20層が堆積している。

16・18層の暗褐色粘質土が上層で、17層の灰黒色砂礫層を介し、さらに下層の19層である褐黒色粘質土が堆積している。16・17層から多くの炉壁が出土した。また、16・18層は炭粒を多く含み、溝の東側に広がる14・15・21層も炉壁等の包含層であり、東側の肩は元々きわめて低いものであったことが明らかである。その他、溝の堆積土からは奈良時代後半の須恵器や瓦等が共伴しており、埋没は創建から比較的早い段階に進んだと考えられる。

溝の西肩は標高19.8m、東肩では19.7mである。西肩はより高かったものが削られていると判断できる。

T19Bにおいて溝の肩部は水田造成によって削られているが、検出面での残存幅は3.83mをはかる。溝の堆積土は図104　20層から27層で、断面形状はV字形である。西肩部から96cmの深さとなり、埋土は黒褐色を呈している。昭和49年度に検出した溝と同一である。

雨落ち溝18（図104）

昭和49年度調査では雨落ち溝17とほぼ同規模の溝を想定している。今回調査でも同様の土層堆積を認めたが、昭和49年度に確認した溝は無遺物で上方から掘り込まれたものではないことから、創建以前の自然流路の一つであり地山の一部と考えてよい。つまり国分寺造営時においては基盤層となる。

それとは別にこの上面で幅1.1m、深さ12cmの雨落ち溝18を検出した。雨落ち溝17と比較するとかなり浅い。埋土は図104 28層の暗褐色粘質土で、瓦を含む。北面築地で認められたように、築地の内溝は外溝と比べると格段に小規模なものであるという結果と合致する。

溝22と水路（図105）

溝22は、T18西半で検出した幅約1.2m、深さ20cmの溝である。南北方向にのびるが、包含層を掘り込んで設けられていることから後世の水田耕作に伴う溝と考えられる。設けられた位置からもこの溝は東面築地に関係するものではない。

この東にほぼ平行して石垣をともなう水路を検出した。西側に4本、木杭が打ち込まれている。これも後世の水田耕作に伴う溝である。

T18では築地に関係する遺構は検出できなかったが、溝22や石垣など後世に南北方向の土地利用が認められ、それ以前に築地等の地形の起伏があったことを思わせる。

出土土器（図106、図版50-2）

T17から出土した遺物で、主に雨落ち溝17とそれより東側の包含層から出土した。215～217が須恵器、218・219が土師器である。

杯B（215）は口径13.9cm・器高4.1cmで、径高指数は29.5となる(7)。高台端面は凹状をなしている。216も杯Bであるが灰白色を呈し、底部が残るのみである。217は甕の底部と胴部の一部で、胴部外面に格子目のタタキ、胴部内面に同心円文の当て具痕跡がみられる。平底である。

218は甑の口縁部で、外面にハケ調整が認められる。219は甕で、口縁部内面にハケ、胴部内面にヘラナデ、外面にハケ調整が施されている。

出土した土器は、奈良時代後半に属すると考えられる。

青銅製品鋳造関連遺物（図106・107・108、図版53-1）

青銅製品の鋳造に関わる遺物は、奈良時代後半の土器と共伴してT17の雨落ち溝17とそれより東側の包含層から出土した。大量の青銅溶解炉壁、銅粒、羽口、鋳型などからなる。

220・221は羽口である。220は外径5.1cmをはかる。222は不明土製品で、厚みのある製品の一部である。

223・224は鋳型片である。223は残存長7.4cm・最大厚3.1cmで、外面が円弧状になる。内面には褐色と灰褐色の砂（図106ドット部分）が認められる。224は外面黒褐色を呈し、残存長5.4cmをはかる。223と同様に内面に褐色と灰褐色を呈す砂が確認される。どのような製品の鋳型かは不明である。

225～233は炉壁である。総量としてコンテナ4箱分ほどが出土している。

225は最大厚4.8cmで、内面は赤色および黒色を呈し、気泡が認められる。外面には粘土帯（幅5～6cm）を積み上げた痕跡が明瞭に残り、粘土中に0.5～1.0cm大の礫と0.1cm大の砂粒、スサを混和している。226は最大厚2.8cmで、内面は赤色で気泡があり、外面は灰色を呈する。

227は内面から外面へ貫通する、鞴の送風孔と考えられる孔が確認される。内面は赤色を呈する。228は内面黒色を呈し、黄褐色の付着物や銅の付着が認められる。内面は箱状に屈曲をもつ。229はこの炉が円筒形を呈すことを明瞭に示している。内面は黒灰色で気泡と橙褐色の付着物がみられる。外面は灰色でスサの混和が認められる。230は内面が外方に拡張しており、口縁部となる。黄褐色の付着物や銅の付着、気泡がみられる。

231は内面黒灰色で、銀色・橙褐色の付着物が認められる。丸底状を呈しており炉底と考えられる。

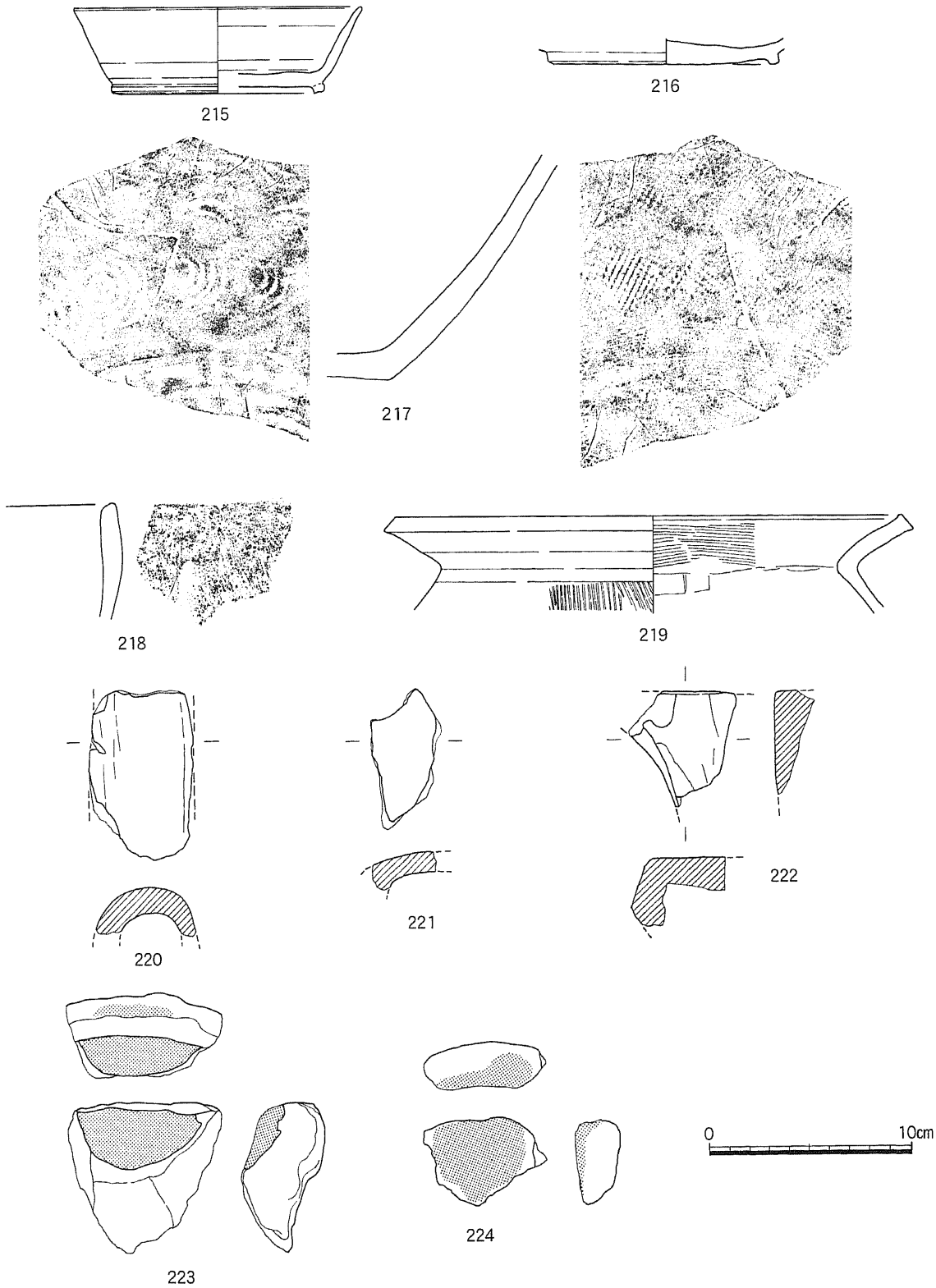


図106　Ｔ17出土遺物（１）（1/3）

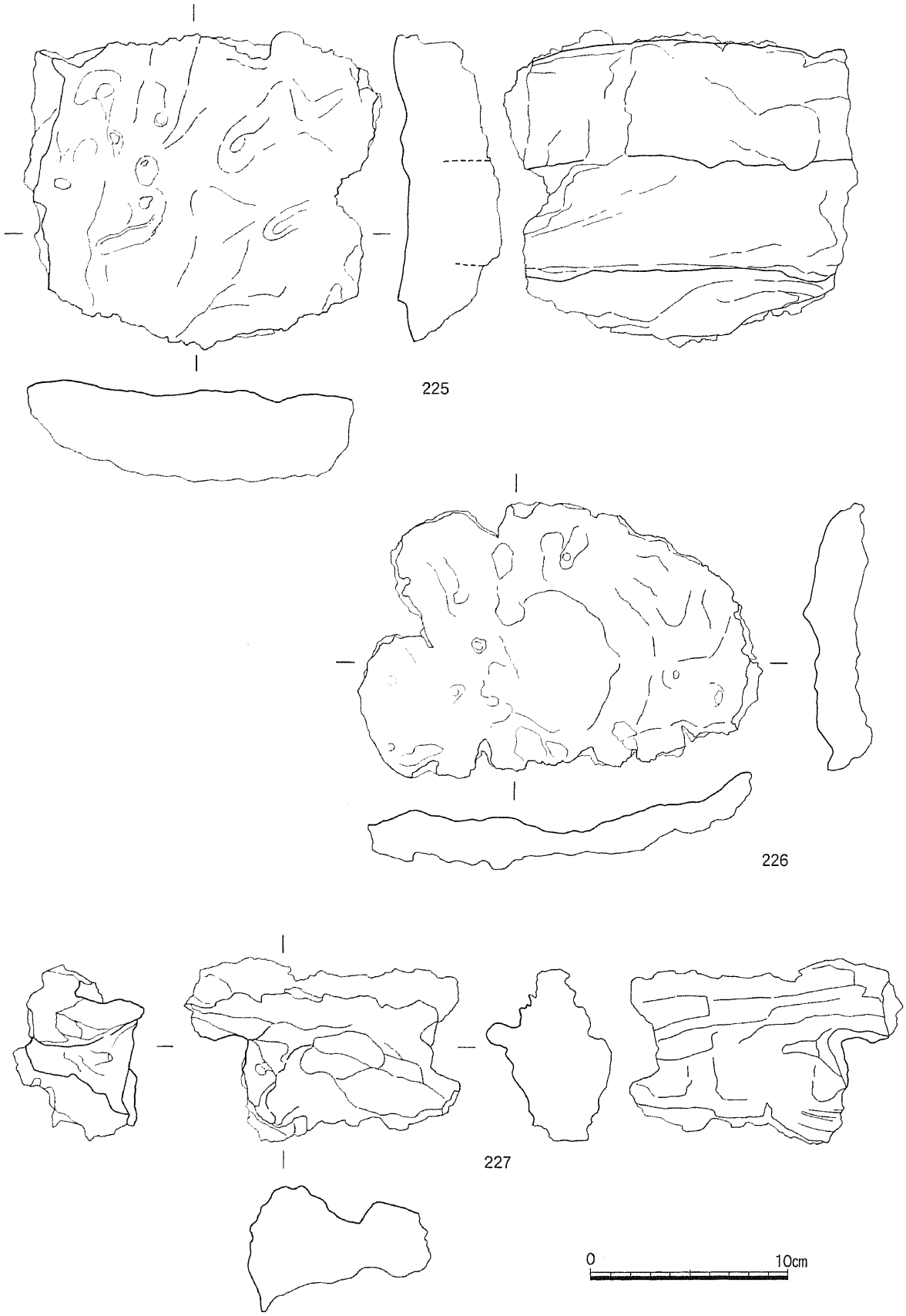


図107　Ｔ17出土遺物（２）（1/3）

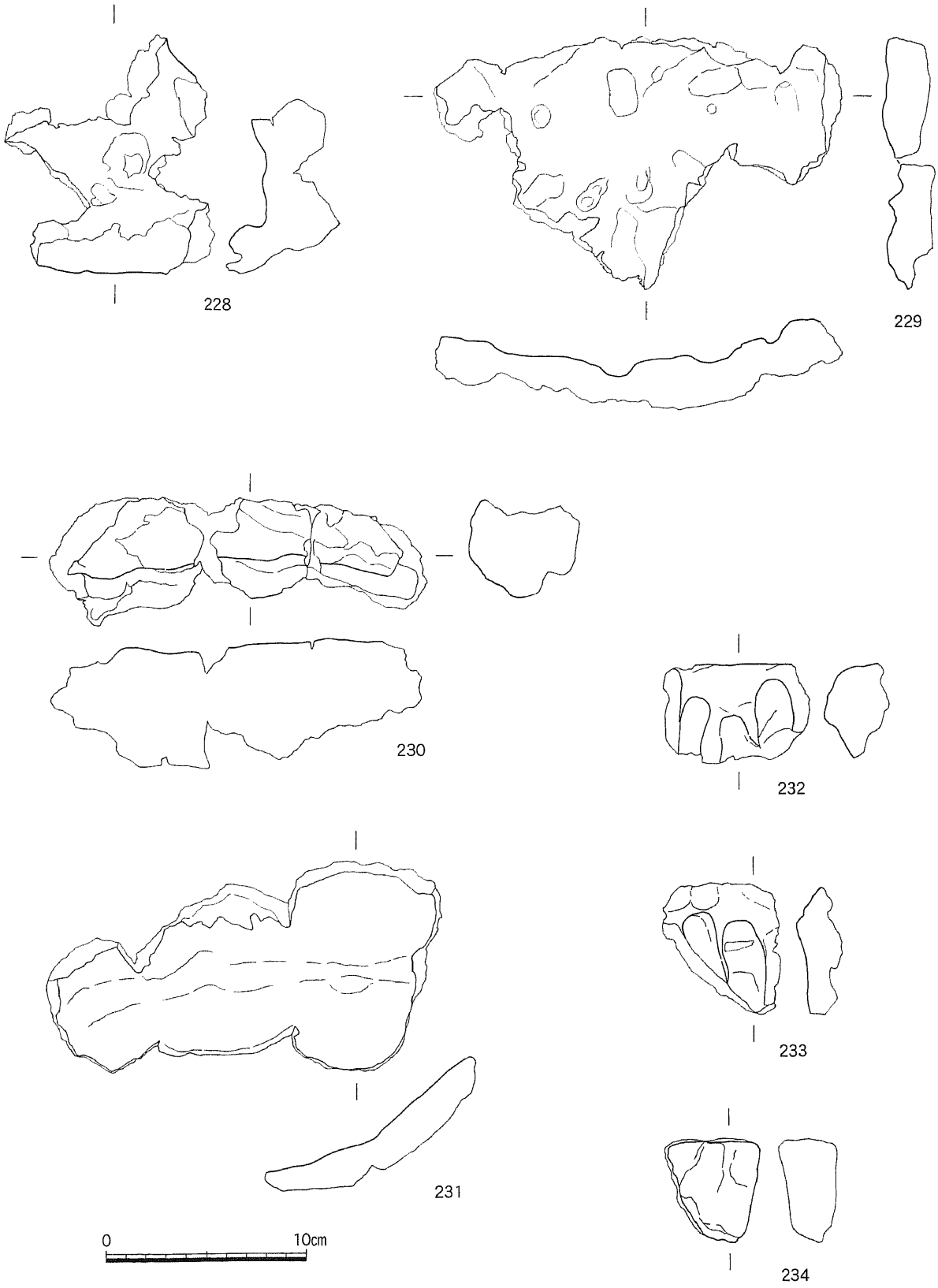


図108　T17出土遺物（3）（1/3）

232・233は内面灰色で、指オサエの痕跡がみられる。234は重量感がある、灰褐色の銅塊もしくは銅滓である。

以上、出土した炉壁の特徴から、この炉は青銅製品の鋳造に伴う溶解炉であったと推定される。炉は粘土帯を積み上げた円筒形の甑炉、竪炉の形状を呈する。溶解炉の先行研究を参考にすると（神崎1998・池田1998)、古代から中世の溶解炉は３～４部分からなる甑炉に復元されており、この炉もそれに合致する。

すなわち、228・230などの銅の付着や黄褐色の付着物が認められたり、232・233のように指オサエの痕跡がみられたりして、口縁部状の形態を呈したものが上段と考えられる。そして、円筒形の膨らみをもつ225・226・229は中段、送風孔をもつ227は下段、丸底状を呈す231は最下段と推測され、円筒形の甑炉が復元できる。

炉壁等の多さから、トレンチの北東至近の位置に鋳造遺構が所在するとみられる。

寺域東限と青銅製品の鋳造

築地塀本体の検出はできなかったが、T19Bで二本の平行する外溝と内溝、T17で外溝を確認した。昭和49年度調査の成果とあわせ、これらのトレンチを設定したラインに寺域東限が所在すると推定されるので、雨落ち溝17・18は築地塀に伴うものと認定してよい。両雨落ち溝間の距離は肩部上面で3.6mをはかる。

また、T17の雨落ち溝17およびその東側に広がる包含層から奈良時代後半に属すと考えられる青銅製品鋳造に伴う遺物が出土し、遺構としては検出していないものの、その出土量の多さから、近接した寺域東側に青銅製品を鋳造する工房等が所在しており、そこから流入した遺物が堆積したと考えられる。国分寺造営に伴う青銅製品の鋳造を、寺域に近接した場所で行っていた状況をうかがう好事例といえる。

３．北面築地［T11・13］

現況と遺存状況（図109･110）

北面築地については昭和49年度調査時には確認できておらず、不明であった。

この時の報告には、「西面築地北端付近に人工的な開削を思わせる地形がみられるので、そこまでとすれば寺域南北は800尺（240m）と想定できる」とある。この想定では、寺域北側を東西方向に沿う市道のラインあたりを北面築地の線としている。

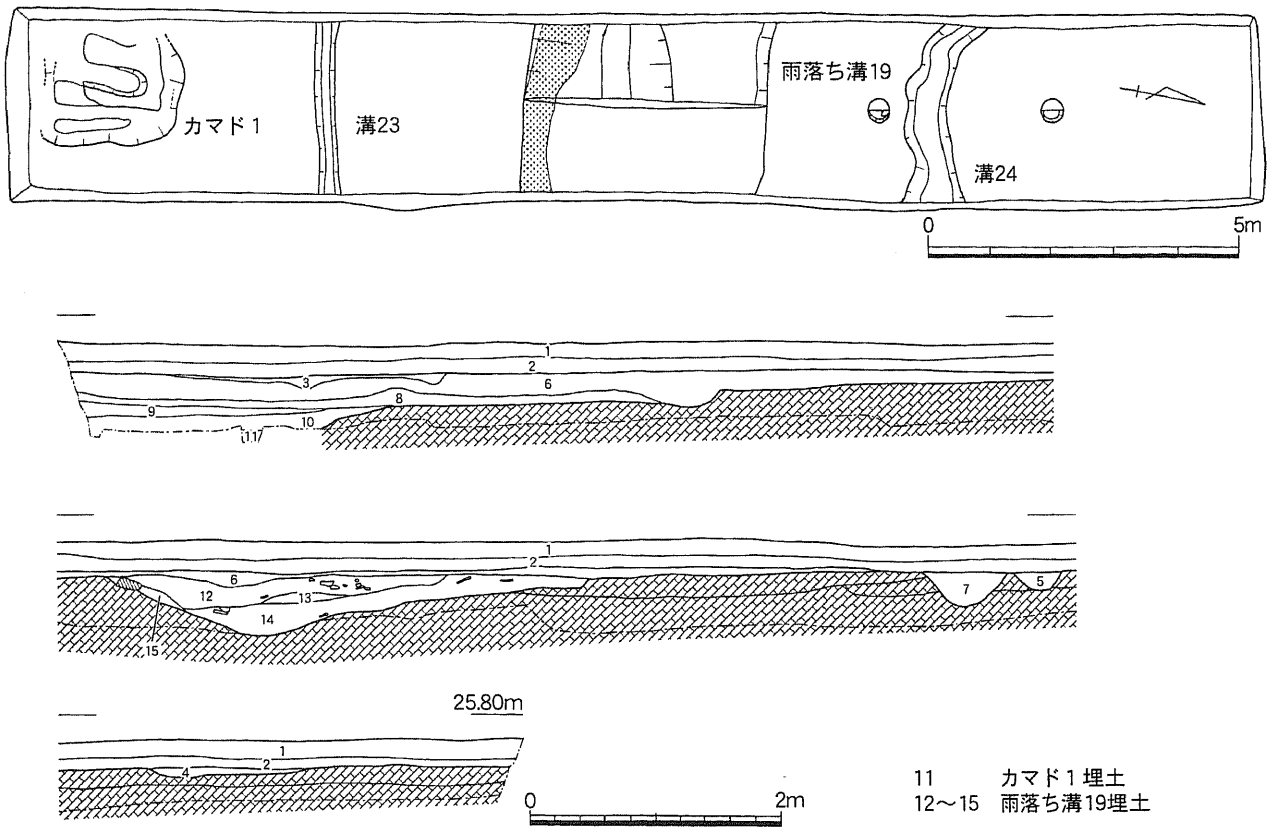
寺域は全体として北西から南東に傾斜し、水田が棚田状につくられている。その中で寺域北部周辺の地形は、T11を設定した水田とT10を設定した水田とを境に大きな段差があり、ここが傾斜変換点の一つであると推測できる。

地形の傾斜変換点と思われる畦畔の南側に長さ20m・幅３mでT11を、長さ15m・幅３mでT13を設定し、北面築地等の確認を行った。

T11、13各々において東西方向の溝を検出したほか、T11ではカマド状の遺構１基を検出した。築地塀本体は残存していなかったが、確認した溝にはT11では築地の外溝が、T13では築地の内・外溝と思われる溝が含まれる。また、T13の外溝より北には、東西方向の石列がみられた。

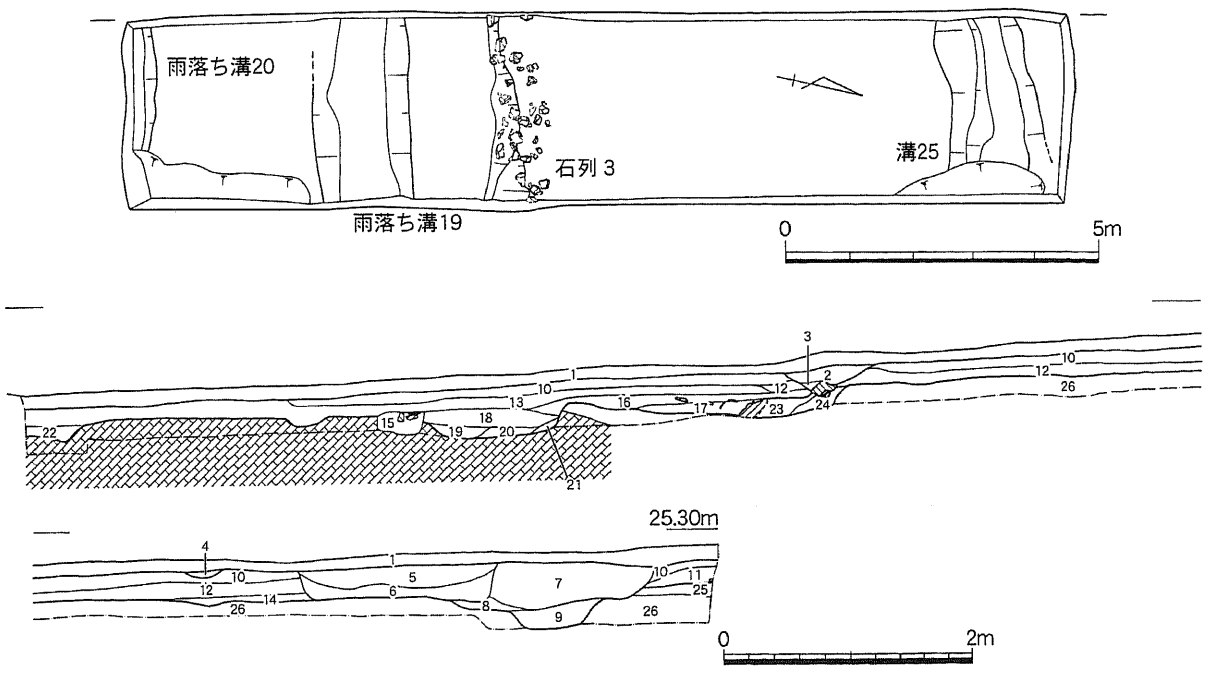
基本層序

地山は10～15cm大の礫を多く含む黒褐色土で、T13の石列３付近から北は弥生土器を含んだ創建



11　　カマド１埋土
12～15　雨落ち溝19埋土

図109　Ｔ11（1/120・1/60）



18～21　雨落ち溝19埋土
22　　雨落ち溝20埋土
23～24　石列３裏込め土

図110　Ｔ13（1/120・1/60）

以前の堆積土が基盤となる。地山および基盤層の検出高がT11で25.2～25.4m、T13では24.4～24.8mである。両トレンチは距離が60m離れているが、地山の検出高で約1mの比高差がある。それぞれに築地に伴うと考えられる雨落ち溝を検出しており、T13のみが大幅に削られているわけではない。地山の削平度合いの違いにもよるが、地形が傾斜していたことを反映していると思われる。

遺構面までは比較的浅い。

T11は水田耕作土と床土を除去すると、その北側で遺構面が検出され、南側で暗褐色の流土が厚さ約20cm堆積している。調査区南端では、さらに厚さ10cmの堆積土がみられ、その下からカマド1が検出された。また、調査区のほぼ中央で地山を掘り込んだ雨落ち溝19を検出している。

T13では耕作土を取り除くと厚さ約20cmの流土がみられ、その面からは溝25等の水田耕作に伴う溝が掘られている。その下は地山および基盤層となり、これらを掘り込んで雨落ち溝19・20、石列3が設けられている。

雨落ち溝19（図109･110、図版31-2）

築地外溝と想定される雨落ち溝19を両トレンチから検出した。溝は、東西方向に延長すると接続する位置関係にあり、同一の溝と判断した。

T11では上面幅3.8m、深さ48cmをはかる。最深部は中央より南に位置し、北側の肩部までは緩やかに上がる。断面形状は緩いV字形である。地山を掘り込んで設けられている。

図109の12～15層までがこの雨落ち溝の埋土となる。埋土には、比較的多くの奈良時代後半の須恵器や土師器、瓦片等が含まれる。とりわけ、溝の南肩に幅50cmで帯状に平瓦等が集中して出土している。

T13においては上面幅1.57m、深さ27cmをはかる。溝の断面形状は逆台形に近いU字形である。地山および基盤層を掘り込んで設けられている。図110の18～21層が埋土で、西壁では暗渠（15層）に南の肩部を壊されている。

以上のように、雨落ち溝19は東西方向で接続する位置にあるが、幅や断面形状で差異が認められる。これは検出面での深さが異なり、T13ではT11より遺構面の削平度合いが大きいためであると考えられる。T13の雨落ち溝19を20cmほど上方に復元すれば、T11と同じくらいの幅になるのかもしれない。また、両トレンチ間は60m離れており素掘りのため、その間に溝の規模、形状に差異が生じたとも考えられる。

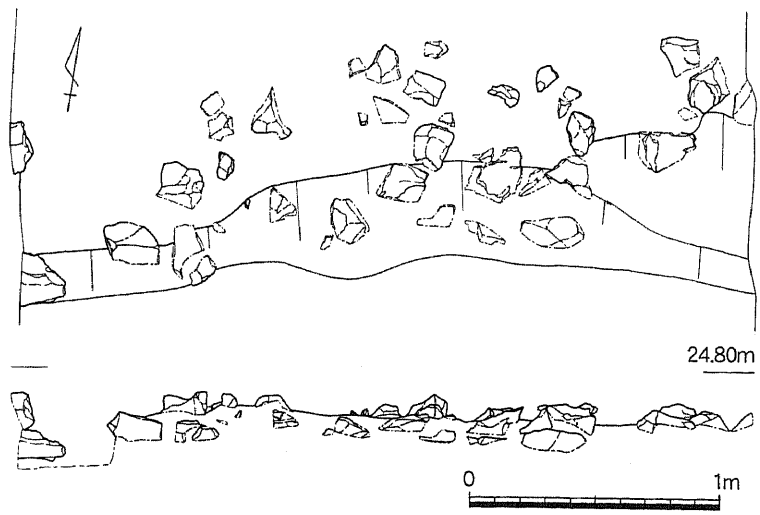


図111　石列3（1/30）

雨落ち溝20（図110）

T13の南端で検出したため、北側の肩部しか確認できていない。

東西方向にのびており、雨落ち溝19と平行する。検出面からの深さは13cmである。

石列３（図110・111、図版31-２）

Ｔ13の雨落ち溝19から約1.3m北へ隔てて検出した東西方向の石列である。

石列は南北幅0.8mの範囲に約10～25cm大の礫を詰め、並べている。石列は基盤層を南北幅約1.1mの範囲を掘り込んで設置しており、掘りかた内に礫を詰め、裏込め土（図110　23・24層）で充填している。

石列の南側にはたわみ状に17層の流土が堆積しており、瓦片を含んでいる。一方、石列の北側には26層の基盤層がつらなっていく。

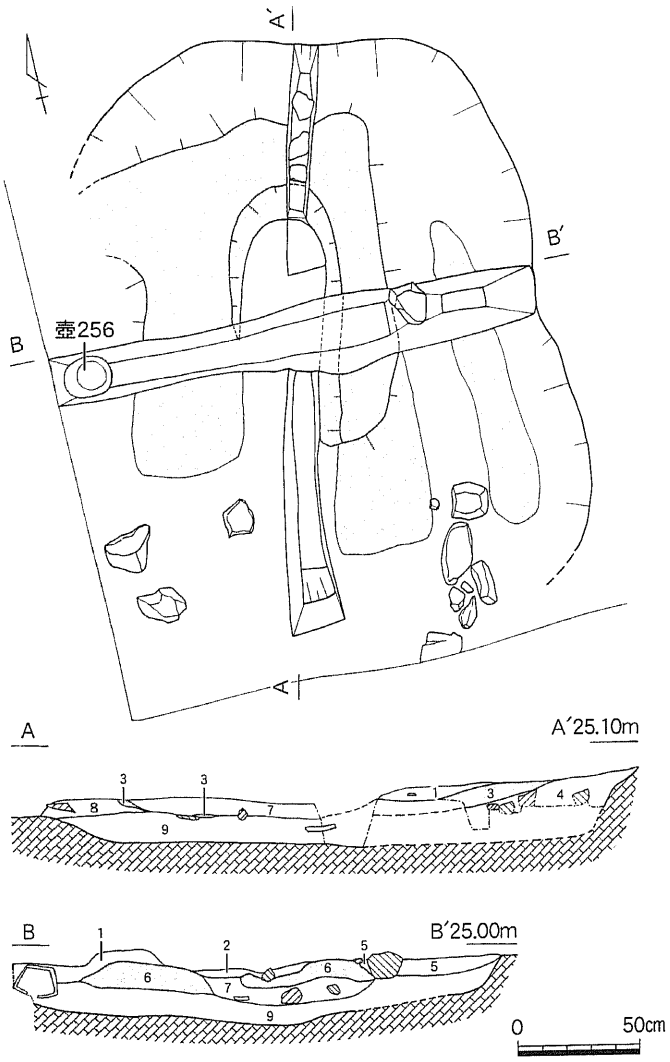
なお、Ｔ11ではこの石列は認められなかった。

カマド１（図109・112、図版30-３）

Ｔ11の南端で検出したカマド状の遺構である。既に平面検出段階で赤く被熱した焼土粒と白く焼け締まった土層がまとまった範囲でみられた。被熱土は南に空間をあけた平面Ｕ字形に確認された。また、東側に15cm隔てたところにも筋状の被熱痕跡が認められた。

被熱土の周囲において、長軸2.3m×短軸1.85m以上の楕円形の掘りかたを検出した。掘りかたの検出面からの深さは25cmである。掘りかた内の埋土は全体に炭や焼土を含んでいる。初めに図112　9層が約10cm堆積し、掘りかた内外縁に４層が堆積している。３層と６層は同一の土層で黄白色粘質土である。この粘質土がカマドの構成材かどうかは不明である。少なくともこの平面Ｕ字形の黄白色粘質土は堆積土上にあり、カマドそのものではない。用材が崩落したものが堆積しているようにみえる。黄白色粘質土を検出しなかった南部分は焚き口に相当すると考えられる。

堆積土中には、周辺の地山内にみられた10～15cm大の礫が認められる。



1　灰褐色粘質土（焼土含む）
2　黒褐色土（焼土含む）
3　黄白色粘質土（焼土・炭粒含む）
4　黒灰色土（焼土・炭粒含む）
5　黒灰色土（焼土含む）
6　黄白色粘質土（焼土含む）
7　黒褐色土（焼土含む）
8　暗灰褐色土（焼土含む）
9　黒褐色粘質土（炭・焼土含む）

図112　カマド１（1/30）

奈良時代後半の須恵器や土師器が比較的多く出土した。焚き口と思われる付近からは土師器の甕が数点出土した。掘りかた西端から、口縁部～頸部がなく、高台が剥離した須恵器の壺256が底部を上に向けた状態で出土した。

溝23（図109）

Ｔ11南端から北へ５ｍのところに位置する東西方向の溝である。埋土は灰色砂質土で、後世の水田造作に伴うものと考えられる。溝23の他に、東西方向もしくは南北方向で同一埋土の浅い溝を数条検出しており、その一つとみられる。

ただし、雨落ち溝19南側肩部から続く地山がわずかに溝23に向かって下降し、溝23の掘削面を境に10cmの段差を生じている。そのため、溝23の段差と雨落ち溝19に挟まれた間は、基壇状の高まりをなしている。

溝24（図109）

Ｔ11の雨落ち溝19北側肩部から北約2.5mに位置する。不整形であるが、東西方向にのびる。埋土は図109　７層で、幅70cm・深さ28cmをはかる。埋土には瓦片を含み、溝23等の灰色砂質土を埋土とする溝とは別種である。

なお、溝24をはさんで2.8ｍの間隔をあけ柱穴２基を検出している。柱穴の検出面からの深さは15cmで直径35cmである。性格は不明であるが、何らかの建物が存在したと考えられる。

溝25（図110）

Ｔ13北端に位置する、東西方向の溝。堆積土上面から掘られているので、後世の水田造作に伴うものである。

出土遺物（図113・114、図版49-２・50-１）

図113はＴ11雨落ち溝19出土の土器で、須恵器235～244、土師器245～247からなる。時期は奈良時代後半に属する。

235～237は杯Ｂの蓋である。235のつまみは径2.0cmの扁平で、上面中央がやや突出し、周辺がくぼんでいる。236は復元口径16.6cmで、天井部がやや丸み帯びる。237は口縁部付近で屈曲し、段をなしている。

238～240は杯Ｂで、239は高台が剥落しているが、口径14.2cm・復元器高4.3cmである。口縁端部は弱く外反している。240は口径14.8cm・器高4.4cmをはかり、径高指数は29.7である。高台の端面は、凹状をなす。

241は杯Ａである。242は杯としてよいか判断しかねるが、皿状で灰白色を呈する。底部は比較的厚いが、口縁端部は薄くなる。口径は9.7cm、器高は2.6cmで、底部外面はヘラ切りである。

243は高杯の脚部である。244は皿Ｂで、白色を呈し、口縁端部は平坦面をなしている。復元口径は26.8cm、器高は4.0cmとなる。

245は底部が欠損しており、口縁部の形状から高杯あるいは蓋の可能性がある。246は口縁部の一部のみで、器種は不明である。皿もしくは高杯と考えられる。245は内外面、246は外面に丹塗りがなされている。247は把手であるが、器種は鍋で、内面に指オサエの痕跡が残る。

図114はＴ11のカマド１および図109　10・11層から出土した遺物である。10・11層はカマド１に由来する堆積土である。須恵器（248～256）、土師器の甕（257～259）、製塩土器（260～262）、土錘（263）が出土した。

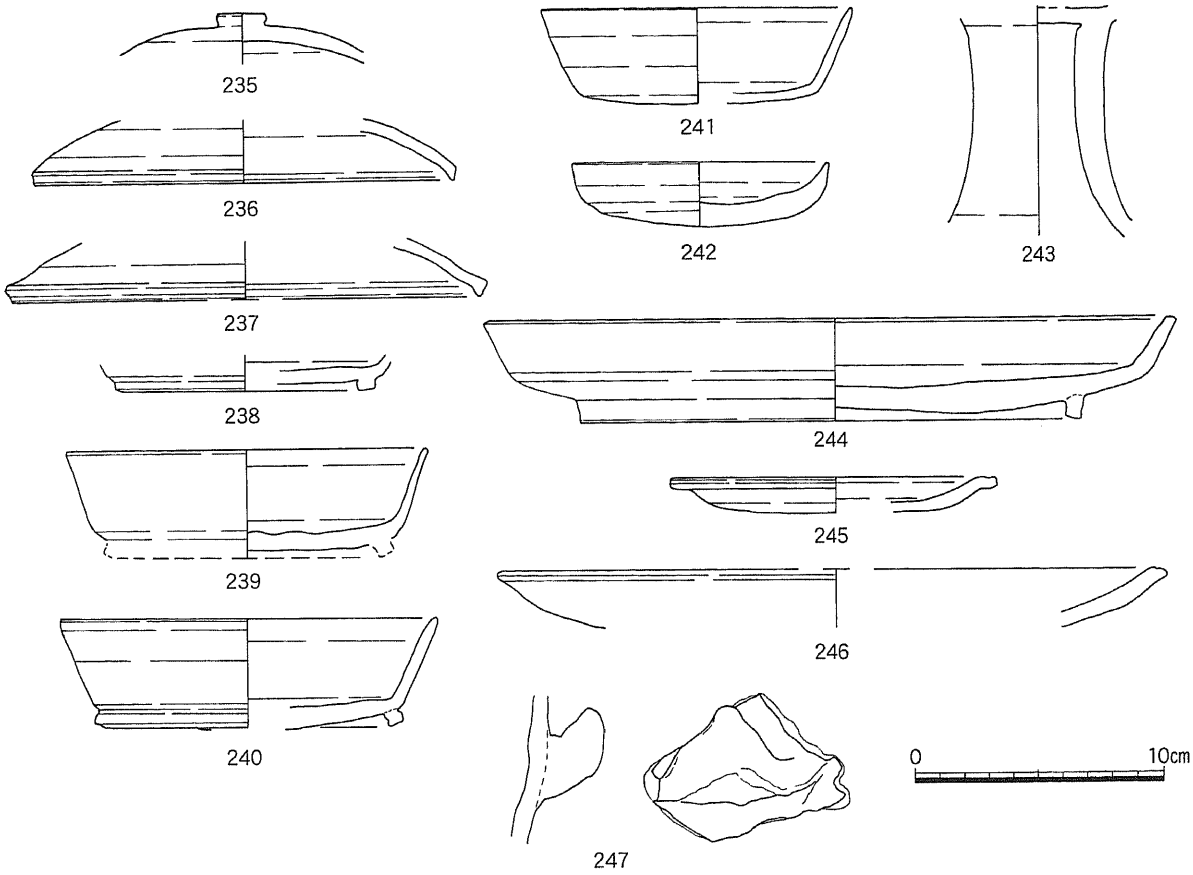


図113　雨落ち溝19出土遺物（1/3）

248～250は杯Ｂの蓋で、つまみは直径2.8～2.9cmで頂部が尖る。扁平な擬宝珠形のつまみといえる。250は口縁部付近で屈曲し、段をなす形状である。杯Ｂ（251）は、口径20.7cm・器高8.3cmをはかり、径高指数は40.1である。高台端面は凹状をなしている。252はヘラ状の工具で穿孔しており、香炉の蓋と想定される。253は杯、254は外反する口縁部をもつ皿、255は壺の底部と考えられる。壺の外面には自然釉の付着がみられる。

壺256はカマド１から底部を上にした状態で出土したものである（図112）。頸部以上と底部が欠損している。底部には高台が付けられていたものと思われるが、剥離している。台として用いられたのかあえて埋設されたのか明確でない。

甕（257～259）のうち257は肩部があまり張り出さない形状と思われる。胴部外面と口縁部内面にハケメが認められる。口縁端部は少し上にのびる。出土地点はカマド１の南側、焚き口と想定される付近である。

258は器壁が厚い。外面は口縁端部近くまでハケメ調整され、内面も口縁部はハケメ、胴部はナデ調整がなされている。259は内外面とも磨滅が激しく、調整は確認できない。

製塩土器260と261は胎土・調整ともよく似通っており、同一個体と考えられる。外面は指オサエによって仕上げられている。262は器壁の厚さが一定せず、調整も認められない。

土錘（263）は、長さ2.8cm・幅0.95cmである。

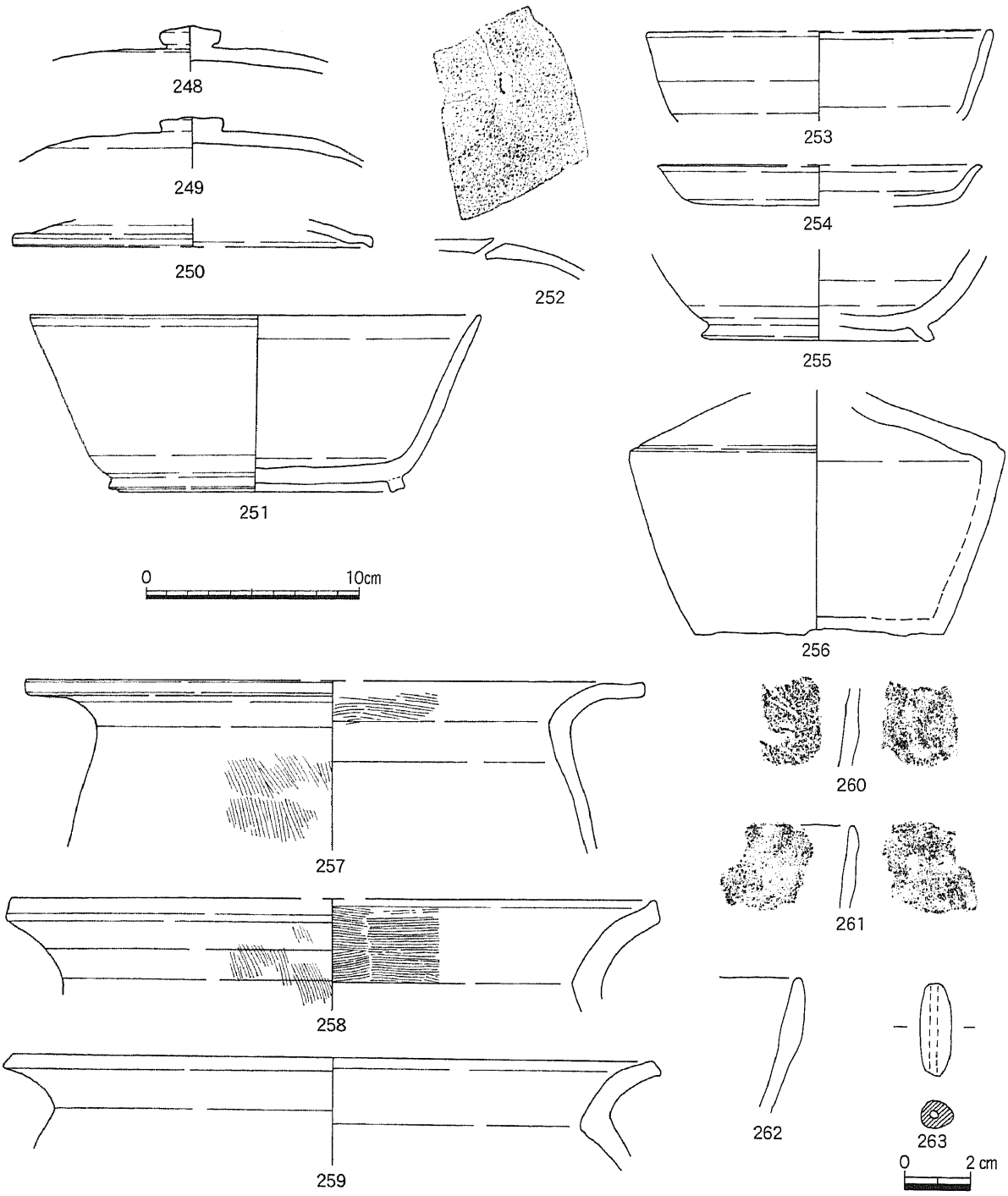


図114　カマド1周辺出土遺物（1/3・1/2）

北面築地と寺域北部の様相

寺域北部の区画位置と想定されるところで、奈良時代後半の土器等を多く含んだ比較的大型の雨落ち溝19を検出したことから、これが寺域の北限を示していると判断できる。雨落ち溝19は、寺域内でみられた溝より大型で、寺域北方の山麓斜面から流入してくる雨水等を受け、雨水等が寺域内へ浸入するのを防ぐには適当な溝であったのではないかと思われる。

T13において雨落ち溝19と20の間隔は上面で約2.5～2.7mをはかり、底面で約2.95～3.2mをはかる。T11で雨落ち溝19の南側肩部から溝23の段差までの距離は上面で3.08m、底面で4.3mをはかる。築地塀本体は削られ残存していないが、本来はこの間に築地塀が存在していたと推定される。

また、T11の雨落ち溝19の南肩に幅50cmの帯状に平瓦等が集中している状況も、この南側に瓦葺の築地塀が所在していたことを裏付ける。なお、T11・13での瓦の出土量は多くないため確定的ではないが、軒丸瓦は出土しておらず、築地に軒丸瓦は用いられていなかった可能性がある。

T13の検出状況から築地塀の両側に雨落ち溝が設けられた可能性が高いが、内溝は外溝である雨落ち溝19ほど大きなものでなかったと考えられる。

築地塀で囲まれた外には、石列3が認められ東西方向にのびている。石列3は掘りかたをもち、礫を詰め込み構築している。その北側に基盤層が平坦につらなっていくところをみると、石列3の北に寺域外に沿って土留めを行ったうえで、寺域外を沿う道路もしくは通路のようなものがあったと考えられないだろうか。

ただし、T11ではこのような石列は認められなかったので、北辺外周すべてに存在したわけではない。

一方、築地塀に囲まれた中にはカマド1が検出され、性格は不明であるが火を用いた作業が寺域北部で行われていたようである。食堂の炊事等にかかわるものであろうか。

（8）その他［T2・3・9・10・12・19］

T2（図115）

寺域北西隅、寺域の西辺にあたると考えられる箇所に設定した東西方向のトレンチで、規模は長さ11m×幅3mである。

厚さ約20cmの水田層および床土を除去後、調査区西端において検出面からの深さ1.7mの溝26を検出した。調査区外西側に溝の西肩が所在し、14～19層には暗灰色粘土が堆積している。この溝は南北方向に掘られている。

現在、寺域西辺をある程度反映していると考えられる畦畔および用水路が国分寺八幡宮の西に接して南北にのびており、これがほぼ溝26の位置と合致する。溝26自体は近世に掘られた水路とみられ、古代にはさかのぼらないが、国分寺の西面築地やその雨落ち溝の跡を踏襲してつくられた可能性はある。

寺域西辺については、溝26の掘削のため、遺構が広範囲に削平されている可能性が高い。昭和49年度調査の寺域南西隅のトレンチにおいて平面L字形の築地の高まりが検出されており、掘削をまぬがれた部分とみられる。この調査成果と寺域東辺との位置関係から溝26付近に寺域西辺を想定できる。

T3（図116・117）

史跡指定地の北端、寺域北西に長さ10m×幅3mの南北方向のトレンチを設け調査した。

約30cmの厚さの水田層および床土、そして厚さ約10～20cmの明灰色砂質土を取り除くと、黄色の地山が現れる。トレンチの北西隅と南東隅には、それぞれ落ち込み状の遺構が検出された。北西隅側の落ち込みは、溝状を呈しており溝27とした。溝27の深さは約0.8mをはかるが、調査区外に底面があり未検出のため、さらに深くなる。埋土には灰色土が堆積し、7層から瓦片、8層から備前焼の甕264が出土した。時期は16世紀後半と考えられ、近世に埋没した溝で、溝26に接続するとみられる。

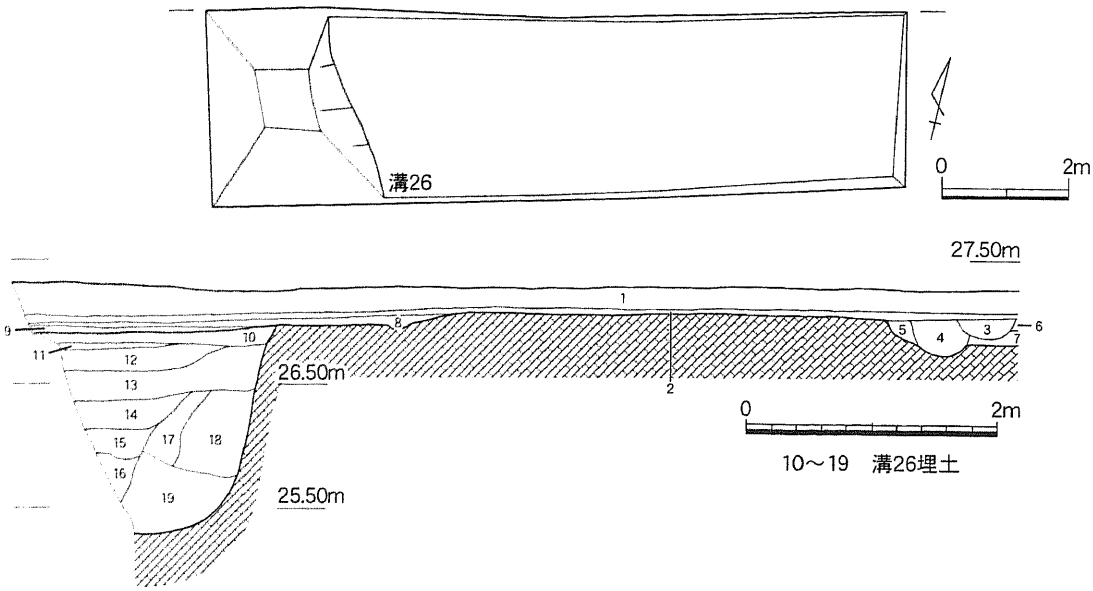


図115　T 2 （1/120・1/60）

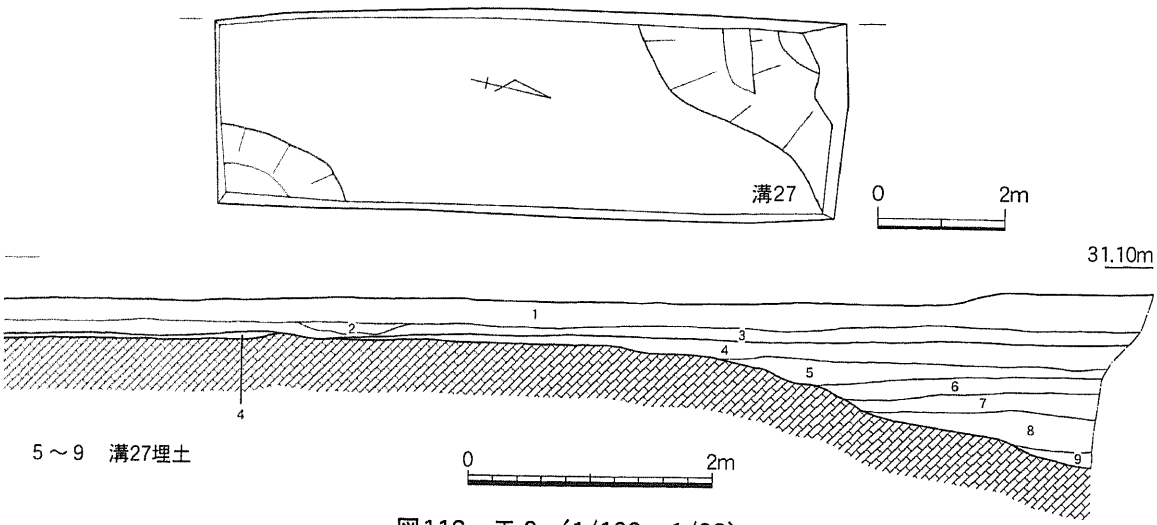


図116　T 3 （1/120・1/60）

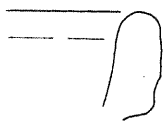


図117　T 3 出土遺物 (1/3)

なお、寺域北部に設けたT10・11・13の遺構配置から考えると、T 3は寺域外となる。

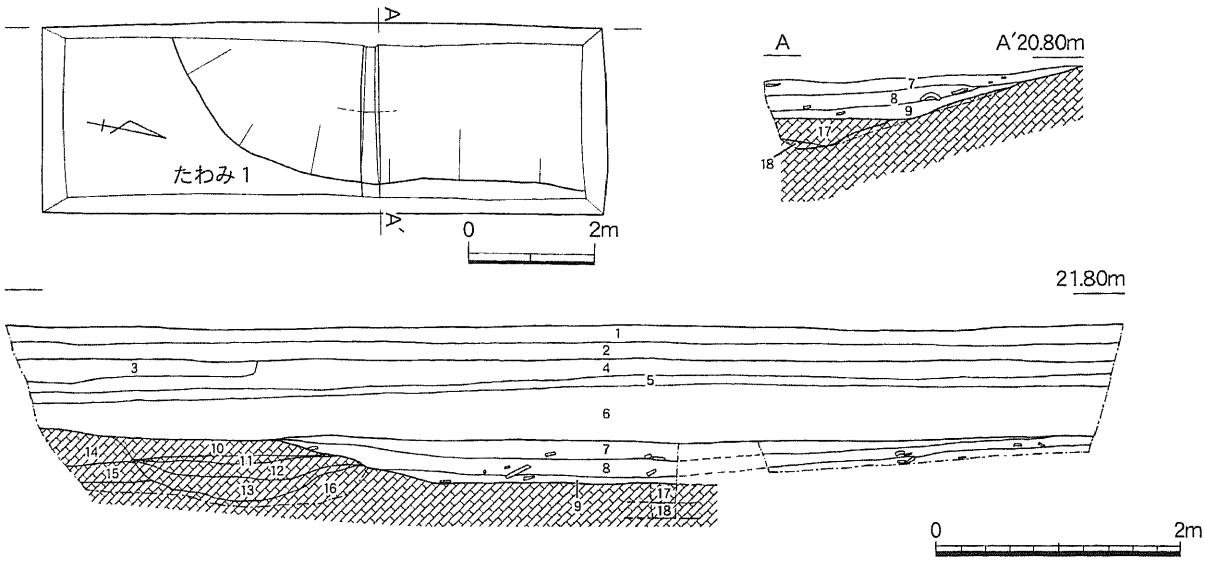
T 9 （図118・119）

寺域南西部の空閑地に設けた長さ９m×幅３mのトレンチ。回廊外に位置する。寺域内諸施設の所在を確認することを目的とした。

耕作土・床土・水田造成土を除去すると、調査区の３分の２の範囲にわたってたわみ１を検出した。たわみ１は検出面からの深さが最大35cmで、浅い皿状を呈する。北、西部は調査区外に広がるため、全体像は把握できない。

たわみ１の堆積は図118　7～9層で、すべての層で土器と瓦を含む。８層の灰色粘質土は粘性がかなり強く、この段階で沼のような状態になっていたことが想定される。

たわみ１が形成された基盤である地山には、10～13層の堆積状況から河道（自然流路）が存在していたと考えられる。



７～９　たわみ１埋土

図118　Ｔ９（1/120・1/60）

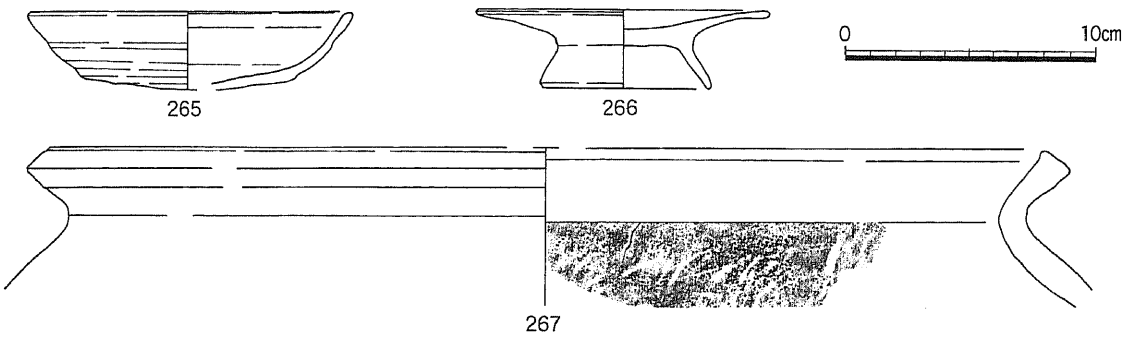


図119　Ｔ９出土遺物（1/3）

図119はたわみ１から出土した土器である。たわみ１からは土師器皿を主体として、多量の土器が出土したが、接合できない小片が多く図化できたものは少ない。

265は土師器の杯で、内面と外面体部にナデの痕跡が残る。内面は黒褐色を呈する。266は土師器の高台付の皿であり、口径は11.1cmをはかる。底部から口縁部までそのまま外反気味にのびる。267は、須恵器の甕の口縁部であり、灰白色を呈する。口縁端部内側に段を有し、胴部内面にタタキ、外面にタタキの後にナデを施した痕跡がみられる。たわみ１の時期は、平安時代前期～中期と考えられる。

Ｔ12（図120）

寺域北部に設けた長さ10m×幅３mのトレンチである。

厚さ約30～35cmの水田層と床土、流土である明灰褐色粘質土を除去すると、水田に伴う暗渠等が検出される。その下位には、瓦片を含む水田のかさ上げ造成土がみられる。造成土は約50cm盛られており、その下、標高25.9～26.25mで地山が現れる。地山は黄色土で、北から南に向かって下降している。

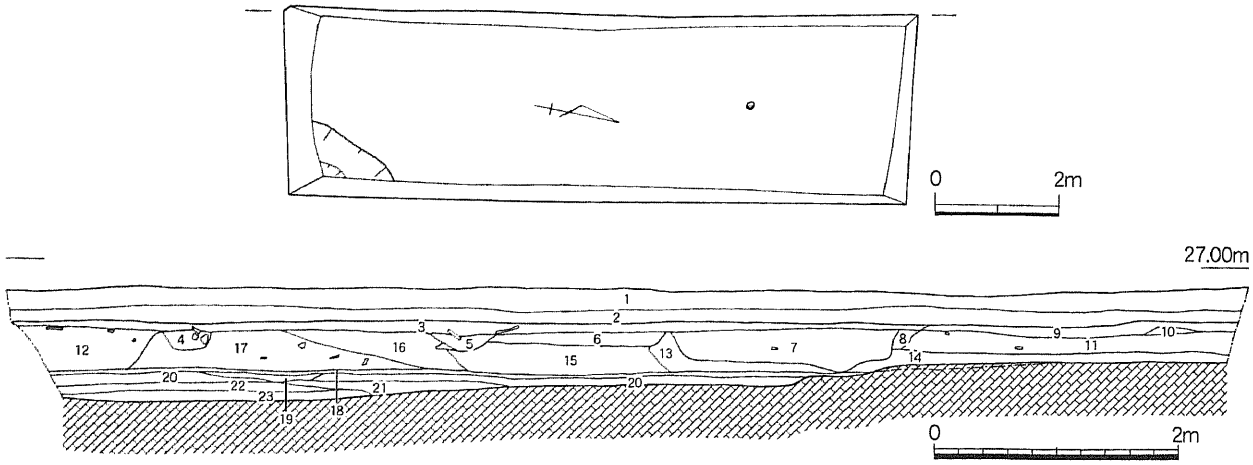


図120　T12（1/120・1/60）

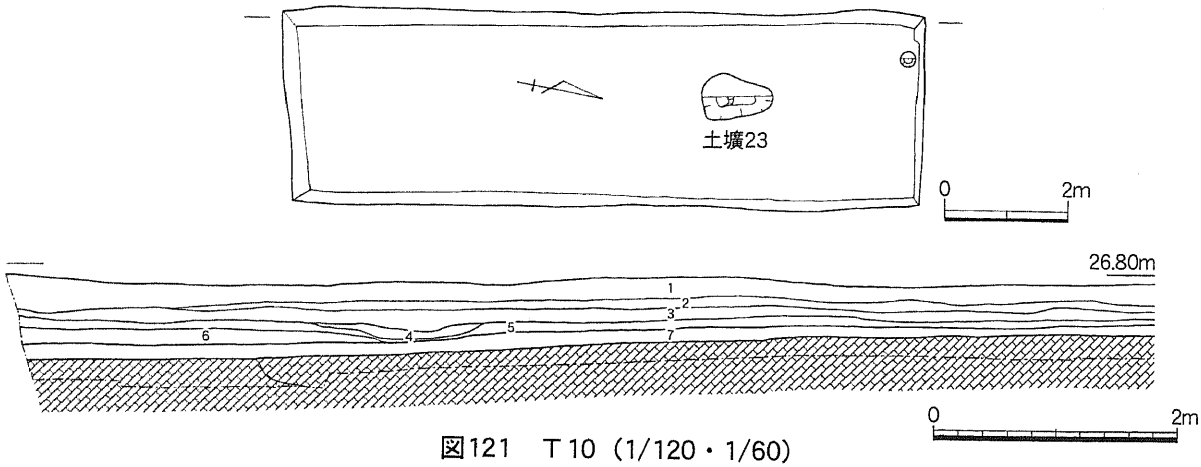
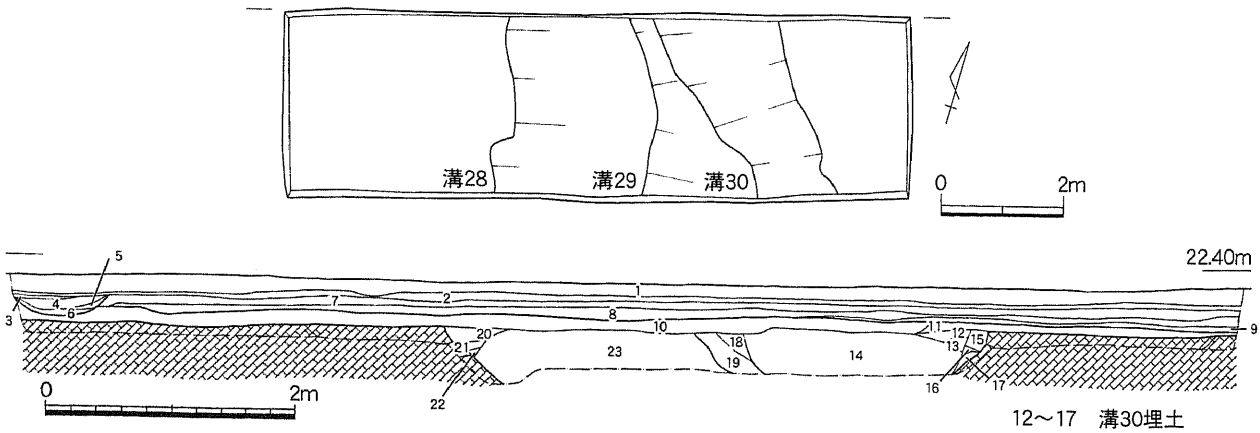


図121　T10（1/120・1/60）



12～17　溝30埋土
18～19　溝29埋土
20～23　溝28埋土

図122　T19（1/120・1/60）

トレンチ南東隅で、落ち込み状の遺構を確認したが、国分寺創建以前のものである。

北面築地を確認したＴ11の地山標高と比べると、Ｔ12の方が約80cm高い。寺域全体が北西から南東に傾斜していることを考慮しても、何らかの遺構が削平されていると考えるよりは、Ｔ12周辺は寺域内の空閑地と考えてよいであろう。

Ｔ10（図121）

寺域北部に設けた長さ10m×幅３mのトレンチである。

Ｔ11を設定した水田より一段高い位置になる。国分寺に関する遺構は検出されなかった。厚さ約40cmの水田層・床土・旧水田層・旧床土の下に、厚さ10cmの土器片を含む褐灰色土の堆積層がみられる。これを除去すると黄色土の地山が検出される。

地山上で、柱穴と土壙23を確認したが、堆積土は無遺物の黒褐色粘質土で、時期を確定できない。

地山は標高26.0～26.3mで検出されたので、Ｔ11基盤層の標高25.2～25.4mとは0.6～1.1mの比高差がある。現況でも水田に段差が生じているように、Ｔ11とＴ10の間には地形の傾斜変換点があったと考えられ、この傾斜変換点を寺域北限としたものと思われる。そのため、Ｔ10は北面築地で区画された寺域の外になる。

Ｔ19（図122）

Ｔ19Ｂの東延長線上に設定した長さ10m×幅３mのトレンチ。Ｔ19Ｂで東面築地に伴う雨落ち溝17・18を確認しているので、築地塀で囲繞された寺域の外になる。

水田層・床土・旧水田層・旧床土と流土１層を除去すると、地山が検出される。

トレンチ中央から東に向かって、南北方向の溝28～30が確認された。新旧３条の溝で、14・19・23層は大量に礫を含み、重複し合っている。新旧関係は古い溝から、溝28・29・30の順である。堆積層が礫層となっていることから、これらは国分寺創建以前の段階の自然流路と判断される。

註

（1）第２章第２節の図８　１・２を参照。金堂のあった薬師田と呼ばれた水田に４基の礎石が描かれている。

（2）建物の復元に際しては、以下１尺＝0.297mを用いる。備前国分寺の単位尺の復元は第５章第１節で行っているので参照されたい。

（3）図44は西端除去後の図である。

（4）図70A-A'断面ではこのように南門・中門の瓦の堆積状況を理解したが、中門は近世に池１の造成によって大きく削平されており、この状況が正確であるかどうかは確証がない。なお、第４章第１節の瓦の検討により、南門は講堂とともに中世を通して維持されていることがわかっている。

（5）平井泰男1999「平安時代の土器」「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』138岡山県教育委員会、平井泰男1998「古代の土器について」「窪木遺跡２」『岡山県埋蔵文化財調査報告』124岡山県教育委員会等を参考とした。

（6）南面築地については南門・中門調査区の南門西側でも検出しているので、第３章第４項をあわせて参照いただきたい。

（7）器高／口径×100を「径高指数」とし、法量を示す指数として記載した。

引用・参考文献

池田善文1998「長門国長登銅山跡にみる生産遺構」『季刊考古学』第62号

小田賢ほか2006『古代山陽道野磨駅家跡』上郡町教育委員会

神崎勝1998「古代・中世の産銅遺跡の調査 - 炉を中心に - 」『季刊考古学』第62号

黒崎直1997「掘立柱塀と築地塀 - 藤原宮と平城宮の外周施設をめぐって - 」『立命館大学考古学論集Ⅰ』

国分寺町教育委員会1996『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』

杉山一雄ほか1997『服部廃寺』長船町埋蔵文化財調査報告２　長船町教育委員会

豊岡市教育委員会2007『国史跡但馬国分寺跡第24次調査現地説明会資料』

永山卯三郎1925『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第５冊　岡山県史蹟名勝天然記念物調査会

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』

箱崎和久2003「２遺構各説」『吉備池廃寺発掘調査報告』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』10　岡山県教育委員会

平岡正宏2002「塔建立の時期について」『美作国分寺跡塔跡発掘調査報告書』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書72　津山市教育委員会

宮本長二郎1979「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『法隆寺と斑鳩の古寺』日本古寺美術全集第２巻　集英社

森郁夫1998「国分寺初期の様相」『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局

山田幸一1981『壁』ものと人間の文化史45　法政大学出版局

第4章　遺物

第1節　瓦

備前国分寺跡の出土遺物の圧倒的多数を占めるのは瓦である。その大部分は平瓦・丸瓦であるが、軒瓦もかなりの量が出土しており型式数は軒丸瓦29型式、軒平瓦34型式に達する。以下では出土瓦の記載を行うが、型式数がきわめて多いため焼成や胎土から組み合うと判断できたものについては軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦をあわせて掲載し、不明確なものについては種類ごとに示した。

瓦の年代は奈良時代から室町時代、最終的には江戸時代に及んでおり、備前国分寺の変遷を如実に示す。型式数が多いのは平安時代後半の資料であるが、それらは1型式数点の出土となるものが多く、軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせも明確でない。まとまった出土を示すのは奈良時代・創建期の瓦と室町時代の瓦である。

表1にはそれらの出土状況一覧を示した。ここでの数値は破片数であり、大小があるため厳密な対比にはならないが、出土傾向の把握は可能と考える。表示項目のうち、南門中門調査区池堆積土とするものは、中門を破壊して南門基壇を利用して設けられた池1の堆積土中から出土したものであり、南門・中門瓦だまりから遊離したものとともに、金堂・講堂から流出したものを含むようである。また、造成土はその池を幕末・明治に埋め立てた土であり、金堂・講堂の瓦も含むようである。南石垣裏込めとしたものは南門付近に設けられた水田石垣の裏に詰められていた多量の瓦であり、耕作の支障となる南門付近の瓦を集めて埋め込んだものと考えている。その他、昭和49年度調査をここでは確認調査と略する。また、胎土の記載において薄層とするものは、軒丸瓦20式・軒平瓦25式を代表とする特徴のある胎土である。

なお、格子叩きの大きさの記載では、長さは対角線のうち長いものの数値を示した。また、平瓦はここでは基本的に広端を下にそろえた。

備前国分寺出土瓦については伊藤晃氏による型式設定（備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975・伊藤1991）があるが、新たな型式が多数加わったため番号を付け直しており、旧型式名は［ ］に記した。

（1）創建期の瓦

軒丸瓦1式（図123～126･161、図版32-1・2）

単弁8弁軒丸瓦。［第Ⅰ型式］。すべての堂塔から出土しており、出土個体数も軒丸瓦のなかで最も多い。

瓦当径は17.3（6）～18.5cm（2）と1cm以上のばらつきをもつが、焼成の差によるものである。6は暗青色で須恵質、2は灰色で表面に炭素を吸着している。厚さは2の中房基部で2.3cmを測る。

中房は径2.6cmで丸くふくらむ。蓮弁は均整であるが、1を例にとれば下向きの弁の外郭が丸みをもって張り、また、上向きの弁は軸線がやや曲がるといった特徴がある。1・2・6・10ではこの丸

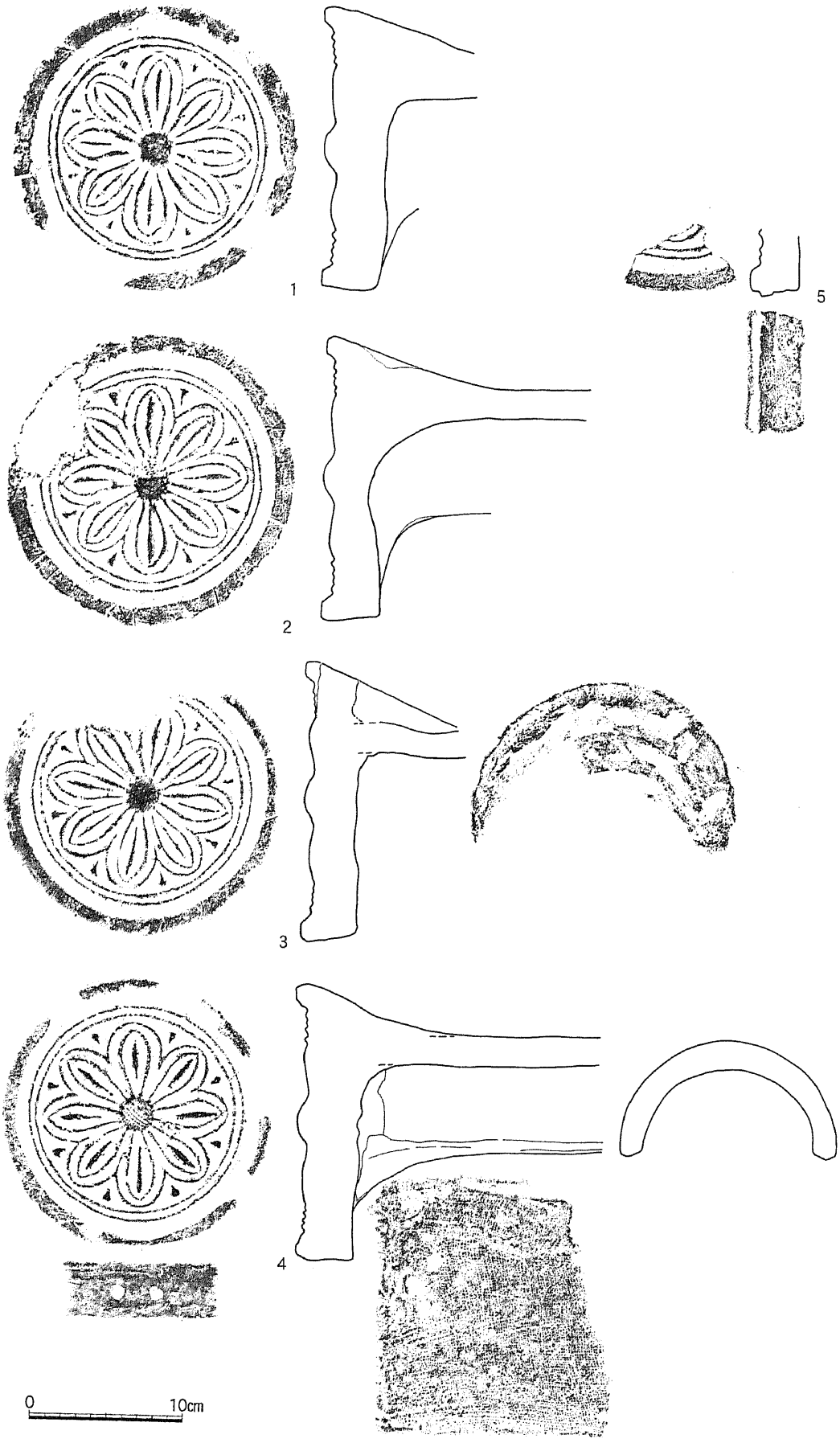


図123　軒丸瓦１式（１）（1/4）

みの強い弁が下に向くが、３・４・８・９・11では上向きになっている。図示しなかった完形・準完形品を含めた場合、上向きが７点、下向きが10点で、下向きがやや優勢であるが、出土位置等による偏りはなく、製作時に瓦笵の上下はあまり留意されていなかったようである。蓮弁の軸線が垂直をな

表１　軒瓦の出土状況

（数値：出土破片数）

区分	型式	金堂	講堂	回廊				南門・中門			塔	僧房		築地					その他	計
		調査区	調査区	T4	T5	T5暗渠	T6	調査区	池積・造成土	堆石裏込め	調査区	T7	T8	T15	T16	T17	T18	T19B	T9	
1）	軒丸１	16	101	9	16	6	9	67	34	9	79	2	2	9	5	1	2		6	373
	軒平１B	10	42	11	9	5		53	33	12	70		3	1				1		250
	軒平２B	9	35	1	3				7		1									56
	軒平２A																			0
2）	軒平１A										6			2						8
	軒丸２	2	1		2	1		2			29			1	1					39
	軒平３			1					3		17			3						24
3）	軒丸３	1	3					7	1											12
	軒丸４		3					1			4									8
	軒平４		5	1		1		3			5		1							16
	軒丸５										1									1
	軒丸６	1		1	2		3	1			10								1	19
	軒平５	3	4		1		1		1	1			1							12
4）	軒丸７								2											2
	軒丸８																			0
	軒丸９	1																		1
	軒丸10																			0
	軒丸11																			0
	軒丸12								1											1
	軒丸13							2												2
	軒丸14				1															1
	軒丸15		2																	2
	軒丸16		3																	3
	軒丸17	1																		1
	軒丸18		1																	1
	軒丸19																			0
5）	軒平６																			0
	軒平７										1									1
	軒平８									1										1
	軒平９																			0
	軒平10																			0
	軒平11																			0
	軒平12		1																	1
	軒平13								1	1										2
	軒平14		1																	1
	軒平15	1																		1
	軒平16	1								1										2
	軒平17	1	1																	2
	軒平18	4	5	1					1		1									12
	軒平19		1																	1
	軒平20									2										2
	軒平21			1																1
	軒平22							1												1
	軒平23							1												1
	軒平24			1																1
7）	軒丸20	1	6					11	2											20
	軒平25	2	2					19	2	2										27
8）	軒丸21	5	12	1																18
	軒丸22	4	15	1					2	1				1						24
	軒平26	27	3	2		1		1	3											37
	軒平27	1																		1
9）	軒丸23		2					1	9											12
	軒平28		2					4	14											20
10）	軒丸24	1	2						2	1										6
	軒丸25	1						3	4											8
	軒丸26		1						1											2
	軒丸27		15																	15
	軒丸28									1										1
	軒平29		1					3	7	4										15
	軒平30		1							2										3
	軒平31									1										1
	軒平32									1										1
11）	軒丸29	9	134					1	3											147
	軒平33	6	111										1				1			119
	軒平34		5																	5

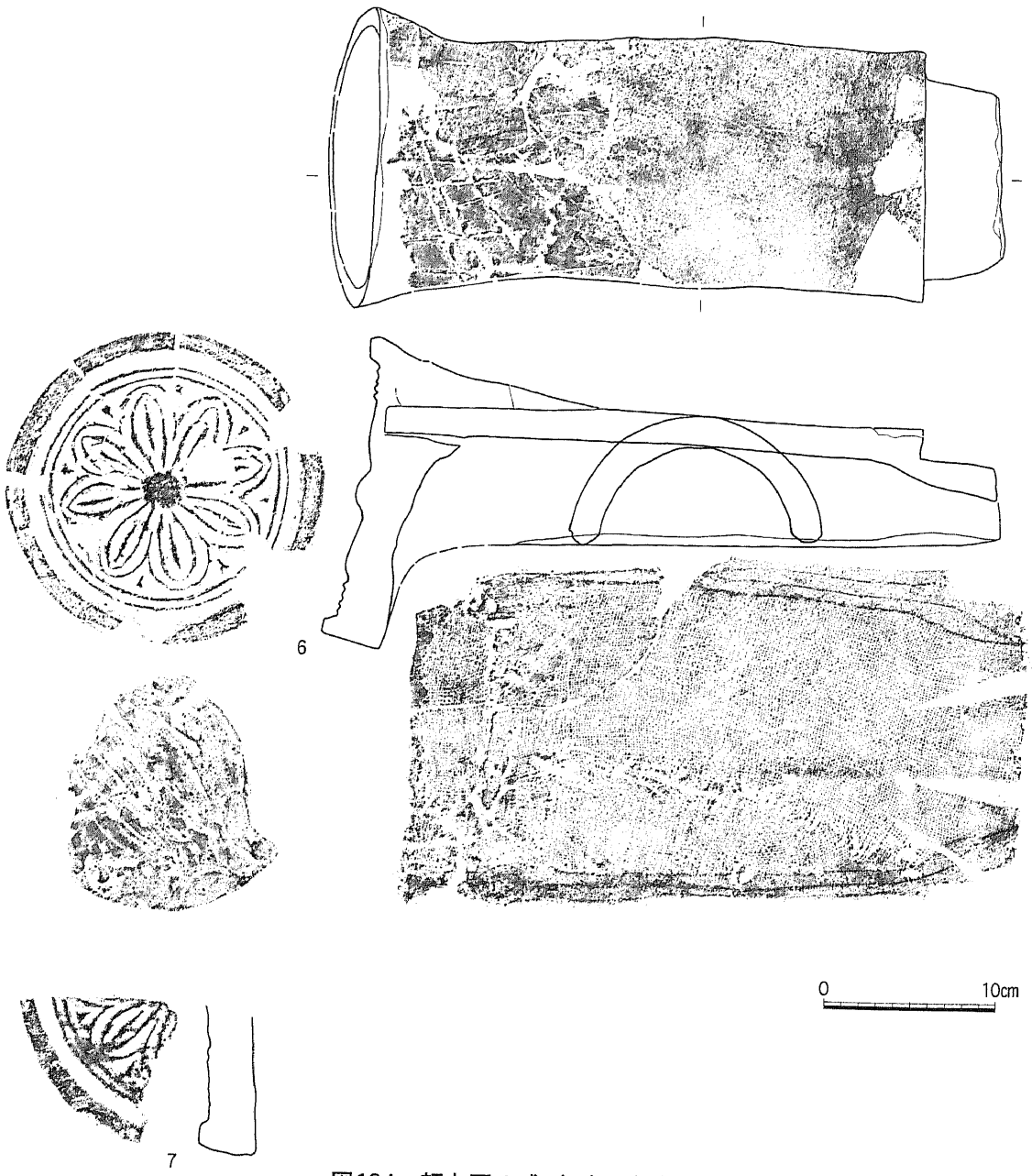


図124　軒丸瓦１式（２）（1/4）

すものは少なく、多くが垂直線から少し傾く。この丸みの強い弁が横に向くことはなく、瓦笵は正方形や円形ではなく、上下左右が判別できる状態か長方形であったとみられる。

間弁は水滴形に表現される。外側には二重の圏線がめぐる。周縁は幅10㎜前後の水平な面をなすが、４のように側面に施されるナデ調整がこの部分にまで及んで丸みをもつものも少なくない。

７は蓮弁に大きな笵傷が生じた例で、笵傷は木目方向に生じているが、こうした例はきわめて少ない。

４・５のように瓦当側面の先端側には、多くの場合瓦笵の痕跡が残る。周縁上面から６㎜の位置で、瓦笵の彫り込みは浅いものであったとみてよい。なお、完存あるいは大形の破片の観察によれば先に述べた蓮弁の特徴は共通しており、瓦笵は１個体であったとみてよい。

瓦当裏面の調整は指頭押圧およびナデであるが、６のようにケズリが施されるものもある。

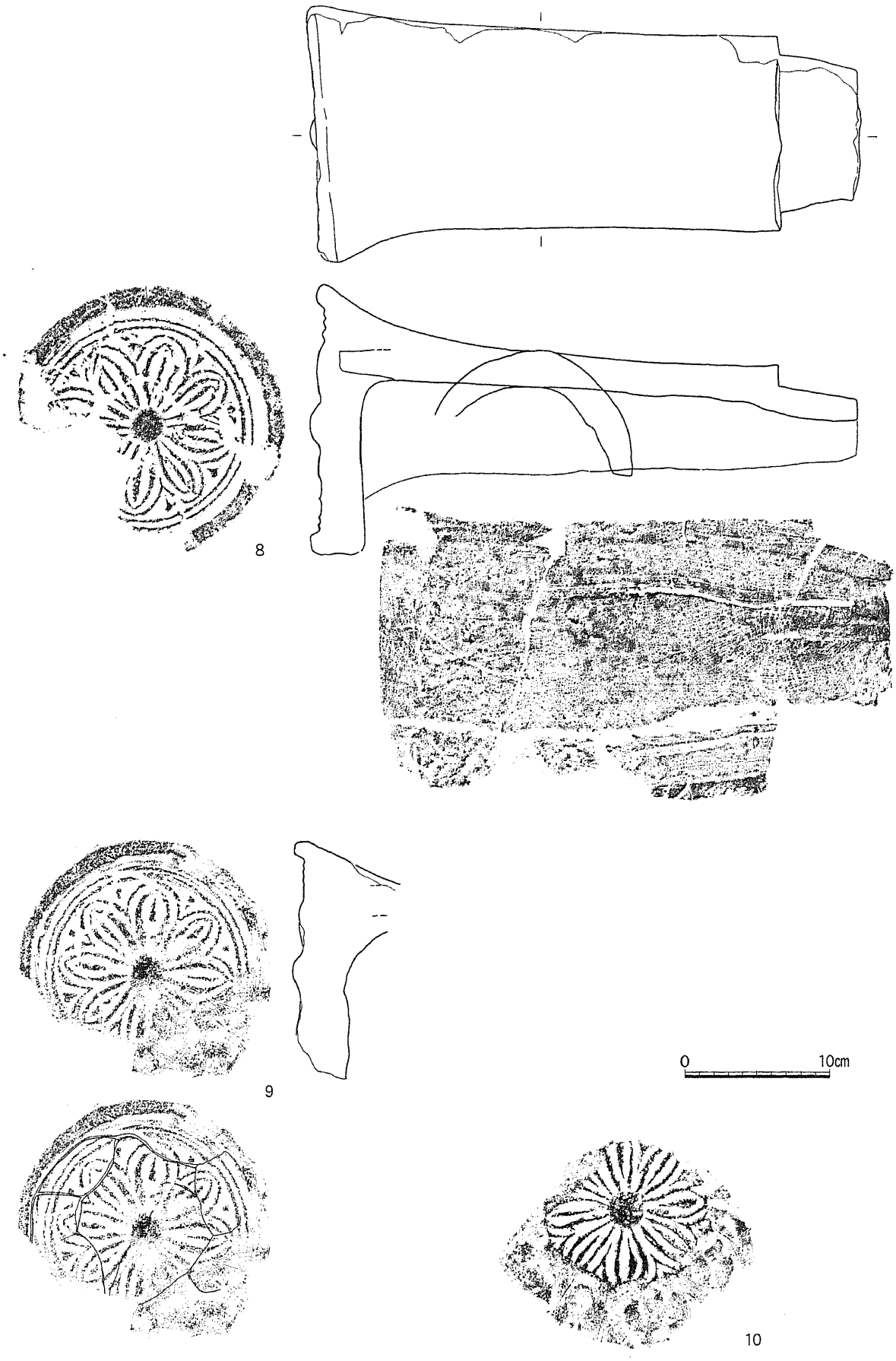


図125　軒丸瓦1式（3）（1/4）

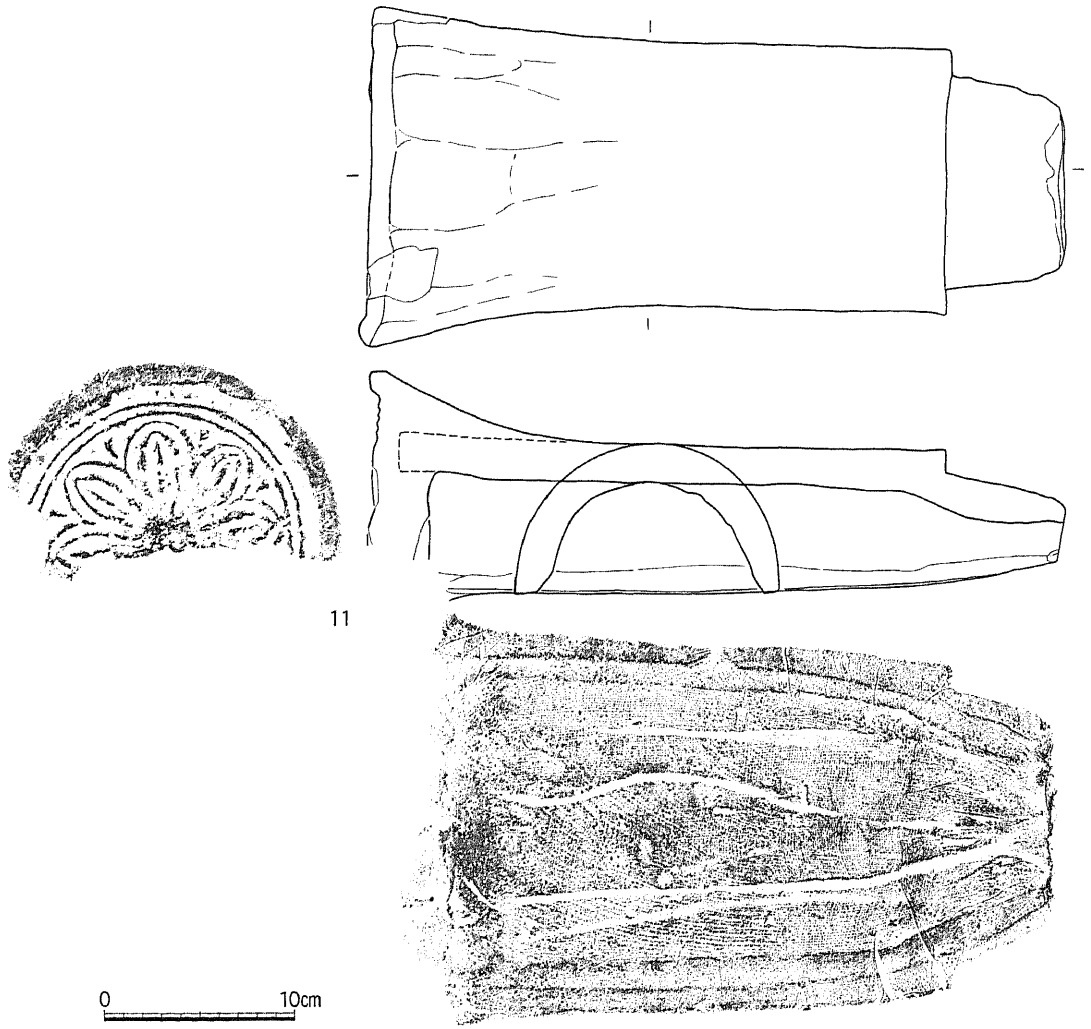


図126　軒丸瓦１式（４）（1/4)

瓦当側面部から丸瓦部上半部にかけてはナデによって仕上げられるものとケズリを施すものとがあり、前者が多い。いずれの調整の場合も上半は縦方向になされるが、下半にケズリを施す場合は縦方向のケズリを平行に行うものと、瓦当の縁にそって横方向にケズリをかけるものとがある。なお、まれに４のように瓦当側面下端に２つの円形の圧痕をもつ個体がみられ、この圧痕はナデ調整に先行する。

６は上段に平面を示しているが、丸瓦部の瓦当近くでは中軸よりも下側の部分で接合時に加えた粘土が剥離し、丸瓦凸面先端部に施された刻みが現れる。刻みは丸瓦の軸線に平行する沈線を施し、さらにそれに斜交する沈線を刻むものである。軒丸瓦１式では丸瓦先端に刻みを施す例が多く、またそのパターンも多様である。それらについては、第２節において検討を行う。なお、６は焼成時に丸瓦部凹面と瓦当部の間に亀裂が生じて瓦当面がやや斜めとなっているが、そのまま使用されている。

６が全長36.6cm、玉縁部長さ4.5cm、８は37.8cm、5.6cm、11が37.3cm、6.3cmを測る。全長のばらつきは玉縁部の長さによって生じており、それを除いた長さは31.0～32.1cmである。なお、８も破損時に瓦当部がはずれて丸瓦部先端が現れるが、凸面・凹面ともに刻みは施されない。

9・10は瓦当部の成形を示す資料である。9では瓦笵に最初に置いた粘土と後に置いた粘土がうまく接着しておらず、シワ状の溝となっており、下段拓本にはその境界を示している。これによれば、最初に長さ5～8㎝の長さの粘土塊を周縁から蓮弁先端付近にかけて順に押し込んでいって環状に埋め、これに続いて中央部に粘土を充填したことがわかる。最初の粘土がすべて剥離したのが10である。こうした軒丸瓦1式の製作手順に関しても第2節でまとめて述べることとする。

1・6は青灰色の須恵質であるがそうした焼成の個体は少なく、多くは灰白色～暗灰色である。胎土には3㎜以下の砂粒を含む。

同笵品が仁王堂池遺跡（備前国分尼寺跡）（永山1925）および備前市香登廃寺（123）（田代1988）から出土している。また、外区に珠文をめぐらせる点で異なるが、類似した文様をもつ資料として岡山市瀬戸町妙興寺廃寺出土資料（126）（矢部1975）がある。

軒平瓦1B式（図127～129・146、図版32-1）

均整唐草文軒平瓦。［第Ⅰ型式］。寺域の全域から出土しており、個体数も他の型式にくらべて圧倒的に多く、軒丸瓦1式に組み合うとみてよい。

均整唐草文ではあるが、唐草は連続性が弱く、Y字形の単位を反転させながら配置したかのような文様構成になる。13の左端、唐草第3単位先端の形状が他とやや異なるが、これは笵からはずす際にゆがみを生じたためとみられ、瓦笵は1個体と判断している。12・14では水平方向に笵の木目とみられる微細な条線が認められる。

12は右半は明瞭に文様が出ているが、左半は粘土がうまく入っておらず文様がやや不鮮明である。また、14は文様を軽く押さえており、唐草がややつぶれた状態となる。

周縁は断面が丸みのある三角形をなし細く突出するものを基本とするが、14ではナデのため扁平となる。また14の左側のうち、下側の周縁がないのは欠損のためであるが、上側は製作時のケズリ調整によって削り取られている。一方、15は方形気味の断面をなし面をもつ周縁がめぐる。周縁の外側をやや広めにとってナデを加えて太い周縁とした可能性を考えている。

12で瓦当幅26.9㎝、瓦当厚4.3㎝を測る。断面形のバリエーションは大きく、12・13・15のように厚さがあり、凹面の先端が丸みをもって下方に湾曲するものと、14・16・17のように薄くて湾曲が弱いものの二者があるが、中間的なものもあり截然と区分することはむずかしい。基本をなすのは前者であり、後者の出土量は少ない。何らかの作り分けがなされた可能性があるが、出土地点による偏りは見出しがたい。ほぼ全形がわかる15で長さ39.6㎝、狭端幅26.2㎝、瓦当厚・屈曲部厚さとも4.5㎝、17で長さは40.8㎝を測る。なお、17は北面回廊東部の石列1平瓦列に用いられていたものであり、転用以前に半裁されて用いられていた可能性が考えられる。

凸面の調整はいずれも縄目叩きであるが、12はさらに工具によるナデを加えており擦痕状の調整が残る。凹面は体部には布目が残り、14・15では糸切り痕がある。体部先端はケズリののちナデ、側面部もケズリである。

16の凸面側には瓦当面から10.8㎝の位置を後端として赤色顔料の付着が認められる。暗い赤色を呈しており丹とみられる。器表がかなり剥落しているため図では点在の形になるが、もとは幅2㎝弱の帯状になっていたとみられる。なお、後述の軒平瓦2B式では赤色顔料が付着する資料が比較的多いが、1式ではこの破片のみである。

14は須恵質の焼成で暗青色を呈するが、こうした焼成のものは少なく、白色～褐色、あるいは表面

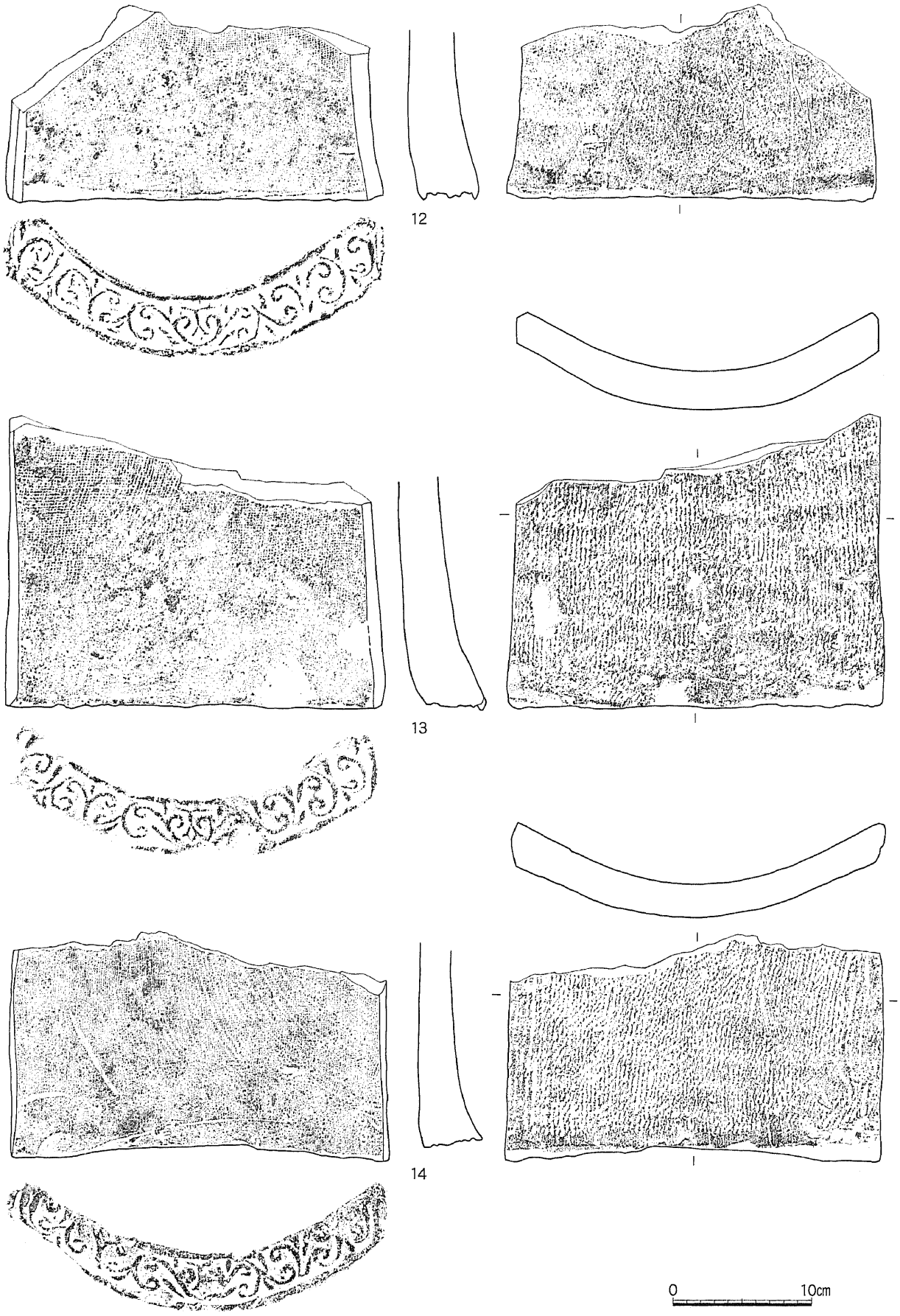


図127　軒平瓦１Ｂ式（１）（1/4）

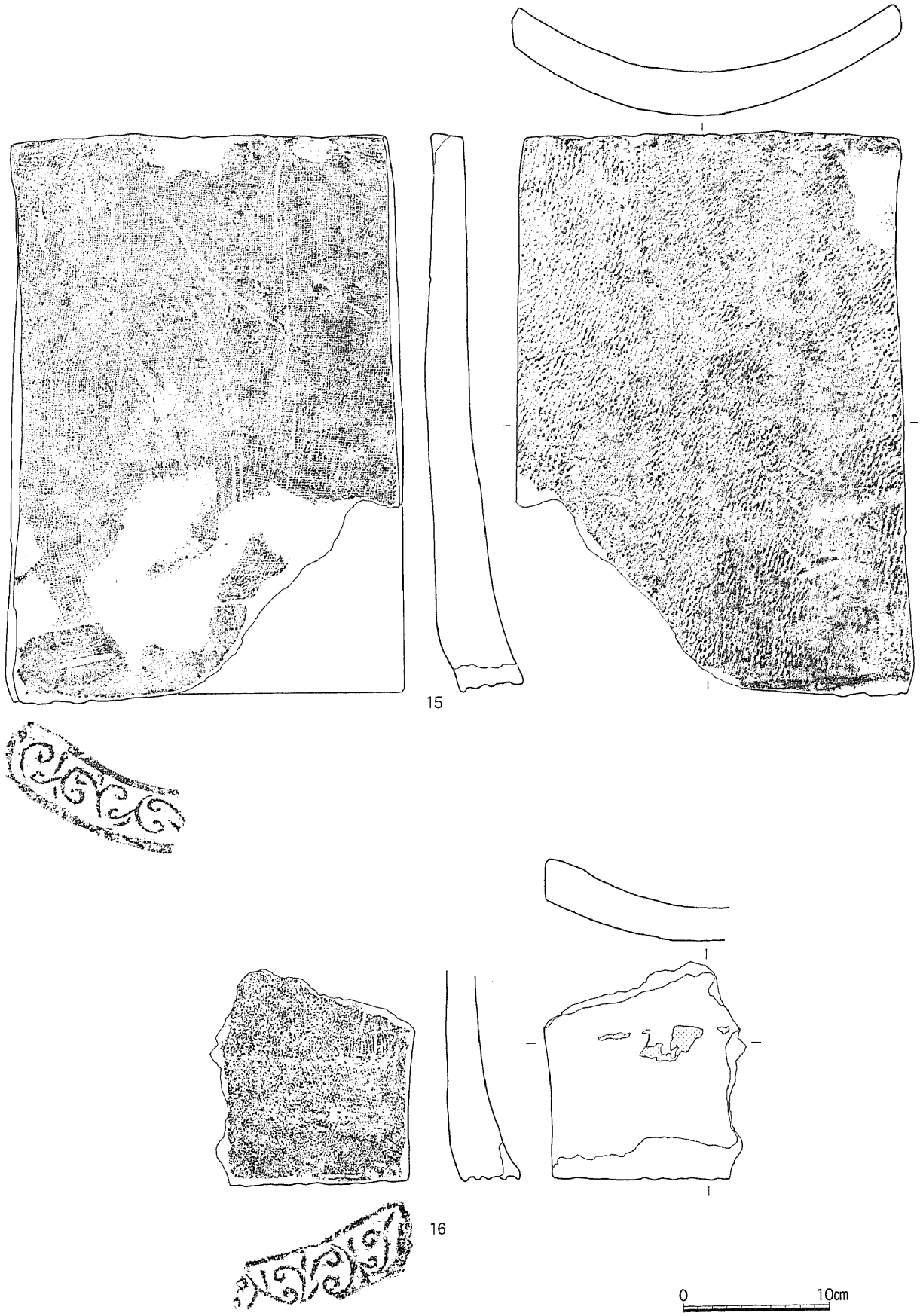


図128　軒平瓦１Ｂ式（２）（1/4）

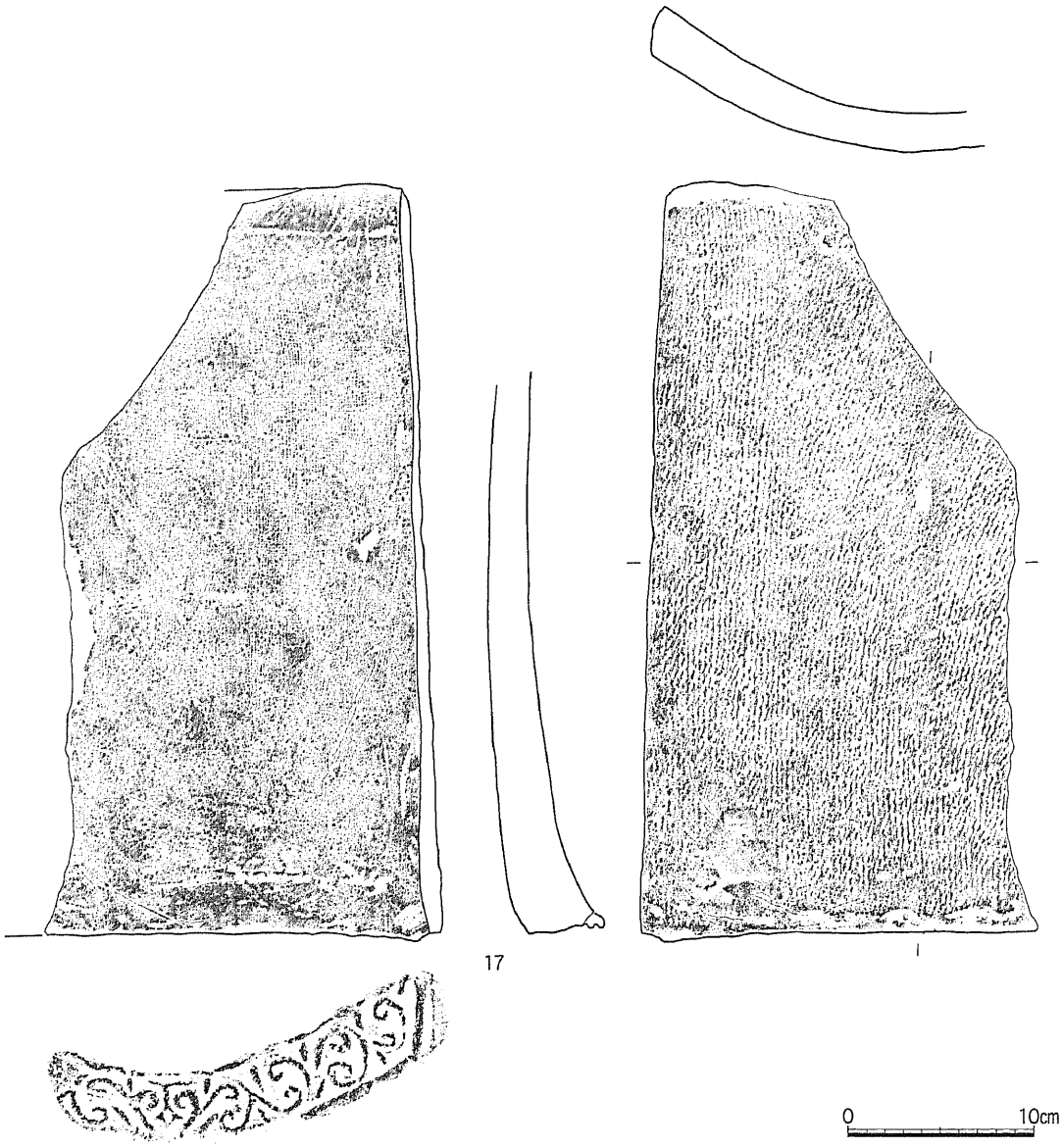


図129　軒平瓦１Ｂ式（３）（1/4）

に炭素を吸着して褐黒色を呈するものが多い。胎土の特徴は軒丸瓦１式と同様である。

同笵瓦が仁王堂池遺跡（備前国分尼寺跡）から出土している。

軒平瓦２Ｂ式（図130～132、図版32-２）

均整唐草文軒平瓦。[第Ⅱ型式]。

講堂西側では焼け落ちた西面庇軒先の状況をとらえることができ、軒平瓦２Ｂ式が並んだ状態で出土した。これ以外の破片も講堂周辺に集中した出土状況を示している。金堂調査区や中門調査区池堆積・造成土からもある程度の量が出土しているが、講堂から流出したとみられる出土状況であり、講堂に用いた軒平瓦とみてよい。組み合う軒丸瓦は１式である。

大ぶりの中心飾りの左右に２回反転する唐草がのびるが、中心飾りがかなり左に偏っているため左右対称とならない。周縁は半円形の断面をなす。

肉厚で大形の軒平瓦であり、19で長さ44.9cm、瓦当幅29.7cm、瓦当厚6.0cmを測る。18・19では糸切り痕は残らないが、凹面は基本的に糸切り痕と布目で、瓦当面にむかう斜面はナデである。凸面は

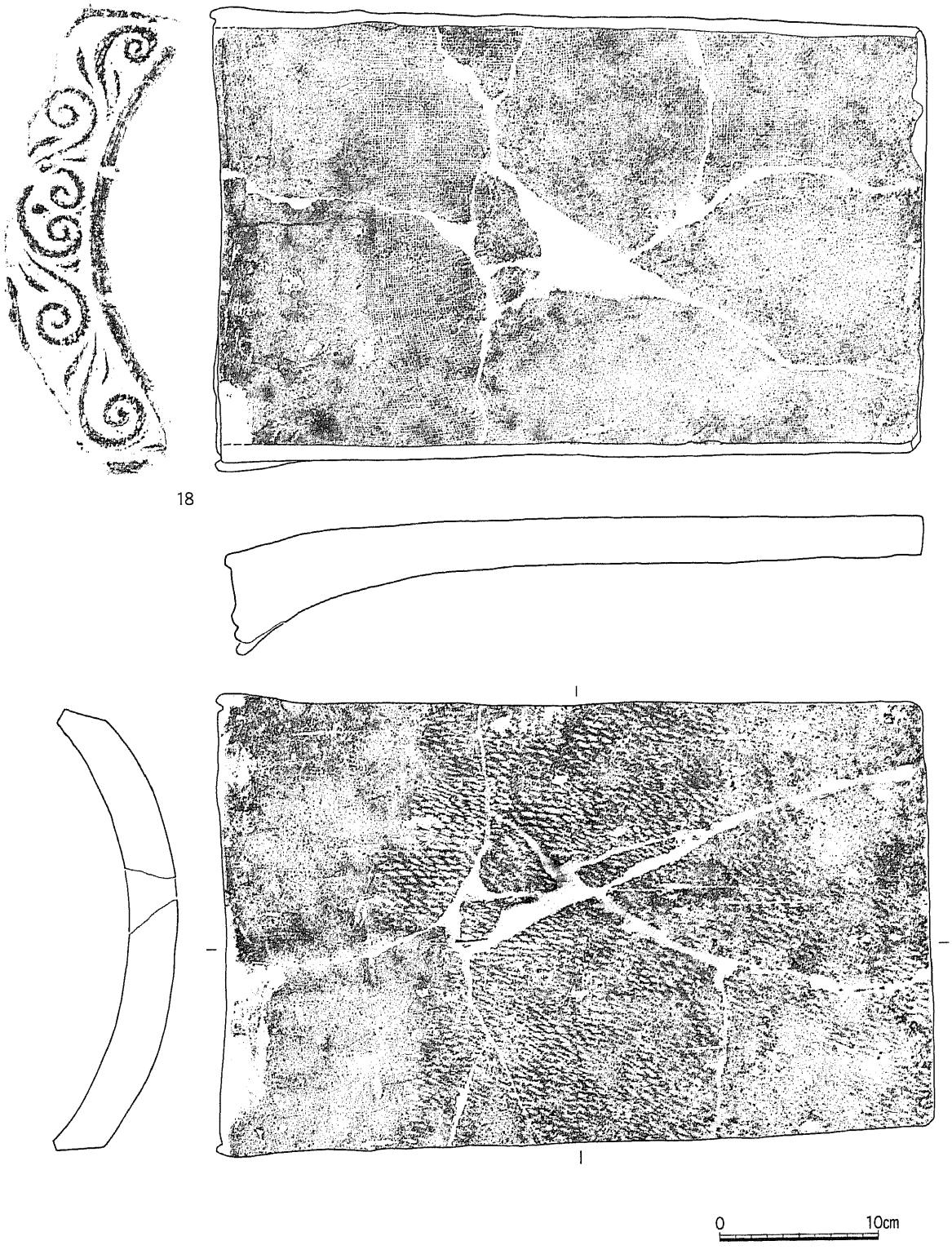


図130　軒平瓦２Ｂ式（１）（1/4）

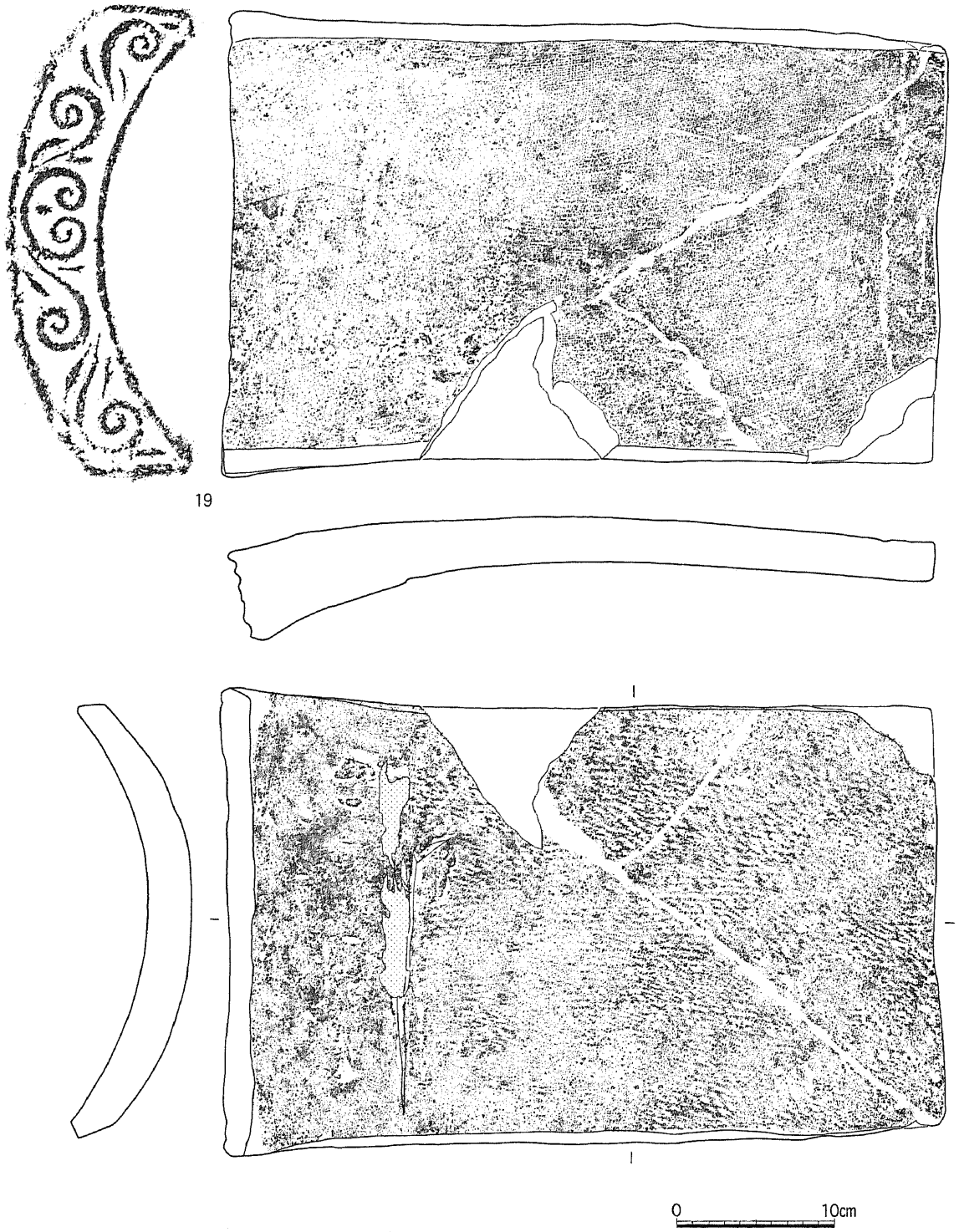


図131　軒平瓦２Ｂ式（２）（1/4）

縄目叩きで、縄目は軒平瓦１式のそれよりもわずかに太い。18では縄目ののち部分的にケズリがかかる。凸面の前側斜面部には縦方向のケズリののちナデが施されることが多い。

18のように瓦当周縁や唐草文の頂部など瓦当の高い部分に浅い平行の条線が入るものがかなり見られる。完全に乾燥しきらないうちに瓦当面を下にして置いたため下に敷かれた植物などの圧痕が付いた可能性が強い。また、19の凸面の縄目叩きが終わる付近には長軸と直交する浅い凹線状のくぼみが

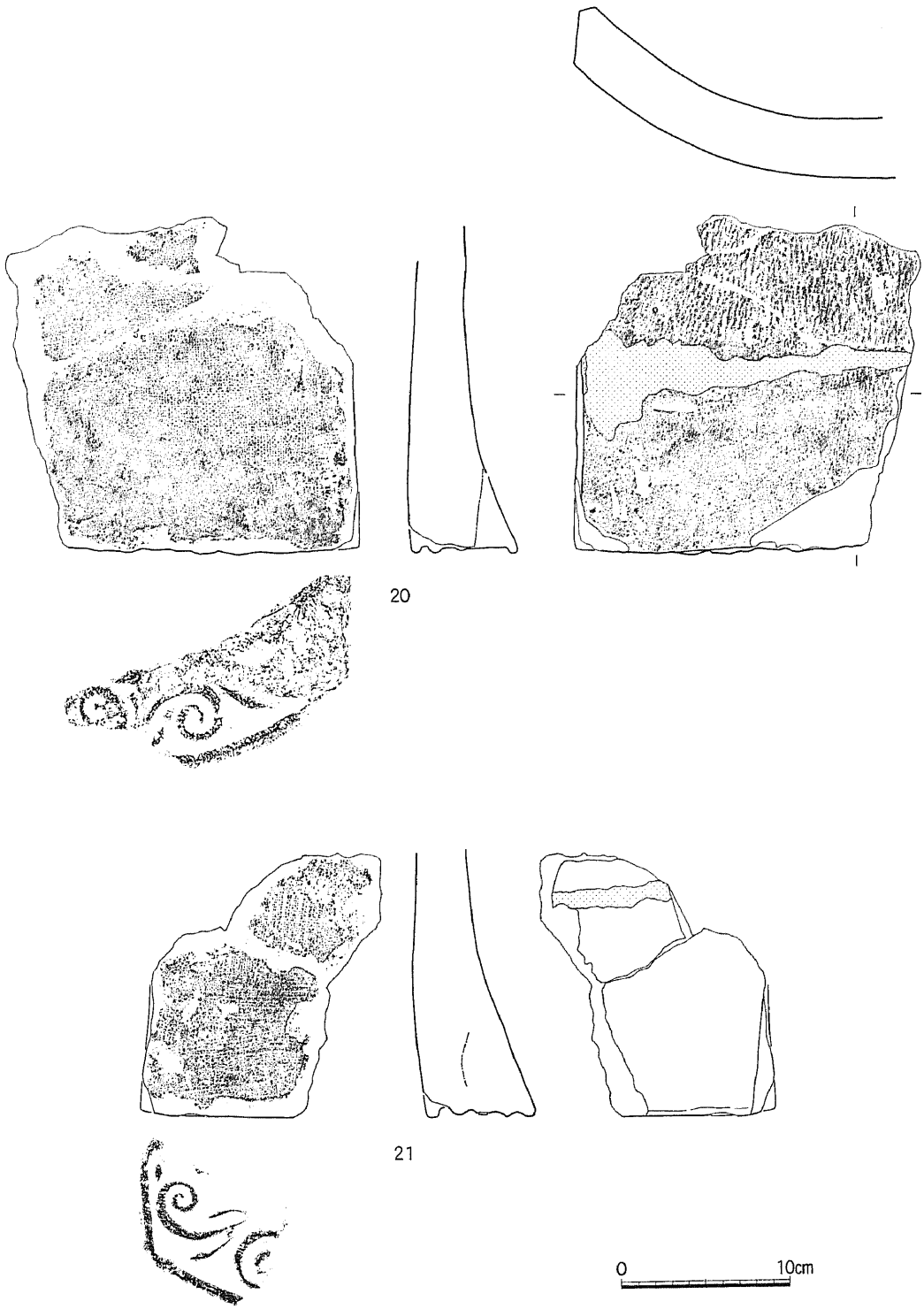


図132　軒平瓦２Ｂ式（３）（1/4）

見られるが、別個体でもこれに似たものがあり、乾燥時に他の個体の縁があたった跡の可能性がある。

この推定を妥当とするなら、軒平瓦２Ｂ式は連続して製作され、瓦笵からはずした後に瓦当面を上にして連続して立てかけ、ほぼ乾燥した段階で反転させて乾燥を完了という工程を経たことになる。

この型式では凸面に赤色顔料が付着するものが多い。19では瓦当面から10.6cmの、前述のくぼみとほぼ重複する位置を奥側として、幅1.7cm、長さ15cmにわたって赤色顔料が帯状に付着しており、20・21にも同様の付着が認められる。

いわゆる須恵質の焼成で暗青色を呈するものと明褐灰色を呈しやや軟質のものとがある。

備前国分寺跡以外に仁王堂池遺跡（備前国分尼寺跡）から出土している。

軒平瓦２Ａ式（図133）

２Ｂ式がまとまった出土量を示すのに対し、この型式は調査では出土していない。永山1925、玉井1941掲載資料が知られ、他に馬屋遺跡包含層出土資料（岡山県教委1995）がある。22には国分寺寺域南東外側で過去に採集された資料を示しており、23は永山1925からの転載である。

内区の構成・特徴は２Ｂ式と同一である。異なるのは22では欠損しているが上下両側に周縁をもつことと、２Ｂ式の周縁となる界線の形状である。２Ｂ式の周縁は丸みをもち高い蒲鉾形の断面をなし全周するのに対し、２Ａ式の界線は断面が三角形をなし唐草文からやや離れた位置にある。また、欠損のため明確ではないが、瓦当面残存部の端と側縁の間は狭く、界線は脇区にはめぐっていなかった可能性もある。断面形状からみて２Ａ式の界線を内側にやや拡張して周縁に変えたとみられ、２Ａ式から２Ｂ式に改笵されたとみられる。２Ａ式の周縁は取り去られたことになる。

瓦当厚7.8cmときわめて厚い。凹面の瓦当側は横ナデ、奥側は糸切り痕および布目。凸面は瓦当側がナデ、奥側は縄目叩きである。焼成は良好で暗青色、須恵質である。

２Ｂ式に先行するものであり創建期のなかでも早い段階の軒平瓦と判断できる。用いられた堂宇は不明であるが、22の採集位置に最も近い塔がその可能性をもつかもしれない。出土量はきわめて少なく、多くが生産されないうちにより薄い２Ｂ式に変更されたとみられる。

丸瓦（図134～136）

創建期の軒丸瓦・軒平瓦に組み合う丸瓦はいずれも玉縁式である。全長は33.5から37.5cmまでがあるが、36.3～37.1cmに集中する。玉縁部の長さも2.4cmから7.4cmとかなりばらつきがあるが、４～６cmが最も多い。筒部の長さはよくまとまり、29.4～31.8cmが主体を占め、長さ約１尺が標準であったとみられる（図136）。これ以外に筒部長さ33～35cmの大型品が少量見られる。

幅は玉縁側が14cm前後で、下端は玉縁側よりも1.5cm前後広くなる。

凸面は縄目叩きののち、玉縁を含めてヨコナデが加えられており、ほとんど縄目叩きが残らない個体もある。凹面には糸切り痕と布目が見られる。

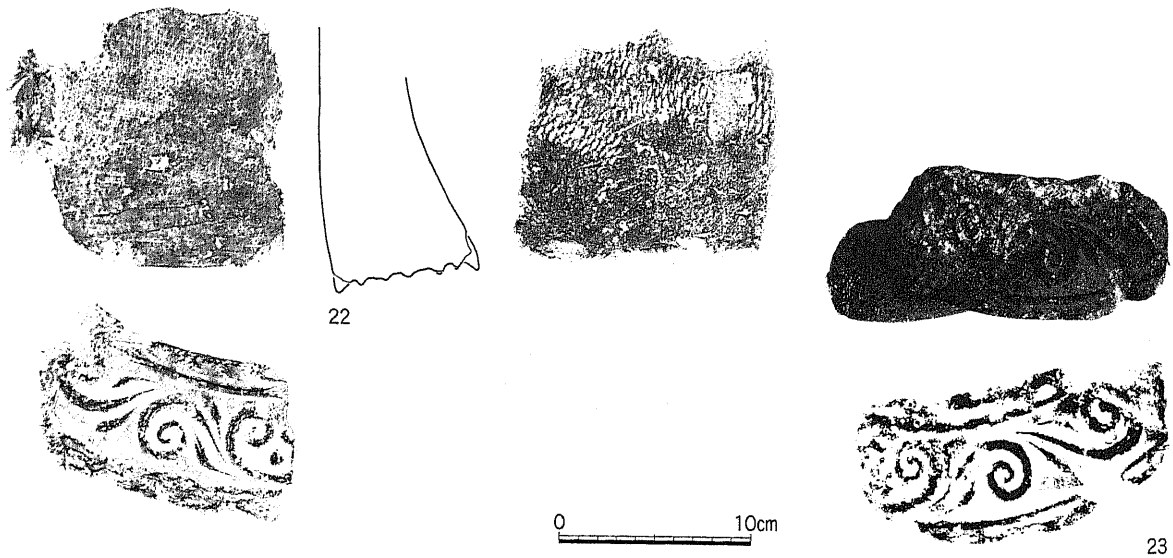


図133　軒平瓦２Ａ式（1/4）

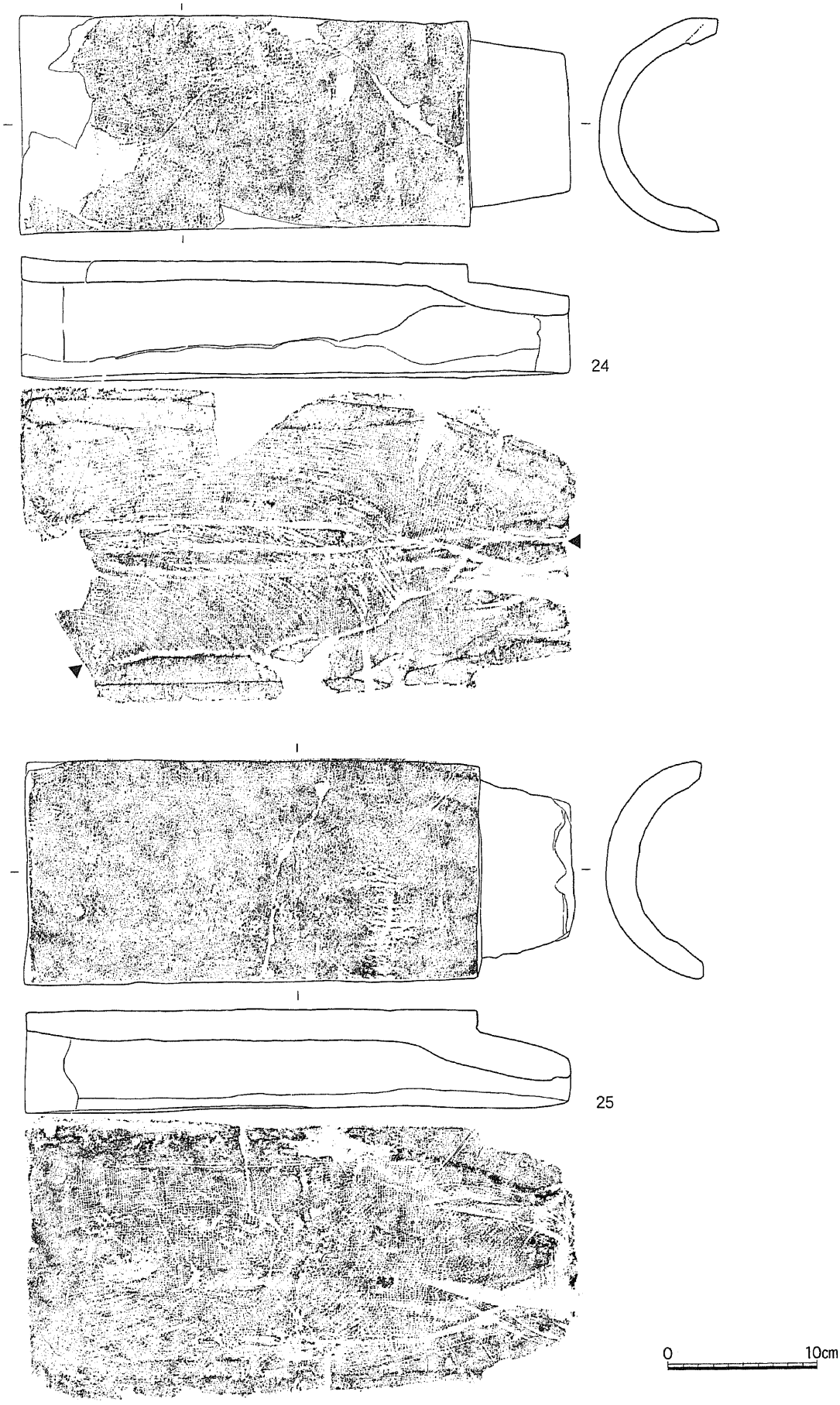


図134　創建期の丸瓦（1）（1/4）

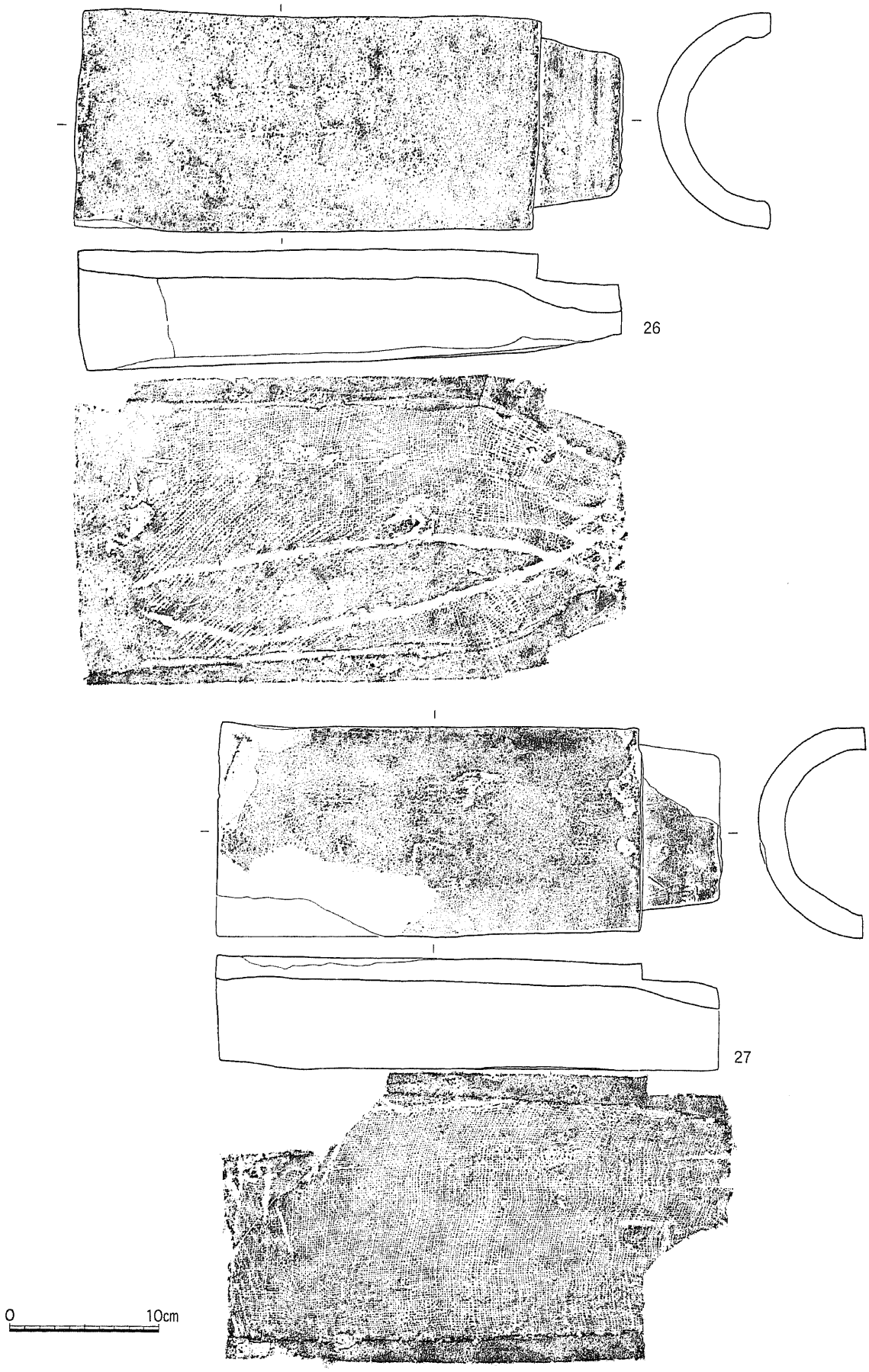


図135　創建期の丸瓦（２）（1/4）

24では糸切りで形成された粘土板を接合した痕跡が玉縁部中央付近から筒部端にかけて残っており（凹面拓本▼－▼）、内型に粘土板を巻き付けた状況が明瞭である。図示していないが筒部の中ほどで横方向に別の粘土板と接続している個体があり、上下二段で内型に巻き付ける場合もあったようである。24のような資料はほとんどなく、通常、接合部付近で半裁しているのかもしれない。このほか、まれに玉縁の段を形成する粘土が剥離した例があり、丸瓦部玉縁側の稜は細く粘土を貼り付けことによって形成されていることがあきらかである。

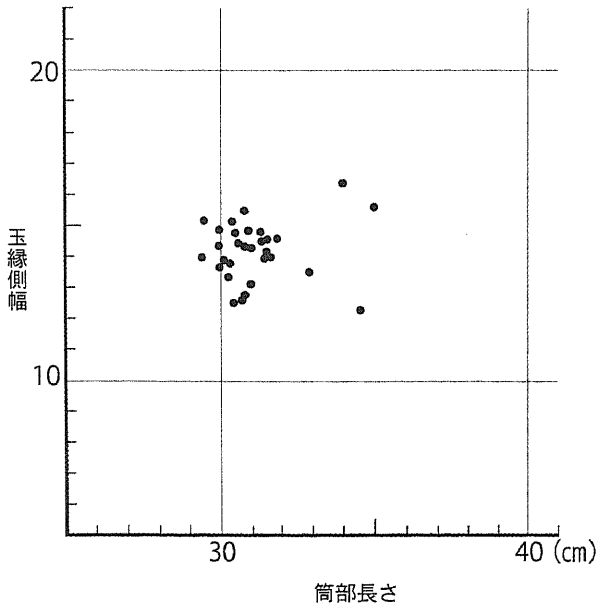


図136　丸瓦の規格

半裁後、裁断面および内側側縁、両端の内側に面取りのケズリをかけているが、27のように面取りを省略し、裁断面のみにケズリを加えるものもある。25・26では玉縁下端をそぎ取っている。24では玉縁端部にもケズリを施すが、25では未調整、26・27は粗いナデである。25では玉縁部先端の粘土がめくれ上がったような状態であるが、こうした状態を示す例は他にもあり、玉縁を下にして立てて乾燥した可能性が考えられ、また、その際のつぶれを考慮してさほど丁寧な調整がなされなかった可能性がある。

平瓦（図137～142）

平瓦の出土量は最も多く、完形品・準完形品もかなりの量があるが、そのうちの一部を図示した。また、平瓦のうち文字記号をもつものについては第2節で検討する。

図137に示すように29は長さ32.9cmと例外的に小さく（a）、それを除いた場合、長さは34.3cm～38.5cmにまとまる。長さ37.0cm、狭端幅25.5cm、広端幅28.0cmが標準となり、その数値から±1.0cmの間に大部分がおさまる（b）。それらよりもやや長く広いもの（c）と短く狭いもの（d）が見られるが、それらの量は少ない。幅に関しては広端よりも狭端の方がまとまる傾向にある。

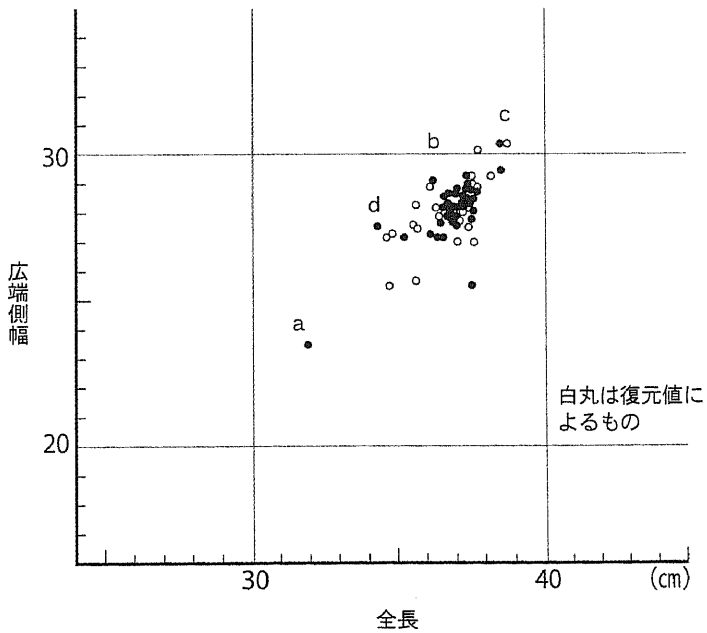


図137　平瓦の規格

いずれにも模骨痕は見られず、横断面形が弧をなさず両端が直線気味になること、35のように布端

の紐痕が見られることなどから、一枚作りで製作されたとみてよい。

叩きの特徴　凸面の調整は縄目叩きで、32のようにやや太いものもあるがそれらは少数で、基本的に細い叩きである。30・33・34によく表れているが、叩きは広端側と狭端側に二分して行われており、中央を横方向に叩きが十分に及んでいない部分が生じるものもある。縄目が不揃いな場合は叩きの単位を確認できるが、34では5～6cm間隔で叩きを行い、横方向に6回程度叩いている。

他の、叩きが明瞭な資料を含めた観察にもとづけば、工程は以下のように整理できる。

・狭端側の叩きを最初に行ったのちに広端側の叩きがなされる。

・叩きは6ないし7回で行う。

・30のように狭端側・広端側を均等な長さで叩くものと、34のように広端側をやや長めにするものとがあり、後者がやや多い。

・34のような、原体が不揃いなため叩きの状況を知ることができる資料から判断すると叩き原体の向きは換わっておらず、狭端側・広端側とも同じ方向から叩いている。

凹面・端部の調整　凹面には糸切り痕と布目が残るが中央よりもやや広端側の位置から狭端までの間にはナデが加えられるのが一般的である。なお、29では全面にナデを行っており、32では狭端側は布目が残る軽いナデで、広端側に丁寧なナデを施している。このほか36のように指頭の痕跡が見られる例がある。

両側面の調整はケズリののちナデで、稜線の面取りを行っている。31ではそれに加えて凹面の両側縁にケズリを加えている。

両端の調整は基本的にはケズリののちナデであるが、広端の調整は狭端よりも雑で、28では一部がケズリ、大部分がナデである。29のように両端とも斜面に仕上げるものもあるが、基本的には狭端は斜めに、広端はそれよりも大きな傾斜かほぼ方形に仕上げている。38がその最も顕著な例であるが、広端にはしばしば植物の茎とみられる圧痕があり、また28では表面が荒れた状態になる。これらは、乾燥時に広端を下にして立てていたことを示すとみられる。

製作手法　30では粘土接合面で明瞭な剥離を生じており、平瓦の製作手法を推定することができる。これによれば、狭端側中央付近から広端側にむかって順次粘土塊を付加して平瓦の原形を形成したとみられる。28・296にも接合痕があり、同様な成形であったと推定できる。また39の凸面は、粘土の付加が十分でなかったため凸面側に段差を生じ、その部分に叩きがうまく及ばなかった事例である。このほか34では粘土の接合が十分でなかったため凹面の狭端近くに未調整の面をみせる空隙が生じている。

通常、凹面に糸切り痕が残る場合には厚い粘土塊から粘土板が切り出されたとみなされているが、備前国分寺創建瓦の場合は水平の作業台上で粘土塊を接合することによって個別に平瓦原形が製作され、作業台からの切り離し時に糸切りが行われたと考えるのが適当である。この手法がどの程度の普遍性をもつのか今後他の資料で検討が必要であるが、必ずしも特殊な手法ではないと考えている。

なお、ここには製作工程を示す資料に留意して示したが、こうした資料はごく少数であって、多くは丁寧な仕上がりである。

不明製品（図142）

通常の平瓦以外に特異な形状を示すものが若干見られる。37は通常とは逆に縄目叩き側が凹面をなし、またその方向も叩き軸線に直交する。焼成時に変形したものが持ち込まれた可能性がある。40は

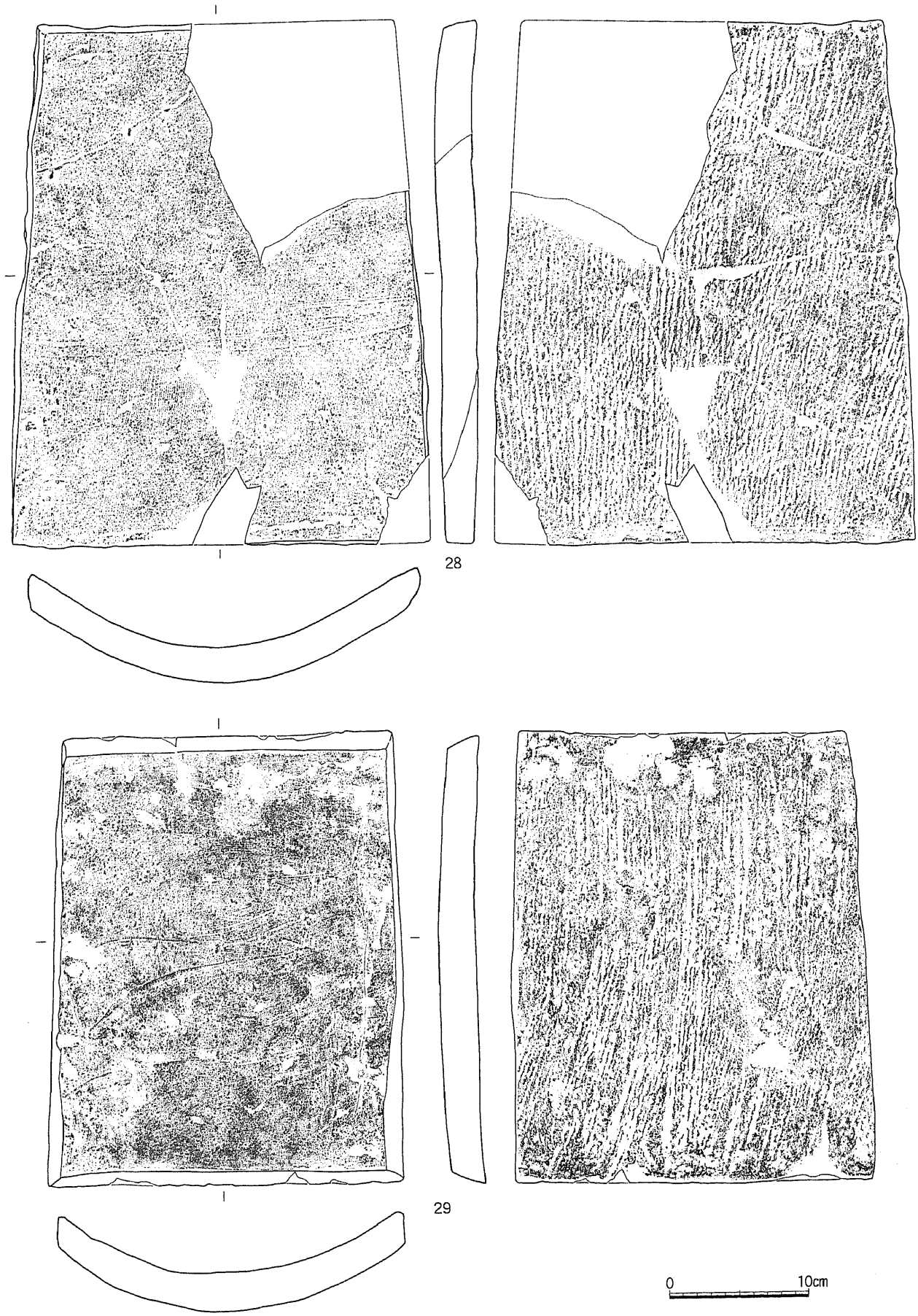


図138　創建期の平瓦（1）（1/4）

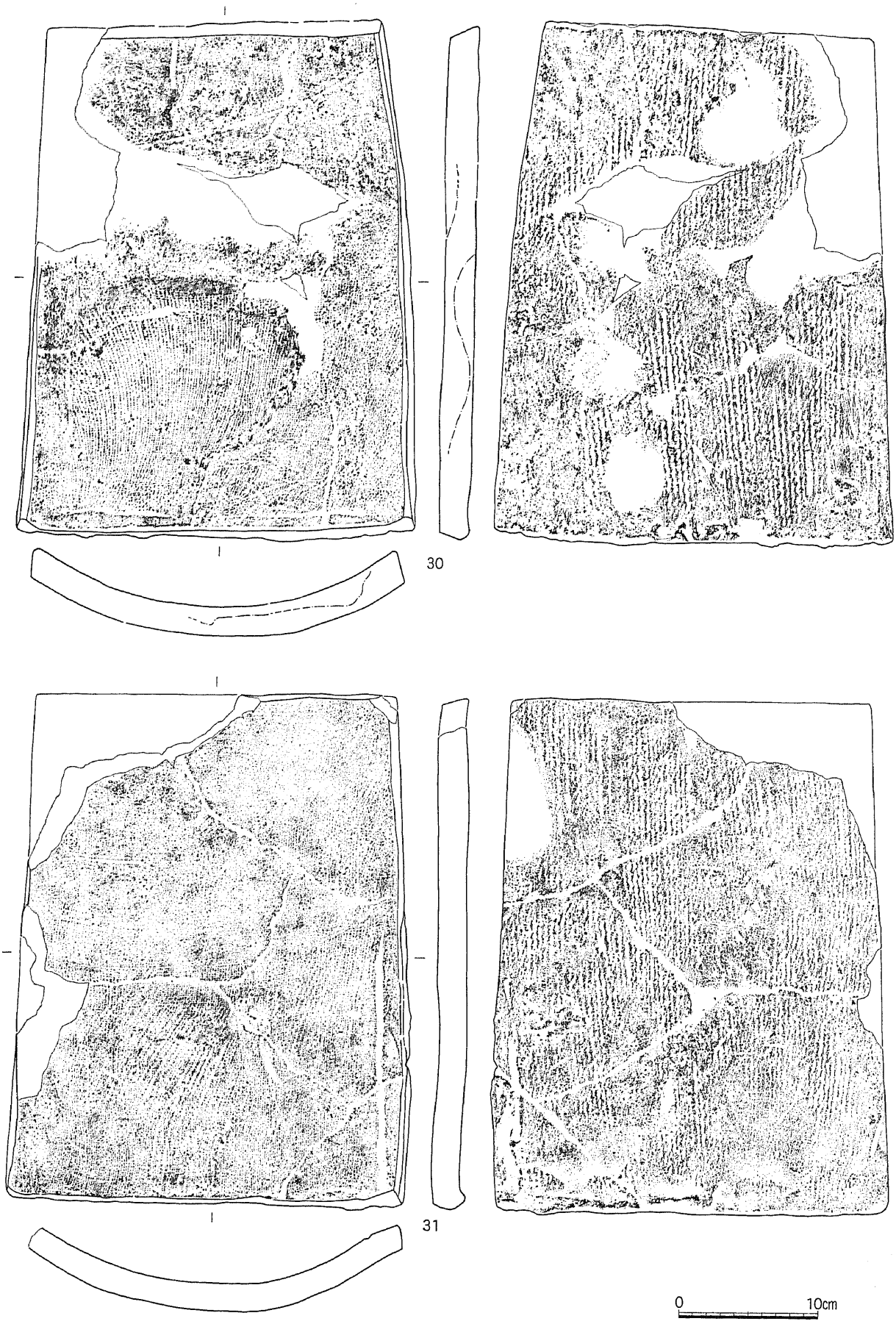


図139　創建期の平瓦（2）（1/4）

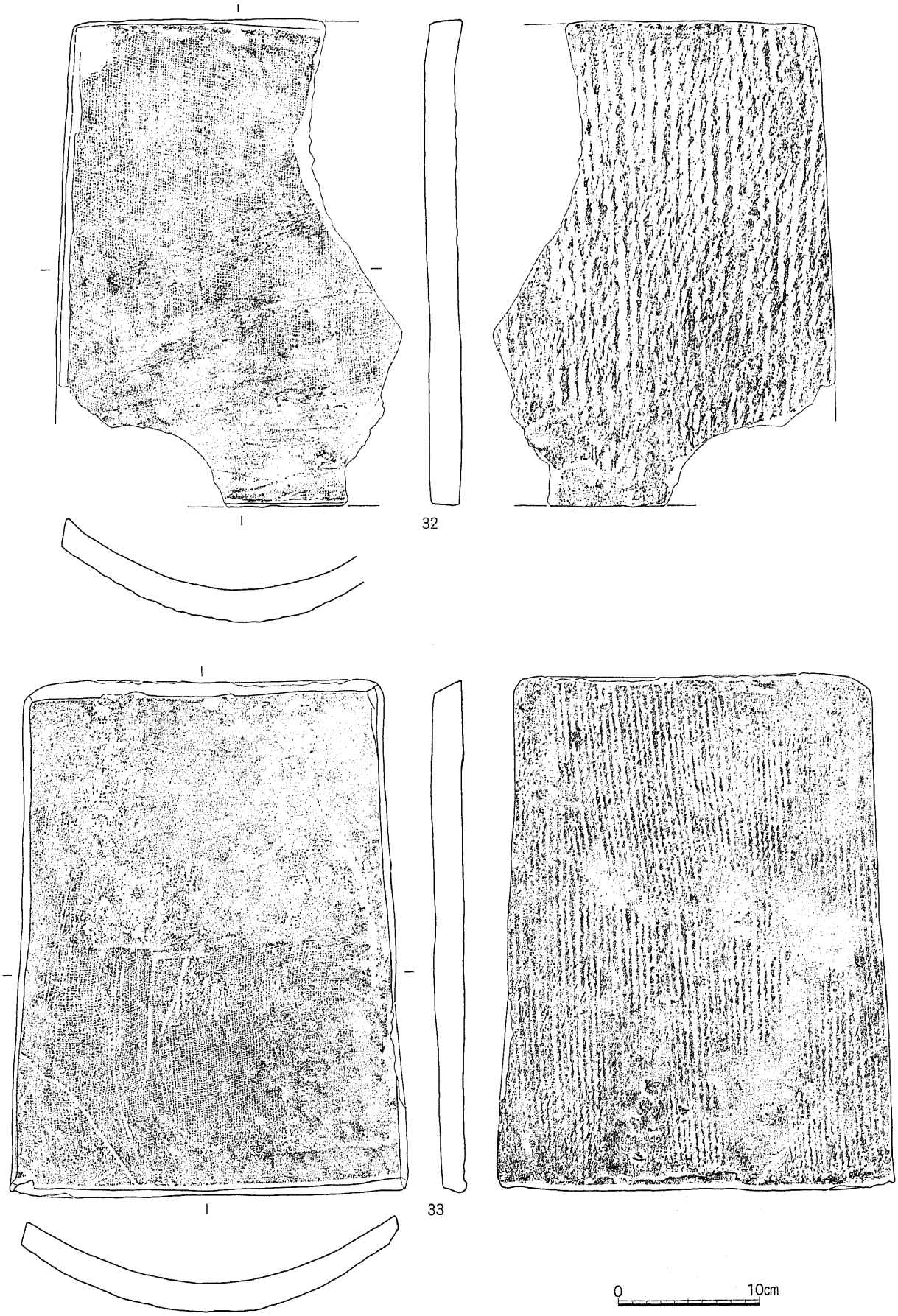


図140　創建期の平瓦（3）（1/4）

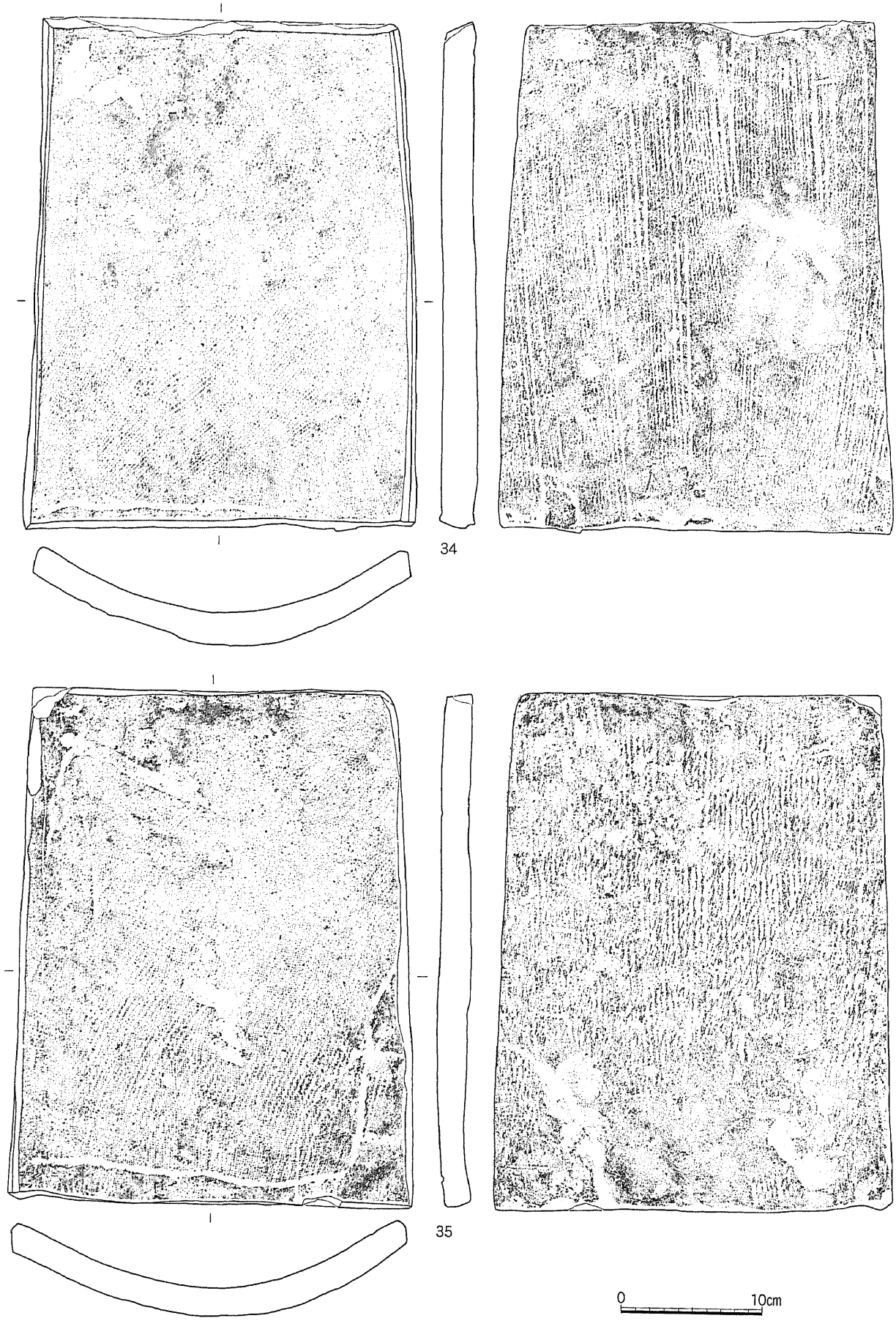


図141　創建期の平瓦（４）（1/4）

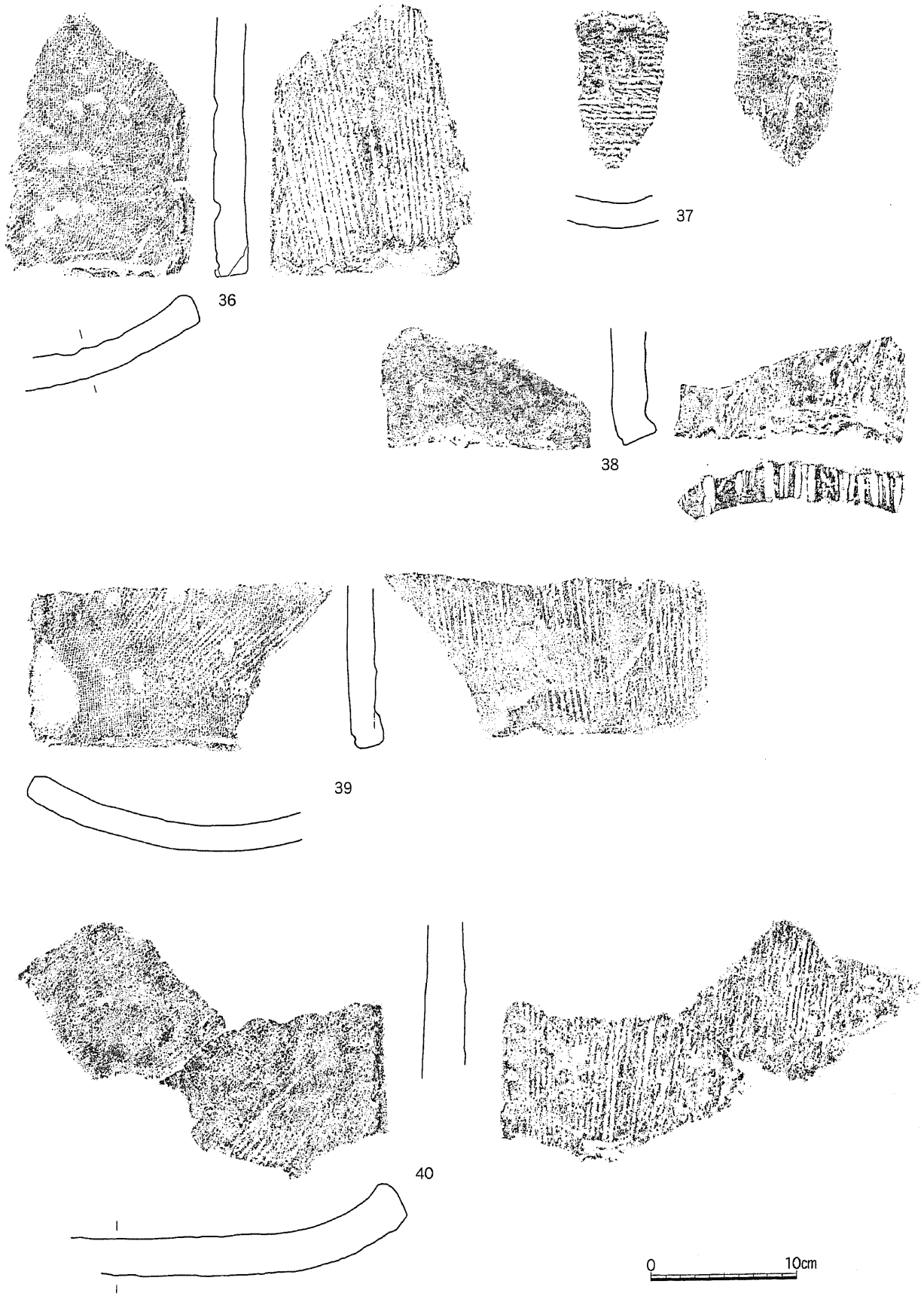


図142　創建期の平瓦（5）・不明製品（1/4）

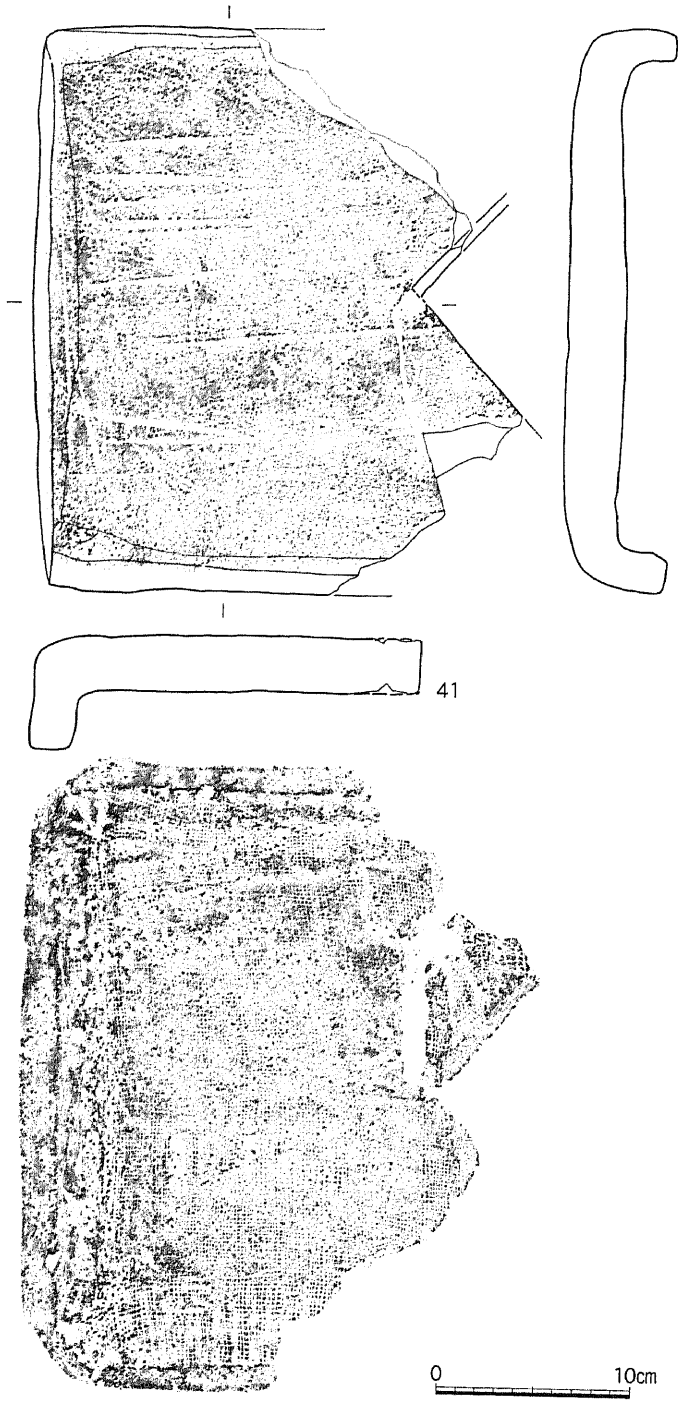


図143　隅木蓋瓦（1/4）

中央が平坦で、端部のみ屈曲する破片である。

隅木蓋瓦（図143、図版44-５）

41は塔調査区東端の瓦だまり上層から出土した隅木蓋瓦で、幅30.0cm、残存長さ25.9cmを測る。先端から20.5cmの位置に方形の切り込みが設けられる。裏側の天井部幅は25.0cmである。

上面は板状工具による無文の叩きが施され、裏面には布目が残る。

塼（図144、図版44-６）

塼は破片12点が出土した。図示した42は僧房調査区基壇南側瓦だまり、43は金堂調査区に近世に形成された瓦廃棄土壙、44は中門雨落ち付近、45は講堂瓦だまりからの出土である。出土の調査区は僧房・講堂・北面回廊・金堂・中門・南門（石垣裏込め）・東築地などにわたっており、特定の調査区にまとまるとは言い難く広範な散布状況である。なお、僧房調査区では礎石85の根石に混じって１点が出土しており、破損品が転用された可能性がある。

42・43・44はそれぞれ厚さ5.2・5.3・5.8cmである。42は幅25.3cmを測る。明褐色～灰褐色を呈しやや軟質の焼成のものが多く、暗灰色で堅緻な焼成のものは１点である。表面はナデによって平滑に仕上げられている。

45は講堂基壇東部上面に形成された瓦だまりから出土したものであるが、室町時代の瓦を多量に含む瓦だまりであり、出土位置が必ずしも使用された建物の位置を示すとは言い切れない。幅13.8cm、残存長さ15.0cm、同厚さ10.5cmを測るが、破面の状態から長さ・幅ともさらに大きかったとみてよい。上面には丁寧なナデが加えられ、平滑な面をなすのに対し、両側面は粗いナデで指頭押圧を残している。ここでは塼に含めたが、42～44とは形状が大きく異なっており、別器種となる可能性もある。須恵質の焼成で暗青色を呈する。

以上が創建時に用いられた瓦類の基本的な構成である。

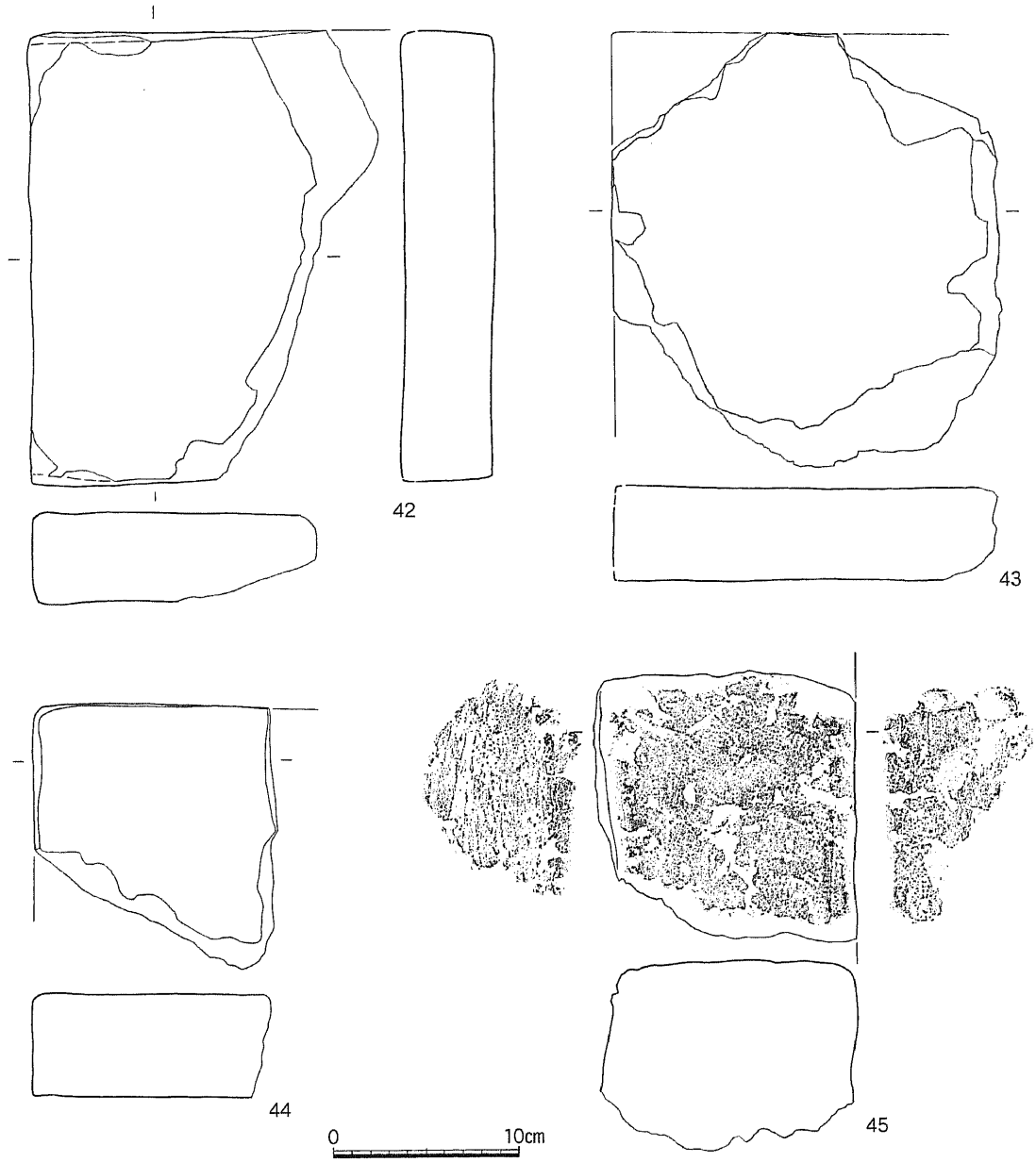


図144　塼（1/4）

（2）塔の瓦

塔に用いられた瓦の主体は軒丸瓦１式・軒平瓦１Ｂ式である。しかしながら、それ以外の型式がかなり高い比率で出土しており、他の堂宇とはやや異なる特徴をもつ。それらの型式をどのように評価すべきか判断がむずかしいところが多い。以下それを記載する。

軒平瓦１Ａ式（図145･146）

均整唐草文軒平瓦。準完形品46は塔南側の築地調査区（Ｔ15）から出土した。これ以外に破片７点が出土しているが塔調査区に集中を示す。46など塔調査区南側の築地調査区出土品も塔瓦だまりからの流出とみられ、塔に用いられた型式と考える。

唐草文は軒平瓦１Ｂ式と同じであるが、１Ｂ式の中心飾りの上端にある短く水平な表現がなく、他

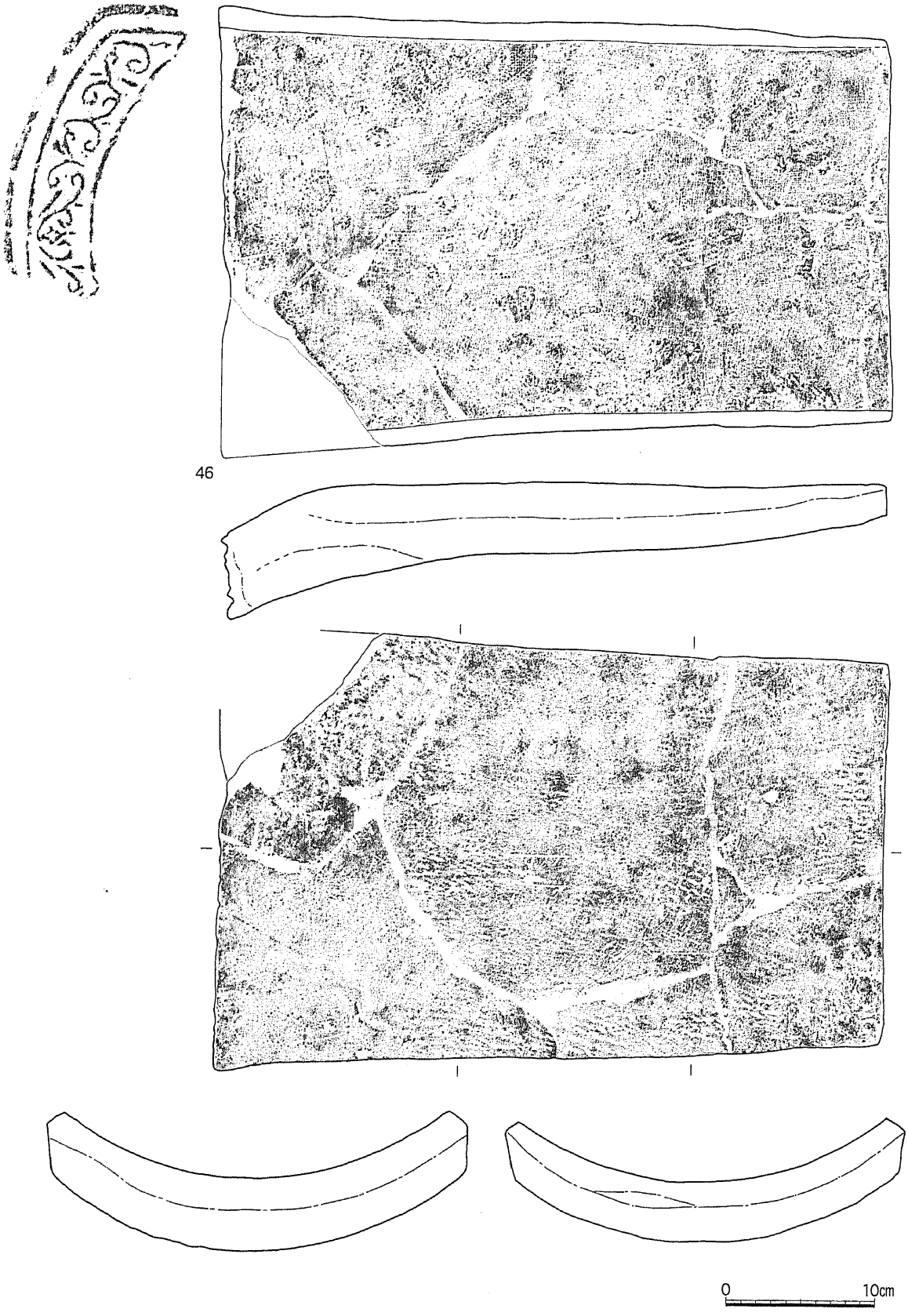


図145　軒平瓦１Ａ式（1/4）

に、中心飾りの左右斜め上の短い線や唐草文第3単位外側にある線表現が1B式では端部が細長くのびるのに対して、これではまるく収まるといった相違がある。そして、1B式の周縁が界線となり、側面と下側には界線よりもやや太い周縁がめぐる。このため復元幅は30.5cm、瓦当厚5.5cmとなり、また、肉厚で瓦当面後方の凹面の屈曲部での厚さ6.0cmとなる。

図146　軒平瓦1B式（4）（1/4）

上記の相違点を除き文様の細部および微細な笵傷は軒平瓦1B式と同じであり、1B式と1A式の内区は同じ瓦笵によるとみてよい。なお、笵傷の進行が見られないため、それをもとに両者の先後関係を判断することはむずかしい。周縁の有無は先に示した軒平瓦2A式・2B式に見られ、その変化やこの型式の文様の欠落にもとづけば、軒平瓦1A式の唐草文に若干の追刻を行い周縁を除去したのが1B式とみなすことができる。玉井1941には中心飾り上部の横線がなく、一方、周縁がない資料の拓本47が示されており、これが上記の変遷の間に入る可能性がある。

したがって、この型式から塔の着工は伽藍全体のなかでかなり早い可能性をもつことになる。ただし、この型式は塔の軒平瓦全体のなかでごく少量である。

凸面や凹面の調整は1B式と同様であるが、叩きの縄目が太く間隔が広い点が異なる。

46では製作時の痕跡が残る。体部の破面には粘土の接合痕が明瞭に残っており、2枚の粘土板を貼り合わせて形成していることがわかる。接合面は平滑な面ではなかったようで緩やかな凹凸をもつ。瓦当面近くではこの接合面は不明瞭になり、また、別に粘土を加えるようである。瓦当面部分には薄く粘土を付加している可能性があるが、これはこの型式に限ったものではなく、不明瞭なため図示しなかったが軒丸瓦1B式も同様の手法をとる可能性がある。また、軒平瓦1B式のうち厚いものでは同様に体部を2枚の粘土板によって形成した可能性が考えられる破片があり、厚い体部を作る場合はこの手法が用いられたとみられる。

軒丸瓦2式（図147、図版33-1）

単弁8弁軒丸瓦。［備前国分寺跡緊急発掘調査委1975：Ⅲb型式、伊藤1991：第Ⅰ型式b］。

塔調査区からまとまって出土している。出土破片数は29点で軒丸瓦1式の79点に次ぐ出土量であり、塔調査区の軒丸瓦に占める比率は24％と高い。

塔以外の調査区では、僧房を除く各調査区から1ないし2点の出土である。

瓦当径16.8cmを測る。厚さは2.6cm前後で、丸瓦の接合時の粘土の付加が少ないため部位による厚さの変化は少なく、瓦当径に対して薄い感がある。

瓦当文全体の構成は軒丸瓦1式のそれに近いが、細部は異なる。文様は太く、一方高さがそれほどないため全体が平面的になる。間弁は1式のそれが水滴形であったのに対し、この型式では大きな三角形となり、形状は不揃いになる。また、49で示せば左蓮弁と左下蓮弁の間になるが、この部分には間弁は配されていない。外側には二重の圏線がめぐるが正円を描かず49では上方にやや張り出している。

周縁は狭く幅5～10mmと一定ではない。48・51では周縁幅が広くなる部分が同じであるが、49は異なっている。周縁の上面はナデ調整が加えられる。また、丸瓦部側を含む側面の調整もナデであり、

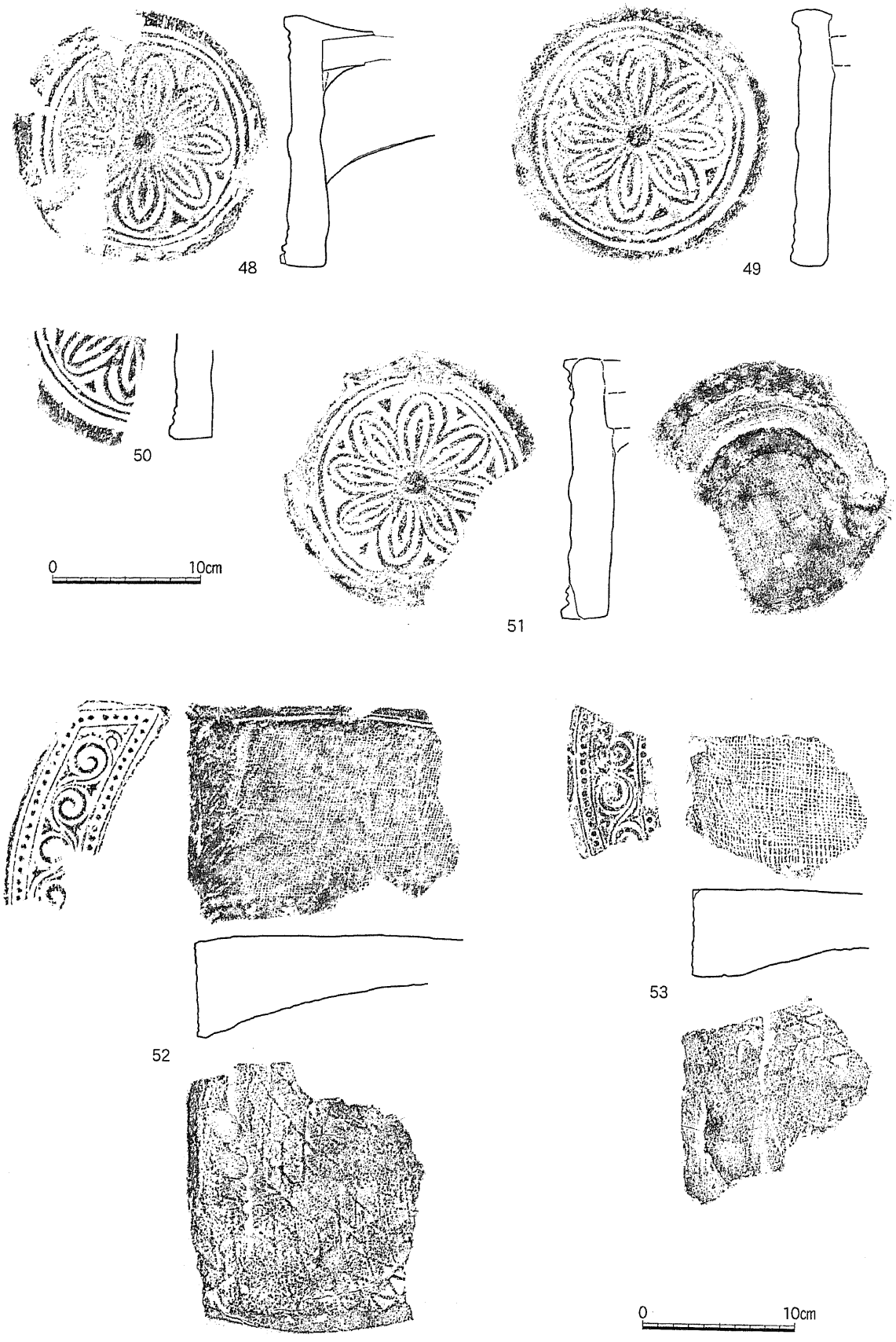


図147　軒丸瓦２式・軒平瓦３式（１）（1/4）

軒丸瓦１式に見られたケズリ調整は見られない。軒丸瓦１式の場合はナデ調整がなされる場合でも瓦笵の痕跡が側面に残ることが多いが、この型式ではそれは認められない。単にナデによって消されている可能性もあるが、瓦笵によって瓦当の径が定まるのではなく、瓦笵からはずして後に側面調整によって瓦当の外形を整えている可能性が強い。

48は文様が不鮮明であるが器表の状態は良く、笵にうまく粘土が入っていないようである。

蓮弁の軸線は瓦の軸線に対してわずかに振れており、また、48・50と49・51では文様は上下逆になる。上に向く蓮弁と下に向く蓮弁は他よりもわずかに大きく、丸みが強い。また、たとえば51の右上蓮弁・左蓮弁内郭線はゆがみをもつが、これは図123（３）など軒丸瓦１式の蓮弁に見られるゆがみに近い。これらは軒丸瓦１式の文様と共通の特徴である。１式の特徴を細部まで写し取ったとみることもできるが、１式の誤差とでも言える点が継承されていることから、軒丸瓦２式は軒丸瓦１式を改めた笵によって製作されたと考える。

改笵は笵の部分的な修正や補刻ではなく、大幅な改造であったとみられる。軒丸瓦１式の中房は４で高さが７㎜、径27㎜を測るのに対し、軒丸瓦２式は51で高さ２㎜、径22㎜と縮小しているが、形状については軒丸瓦１式の中房先端部と同様とみてもよい。また、軒丸瓦２式で間弁が刻まれなかった箇所に位置する軒丸瓦１式の間弁の高さはほぼ３㎜である。したがって笵を５㎜削り込んで新たな面を作り出したと考えることができ、間弁の一つは彫り込むのが忘れられ平面になったとみられる。この改笵を想定した場合、一度に５㎜削り取ると中房と周縁以外の文様は失われ、先に示した文様の諸特徴が継承されることはなくなるため、薄く削りながら文様を彫り下ろしていった可能性が考えられる。

瓦当裏面には丸瓦接合面が設けられるが、瓦当裏面からの深さはきわめて浅い。51で４㎜の深さをもつがこれが最も深く、49では面を作り出した程度である。51では接合面の上下両側に指頭押圧を加えており、その後に丸瓦両側に粘土を補充する。接合面が浅いため指頭押圧はさほど効果があったとは考えにくく、また丸瓦凹面側の粘土も少なく、丸瓦凸面側の粘土で丸瓦を固定しているような感があるが、破損時には多くで瓦当部と丸瓦がはずれている。

接合される丸瓦の先端は整った平面をなし、擦痕をもつものがある。瓦当側の接合面に密着するように粘土が柔らかい段階で切り整えている可能性がある。なお、丸瓦の凹凸両面の補充粘土が丸瓦から剥離した例、特に凹面側が剥離する例はほとんどない。瓦当側への差し込みを浅くした分、柔らかいうちに接合を終えている可能性がある。

瓦当裏面の調整はナデである。

丸瓦瓦当側上面の見える破片が少ないため判断しがたいが、それらには刻みは認められず、刻みはない、あるいはその比率はきわめて低いとみられる。

焼成は比較的よく、灰色～褐灰色を呈する。

以下に述べるように軒丸瓦２式は軒平瓦３式と組み合う可能性が考えられる。

軒平瓦３式（図147・148、図版33-１）

均整唐草文軒平瓦。［第Ⅳ型式］。出土した破片のうち83％が塔およびその南側の築地調査区から出土しており、塔の軒平瓦に占める比率は17％である。

54で瓦当幅27.0㎝、瓦当厚6.7㎝を測る。偏行唐草文に似るが、中央から左右へ主葉が３単位ずつ反転しながらのびる。54では中央が若干欠損しているが、53の左側の単位が中央にあたり、他と同じ

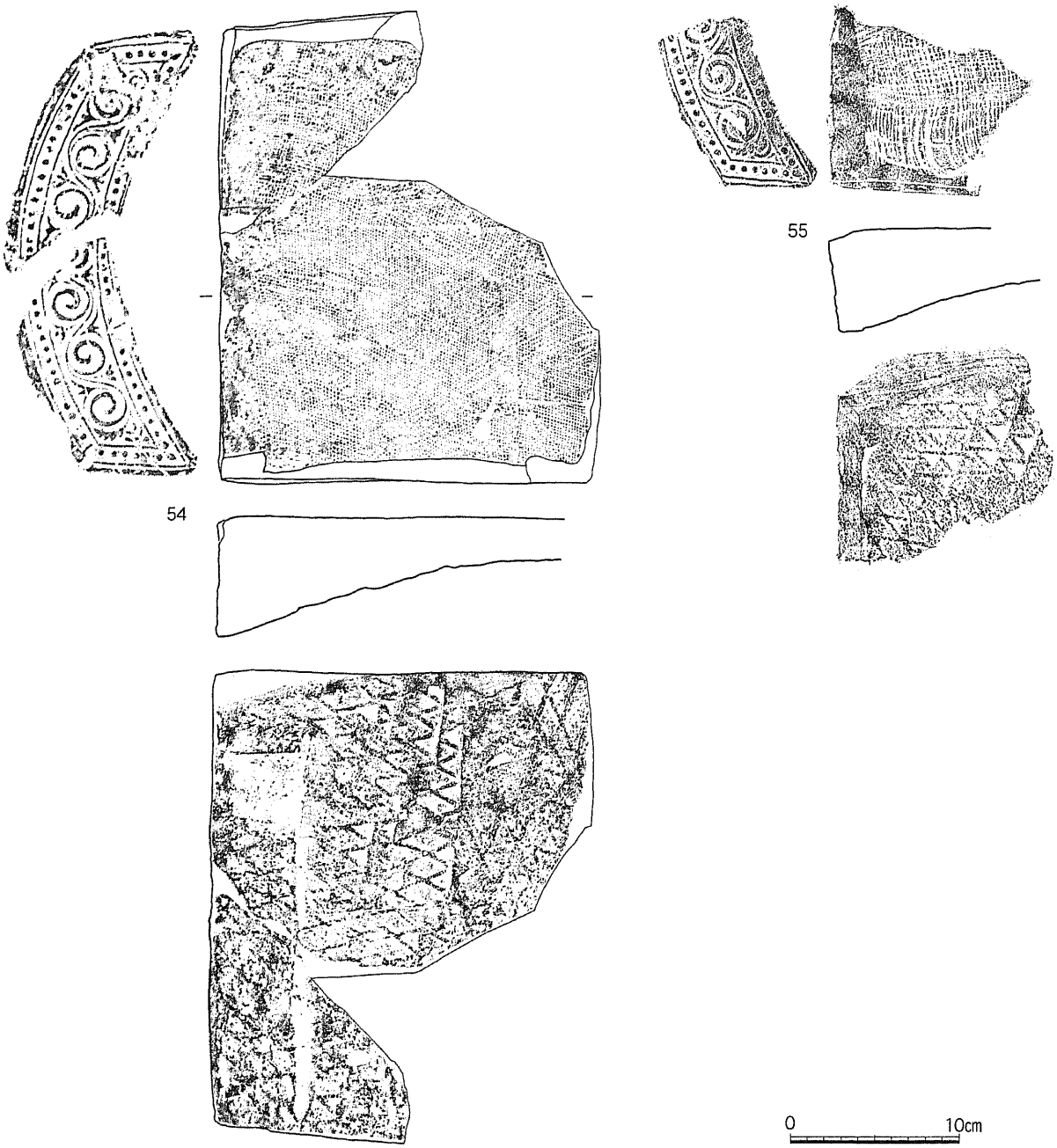


図148　軒平瓦３式（２）（1/4）

く渦状をなす。

渦状に巻く蔓先の間には上下に支葉を配する。支葉は木葉状で先端が３つに分かれる。

外区には珠文を密に配している。

凹面・凸面の瓦当面近くは横方向のケズリがなされるものが多い。

凹面には布目および糸切り痕が見られる。布目は軒平瓦１・２式のそれにくらべて粗く、55のように端がほつれたかに見えるものもある。

凸面には格子叩きが施される。瓦当面近くは52・55のように斜めから叩くものと、53・54のように横から叩くものとがある。瓦当面から離れた平瓦部は54のように長軸と平行に叩く。

なお、54の凸面では瓦当側から50㎜の位置にごく浅い段が見られその底面では叩きが消える。同様

な段は52においても見られ、これでは指頭によって段がつぶれている。この段は製作後に軒平瓦が順番に立てかけられたため生じた圧痕と推定される。

側面は縦方向のケズリで、凹面の端も面取りがなされる。

多くが淡褐色の色調で軟質の焼成であるが、53・55のように表面が暗青色、破面が暗赤色で、須恵質で硬質の焼成になるものも少数ながら認められる。なお、この型式では花崗岩起源とみられる長石の粗砂が比較的多い。

塔に用いられる瓦の基本は軒丸瓦１式と軒平瓦１Ｂ式であるが、以上のように塔にほぼ固有の型式が見られる。このうち軒平瓦１Ａ式は古い様相をもち、一方、軒丸瓦２式・軒平瓦３式は新しい様相を示す。塔の建立がどの時点であったのかは大きな問題であるが、現状では判断がかなりむずかしい。この問題については平瓦の検討を加えて第２節でもふれる。軒丸瓦２式・軒平瓦３式は塔の軒瓦の２割前後の高い比率をもっており、大規模な補修の瓦でないとするなら、竣工は大幅に遅れたことになる。

（3）補修瓦

軒丸瓦３式（図149･161、図版34-２）

［第Ⅱ型式］。金堂・講堂・南門中門調査区から出土しているが、出土個体数は少量である。金堂調査区の１点が講堂からの流入とすれば、講堂と南門・中門の補修に用いられたとみることができる。

瓦当径17.0cm、厚さ3.6cmを測る。軒丸瓦１式と同じく単弁８弁蓮華文である。蓮弁の外郭は中房に達しており、間弁はハート形をなす。中房は径2.8cmと小さく、そのなかは６弁に区切られる。外区には蓮弁に対応して８つの珠文が配される。周縁上面は平坦で幅は９㎜前後と軒丸瓦１式のそれに

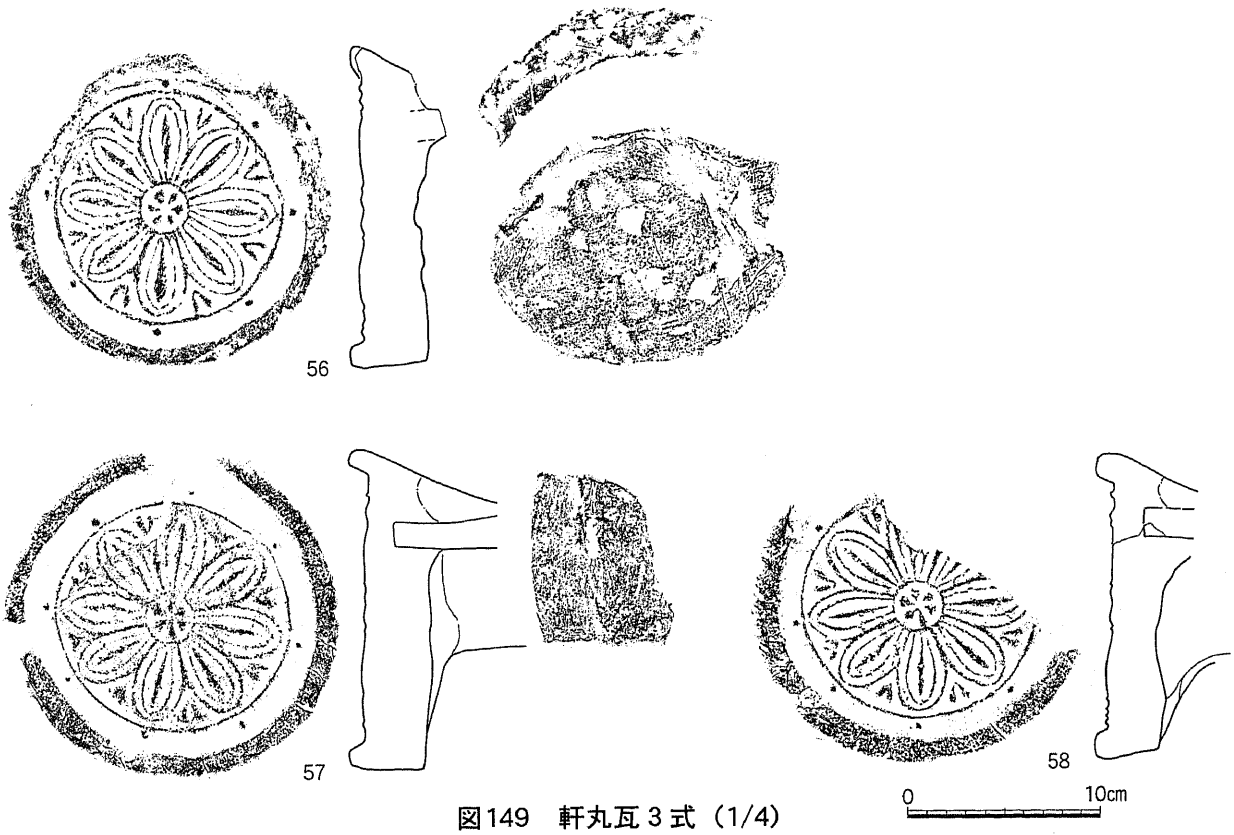


図149　軒丸瓦３式（1/4）

近い。

丸瓦接合面の位置は瓦当面から11～16㎜である。接合される丸瓦の先端の厚さは11～14㎜で、軒丸瓦１式のそれよりもやや薄めである。

56では丸瓦上面に刻みを施すが、57では見られない。また56では丸瓦接合時に凸面側に指頭押圧を加えており、その面で剥離を生じている。57・58でも同様の同じ手法を見ることができるが、これらは軒丸瓦１式と共通する。

瓦当裏面の調整は指頭押圧およびナデである。また、瓦当の丸瓦凸面側の調整は縦方向のケズリののちナデで、下半は横方向のケズリののちナデである。周縁上面から７㎜の位置に浅く瓦笵の痕跡が見られる。

57は表面に炭素を吸着して暗灰色を呈するが、56・58は白色に近い。

馬屋遺跡包含層からも１点出土しているが、これは備前国分寺跡から流出したものとみられる。このほかには瀬戸内市邑久町半田廃寺から同様の文様をもつ軒丸瓦128・129が出土している。間弁がハート形をなし外区に疎に珠文を配する点も同じであるが、中房が花弁状にならず１式のそれと同じく丸く突出する点が異なる。軒丸瓦３式を改笵して半田廃寺軒丸瓦が製作された可能性を考えるべきであろう。

この軒丸瓦３式に対応する軒平瓦は明確でない。軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせからはずれる軒平瓦８式、12式などが候補にはなるが、それらは１型式１個体であり、ある程度の出土数があるこの型式とはやや異なる。軒丸瓦のみが持ち込まれた可能性もある。

軒丸瓦４式（図150、図版33-２）

［第Ⅴ型式］。塔・講堂・南門中門調査区から出土しているが、出土個体数は少なく各調査区数点ずつの出土である。

瓦当径17.6cm、厚さ3.0cmを測る。単弁７弁で、花弁の間隔は広くその間に棒状の間弁を配する。間弁の端部は横向きの「，」形をなし、そこから内側に棒状にのびて中房に達する。径4.2cmの中房の輪郭は圏線で表現され、中央に径1.0cmの蓮子を置きその周囲に径４㎜の蓮子６個を配する。界線の外側には珠文11個を配する。周縁は高く上面は平坦であるが端部は丸みをもつ。周縁の外側には瓦笵の痕跡を残すものが多く、それらは周縁上面から３㎜前後の位置に見られる。瓦当面には水平方向に木目が見られる。

丸瓦接合面の位置は瓦当面から15㎜前後である。59では丸瓦の凹面先端部に刻みが見られる。凸面側は剥脱していないため、その側での刻みの有無は不明である。刻みは細い沈線で密な格子を描くように施される。これは60でも認められ、さらに図示しなかった破片で丸瓦凸面側の刻みが転写されている例があり、丸瓦の両面への刻みを基本としていた可能性がある。出土地点にかかわらず刻みの特徴はいずれもよく似ており軒丸瓦１式のような多様性は示さず、単一の工人によって製作された可能性が考えられる。なお、59は瓦当面上半に圏線にそって亀裂が生じており文様に変形を生じている。亀裂付近に粘土が付加されており、亀裂の発生は乾燥時で補修がなされたとみられる。

瓦当裏面の調整は指頭押圧とナデである。上面を含む瓦当側面の調整はナデで、ケズリを施すものは認められない。

丸瓦凸面の調整はナデで、縄目叩きがわずかに認められる。凹面には糸切り痕と布目が見られる。

59は明褐色を呈するが、火災による変色とみられる。60は暗褐色を呈しやや軟質の焼成である。こ

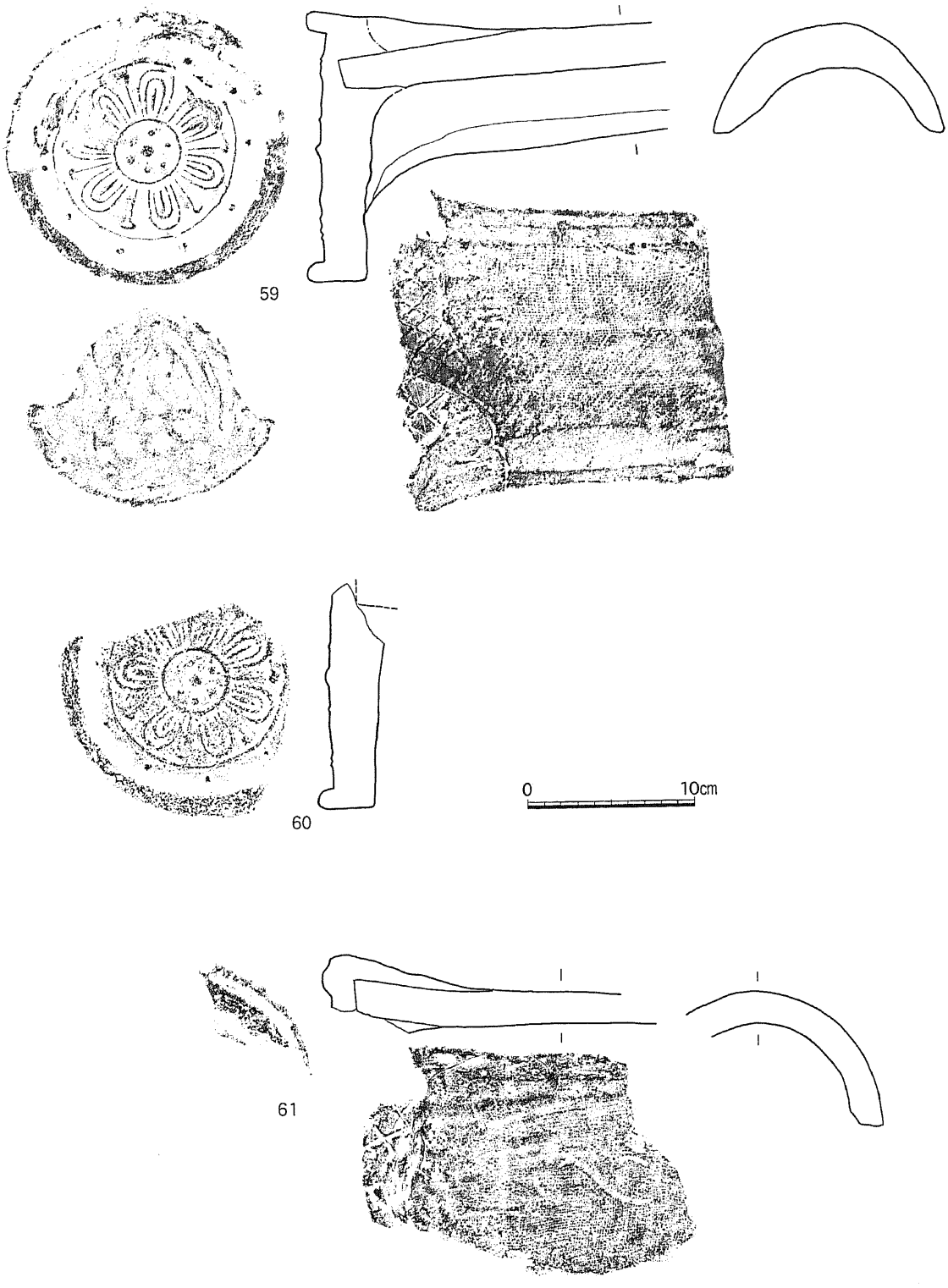


図150　軒丸瓦４・５式（1/4）

れら以外は灰褐色で、比較的良好な焼成が多い。

軒平瓦４式（図151･161、図版33-２）

［第Ⅲ型式］。紡錘形の中心飾りから３回反転しながら主葉がのび、そこから大きく反転する支葉がのびる。主葉の第１単位と第２単位の間から上にのびる支葉、あるいは第２・第３単位で反転する支葉の先端は点状に突出するが、この表現は軒丸瓦４式と共通しており、軒丸瓦４式と軒平瓦４式が

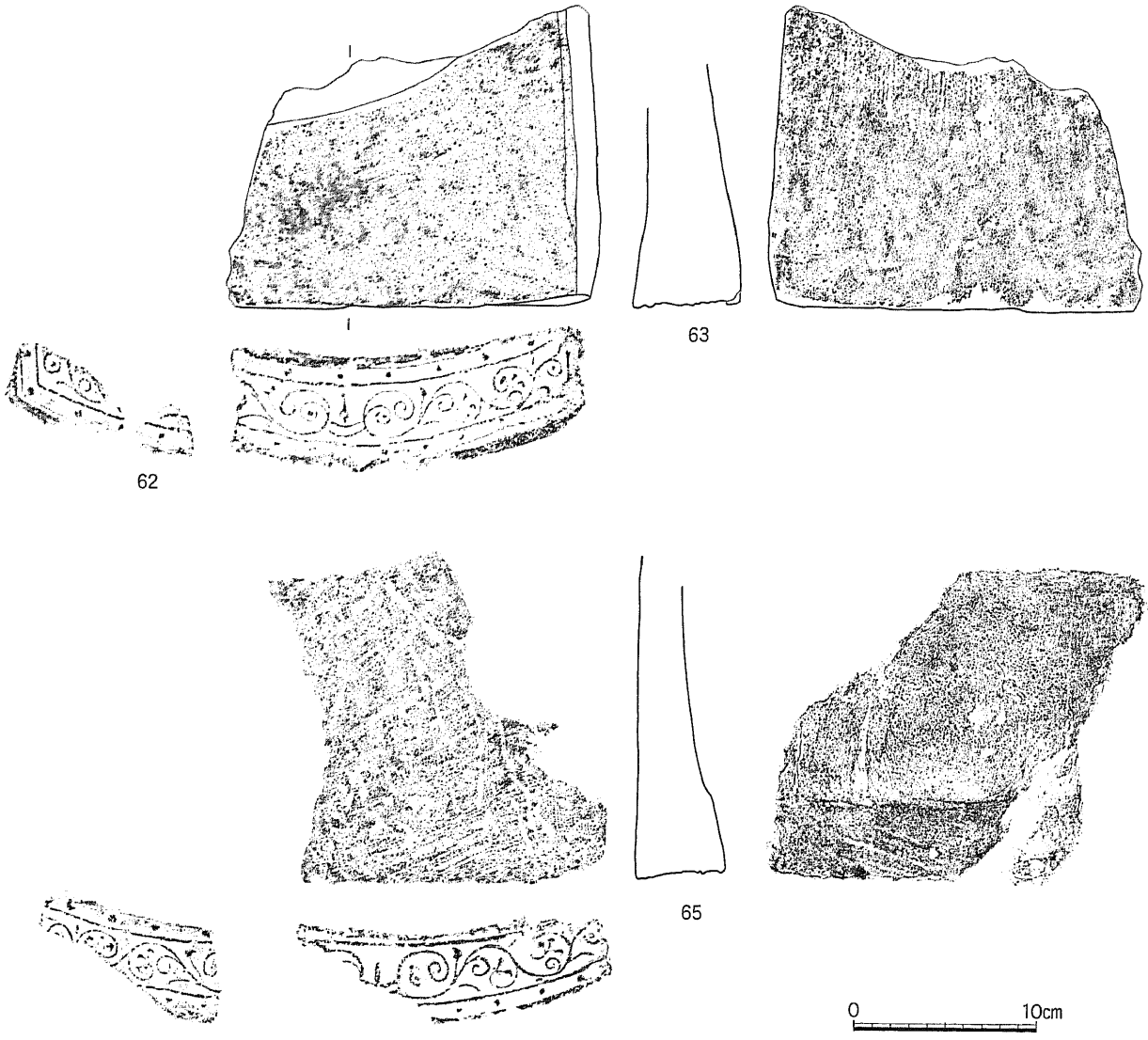


図151　軒平瓦４式（1/4）

セットになるとみてよい。金堂をのぞいた各調査区から少量ずつ出土しており、そのうち講堂・塔が各５点とやや多い。

外区には27㎜前後の間隔で珠文がめぐる。62では脇区が完全な状態であるのに対し、63は脇区外縁が切り取られた状態である。さらに64・65では脇区が完全に切り取られており、外区上側も端までない状態である。このため瓦当厚は63の6.2cmに対し65では5.1cmとなる。また、中心飾りから右端までの長さは63で13.5cm、65で13.1cmである。幅３～５㎜の周縁がめぐるが、上記のように上側や脇区側にはないものが多い。なお、いずれの個体も瓦当面は平瓦部凹面に対して直角よりもやや浅い角度をなす。

形状及び調整からＡ・Ｂの２種類に区分することができる。Ａは63に代表されるもので、瓦当の文様はシャープで、唐草や界線の断面形は三角形である。凸面の調整は瓦当面から10cmまでがナデ、それよりも奥側は縄目叩きである。凹面はナデで、消え残った糸切り痕と布目が認められる。側面にはケズリが加えられるがそれは瓦当近くのみで、奥側はナデによって仕上げられており横断面は丸みをもつ。

もう一方のBは65に代表され、62・64もこれに含まれる。瓦当の文様は浅くその断面形は丸みをもつものが多い。ただし、保存状態も関係してこの差が明確でないものもある。凸面側には浅い顎が形成される。最終的な調整はナデであるが、幅4.3cm前後の顎部には糸切り痕が残りそれよりも奥側にはケズリが見られ、顎部は削り出しによって形成されるようである。凹面には糸切り痕と布目が見られるが、65では糸切り痕が顕著である。

先にふれた脇区の切り取り程度については、62のようにBでありながら脇区が完存するものがあり、明確に対応はしないが、傾向としてはBの方が瓦笵に対して瓦当面が小さくなるようである。

４A型式の63は僧房調査区からの出土であるが、これ以外の破片７点のうち６点が講堂調査区、１点が塔調査区である。一方、４B型式は塔調査区４点、南門中門調査区１点の出土であり（型式不明・攪乱出土を除く）、型式によって出土傾向がやや異なる。

縄目叩きで顎がない４Aから４Bに変化している可能性が考えられ、瓦笵の使用期間の長さをうかがわせる。また文様突線の断面形の相違から、その間に瓦笵に手が加えられた可能性がある。４Bは叩きを行わない凸面押圧技法によって製作されたと推定され、平安京の瓦製作手法が導入されたとみられる。４Aについては叩き技法であるが、側面が丸みをもっており両技法併用の可能性もある。

明褐色～淡暗褐色を呈するものが多いが、炭素を吸着して黒色をするものもある。

軒丸瓦４式・軒平瓦４式は、創建後さほど時期を経ない段階で補修に用いられたと考えられる。

備前国分寺跡のほか、仁王堂池遺跡（備前国分尼寺跡）、妙興廃寺（127）から出土している。

軒丸瓦５式（図150、図版34-３）

塔調査区上層の水田床土層から出土した61の１点のみである。瓦当面は周縁の一部が残るにすぎないが、他のいずれとも異なるとみられるため型式名を付した。周縁の形状が不明確で対比がむずかしい軒丸瓦９式と同一の可能性は残る。

かまぼこ形の断面をなす周縁がめぐり、周縁の外側に狭い面をもつ。瓦当径は軒丸瓦１式等と同程度になるとみられる。丸瓦部凹面には幅の広い沈線で刻みが施される。瓦当上側から丸瓦にかけての調整は浅いケズリののちナデ・押圧である。胎土や焼成は他の型式と大きな差はない。

軒丸瓦６式（図152、図版34-１）

軒丸瓦１式・２式と同様式の単弁８弁の軒丸瓦である。最大の特徴は出土破片のすべてが橙色で軟質の焼成であることで、保存状態の悪さもあるが66では器表の剥落が著しい。

塔調査区からは10点の出土であるが、細かく砕けた個体があって数が多くなっている可能性が強い。ただしそのことを考慮に入れてもこの調査区が分布の中心となることは動かない。塔以外の調査区からは１、２点の出土である。

瓦当径16.9cm、厚さ2.2cmを測る。蓮華文の構成は軒丸瓦１・２式に似るが、上下左右の弁がその間の４弁の上になる構成となり、蓮弁の先端が尖って圏線に接する。間弁は中房側が鈍角の三角形をなす。中房は丸く突出し径22mm、高さ５mmを測る。外区には二重の圏線がめぐるが、軒丸２式と同様外側の圏線がわずかに高くなる。周縁の高さは９mm前後で、ほぼ水平な面をもつが幅は７～10mmと一定しない。蓮華文の軸線が垂線に対してやや傾く点は、軒丸瓦１・２式と共通する。

瓦当裏面の調整は指頭押圧とナデ、瓦当側面から丸瓦凸面にかけての調整もナデで、側面には瓦笵の痕跡は認められない。

瓦当面から11mm付近に丸瓦接合面を設けており、軒丸瓦１式と同様な手順で丸瓦が接合されるとみ

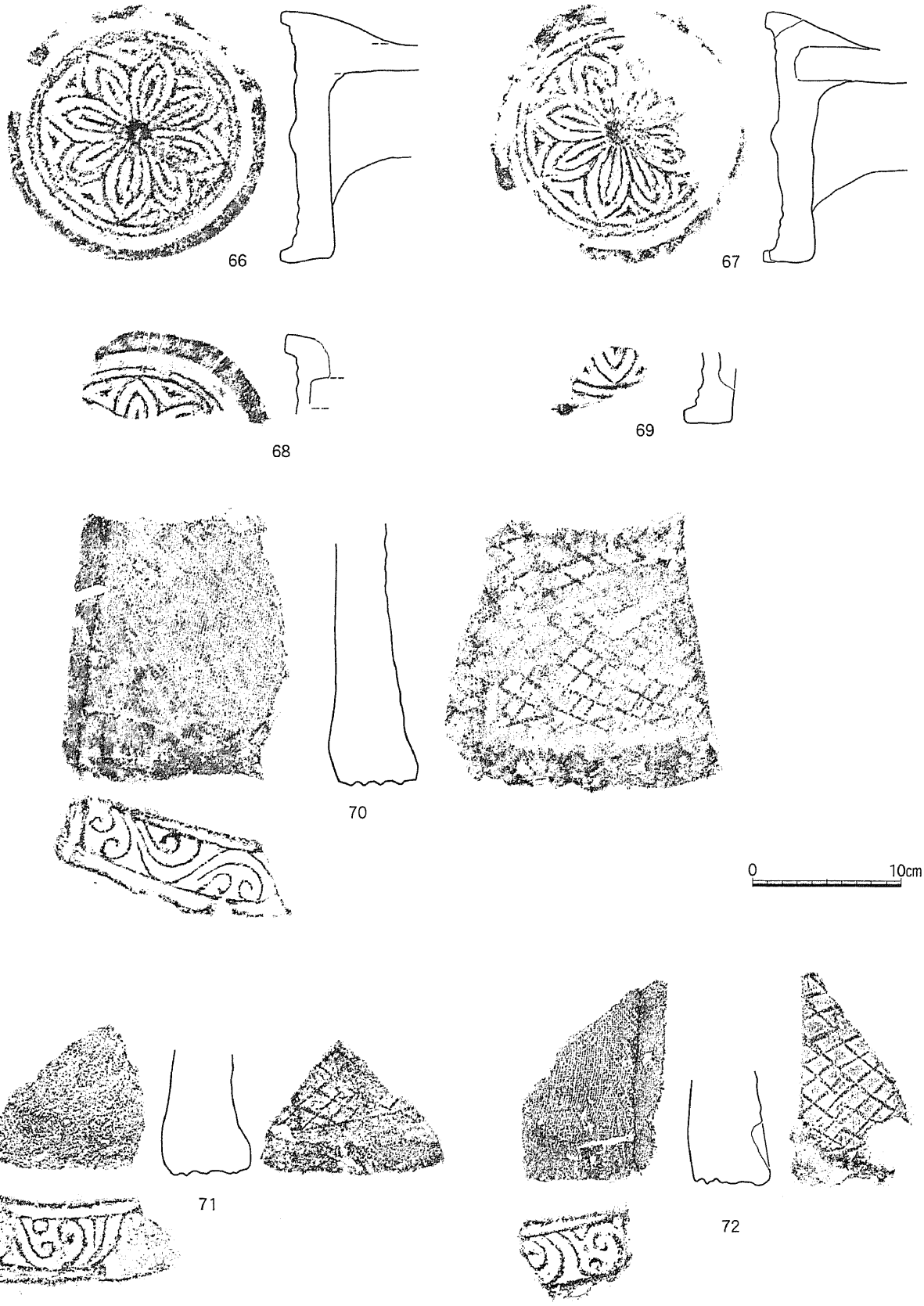


図152　軒丸瓦６式・軒平瓦５式（１）（1/4）

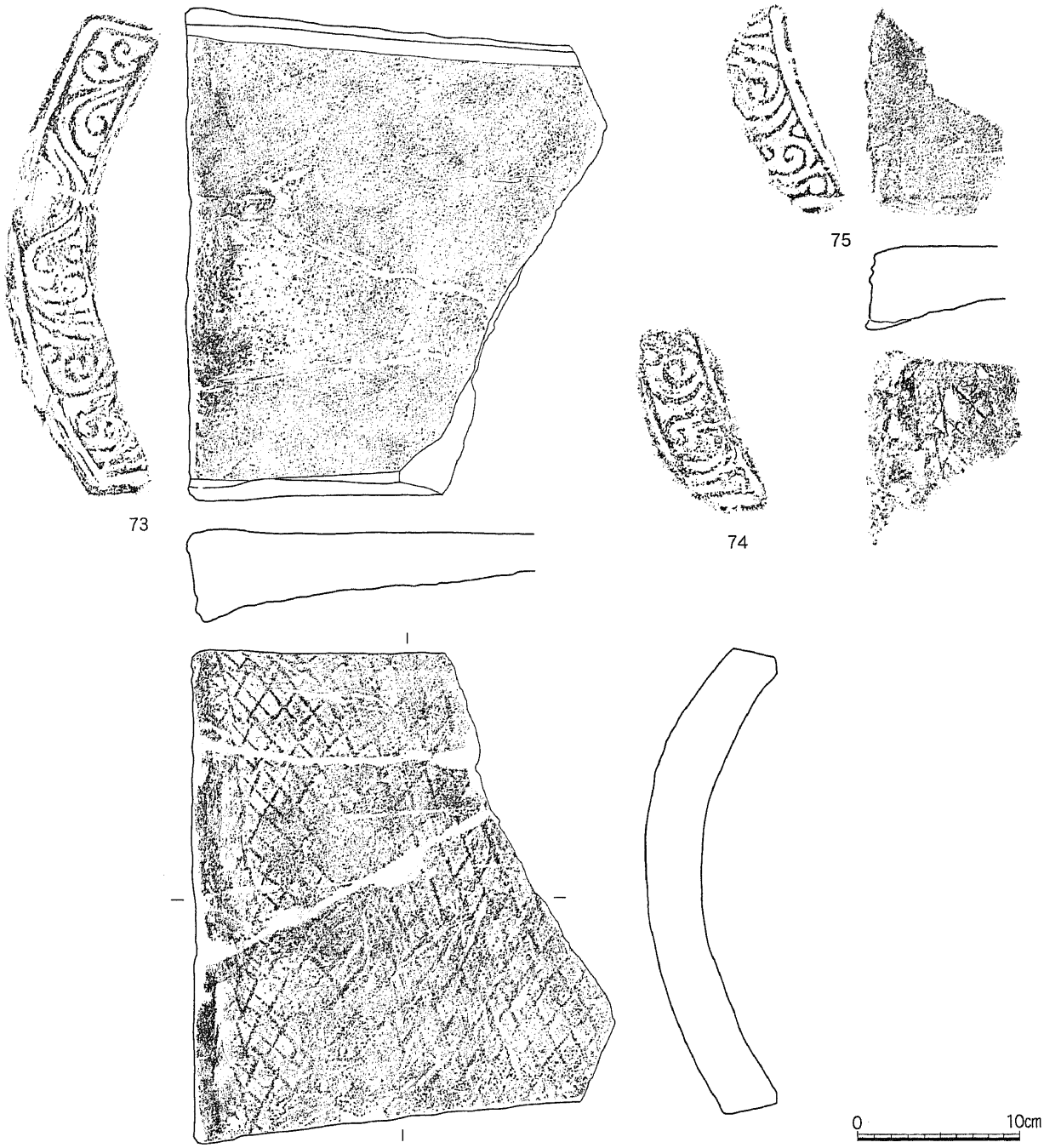


図153　軒平瓦５式（２）（1/4）

られる。丸瓦凹面に平行刻みが施されるものが１点、斜めの刻みが施されるものが１点ある。丸瓦部分の破片には縄目叩きが見られる。なお、接合される丸瓦の幅が１式で14.1～16.1cm、２式で14.6cm前後であるのに対し、この形式では13.0cmと小さく、またそれらよりも薄手である。

以上のように、瓦当の文様は軒丸瓦２式に近く、丸瓦の接合については１式と共通するといえる。

軒平瓦５式（図152･153、図版34-１）

偏向唐草文軒平瓦。講堂調査区・金堂調査区を中心に出土している。12点の破片のうち１点は灰色の焼成を示すが、他はすべて橙色で軟質の焼成であり、軒丸瓦６式と組み合う可能性を考えるが、塔調査区からの出土がない点がやや問題である。

73で瓦当幅30.3cm、瓦当厚5.1～5.8cmを測る。73には見られないが、71・70のように狭く浅い顎をもつものが多い。

文様の全容を73で見ることができるが、この個体では右半部がずれて笵に二度押ししており、さらにナデが加えられているため中央よりも右側が不鮮明である。反転しながら左右にのびる唐草が描かれるが、右側では唐草の連続がやや不明確になる。

瓦当の右端にはわらび手状の巻き込みが対向するように設けられるが、その右側部分の表現に２種類がある。75では脇区に向いて界線につながるわらび手状の単位が配されるのに対し、74では不鮮明ながら弧線が配され、その右側にわらび手状の単位となっており、わらび手状の単位は上側界線につながっている。72では当該部分が欠損しているため不明である。一方、73では先に述べたように文様がわかりにくいが、74・75のいずれとも微妙に異なる可能性もある。したがって、少なくとも２種類の文様があると言える。改笵の可能性が考えられるが、中央および左半の文様はすべて同一であり、右端のみの改変がどのようになされたのか、状態のよい資料が少ないこともあって不明確と言わざるをえない。

外側には幅３㎜前後の狭い周縁がめぐる。

凹面には糸切り痕と布目が見られ、先端の中央にはケズリが加えられている。

凸面には格子叩きが施される。叩きは軒平瓦３式のように方向を違えることはしていない。完存する個体がないため確実ではないものの、長い叩き板で叩いている可能性が強く、そのことと断面形状を勘案すれば、平安時代中期に位置付けられる。

側面はケズリののちナデがよく施される。

同笵ではないが75に似た文様の破片が妙興廃寺から出土している。

（４）補修瓦２－軒丸瓦－

以下に示す軒丸瓦・軒平瓦は数点、あるいは１点が出土したものであり、補修に際して少量持ち込まれたものとみられる。

軒丸瓦７式（図154、図版34-４）

単弁８弁の軒丸瓦。76・77ともに中門調査区池堆積土からの出土である。復元径16.0cm、厚さ2.9cmである。蓮弁は短くやや寸詰まりである。間弁は水滴形である。中房には中央に１、周囲に８個の蓮子を配する。外区には二重の圏線がめぐり、外区外縁には面鋸歯文を配する。周縁上面は幅９㎜の平面をなす。

周縁の外側５㎜の位置には瓦笵の痕跡がわずかに残る。瓦当側面のうち上半は縦方向、下半は横方向のケズリである。瓦当裏面はケズリののちナデで平滑に仕上げられる。

瓦当接合面は瓦当面から1.3cmの位置に設けられており、瓦当裏面から溝状に彫り込まれているようである。76では認められないが、77では丸瓦凹面の縦長の斜格子とみられる刻みが転写されている。丸瓦の取り付く位置はかなり低い位置となる。

76は須恵質で青灰色を呈し、77もそれに近い焼成である。

軒丸瓦８式（図154）

78は伊藤1991に第Ⅲ型式として示されたものであり、今回の調査では出土しなかったため転載した。確認調査において南門北側から出土したものである。

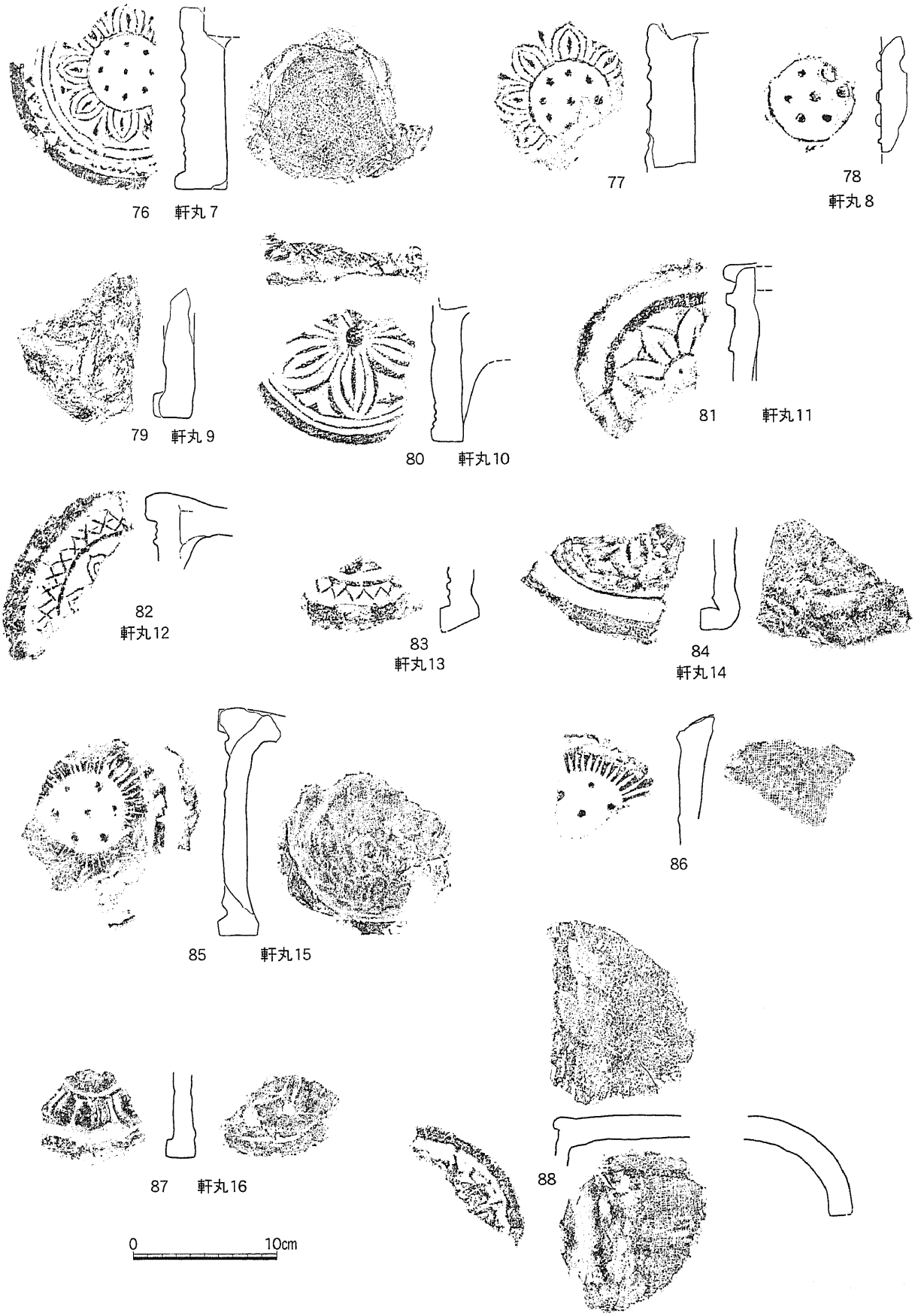


図154　軒丸瓦7～16式（1/4）

中房のみの破片で、蓮子を中央に1、周囲に6個配する。

軒丸瓦9式（図154、図版34-5）

79は金堂北側の水田造成土から出土した破片で、金堂上層瓦だまりに含まれていた可能性もある。

瓦当径は軒丸瓦1式と同程度になるとみられるが、厚さは1.9cmと薄い。残存状態が著しく不良で文様を把握しにくいが、2つの蓮弁の一部が遺存しており単弁8弁になる可能性がある。蓮弁の外郭と内郭の間に平面をもつ点で軒丸瓦1式とは異なり、また、蓮弁の位置から圏線はない可能性が強い。瓦当裏面・側面の調整はナデである。

破片上部の形状はおおむね丸瓦の接合位置を示すとみてよく、取り付け位置はかなり低いようである。

黄褐色を呈し、胎土中に3～5㎜の小礫を含む。

軒丸瓦10式（図154）

80。[備前国分寺跡緊急発掘調査委1975：Ⅲc型式、伊藤1991：第Ⅰ型式c]。今回の調査では出土しなかったため、再測・掲載した。講堂周辺から出土したものである。

復元径は15.0cmと小さく、厚さは1.7cmを測る。

文様はかなり平面的である。単弁6弁蓮華文で、蓮弁先端は圏線に接する。文様の特徴は軒丸瓦2式・6式に近い。破片左下では三角形の間弁が圏線とつながって所在し、右下では離れて設けられる。右下の間弁から左に棒状の線がのびて→形になるが、これは大きな笵傷である。周縁は低く、また、幅は一定ではない。

瓦当裏面の調整は指頭押圧およびナデ、側面の調整もナデである。

丸瓦の接合部で剥離しており、瓦当面から5㎜の位置に接合面が設けられる。取り付けられる丸瓦の幅は10.9cmと小さいものであったとみられる。また、丸瓦凹面が瓦当側に転写されており、横長の斜格子刻みが施されていたことがわかる。

焼成は良好である。明橙色を呈するが、これは火災による可能性がある。

通常の軒丸瓦よりも径が小さく、補修時に特殊な部位に用いるため製作された可能性がある。

軒丸瓦11式（図154）

[第Ⅳ型式]。今回の調査では出土しなかった。81は確認調査の南門調査区出土資料を再測したものである。

瓦当復元径16.0cmで、厚さは1.6cmと薄い。

単弁8弁に復元され、文様は平面的で瓦笵の彫りは深い。蓮弁は相互に接続しており子葉は細く尖る。中房は輪郭線が環状になり、蓮子1つが残る。圏線は周縁とほぼ同じ大きさで高く突出する。周縁の高さは8㎜で上面は丸みをもつ。

瓦当裏面の調整はナデで平坦に仕上げられる。

瓦当接合面は浅く瓦当裏面とほぼ同じ高さに設けられており、その位置は周縁に近い。

砂粒を比較的多く含む。表面に炭素を吸着して灰黒色を呈する。

軒丸瓦12式（図154、図版35-1）

82は中門調査区に所在する池の堆積土中から出土した。単弁蓮華文が刻まれる。圏線や周縁がゆがみをもつため弁数の復元がむずかしく、8～12とみられる。内区は外区よりもわずかに低く、蓮弁の先端は尖る。外区には斜格子文が配される。周縁にはナデが加えられている。

瓦当裏面に丸瓦接合面を形成して丸瓦を置き、上下両側に粘土を補充するが、接合面の形状は後述の軒丸瓦20式のそれに酷似する。胎土も白色粘土の薄層を含むタイプで20式と同様である。暗灰色を呈する。

軒丸瓦13式（図154、図版35-2）

83は南門調査区瓦だまりからの出土である。胎土・色調とも12式に類似する。

12式と同様の文様構成であるが、蓮弁全体が肉厚になることと外区の施文が線鋸歯文になる点が異なる。蓮弁の右には細線2本がのびるが文様か笵傷が不明である。内区は外区よりもわずかに低くなる。周縁幅は12式よりも細く、その上面の調整はナデである。

厚さは1.5cmと薄い。瓦当裏面の縁は上面幅8㎜、高さ9㎜の突帯状をなす。

軒丸瓦12・20式と同時期とみられる。

軒丸瓦14式（図154、図版35-3）

84は西面回廊調査区東端の堆積層から出土したものであり、金堂から流出した可能性もある。

肉彫り状の蓮華文を主文とするが、著しくナデが加えられてつぶれており、文様の詳細を知ることはむずかしい。圏線や周縁は正円を描かない。圏線と周縁の間は深い溝状になるが、その形状から瓦笵からはずして後に周囲の粘土を瓦当側に寄せて周縁を形成しているとみられる。ケズリによって周縁上面が形成される。

瓦当裏面の調整はナデで、それが瓦当側面にも及んでいるため瓦当裏面から側面にかけて丸みをもち、瓦当裏面は緩やかな凸面をなす。

暗灰色を呈し硬質の焼成である。石英・長石の細粒を多く含む。

軒丸瓦15式（図154･161、図版35-4）

85・86。複弁8弁蓮華文軒丸瓦。いずれも講堂調査区からの出土である。馬屋遺跡包含層からも1点が出土している（133）。85は瓦笵に粘土がうまく入っておらず、特に下半部は無文に近い。蓮弁に2つの子葉をもち、蓮弁の先端中央は小さな切り込みをもつ。蓮弁の間に細長い間弁が配されるが、蓮弁が短く、また間弁と蓮弁の間隔が狭いため、放射状に多数の沈線が配されたかのように見える。中房は平坦で外側には区画はなく蓮弁の基部で表示され、径5.7cmと大きい。蓮子は中央に1、周囲に6が配される。

周縁は細いようであるが欠損のため明確でない。

一本作りで、瓦当裏面に布目をもつが、85の布目は細かく、86では粗い。また、瓦当裏面下半外縁は低い突帯状をなし、その上面にはナデが加えられる。瓦当部は当初ドーム状に形成した後に周縁付近に環状に粘土を加えて形成されるが、85・86ともに付加部分の多くが剥離しており、85では付加した際に隙間を生じたことが蓮弁形状の乱れの原因となっている。

褐白色を呈する。胎土中に砂粒は少なく薄層状を呈する。

軒丸瓦16式（図154･161、図版35-5）

87は講堂調査区からの出土である。幅の広い複弁状の蓮弁の下に蓮弁が配されるようで、素弁6弁蓮華文になるかと思われる。蓮弁の先端には部分的にナデがかかる。構図の特徴は後述の軒丸瓦17式と同様であるが、弁数と、中房の縁取り、圏線などの点が異なる。蓮弁は中央が浅く窪み子葉状の表現になる。文様は不明瞭であるが、保存状態によるものではない。

中房は蓮弁基部をめぐる圏線によって区画される。破片の範囲には蓮子は認められない。

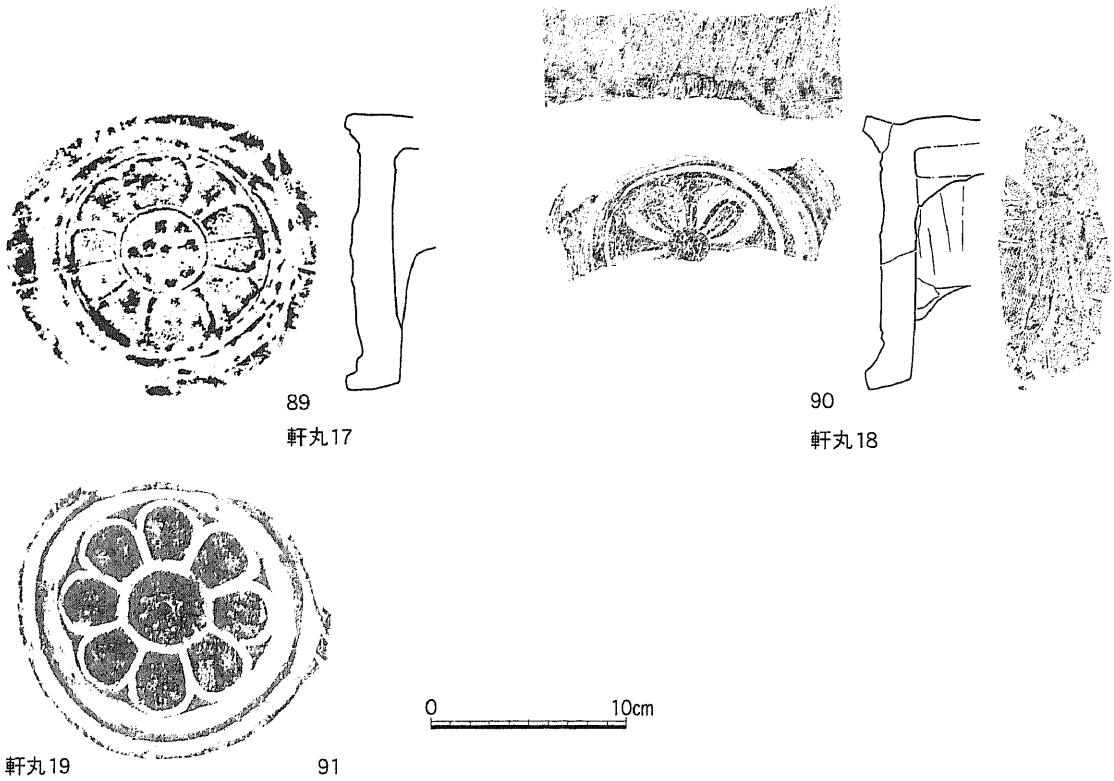


図155　軒丸瓦17～19式（1/4）

細い周縁の上面にはケズリが加えられている。

瓦当裏面には布目があり、一本作りである。瓦当裏面の外縁にはケズリが加えられ、突出はなく、外縁から中央にむかって緩やかに厚さを減じる。

明褐色を呈するが、これは火を受けて変色している可能性がある。砂粒を含む胎土は明瞭な薄層は示さないが、それに近い特徴をもつ。

88は瓦当の残存が少なく、それに加えて文様が明瞭に表出していないため、87と同型式と確定はしがたいが、ごく浅い複弁になるとみられるためこれに含めた。講堂調査区からの出土である。周縁は狭くまた低い。周縁上面にナデが加えられる点、瓦当の厚さが８㎜前後と薄い点は87と異なる。一本作りで瓦当裏面に布目が残る。

丸瓦部凸面の瓦当近くには大きな格子叩きが残るが、奥側はナデで仕上げられる。凹面には布目が残るが、瓦当近くにはナデが加えられている。

暗灰色を呈し焼成は須恵質に近い。胎土は砂粒を比較的多く含む。

87に類似し同笵の可能性もある資料134が京都府広隆寺（近藤編1977）から出土している。

軒丸瓦17式（図155）

［第Ⅶ型式］。確認調査において金堂調査区から１点出土している。今回の調査では出土しなかったため89として転載した。瓦当径14.5cm、中房の径4.4cmを測る。素弁４弁で、間弁が弁間にのぞく。中房の蓮子は中央に１、周囲に４を配する。界線２本がめぐり周縁は狭く低い。

中央を横断する笵の割れがある。

類似した表現の蓮弁をもつ資料が瀬戸内市長船町服部廃寺（池田ほか1997）から出土しているが、同笵ではない。

軒丸瓦18式（図155、図版35-6）

90は講堂調査区から出土した。単弁４弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は陰刻で表現され、中房も扁平でほとんど突出しない。右上から左下にむかう笵傷が多数認められる。比較的太い圏線がめぐり、周縁は上面が狭く外側に開いており、その上面および両斜面はロクロナデによって仕上げられる。

瓦当裏面に布目が認められるが、瓦当部に丸瓦をあてて凹面・凸面側に粘土を加えて固定する通常の手法が見られ、いわゆる一本作りではない。丸瓦凹面先端の、瓦当との接合部にはナデが加えられるが、丸瓦凹面の布目をこのナデが消す一方、瓦当裏面の布目はそれの上に及んでいる。ほぼ成形を終えた段階で瓦当裏面に布目が付いたことになり、周縁を形成するため布を敷いた回転台に置かれたと考える。なお、丸瓦接合面は瓦当裏面と同じ面であり刳り込みはなされない。

丸瓦凸面には縦方向のナデが加えられる。

暗灰色で須恵質の焼成である。砂粒は少なく、白色粘土と暗灰色粘土の薄層が見られる。

軒丸瓦19式（図155）

91。素弁８弁蓮華文軒丸瓦。永山1925に地元保管の資料として掲載されたものである。調査では出土していないが、同時に掲載された資料は備前国分寺跡の資料であり、混乱の可能性は低いため出土資料と判断し掲載する。

蓮弁は中央に稜をもつ。中房には中心に１、周囲に８つの蓮子を配する。

備前国分寺の南西６kmに所在する賞田廃寺の軒丸瓦３Ｂ類（扇崎ほか2005）で、７世紀第３四半期に位置付けられている。永山はこの資料の大きさを瓦当径５寸としており、賞田廃寺のそれが16.6cmであることがやや問題であるが、概略の寸法が示されたものと理解しておく。

備前国分寺の瓦のなかで最も古く、年代順であれば最初になるべき型式であるが、備前国分寺に先行する寺院が所在した可能性はなく、後述の国分寺創建以前の平瓦とともに平安時代後期に持ち込まれたものと判断する。

（５）補修瓦２－軒平瓦－

軒平瓦６式（図156･161）

平城宮6663型式系の均整唐草文軒平瓦である。92は確認調査において僧房北側から出土したもので、今回の調査では出土しておらず伊藤1991から再掲載した。馬屋遺跡土壙11出土資料130（岡山県教委1995）と同笵とみられる。

軒平瓦７式（図156、図版36-1）

６式と同じく平城宮6663型式系の均整唐草文軒平瓦である。93は確認調査南門北瓦だまりからの出土で、再掲である。

96は塔調査区南側の包含層上部から出土した。内区の幅1.7cm、瓦当厚4.2cmと狭い。表現はかなり崩れ、唐草文の流れが硬化しているものの太く立体的で、陰陽反転表現ではない。外側には２本の界線がめぐり、周縁は下側にめぐる。

凹面の調整は横方向のナデで、凸面には奥側に縄目叩きがわずかに残る。

明黄灰色を呈し、砂粒がやや少ない胎土である。

岡山市堂敷山廃寺出土例と同笵とみられ、他に馬屋遺跡、岡山市原遺跡出土資料も同笵の可能性が強い（梶原2005）。

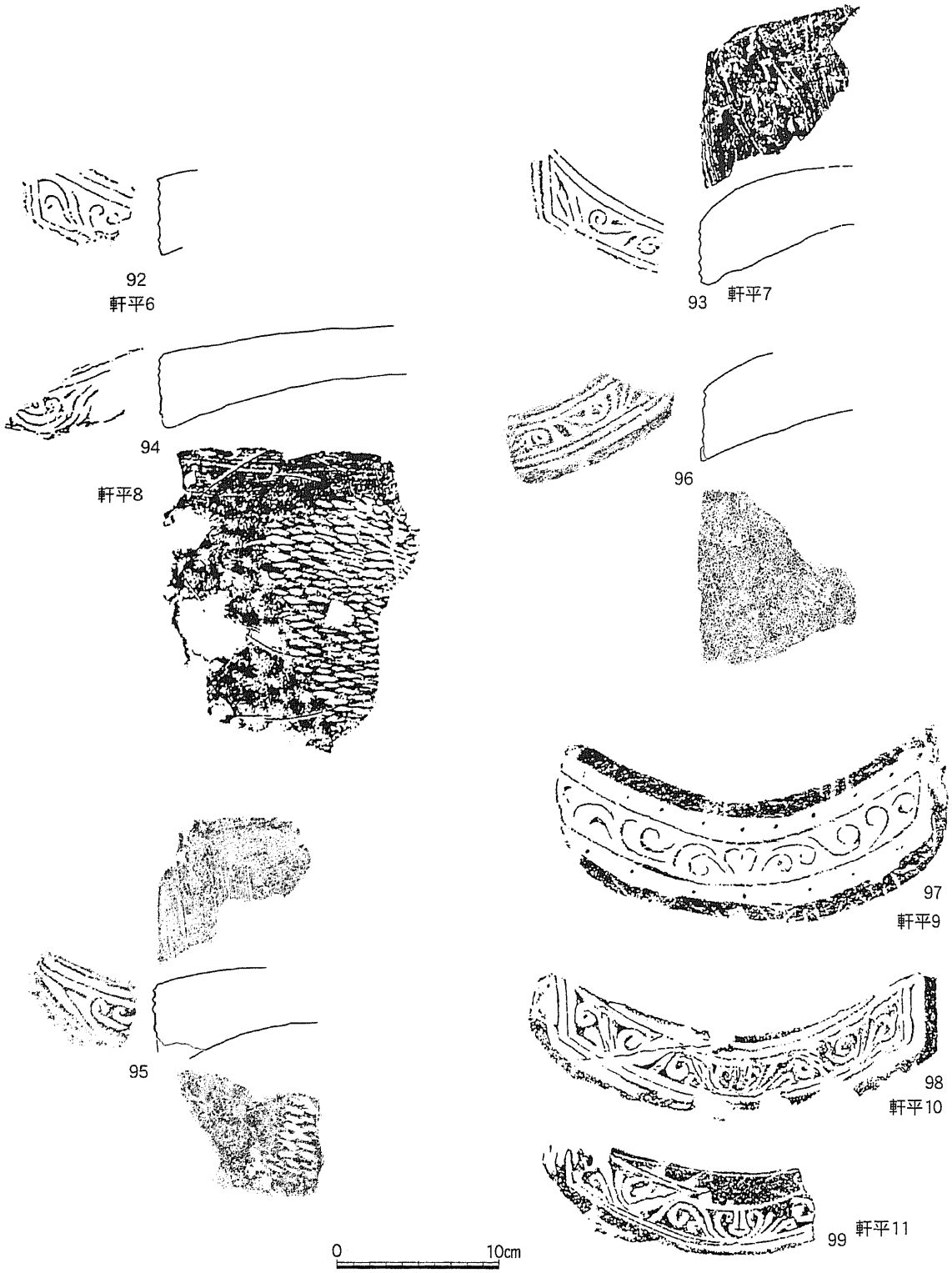


図156　軒平瓦６～11式（1/4）

軒平瓦８式（図156･161、図版36-２）

94は確認調査で南門南溝から出土したものの再掲、95は南門調査区石垣裏込めからの出土である。平城宮6663型式系であるが唐草文の主要部が陰陽反転で表現される。

95は左端近くの破片であるが、左側も欠損する。破片右側に第２単位が反転表現で示され、左には第３単位が見られる。第３単位はかなり長いものになるようで、上端には界線と平行の突線が入る。

凹面の瓦当近くと側面にはケズリが施される。凹面の後方は残存範囲が少ないが、その部分はナデである。凸面には太い縄目の叩きが施される。

明灰色を呈するが、炭素を吸着して灰黒色をなす部分も多い。砂粒の少ない胎土である。

これと同文の軒平瓦は岡山市富原遺跡、網浜廃寺（131・132）、ハガ遺跡、川入・中撫川遺跡から出土しており、備前国府系瓦と評価されている（草原2004）。これらの同笵関係については把握できていないが、拓本にもとづけば８式は少なくとも網浜廃寺131・132と同笵とみてよい。川入・中撫川遺跡での伴出土器から８世紀後半～９世紀に位置付けられる。

軒平瓦９・10・11式（図156）

玉井1941に掲載された資料である。このうち９式（97）はハート形の中心飾りから３回反転する唐草文を描く。外区には珠文を配し、広い周縁がめぐる。平安宮内裏蘭林坊から同文の資料が出土しており、その年代にもとづけば10世紀中葉～後半となる。

10式（98）・11式（99）は８式と同様に均整唐草文の陰陽を反転して表示するものである。両者は文様の細部は異なるが、基本的な文様構成は同一であり、同じ位置で笵の割れを生じており、一方が改笵された可能性も考えられる。11式は岡山市百間川米田遺跡河道から同笵資料が出土している。また、賞田廃寺５Ｅ類（扇崎ほか2005）は右端の破片であるため比較はできないが、唐草の端部が巻き込む表現をもっており同笵の可能性がある。

百間川米田遺跡例では凸面には横方向の平行叩きが施されており、８式の縄目叩きとはかなり異なる。陰陽反転で崩れた唐草文をもつ軒平瓦として岡山市加茂政所遺跡例があり、凸面には斜め方向に短い縄目叩きが施されている。加茂政所遺跡例の年代、11世紀～12世紀前半をこれらにあててよいと考える。

軒平瓦12式（図157・161、図版36-３）

100は偏向唐草文軒平瓦の右側の破片であり、右端および上端を欠損する。講堂調査区東部からの出土で、もとは講堂東側北面回廊瓦だまりに含まれていた可能性が強い。波打ちながら伸びる主葉とそこから上下に出る支葉を主文様とし、周縁から伸びる弧状・棒状の表現が配される。周縁は細く、その上面には浅い凹凸が見られる。

凹面の調整は瓦当にむかって下降する部分が横ナデ、奥側は布目である。凸面は瓦当近くが擦痕の残る縦方向のナデ、奥側は太めの縄目叩きである。表面は炭素を吸着して明灰色～黒色を呈するが、焼成は堅緻である。２㎜以下の砂粒を含む。

香登廃寺出土資料（124・125）（大本1953）（田代1988）が同笵品とみられる。

軒平瓦13式（図157、図版36-４）

101は中門調査区の池埋め立て造成土、102は南門調査区（石垣裏込め）からの出土である。均整唐草文と推定され、文様の細部はやや異なるが101が左側、102が右側からほぼ右端までとみられる。101中央の上部が欠損した上側へ巻く支葉が、102中央の上側へ巻く支葉に対応するとみられるが、左右で支葉の長さや位置など細部はかなり異なる。周囲を界線がとりまく。

凹面の調整は前側斜面が横ナデ、奥側には糸切り痕と布目が見られる。凸面には斜格子叩きが施され、先端のみ強いナデが施される。

２点とも須恵質の堅緻な焼成で表面は暗灰色、破面内部は紫赤色を呈する。砂粒の含有は比較的多い。

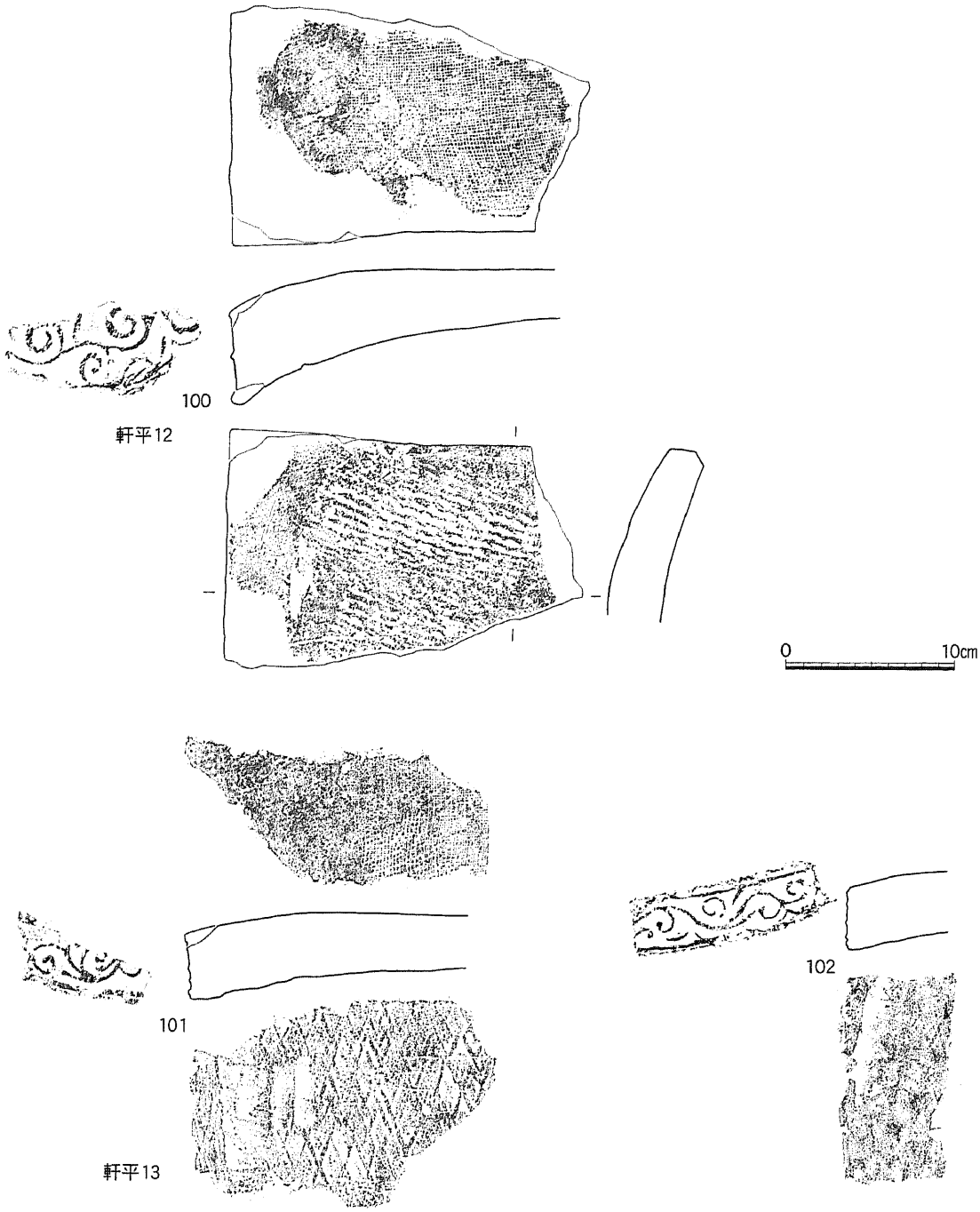


図157　軒平瓦12・13式（1/4）

軒平瓦14式（図158、図版36-5）

図示した103は2片が接合したものであるが、左側の破片は中門西側の南面回廊南側雨落ちからの出土に対し、中央部の破片は講堂調査区東部の包含層からの出土であり、出土位置が極端に異なる。なお、図示しなかったが同一個体の可能性がある体部片が出土しており、それは中門調査区池埋め立て造成土からである。

欠損が多いが、＋を内側に配した○、それをとりまく逆C字形を中心飾りとし、そこから左右に樹枝状の表現がのびる。周囲を二重の界線が取り巻いている。瓦当厚は中央で5.2cm、復元幅は24.4cmである。

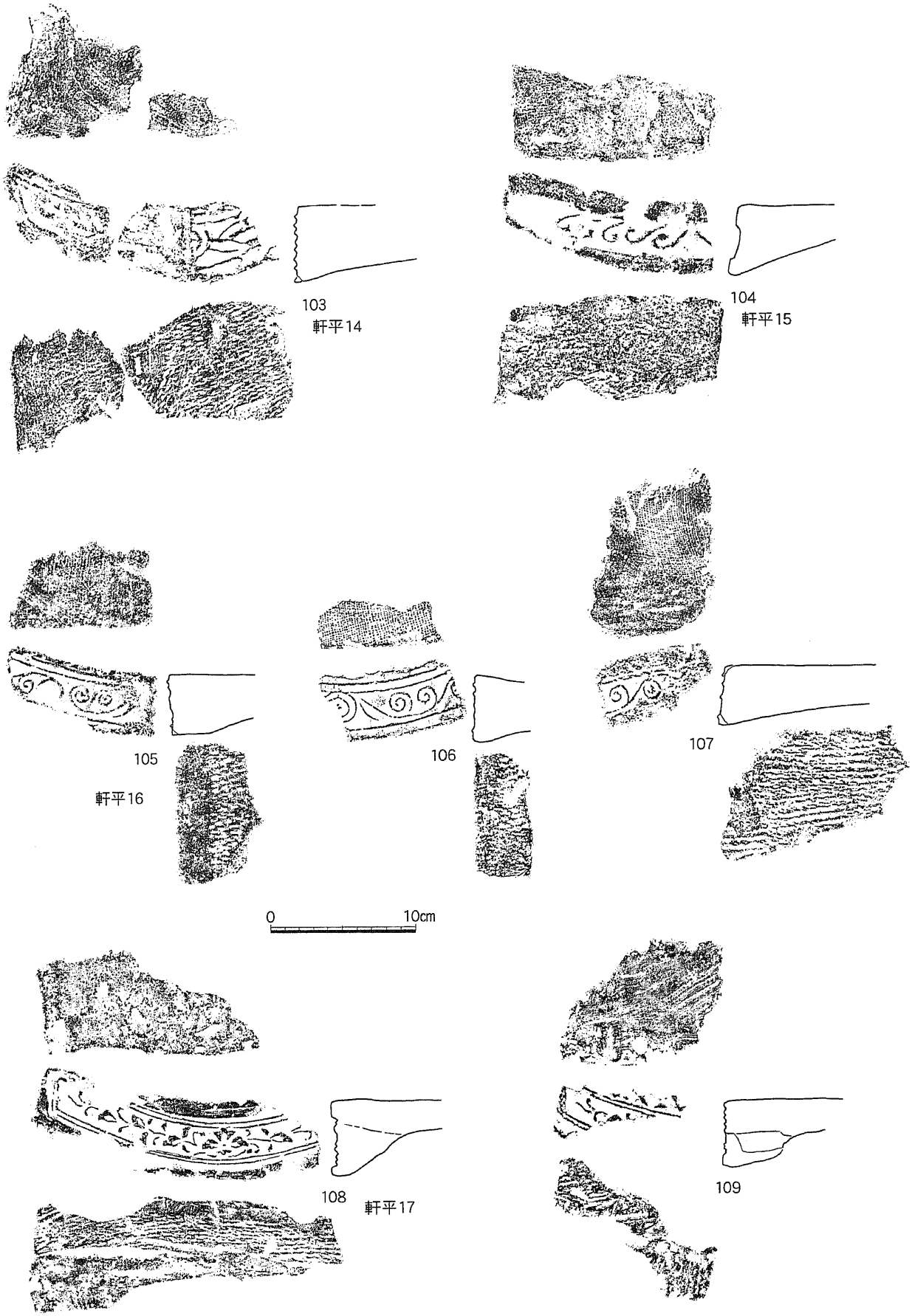


図158　軒平瓦14～17式（1/4）

凹面前半はナデ、奥側は布目、側面はケズリののちナデである。凸面は横方向のやや細かい縄目叩きで、これは前端まで及んでいる。

明灰色を呈し堅緻な焼成で、3㎜以下の砂粒を含む。

軒平瓦15式（図158・162、図版36-6）

104は金堂調査区北部で検出した近世の形成とみられる瓦だまりから出土しており、金堂・講堂のいずれに伴ったかは不明である。

中央から上に反転する支葉を2つ、その外に下に反転する支葉3つを配し、左端には無文部分が広い。幅の広い周縁がとりまくが、瓦笵と瓦の形状が合っていないため左端下側では周縁が欠けることになる。なお、同笵品とみられる破片136が馬屋遺跡暗渠から出土しているが、国分寺跡から搬出されたものと推定される。右側の破片であり、左上に向かって巻く支葉2つがあり、左右対称の文様にはならないようである。

瓦当厚5.1cm、復元幅は破片右端のハ字形になる部分を中央とすれば26.2cmとなる。凹面は前端から1.0～1.3cmの範囲がやや高くてナデ仕上げとみられ、それよりも奥側は布目である。凸面は前端から1cm前後から叩きがはじまる。横方向のやや細かい縄目叩きとみられるが103のような明瞭なものではない。

やや軟質の焼成で褐灰白色～黒色を呈する。2㎜以下の砂粒を含み、胎土には薄層が見られる。

軒平瓦16式（図158・162、図版36-7）

［第Ⅷ型式］。105は南門調査区（石垣裏込め）、107は金堂調査区表土からの出土である。106は確認調査で出土した資料の再掲で、南門、塔付近から少量出土したうちの1点である。

複線で描かれる水滴形の中心飾りから左右に主葉がのび、上向き2、下向き2、上向き1の順に支葉を出す。上に2本、下に1本の界線がめぐる。瓦当幅は4.7cm、106・107からの推定横幅は27.2cmになる。凹面の布目、凸面の縄目叩きは106では前端からはじまるが、105は凸面前縁にケズリ、107は凹面前側にナデが加えられている。側面はナデによって仕上げられている。灰色～暗灰色を呈し、砂粒を含む。

馬屋遺跡暗渠から137が出土しているが、これは備前国分寺跡から搬出されたものであろう。

平安宮内裏跡土壙2から出土しており、天徳4（960）年の内裏焼亡ののち復興に際してもたらされたものと判断されており（前田1993）、10世紀中葉～後半の年代を与えることができる。

この型式は同文で6種類の笵の存在が想定されており、顎の形状もかなりの差異を示すが、上記以外に岡山市加茂政所遺跡（加茂政所廃寺）、浅口市占見廃寺、総社市三須廃寺、備中国分寺跡、平安京左京二条二坊高陽院跡、平安宮豊楽院跡からの出土が知られている（平井1999）。岡山県下では備中を中心に分布するようである。

軒平瓦17式（図158、図版36-8）

108は金堂調査区北部の旧水田層からの出土であり、後述の金堂上層瓦だまりに含まれていた可能性がある。109は講堂調査区東部上層からの出土である。

中央に花文を置き、左右にのびる枝の上下に葉を配する構図をとる。界線は二重で、周縁は突出するが幅は部分によって異なる。周縁上面にはごく浅い段を生じており、瓦笵は周縁の範囲よりもやや小さいものであった可能性がある。

瓦当厚5.1cm、推定幅は27.2cmである。粘土の貼り付けによって瓦当部を形成するが、108の顎が三

角形の断面をなすのに対し、109は台形で下に面をもつ。また108が平瓦の先端を斜めに形成して接合するのに対し、109はやや低い平坦面を形成して接合しており、両者で製作手法は異なる。

側面はやや斜めになりケズリが見られる。

108の凹面中央前縁にはケズリが加えられるが、端では前端まで布目が及んでいた可能性が強い。109では布目のほか糸切り痕も認められる。平瓦部の凸面には縦方向の縄目叩きが施され、顎部には横方向の縄目叩きが施される。

明灰色を呈し、砂粒の含有は比較的少ない。

軒平瓦18式（図159・162、図版37-1・2）

［第Ⅶ型式］。11点が出土しており、出土量は補修瓦のなかでは多い。金堂４点、講堂５点、回廊１点であり金堂は後述の上層瓦だまりに伴っていた可能性がある。回廊は雨落ち溝に形成された瓦だまりからの出土であり、講堂・回廊の補修にも用いられたとみてよい。

水滴形の小さな支葉を中軸として複線表現の唐草文が左右にのびる。周囲には２本の界線がめぐる。ただし上端の界線は瓦当上縁にナデが加えられるため、不明瞭あるいは失われているものが多い。瓦当厚は以下のうち18ａで4.5cmである。110・111の側面は瓦当の弧に対して直角をなす。

この型式は調整や胎土によって３分できる。

18ａ：111は中門調査区池堆積層、112は金堂調査区造成土からの出土で、後者は金堂上層瓦だまりが削平されてこれに含まれた可能性を考えている。

瓦当の上縁にはナデが加えられるが文様に影響は生じていない。側面は唐草文第４単位の端近くで切り落とされる。平瓦部凹面には細かい布目が見られるがナデ消される部分も多い。段顎をなしており、その斜面部には皺状の凹凸が見られる。

112では平瓦部と顎部で剥離しており、貼り付けによって顎が形成されたことがわかる。111では平瓦部先端をやや薄くしているようである。

灰白色を呈し、胎土には0.5㎜大の砂を含む。

18ｂ：113は塔調査区からの出土であるが、暗渠からの出土であり確実に塔に伴うとは言いがたい。瓦笵にうまく粘土がはいっておらず、それに加えて部分的にナデが入っているため文様は不明瞭である。端部は切り落とされず界線までの部分があるが、脇の界線はナデのため不明瞭である。瓦当端にあたる平瓦部隅角は面取り状に削り取られており、瓦当面上部にもケズリののちナデが加えられる。平瓦部凹面には布目の上に縦方向のナデが入り、凸面の調整はナデを基本とするようである。側縁側にも面取りのケズリが入る。

顎部の形成手法は判断しにくいが、18ａと同様の可能性があり、色調・胎土は18ａと同様である。

18ｃ：110は北面回廊瓦だまりからの出土である。瓦当上部にナデが加えられるため、上側の界線は失われており瓦当部の縦断面は上部に丸みをもつ。また、平瓦部の瓦当側隅角は三角形の面取り状になでつぶされている。平瓦部凹面には粗い布目が見られる。唐草文の第４単位の中央付近で切断される。

瓦当部・顎部の形成手法はａ、ｂとは異なり、平瓦の先端を斜めに形成し、瓦当面をなす断面三角形の粘土と顎部を形成する粘土を貼り加えており、平瓦先端部でしばしば剥離を生じている。

器表は褐灰黒色～灰黒色、破面は黒色を呈する。３㎜以下の砂粒を含み胎土にはやや薄層が見られる。

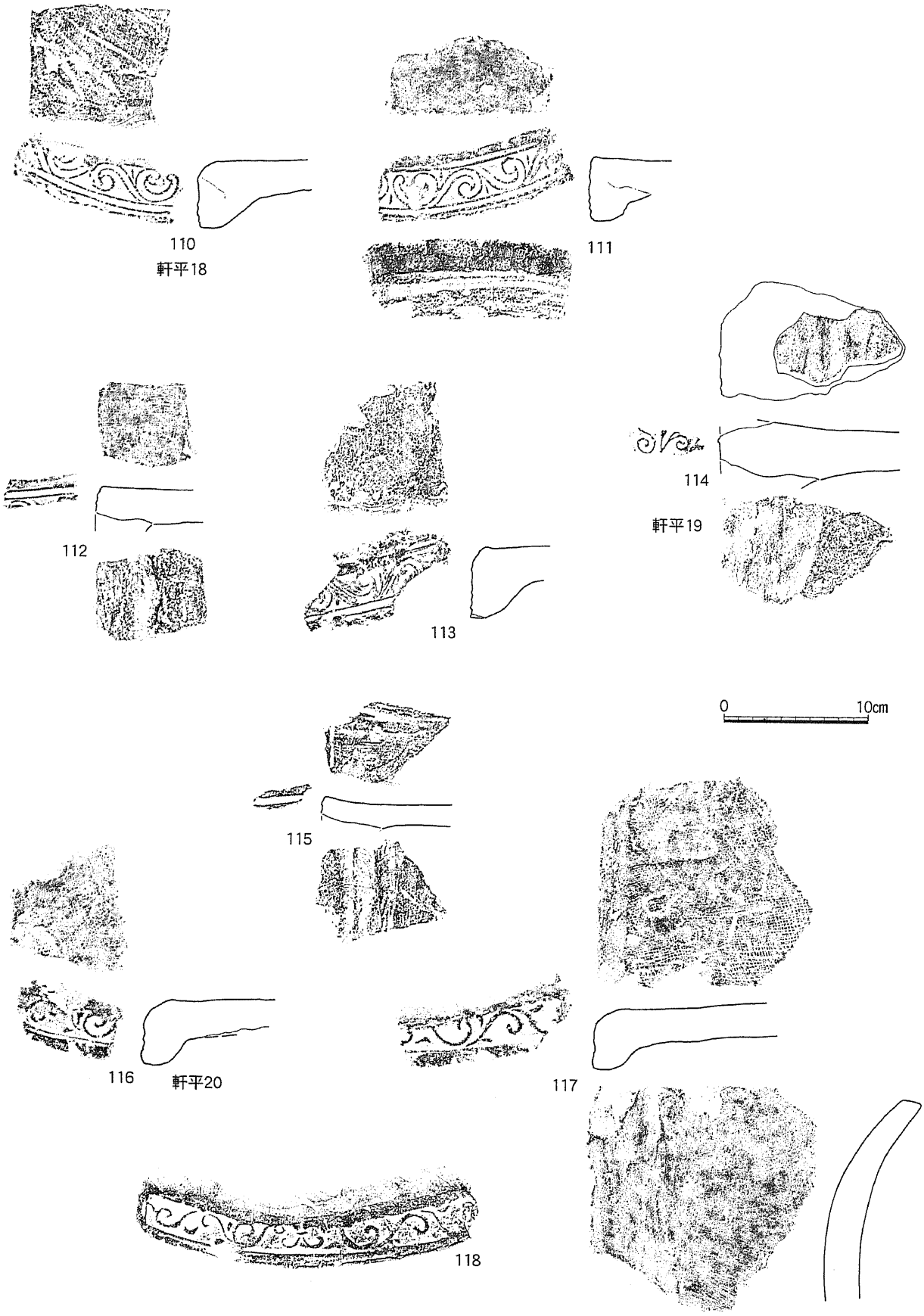


図159　軒平瓦18～20式（1/4）

完存する個体がなく、左右の切り落とし位置が同一でない可能性もあるが、左右対称になると仮定して復元した場合の幅は、18ａが25.4cm、18ｃが23.1cmとなる。

以上のように同一の瓦笵からなるが形態や胎土は異なっており、ａ、ｂ、ｃの順に変化した可能性が考えられる。

このうち18型式ａは同笵瓦が平安京の寺院に用いられている。京都府法勝寺・円勝寺・広隆寺（139）からの出土が知られており、それらには法勝寺創建の1077年頃の年代が与えられている。円勝寺出土資料では脇に界線・周縁がめぐるが、国分寺例ではその部分が切り取られており、若干年代が下降する可能性はあるが、18型式を11世紀後半に位置付けてよいと考える。

備前国分寺跡出土資料は平瓦部が欠損しており比較できないが、広隆寺出土資料139では平瓦部凸面に浅く大きな格子叩きが施される。18ａがこの叩きをもつとするなら、軒丸瓦16式（88）で類似した叩きが見られ、また、先にふれたが87は広隆寺出土資料と同笵の可能性があり、この型式がセットになる可能性がある。

115は中門調査区の池堆積層からの出土である。顎部で剥離しており２本の界線が残る。瓦当面上端にナデを加える点は軒平瓦18型式ａと同様であるが、界線間の形状がやや異なる。顎部の剥離面には横方向のナデを示す２本の凹面が見られる。平瓦部凹面には布目を切って縦方向のハケメが入り、凸面はナデである。厚さは1.3cmと薄い。

灰色～暗灰色を呈し、0.5mm前後の砂粒を含む。

この個体は18型式ａ～ｃとは平瓦部の厚さや色調が異なっており、別の型式の可能性が強いが、比較のための情報が少なすぎるため、ここでは18型式ｄとして扱い、詳細が判明した時点で区分することとする。

軒平瓦19式（図159、図版37-３）

114は講堂調査区の北側瓦だまりからの出土である。

瓦当部はかなり厚さをもつとみられるが、ごく一部しか遺存していないためやや稚拙な唐草文があるという以上にはわからない。瓦当面下半部を形成する粘土が剥離しており、この面には格子叩きとみられる突線が薄く見られる。

平瓦部凹面の調整は横方向のナデ、凸面側はケズリのようである。

明褐橙色を呈するが、これは火災によるものかもしれない。１mm前後の砂粒を含む。

軒平瓦20式（図159･162、図版37-４）

［第Ⅸ型式］。南門調査区（石垣裏込め）から116・117の２点が出土した。118は確認調査、塔付近出土資料の再掲である。中央で束ねられた唐草が左右に３回反転してのびる。いずれも平瓦部からのナデが瓦当面上部に及んでおり、上端の低い周縁はつぶれており、118では瓦当面右半の唐草にもナデがかかる。馬屋遺跡暗渠出土138は瓦当上縁のナデが弱い。内区の幅は狭く2.2cm、瓦当幅28.7cmを測る。内区の下側にのみ界線がめぐる。

118では左右両端に周縁があるのに対し、116は欠損しているものの周縁の内側で切断されているとみられる。

116・117は曲線顎をもつ。118も同様であるが瓦当部は薄い。顎部の形成手法は確定しがたいが、平瓦に粘土を加えるのではなく、先端を折り曲げつつ粘土を補充して形成しているように見える。

平瓦部凹面には粗い布目が残り、凸面の調整は縦方向のナデである。なお、117平瓦部は側縁にむ

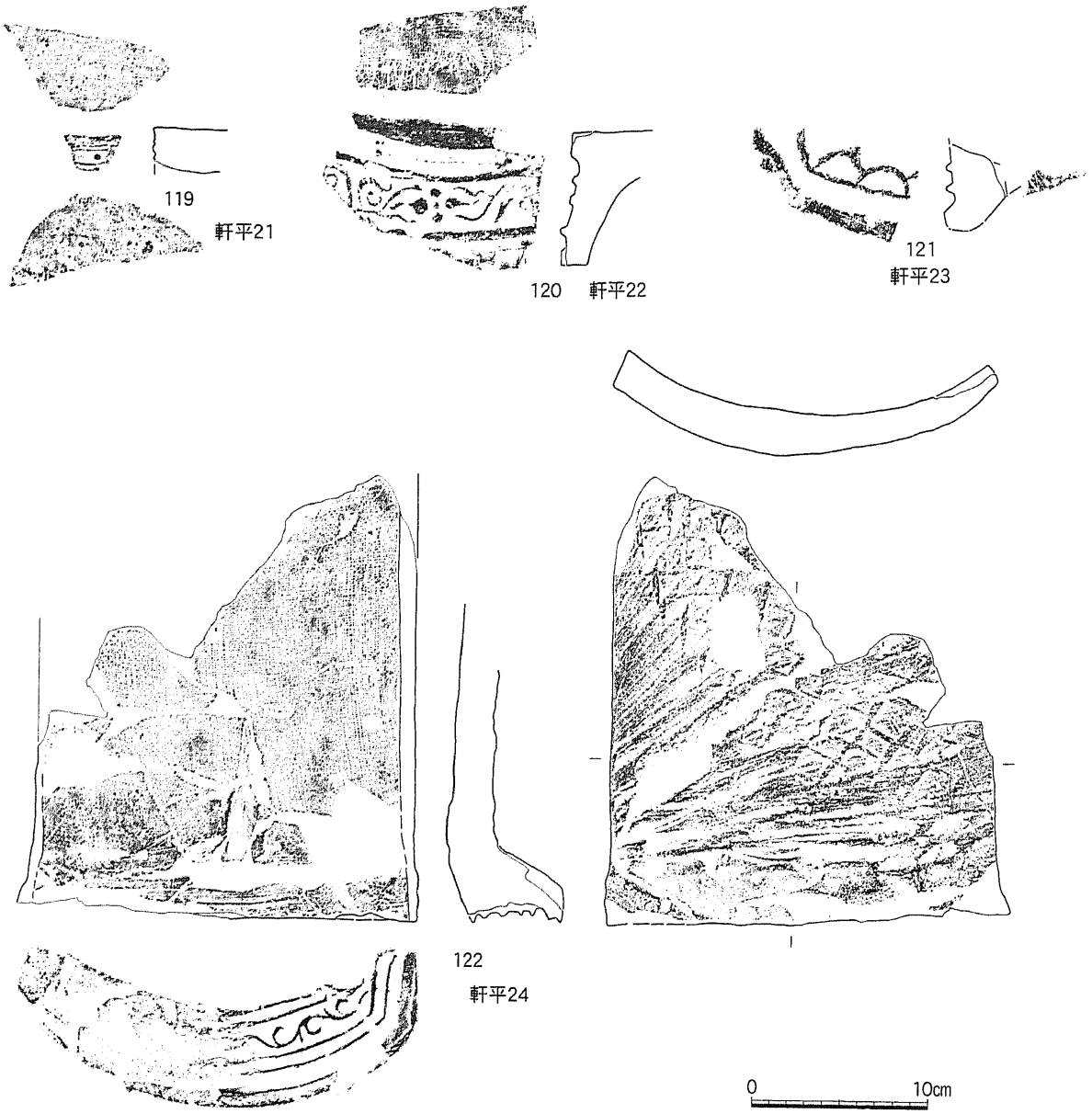


図160　軒平瓦21～24式（1/4）

かって薄くなる。

116・117の色調および胎土は軒平瓦18型式ｂとほぼ同一である。118は灰色で須恵質に近い。

11世紀後半から12世紀前半とみられる。

軒平瓦21式（図160）

119は北面回廊雨落ち溝からの出土である。瓦当面はごく一部しか遺存しない。欠損しているが上端に細い周縁があり、２本の界線の間に珠文を配する。

貼り付けによる顎部が剥離しており、その面には布目が反転して写っている。顎部となる貼る粘土板の成形が布上でなされたとみてよい。平瓦部凹面には布目が見られる。

須恵質の堅緻な焼成で灰色を呈し、砂粒の含有は少ない。軒平瓦18・20式と同様の年代と考える。

軒平瓦22式（図160、図版37-５）

120は南門調査区瓦だまりからの出土である。垂下する瓦当部をもち瓦当幅7.5cmと広い。４弁の花

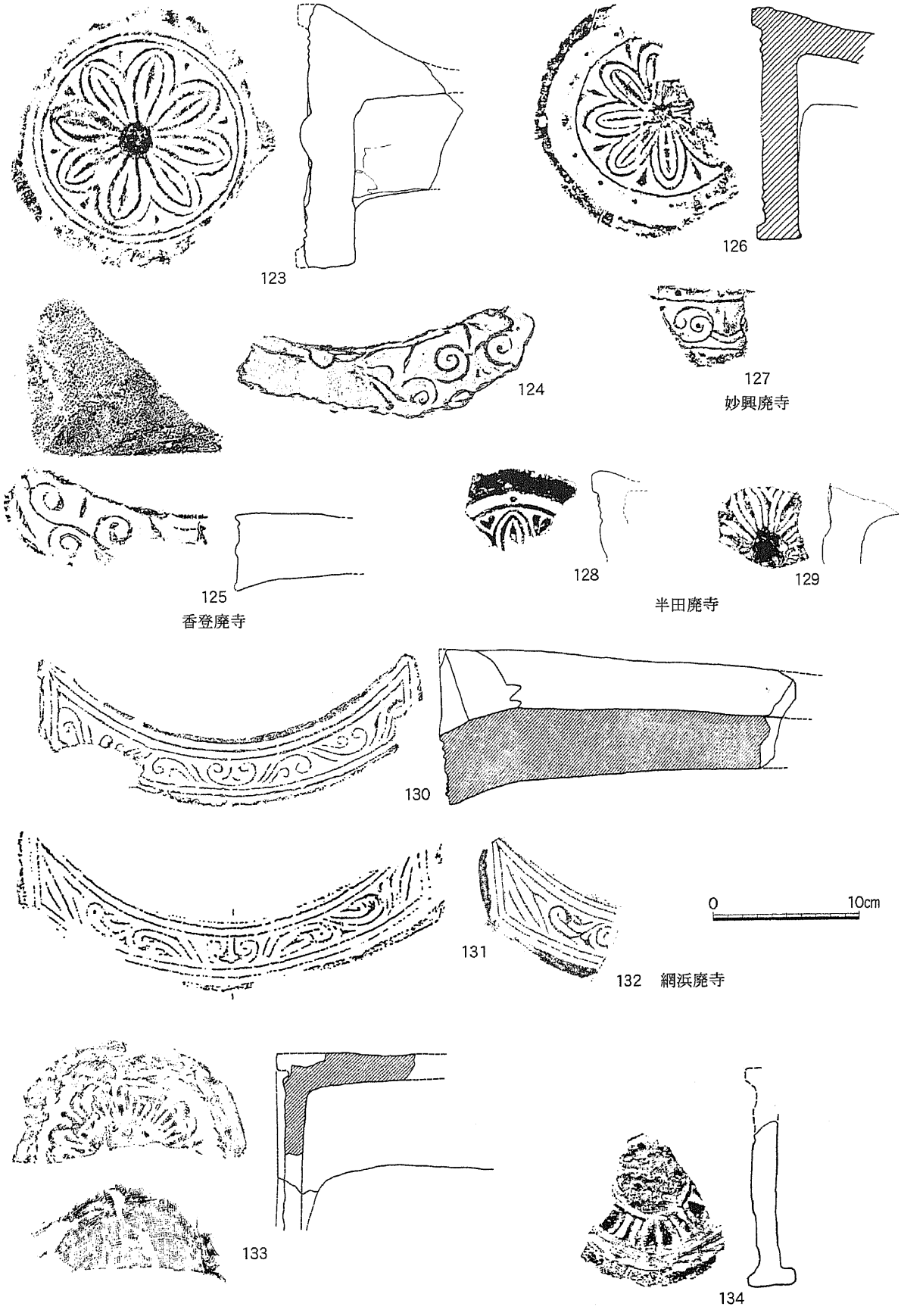


図161　同笵瓦・関連資料（1）（1/4）

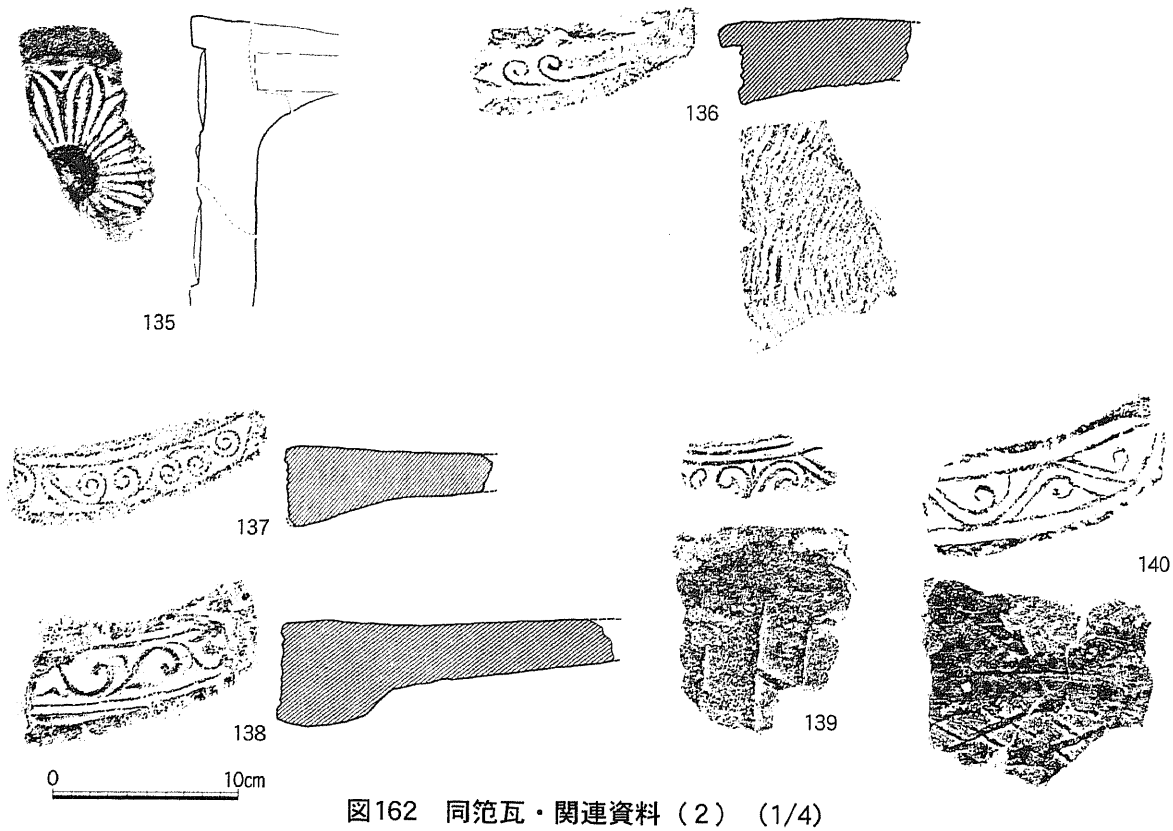


図162　同笵瓦・関連資料（2）（1/4）

文の左右に複雑に入り組む唐草を配しており、文様は肉厚で立体的である。花文が中心飾りになる可能性が強いが、唐草文はそれに対して左右対称にはならず、別に中心飾りがある可能性もある。上下の界線は太く、その外側に粗に珠文を配する。下側の周縁は欠損しているが、高く広い周縁をもつ。

瓦当部は平瓦先端を曲げてその先に粘土を加えて形成されているようである。

平瓦部凹面には先端がほつれた布目が見られ、先端部にナデがなされる。

須恵質の堅緻な焼成で灰色を呈し、砂粒の含有は少ない。

軒平瓦23式（図160、図版37-6）

121は南門調査区包含層からの出土である。顎部の破片で、太い弧が重なる表現と界線、太い周縁が残る。拓本には出ていないが脇区の界線と周縁の間には瓦笵に広いキズを生じている。

破片上面は先端を斜めに整えた平瓦との接合面である。破片後側の破面には小範囲ながら糸切り痕が見られる。瓦当部に糸切りで切り出した粘土塊を用い、平瓦との接合の際に凸面側の基部に粘土を付加したことを示すが、これは軒平瓦26式186の手法と同一である。

明橙色を示し火を受けている可能性がある。1㎜以下の砂粒を含む。12世紀代とみられる。

軒平瓦24式（図160、図版37-7）

122のみの出土で、北面回廊雨落ち溝から出土した。唐草文とそれをとりまく二重の界線、脇と下側をめぐる周縁が残る。平瓦部前縁には横ケズリが施されて界線の上側が削り取られており、本来は上側にも周縁がめぐっていた可能性がある。瓦当推定幅28.2cm、瓦当厚5.2cmを測る。

深い段顎をなし、顎屈曲部から平瓦凸面にかけてシワが入ることから、平瓦の先端を曲げて顎を形成しているとみられる。

平瓦部凹面には布目、凸面には顕著な糸切り痕と格子叩きが見られる。灰白色を呈し破面は淡橙色、

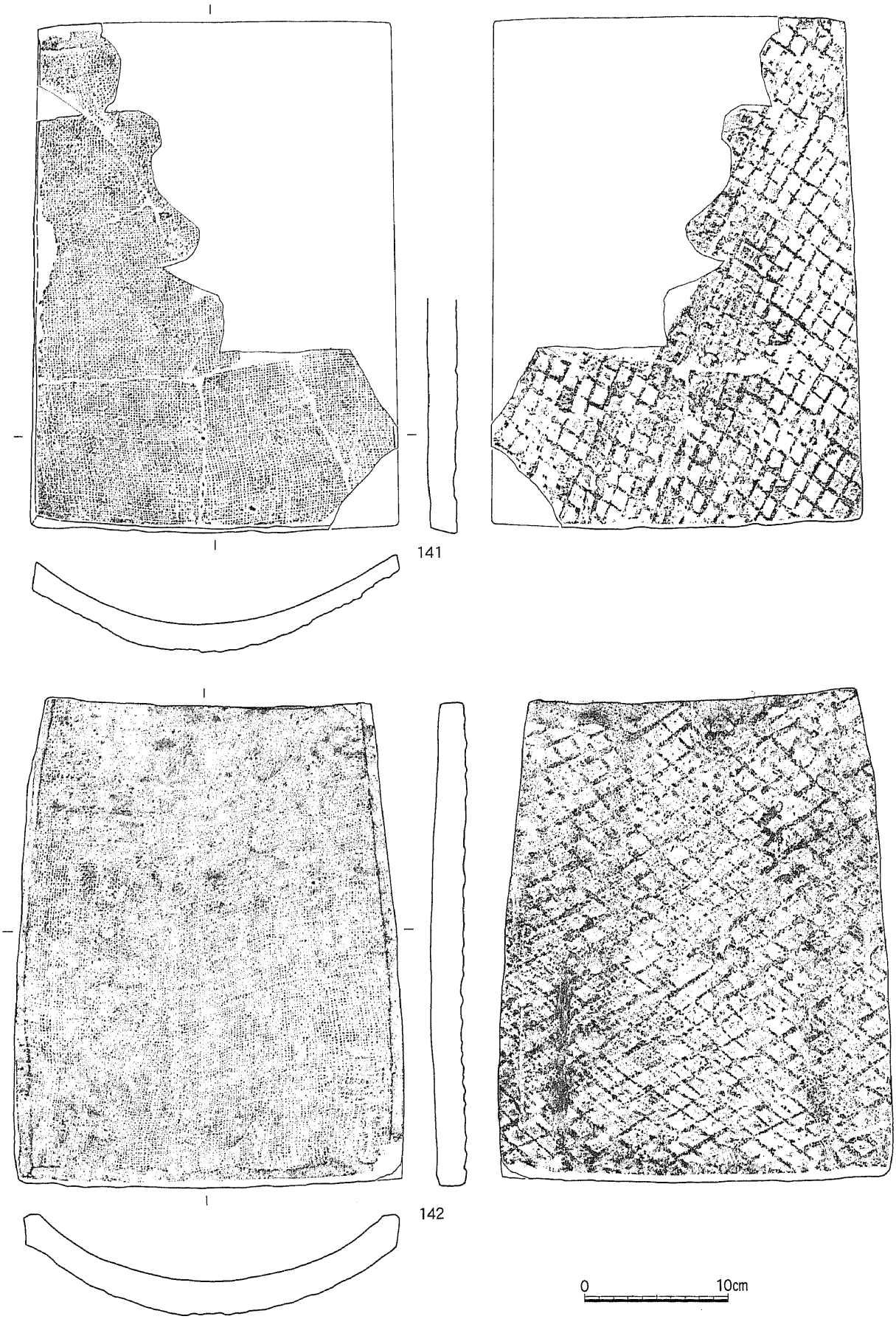


図163　補修瓦－平瓦（1）（1/4）

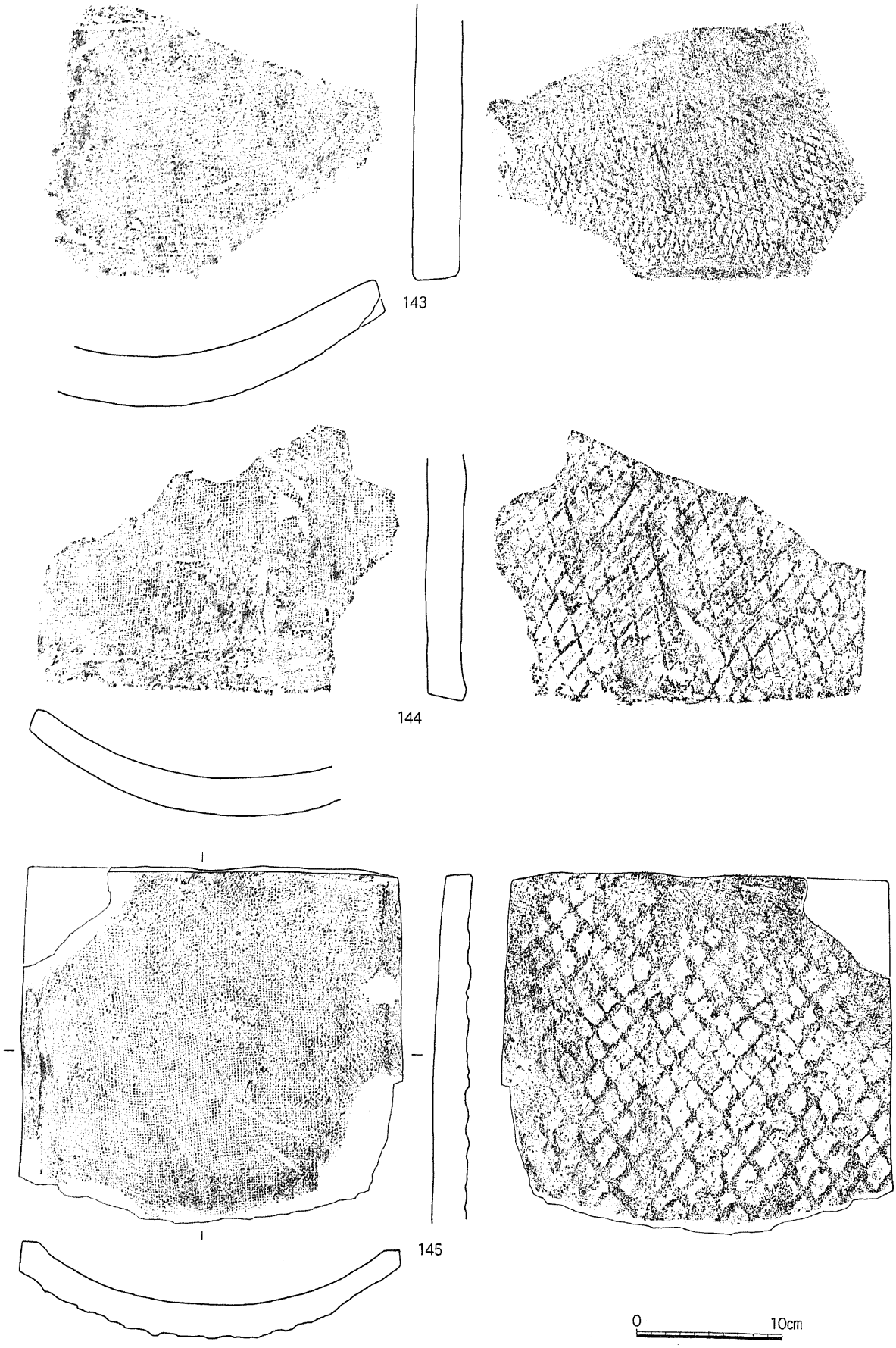


図164　補修瓦－平瓦（２）（1/4）

2㎜以下の砂粒を少量含む。軽量に焼き上がっている。

（6）補修瓦3－平瓦－（図163～170、図版43）

（1）で記載したように創建に用いられた平瓦は凸面に縄目叩きが施されたものである。これに混在する形で補修に用いられた平瓦もかなりの量が出土している。これらは基本的に格子叩きが施されており、創建後ほどなくして叩きは縄目から格子へと変化したとみられる。ただし、格子叩きがすべて年代が下降するわけではなく、以下のａ・ｂのように創建期に含めることができるものもある。それらを補修瓦に含めることは必ずしも適当ではないがここで取り扱った。

ａ　141は雨落ち溝17（T17）から出土した平瓦で、長さ36.6cm、残存（ほぼ広端）幅26.0cmを測る。厚さは中央付近で2.0cmと薄手である。格子は縦方向で長さ16㎜、表出は深い。一回の叩き範囲は縦5.0～6.2cm、横5.2cmと狭く、縦方向7回、横方向5回の叩きとなる。凹面は布目で糸切り痕は認められない。暗黄褐色を呈しやや軟質である。出土遺構は奈良時代の須恵器と銅溶解炉片を含んでおり、創建時、あるいはそれらが再堆積としてもその後の比較的早い段階とみてよい。格子叩きの瓦では早い時期のものである。

ｂ　142は塔南側の築地内側に形成された瓦だまりから出土したものである。長さ34.6cm、狭端幅23.3cm、広端幅27.5cm、厚さ2.3cmを測る。格子の長軸は横で、20㎜である。幅6.3cm程度の叩き板で上半・下半をそれぞれ7回程度叩いているようであり、縄目叩きの場合と同様の叩き方と言える。叩き板の長さは20cm程度あったようで、中央付近では叩きの重複がかなりある。

凸面狭端近くには擦痕状のナデがはいる。須恵質で暗灰色、堅緻な焼成である。

ｃ　143は長さ縦12㎜の細かい格子の叩きが施される平瓦で講堂・西回廊接続部南西の瓦だまりから出土した。叩きののちにナデが加えられており、さらにそれに布目の付く箇所もある。3.4cmと厚く幅も相当大きいものになるようである。微砂を含み胎土も他とはやや異なる。凹面には布目があり糸切り痕は認められない。きわめて厚く大形であり格子の形状は後述の198～200に近いため、それらと同じく国分寺創建以前に製作されて別の寺院で用いられ、平安時代に搬入された可能性を考えている。

ｄ　144は金堂調査区出土である。叩き目は長さ23㎜の格子を縦に配する。横方向は9.9cmの幅で叩き板が動いている。縦方向は明確ではないが叩きの重複が多く横と同程度の間隔で動いている可能性が強い。軒平瓦3式に伴う可能性が考えられる。

ｅ　146・147はやや斜め方向から多数の回数で叩きを行うものである。

146は北面回廊瓦だまりからの出土で、縦方向長さ20㎜の深い格子叩きをもつ。長さ34.3cm、広端推定幅26.3cmを測る。叩き板は縦方向5.5～7.0cm、横方向9.0cm前後で移動しており、縦7回横4回程度の叩きがなされたとみられる。叩き板の移動方向からみてやや斜め方向から叩いているとみられる。なお、凸面の一部に糸切り痕が残る。凹面には糸切り痕と布目があるが、狭端側にはナデが加えられてそれらが消されている。広端は凹面から続く曲面をなし、その部分にも布目が広がっている。赤橙色～灰色を呈し、砂粒は少ない。

147は中門調査区土壙18下層からの出土である。長さ35.7cm、狭端幅22.7cmを測る。側縁の形状からあまり広端側が広くならず長方形に近い形であった可能性が強い。凸面には長さ20㎜の深い格子叩きが施される。格子底面には木目の痕跡が顕著に表れている。叩きの単位の境界は明確でないが、縦方向4.1～6.1cm、横7.3cmの間隔で同じ格子が現れており、横は4回、縦は5回に加えて狭端のやや方

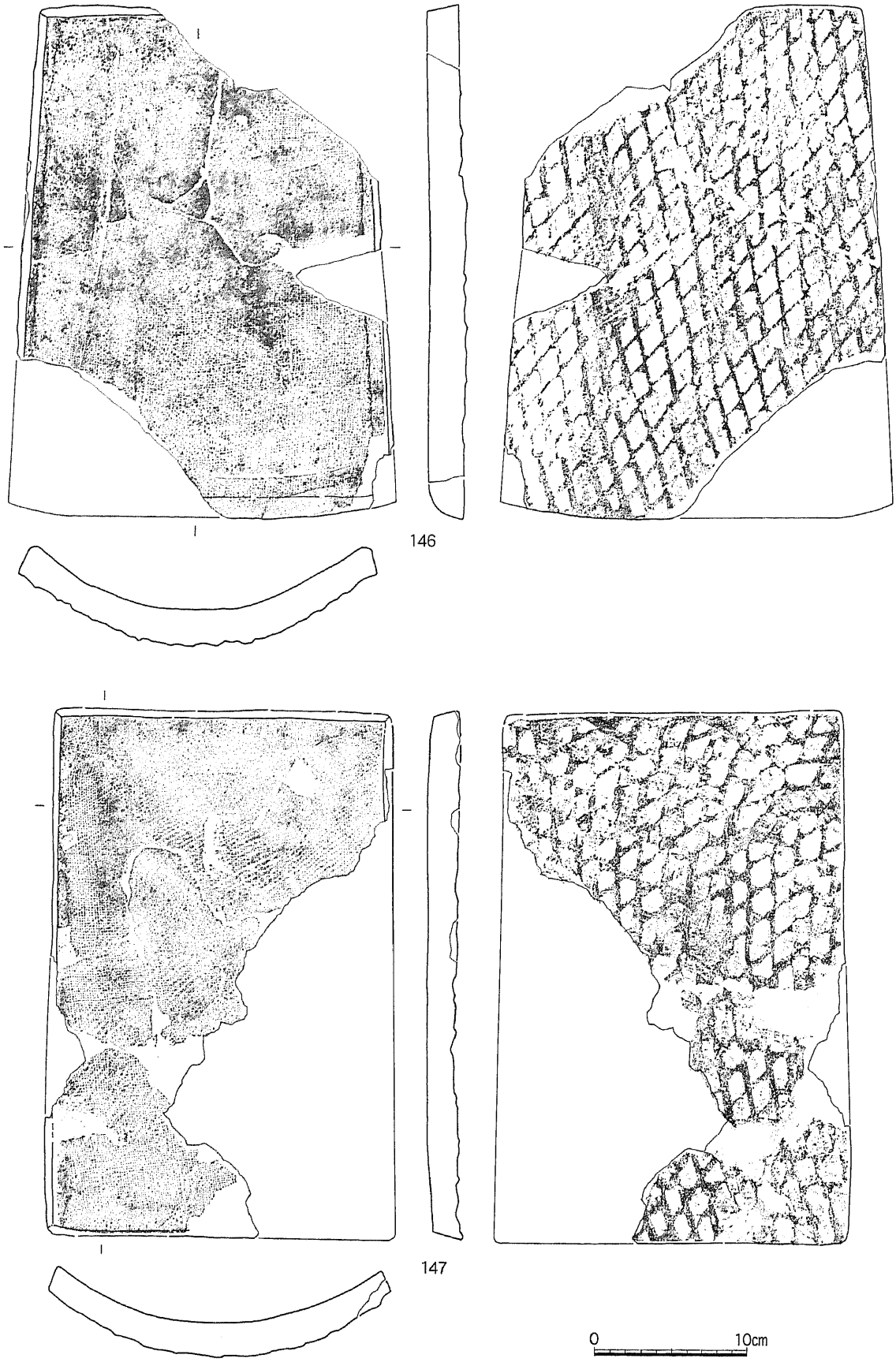


図165　補修瓦－平瓦（３）（1/4）

向を違える叩きの計6回の叩きがなされたとみてよい。格子長軸が瓦の軸線に対してやや斜めになるが、これが叩きの方向であったとみられる。

凹面には糸切り痕と布目があり狭端側にはナデが加えられている。

明褐橙色を呈する。胎土に砂粒は少なく層状をなすため、破損時に著しく剥離を生じている。

145・148～151は長い叩き板で狭端から広端までの範囲を一度に叩く一群である。いずれも赤橙色を呈する。これらは凸面に離砂をまく145・150・151と、それがなされない148・149に区分できる。

f　148は南門調査区溝18からの出土で長さ37.0cm、広端幅27.3cmを測る。狭端と広端の幅は差が少なく長方形気味になるとみられる。格子は横方向で長さ25mmである。凸面には幅44～52mmで8回の叩きが施されている。両端は中央よりもやや低くなるため叩きが及んでおらず糸切り痕が顕著に残る。凹面は状態がさほど良くないが布目が残る。

149は北面回廊講堂西側からの出土である。長さ37.4cm、狭端幅24.3cm、広端推定幅28.0cmである。格子の形状・大きさは148と同様で、凸面を8回、3.6～5.0cmの幅で叩いている。広端側には叩きに先行するユビオサエが残る。凹面は布目の下にわずかに糸切り痕が見られる。148・149ともに微砂を含む胎土である。比較的重量がある。

g　145は北面回廊瓦だまりからの出土で、格子の長さは20mmで縦方向、表出は深い。幅4.6～5.0cmの叩き単位が破片下端まで通っている。凸面には離れ砂とみられる砂粒が見られる。狭端幅は推定26.4cmである。凹面には糸切り痕と粗い布目が見られる。砂粒が少ない胎土で、破面では粘土の接合痕が顕著である。

150は南門調査区雨落ち溝14下層からの出土で、長さ36.3cm、狭端幅23.6cm、広端推定幅25.3cmを測り大きさは147に近い。4.7cm前後の幅で両端まで叩いており7回の叩きとなる。叩き板の表出は部分によって異なり中央は浅い。格子は横方向で長さ22mm前後である。凸面には砂粒が多い。

凹面には粗い布目が残る。拓本には斜めの線が現れるがこれは調査時の傷である。

両端および側面はケズリののちナデであるが、狭端の一部に凹面と同じ布目が見られ、製作時には布は端部まで広がっていたことを示す。

明褐橙色を呈し、やや軟質である。

151は150と同じ叩きを施すもので金堂調査区から出土した。同様に明橙褐色であり、このタイプの焼成を示すと見られる。凹面には糸切り痕は認められない。布目の上に軽く斜めのナデが施される。

h　152は講堂調査区包含層からの出土である。通常の平瓦と異なり凹面はナデ、凸面に細かい布目が見られる。端部はケズリで仕上げられる。焼成は良好で明灰色を呈し須恵質に近い。

i　153は僧房調査区南側雨落ち部堆積層からの出土である。軸線52mmと大きく深い格子を施す。破片の中ほど、端から9.5cmに段差があり叩き板の端とみられ、一回の叩き範囲はそれほど広くない可能性がある。凸面には離れ砂として用いられた粗砂粒が見られる。凹面の状態はあまりよくなく布目は見られるが、糸切り痕の有無は不明である。砂粒の少ない胎土で淡暗灰色を呈する。

j　154～155は凹面に糸切り痕が顕著に残る一群である。154は南門調査区石垣裏からの出土。155は西面回廊トレンチからの出土であるがトレンチ東端からで、金堂上層瓦だまり等からの流出の可能性がある。156は金堂東外側に形成された瓦だまりからの出土で、これも本来は金堂上層瓦だまりの可能性がある。いずれも糸切り痕の上には布目が見られる。また、154・155では凸面にもほぼ全面にわたって糸切り痕が見られる。155を除いて叩きの単位は明瞭ではないが、長い叩き板が用いられた

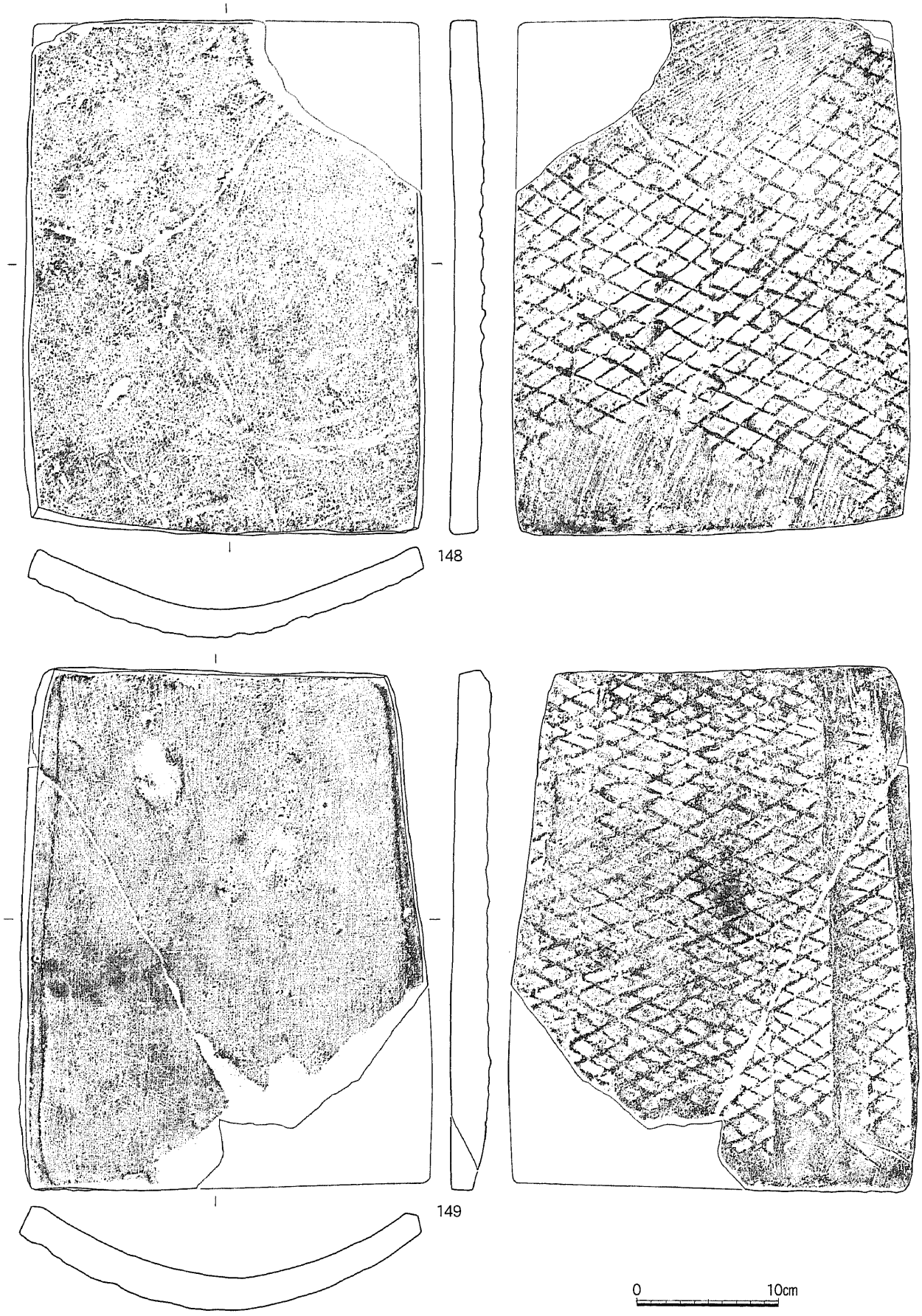


図166　補修瓦－平瓦（4）（1/4）